秋田県文化財調査報告書第350集

和　田　Ⅲ　遺　跡

── 農免農道整備事業金岡西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 ──

２００３・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年発見、高さ7cm、凝灰岩。

和（わ）田（だ）Ⅲ遺跡

── 農免農道整備事業金岡西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 ──

２００３・３

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものです。

一方、農業分野においては、農業を取り巻く内外の厳しい情勢に対処するために農業経営のさらなる効率化が求められていることは言うまでもありません。農道整備事業をはじめ、ほ場整備事業等、様々な整備事業が推進されております。本教育委員会では、これら整備事業との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、山本町における農免農道整備事業金岡西部地区に先立って、平成12年度に実施した和田Ⅲ遺跡の発掘調査成果についてまとめたものであります。調査では、縄文時代の竪穴住居跡や当時の多数の遺物、古代の竪穴住居跡などが発見され、縄文時代と古代の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県山本総合農林事務所、山本町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

秋田県教育委員会

教育長　小 野 寺　　清

例　　言

1．本書は、農免農道整備事業金岡西部地区に係る、秋田県山本郡山本町豊岡金田に所在する和田Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、平成12年７月から10月にかけて実施した。和田Ⅲ遺跡は、平成11年度に山本町教育委員会により、和田Ⅲ－Ｂ遺跡として遺跡西側の一部について発掘調査が実施されている。本書では、平成11年度の山本町教育委員会による調査を第１次調査、今回報告する平成12年度の秋田県埋蔵文化財センターによる調査を第２次調査と呼ぶ。

3．和田Ⅲ遺跡第２次調査の成果については、既にいくつかの概要報告等を行っている。いずれも整理途上段階のものであり、本書の記載内容と相違がある場合は、本書をもって訂正したものとする。

4．本書の執筆は、第５章を除き、榮　一郎が行った。第５章は岩手県立博物館赤沼英男氏による。

5．土層断面図等の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

6．本書第１図および第２図は、国土地理院発行1/50000地形図「森岳」を複製して作成した。また、第３図は秋田県山本総合農林事務所提供の1/500平面図を元に作成した。

7．本書図版１の航空写真は山本町教育委員会および山本町建設課の提供によるものである。

8．自然科学的分析等は以下の機関に委託した。
石質鑑定：パリノ・サーヴェイ株式会社
鉄滓分析：岩手県立博物館

9．整理作業においては、製図・実測等の一部作業は、下記に委託した。
遺構図製図：株式会社ハイマーテック
土器実測・製図：有限会社アイテックス・株式会社シン技術コンサル
石器実測・製図：有限会社アイテックス・株式会社シン技術コンサル
遺物写真撮影：株式会社シン技術コンサル

10. 発掘調査および遺構・遺物の整理にあたって、県内の教育委員会・諸機関のほか、以下の方々および機関から御指導・御助言を賜った。記して感謝の意を表する。（順不同、敬称略）
小野貴之・工藤直子・佐藤祐悦・田村征孝・三浦昌弘・青森市教育委員会

凡　　例

1．本書に掲載した平面図の方位は日本測地系平面直角座標第Ｘ系座標北である。
　巻末の報告書抄録記載の経緯度は世界測地系に基づく。

2．各遺構に付している略記号は以下の通りである。

　ＳＡ　：柱穴列
　ＳＤ　：溝跡
　ＳＩ　：竪穴住居跡
　ＳＫ　：土坑
　ＳＫＦ：フラスコ状土坑
　ＳＫＰ：柱穴
　ＳＲ　：土器埋設遺構

3．遺構平面図では、竪穴住居跡内の柱穴等の断面位置指示線には、煩雑になるため符号は付さず、断面図に断面位置指示線の相対的な方位を「Ｎ」、「Ｓ」のようにアルファベットで付して示した。

4．竪穴住居跡内の柱穴など、元の遺構に付随する可能性がある遺構等の覆土層序については、場合によって、それぞれ別個に①からの丸囲み数字で番号を付した。

5．遺構図および図版中などにおいて、遺物実測図掲載遺物を指示する場合、例えば第１図１の遺物では、 1-1のように略記する。

6．挿図中のスクリーン・トーンの凡例は、以下の通りである。

遺構

焼土

遺物

磨面

浅い敲打痕

盲孔状敲打痕

須恵器断面

7．掲載した石器・石製品の石質は実測図中に以下のように略記した。

珪質頁岩	：珪頁	輝緑岩	：輝
玉髄質珪質頁岩	：玉頁	玉髄	：玉
安山岩	：安	瑪瑙	：瑪
変質安山岩	：変安	玄武岩	：玄
変質輝石安山岩	：変輝安	粗粒玄武岩	：粗玄
流紋岩	：流	赤玉	：赤
デイサイト	：デ	頁岩	：頁
角閃石デイサイト	：角デ	黒雲母花崗岩	：黒花
黒曜石	：黒	角閃石黒雲母花崗閃緑岩	：角花
凝灰岩	：凝	アプライト質花崗岩	：ア花
砂質凝灰岩	：砂凝	集塊岩	：集
砂岩	：砂	緑色岩	：緑
凝灰質砂岩	：凝砂	ひん岩	：ひ
石英斑岩	：石斑	緑色片岩・黒色片岩	：片
閃緑岩	：閃	軽石	：軽
石英閃緑岩	：石閃		

目　　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査要項……2

第２章　遺跡の環境……3
　第１節　遺跡の立地……3
　第２節　歴史的環境……3

第３章　調査の概要……11
　第１節　遺跡の概観……11
　第２節　発掘調査の方法……11
　第３節　発掘調査の経過……13
　第４節　整理作業の方法と経過……14

第４章　調査の記録……17
　第１節　層序……17
　１　基本層序……17
　２　遺物包含層……18
　第２節　検出遺構……20
　１　概要……20
　２　縄文時代……20
（１）竪穴住居跡……20
（２）フラスコ状土坑……35
（３）土坑……37
（４）土器埋設遺構……41
（５）柱穴……41

３　古代以降……42
（１）竪穴住居跡……42
（２）溝跡……43
（３）柱穴列……43
第３節　出土遺物……44
１　概要……44
２　縄文土器……44
３　土製品……47
４　石器・石製品……47
５　土師器・須恵器・羽口……50
６　鉄滓……50

第５章　自然科学的分析 ……179
第１節　和田Ⅲ遺跡出土鉄滓の金属考古学的調査結果 ……179

第６章　まとめ ……188

報告書抄録 ……247

挿図目次

第１図　和田Ⅲ遺跡の位置……１
第２図　和田Ⅲ遺跡周辺の遺跡……４
第３図　和田Ⅲ遺跡調査区・遺構配置図・土層柱状図 ……15･16
第４図　遺物包含層土層……19
第５図　ＳＩ03竪穴住居跡（１）……53
第６図　ＳＩ03竪穴住居跡（２）……54
第７図　ＳＩ04竪穴住居跡（１） ……55･56
第８図　ＳＩ04竪穴住居跡（２）……57
第９図　ＳＩ05竪穴住居跡（１）……58
第10図　ＳＩ05竪穴住居跡（２）……59
第11図　ＳＩ06竪穴住居跡（１）……60
第12図　ＳＩ06竪穴住居跡（２）……61
第13図　ＳＩ08竪穴住居跡……62
第14図　ＳＩ15竪穴住居跡（１）……63
第15図　ＳＩ15竪穴住居跡（２）……64
第16図　ＳＩ15竪穴住居跡（３）……65
第17図　ＳＩ16Ａ・ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡（１）……66

第18図　ＳＩ16Ａ・ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡（２）……67
第19図　ＳＩ16Ａ・ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡（３）……68
第20図　ＳＩ32竪穴住居跡（１）……69
第21図　ＳＩ32竪穴住居跡（２）……70
第22図　ＳＩ34・ＳＩ41竪穴住居跡……71
第23図　ＳＩ50竪穴住居跡……72
第24図　ＳＫＦ19・ＳＫＦ29・ＳＫＦ36フラスコ状土坑……73
第25図　ＳＫＦ38・ＳＫＦ57フラスコ状土坑、ＳＫ39土坑……74
第26図　ＳＫ22・ＳＫ24・ＳＫ26・ＳＫ27・ＳＫ31・ＳＫ33Ｗ・ＳＫ35Ｎ・ＳＫ35Ｓ土坑……75
第27図　ＳＫ37・ＳＫ43・ＳＫ46・ＳＫ58土坑、ＳＲ49土器埋設遺構　……76
第28図　ＳＩ25竪穴住居跡……77
第29図　ＳＡ59柱穴列・柱穴配置図（１）……78
第30図　柱穴配置図（２）……79
第31図　柱穴配置図（３）……80
第32図　遺構内出土土器類（１）（ＳＩ03）……87
第33図　遺構内出土土器類（２）（ＳＩ03）……88
第34図　遺構内出土土器類（３）（ＳＩ03）……89
第35図　遺構内出土土器類（４）（ＳＩ04）……90
第36図　遺構内出土土器類（５）（ＳＩ04）……91
第37図　遺構内出土土器類（６）（ＳＩ04）……92
第38図　遺構内出土土器類（７）（ＳＩ05）……93
第39図　遺構内出土土器類（８）（ＳＩ05）……94
第40図　遺構内出土土器類（９）（ＳＩ05）……95
第41図　遺構内出土土器類(10)（ＳＩ06）……96
第42図　遺構内出土土器類(11)（ＳＩ06）……97
第43図　遺構内出土土器類(12)（ＳＩ06）……98
第44図　遺構内出土土器類(13)（ＳＩ08・15）……99
第45図　遺構内出土土器類(14)（ＳＩ15）……100
第46図　遺構内出土土器類(15)（ＳＩ15）……101
第47図　遺構内出土土器類(16)（ＳＩ15）……102
第48図　遺構内出土土器類(17)（ＳＩ15）……103
第49図　遺構内出土土器類(18)（ＳＩ15）……104
第50図　遺構内出土土器類(19)（ＳＩ16Ａ）……105
第51図　遺構内出土土器類(20)（ＳＩ16Ｂ）……106
第52図　遺構内出土土器類(21)（ＳＩ32・50、ＳＫＦ19・29）……107
第53図　遺構内出土土器類(22)（ＳＫＦ29）……108
第54図　遺構内出土土器類(23)（ＳＫＦ29）……109

第55図　遺構内出土土器類(24)（ＳＫＦ36・38）……110
第56図　遺構内出土土器類(25)（ＳＫＦ38・57）……111
第57図　遺構内出土土器類(26)（ＳＫ22・26・27・31・33Ｗ・35Ｎ・35Ｓ・46）……112
第58図　遺構内出土土器類(27)（ＳＲ49、ＳＫＰ、ＳＩ25、ＳＤ47）……113
第59図　遺構内出土石器類（１）（ＳＩ03）……114
第60図　遺構内出土石器類（２）（ＳＩ03）……115
第61図　遺構内出土石器類（３）（ＳＩ03）……116
第62図　遺構内出土石器類（４）（ＳＩ04）……117
第63図　遺構内出土石器類（５）（ＳＩ04）……118
第64図　遺構内出土石器類（６）（ＳＩ04）……119
第65図　遺構内出土石器類（７）（ＳＩ05）……120
第66図　遺構内出土石器類（８）（ＳＩ05）……121
第67図　遺構内出土石器類（９）（ＳＩ05）……122
第68図　遺構内出土石器類(10)（ＳＩ06）……123
第69図　遺構内出土石器類(11)（ＳＩ06）……124
第70図　遺構内出土石器類(12)（ＳＩ06）……125
第71図　遺構内出土石器類(13)（ＳＩ06）……126
第72図　遺構内出土石器類(14)（ＳＩ15）……127
第73図　遺構内出土石器類(15)（ＳＩ15）……128
第74図　遺構内出土石器類(16)（ＳＩ15）……129
第75図　遺構内出土石器類(17)（ＳＩ15）……130
第76図　遺構内出土石器類(18)（ＳＩ15）……131
第77図　遺構内出土石器類(19)（ＳＩ15）……132
第78図　遺構内出土石器類(20)（ＳＩ15）……133
第79図　遺構内出土石器類(21)（ＳＩ15）……134
第80図　遺構内出土石器類(22)（ＳＩ16Ａ）……135
第81図　遺構内出土石器類(23)（ＳＩ16Ｂ）……136
第82図　遺構内出土石器類(24)（ＳＩ16Ｂ）……137
第83図　遺構内出土石器類(25)（ＳＩ32・41、ＳＫＦ19・29、ＳＫＰ）……138
第84図　遺構外出土土器類（１）……139
第85図　遺構外出土土器類（２）……140
第86図　遺構外出土土器類（３）……141
第87図　遺構外出土土器類（４）……142
第88図　遺構外出土土器類（５）……143
第89図　遺構外出土土器類（６）……144
第90図　遺構外出土土器類（７）……145
第91図　遺構外出土土器類（８）……146

第 92 図　遺構外出土土器類（９）……147
第 93 図　遺構外出土土器類(10)……148
第 94 図　遺構外出土土器類(11)……149
第 95 図　遺構外出土土器類(12)……150
第 96 図　遺構外出土土器類(13)……151
第 97 図　遺構外出土土器類(14)……152
第 98 図　遺構外出土土器類(15)……153
第 99 図　遺構外出土土器類(16)……154
第100図　遺構外出土土器類(17)……155
第101図　遺構外出土土器類(18)……156
第102図　遺構外出土土器類(19)……157
第103図　遺構外出土土器類(20)……158
第104図　遺構外出土土器類(21)……159
第105図　遺構外出土土器類(22)……160
第106図　遺構外出土土器類(23)……161
第107図　遺構外出土土器類(24)……162
第108図　遺構外出土石器類（１）……163
第109図　遺構外出土石器類（２）……164
第110図　遺構外出土石器類（３）……165
第111図　遺構外出土石器類（４）……166
第112図　遺構外出土石器類（５）……167
第113図　遺構外出土石器類（６）……168
第114図　遺構外出土石器類（７）……169
第115図　遺構外出土石器類（８）……170
第116図　遺構外出土石器類（９）……171
第117図　遺構外出土石器類(10)……172
第118図　遺構外出土石器類(11)……173
第119図　遺構外出土石器類(12)……174
第120図　遺構外出土石器類(13)……175
第121図　遺構外出土石器類(14)……176
第122図　遺構外出土石器類(15)……177
第123図　遺構外出土石器類(16)……178
第124図　No. 1の外観と摘出した試料片の組織観察結果 ……183
第125図　No. 2の外観と摘出した試料片の組織観察結果 ……184
第126図　No. 2Sa_1から摘出した試料片の組織観察結果 ……185
第127図　No. 2Sa_1下部・Sa_2・Sa_4から摘出した試料片の組織観察結果 ……186

表目次

第１表　和田Ⅲ遺跡周辺の遺跡一覧（１）…… 5
第２表　和田Ⅲ遺跡周辺の遺跡一覧（２）…… 6
第３表　和田Ⅲ遺跡調査工程……13
第４表　和田Ⅲ遺跡出土石器類一覧……48
第５表　ＳＩ03竪穴住居跡柱穴一覧……81
第６表　ＳＩ04竪穴住居跡柱穴一覧……81
第７表　ＳＩ05竪穴住居跡柱穴一覧（１）……81
第８表　ＳＩ05竪穴住居跡柱穴一覧（２）……82
第９表　ＳＩ06竪穴住居跡柱穴一覧……82
第10表　ＳＩ08竪穴住居跡柱穴一覧……82
第11表　ＳＩ15竪穴住居跡柱穴一覧……83
第12表　ＳＩ16Ａ竪穴住居跡柱穴一覧……84
第13表　ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡柱穴一覧……84
第14表　ＳＩ32竪穴住居跡柱穴一覧……85
第15表　ＳＩ34竪穴住居跡柱穴一覧……85
第16表　ＳＩ41竪穴住居跡柱穴一覧……85
第17表　ＳＩ25竪穴住居跡柱穴一覧……85
第18表　柱穴一覧……86
第19表　調査資料 ……179
第20表　椀形滓の分析結果 ……180
第21表　縄文時代中期前葉の竪穴住居跡一覧 ……188

図版目次

巻頭図版１　１　ＳＩ04竪穴住居跡出土土器
巻頭図版２　１　ＳＩ06竪穴住居跡出土土器
巻頭図版３　１　ＳＩ06竪穴住居跡出土土器
巻頭図版４　１　ＳＩ15竪穴住居跡出土土器
巻頭図版５　１　ＳＩ15竪穴住居跡出土土器
巻頭図版６　１　ＳＩ15竪穴住居跡出土土器
巻頭図版７　１　ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡出土土器
巻頭図版８　１　ＳＫＦ29フラスコ状土坑出土土器
巻頭図版９　１　ＳＫＦ36フラスコ状土坑出土土器
巻頭図版10　１　ＳＫＦ38フラスコ状土坑出土土器
巻頭図版11　１　ＳＫＦ38フラスコ状土坑出土土器
巻頭図版12　１　ＳＫＦ38フラスコ状土坑出土土器

図版１　１　和田Ⅲ遺跡空中写真（上が北東）
図版２　１　和田Ⅲ遺跡遠景（東から）
　　２　調査終了状況（西から）
　　３　調査終了状況（東から）
図版３　１　ＬＨ51区北壁土層（南から）
　　２　遺物包含層土層（ＭＰ～ＭＲ48区南壁）（北から）
　　３　遺物包含層土層断面中の遺物出土状況（北から）
図版４　１　ＳＩ03竪穴住居跡（北西から）
　　２　ＳＩ04竪穴住居跡（西から）
図版５　１　ＳＩ04炉２確認状況（北から）
　　２　ＳＩ04炉２炉体土器確認状況（北から）
　　３　ＳＩ04Ｐ2遺物確認状況（北西から）
図版６　１　ＳＩ04竪穴住居跡Ｐ７土器確認状況（南から）
　　２　ＳＩ04竪穴住居跡Ｐ８断面（南西から）
　　３　ＳＩ04竪穴住居跡西側遺物出土状況（北から）
図版７　１　ＳＩ05竪穴住居跡（南から）
　　２　ＳＩ05竪穴住居跡炉３・Ｐ16断面（東から）
図版８　１　ＳＩ06竪穴住居跡（西から）
　　２　ＳＩ06竪穴住居跡ＳＫＦ20断面（西から）
図版９　１　ＳＩ06竪穴住居跡炉１（南東から）
　　２　ＳＩ06竪穴住居跡埋設土器１（西から）
　　３　ＳＩ06竪穴住居跡Ｐ8（東から）
図版10　１　ＳＩ08竪穴住居跡（北から）
　　２　ＳＩ15竪穴住居跡（南から）
図版11　１　ＳＩ15竪穴住居跡炉１断面（西から）
　　２　ＳＩ15竪穴住居跡炉１断面（北から）
　　３　ＳＩ15竪穴住居跡炉２・Ｐ38断面（西から）
図版12　１　ＳＩ15竪穴住居跡Ｐ34（西から）
　　２　ＳＩ15竪穴住居跡ＳＫＦ64断面（北から）
　　３　ＳＩ15竪穴住居跡西側遺物出土状況（西から）
図版13　１　ＳＩ16Ａ・Ｂ竪穴住居跡（南から）
　　２　ＳＩ16Ａ竪穴住居跡炉１断面（東から）
　　３　ＳＩ16Ａ竪穴住居跡埋設土器１断面（東から）
図版14　１　ＳＩ32竪穴住居跡（西から）
　　２　ＳＩ32竪穴住居跡Ｐ4断面（南から）
　　３　ＳＩ32竪穴住居跡南西側遺物出土状況（南から）

図版15　1　ＳＩ34竪穴住居跡（南から）
　　2　ＳＫＦ29フラスコ状土坑遺物出土状況（西から）
　　3　ＳＫＦ36フラスコ状土坑断面（北から）
図版16　1　ＳＫＦ38フラスコ状土坑断面（北から）
　　2　ＳＫＦ38フラスコ状土坑遺物出土状況（北から）
　　3　ＳＫＦ57フラスコ状土坑断面（北から）
図版17　1　ＳＫ22土坑（東から）
　　2　ＳＫ33W土坑遺物確認状況（北から）
　　3　ＳＫ35N土坑遺物確認状況（西から）
図版18　1　ＳＫ46土坑確認状況（東から）
　　2　ＳＫ46土坑（東から）
　　3　ＳＲ49土器埋設遺構確認状況（北東から）
図版19　1　ＳＩ25竪穴住居跡（南から）
　　2　ＳＩ25竪穴住居跡カマド断面（南東から）
　　3　ＳＤ47溝跡断面（西から）
図版20　1　ＳＡ59柱穴列（西から）
　　2　遺物包含層（ＭＱ～ＭＲ48区）遺物出土状況（南から）
　　3　遺物包含層遺物出土状況（南から）
図版21　1　遺構内出土土器類（ＳＩ03・04・15）
図版22　1　遺構内出土土器類（ＳＩ15、ＳＫＦ38）
図版23　1　遺構内出土土器類（ＳＫＦ57、ＳＫ35N）
図版24　1　遺構内出土土器類（ＳＩ25）
図版25　1　遺構内出土土器類（ＳＩ03）
　　2　遺構内出土土器類（ＳＩ04）
図版26　1　遺構内出土土器類（ＳＩ05）
　　2　遺構内出土土器類（ＳＩ06）
図版27　1　遺構内出土土器類（ＳＩ06）
　　2　遺構内出土土器類（ＳＩ15）
図版28　1　遺構内出土土器類（ＳＩ15）
　　2　遺構内出土土器類（ＳＩ16Ａ）
図版29　1　遺構内出土土器類（ＳＩ16Ｂ）
　　2　遺構内出土土器類（ＳＫＦ36・57、ＳＫ46）
図版30　1　遺構外出土土器類
図版31　1　遺構外出土土器類
図版32　1　遺構外出土土器類
図版33　1　遺構外出土土器類
図版34　1　遺構外出土土器類

図版35　1　遺構外出土土器類
図版36　1　遺構外出土土器類
図版37　1　遺構外出土土器類
　　2　遺構外出土土器類
図版38　1　遺構外出土土器類
　　2　遺構外出土土器類
図版39　1　遺構外出土土器類
　　2　遺構外出土土器類
図版40　1　遺構外出土土器類
　　2　遺構外出土土器類
図版41　1　遺構内出土石器類（石鏃）
　　2　遺構内出土石器類（石槍・石錐）
図版42　1　遺構内出土石器類（石匙）
　　2　遺構内出土石器類（石篦）
図版43　1　遺構内出土石器類（石核①(表)）
　　2　遺構内出土石器類（石核①(裏)）
図版44　1　遺構内出土石器類（石核②(表)）
　　2　遺構内出土石器類（石核②(裏)）
図版45　1　遺構内出土石器類（スクレイパー①）
　　2　遺構内出土石器類（スクレイパー②）
図版46　1　遺構内出土石器類（スクレイパー③・楔形石器）
　　2　遺構内出土石器類（半円状扁平打製石器）
図版47　1　遺構内出土石器類（磨石類①）
　　2　遺構内出土石器類（磨石類②・敲石）
図版48　1　遺構内出土石器類（石皿）
　　2　遺構内出土石器類（石錘・礫器・磨製石斧）
図版49　1　遺構外出土石器類（石鏃）
　　2　遺構外出土石器類（石槍・石錐）
図版50　1　遺構外出土石器類（石匙）
　　2　遺構外出土石器類（石篦）
図版51　1　遺構外出土石器類（スクレイパー・楔形石器）
　　2　遺構外出土石器類（二次加工ある剥片）
図版52　1　遺構外出土石器類（石核①(表)）
　　2　遺構外出土石器類（石核①(裏)）
図版53　1　遺構外出土石器類（石核②(表)）
　　2　遺構外出土石器類（石核②(裏)）

図版54　1　遺構外出土石器類（半円状扁平打製石器）
　　2　遺構外出土石器類（磨石類①）
図版55　1　遺構外出土石器類（磨石類②）
　　2　遺構外出土石器類（磨石類③）
図版56　1　遺構外出土石器類（敲石・石皿・砥石）
　　2　遺構外出土石器類（石錘・線刻礫）

第１章　はじめに

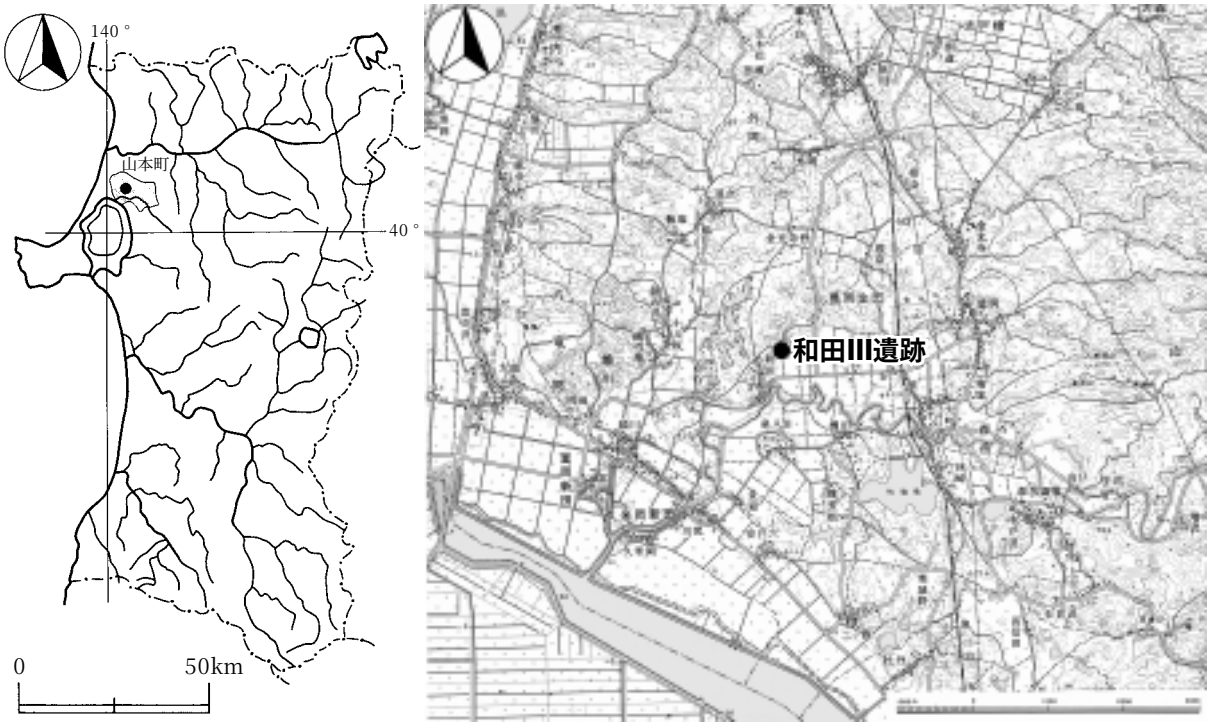
第１節　調査に至る経過

和田Ⅲ遺跡は、秋田県山本郡山本町豊岡金田字駒ヶ崎地区周辺に所在する周知の遺跡であった。『秋田県遺跡地図（中央版）』では、縄文土器片が採集された遺物包含地と記載されており、地図番号は21-26である。(註1)

平成９年度から、この周知の遺跡である和田Ⅲ遺跡に一部隣接して、山本町金岡西地区農免農道整備事業が計画された。平成10年６月には当時の山本農林事務所長から山本町教育長宛に当該事業地域内の埋蔵文化財の分布調査依頼が出され（平成10年６月４日付け山農1393）、さらに山本町教育長から当時の県文化課長宛に埋蔵文化財の分布調査について協力依頼があった（平成10年６月５日付け山教委経第44号）。

これを受けて、県文化課と山本町教育委員会が、平成10年９月18日に事業地内を踏査し、試掘地点を選定した。同年11月～12月には事業地内の試掘調査を実施し、事業地内に周知の遺跡である和田Ⅲ遺跡がかかることが明らかとなった。(註2) さらに平成11年11月には山本町教育委員会が主体となり、和田Ⅲ遺跡の試掘調査を再度実施した。(註3) 調査の結果、和田Ⅲ遺跡が事業予定地内に広がることが再確認され、その旨、山本町教育長から県文化課長に報告された（平成11年11月15日付け山教発第351号）。

この報告を受けて、県文化課、山本町教育委員会、山本町建設課、山本農林事務所の四者で、平成11年度事業施行について協議した結果、事業予定地内にかかる和田Ⅲ遺跡のうち、西側部分1,000㎡について、山本町教育委員会が主体となり当該年度に和田Ⅲ－Ｂ遺跡として発掘調査を実施すること



第１図　和田Ⅲ遺跡の位置

となった。調査は、平成11年11月～12月に行われ、その結果は山本町教育委員会から報告された。(註4)

和田Ⅲ遺跡の残りの東側部分3,700㎡の扱いについては、平成12年１月から３月にかけて、県文化課、山本町教育委員会、山本町建設課、山本農林事務所の四者で協議した結果、秋田県埋蔵文化財センターが平成12年度に発掘調査することとなった。

第２節　調査要項

１　調査要項

遺　跡　名　和田Ⅲ遺跡（略記号３ＷＤ－Ⅲ）
所　在　地　秋田県山本郡山本町豊岡金田字和田255外
遺 跡 状 況　山林
調査対象面積　3,700㎡
調 査 面 積　4,200㎡
遺 跡 時 期　縄文時代・古代
遺 跡 性 格　集落跡
調 査 目 的　農免農道整備事業金岡西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査
調 査 期 間　平成12年７月３日～10月４日
調査主体者　秋田県教育委員会
調 査 担 当　榮　一郎（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
伊藤一彦（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
遠藤　元（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
佐々木るり子（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
豊嶋健晃（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
調査総務担当　佐藤　悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課長）
嶋田敏輝（秋田県埋蔵文化財センター主査）
高橋　修（秋田県埋蔵文化財センター主任）
佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター主事）
八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター主事）
成田　誠（秋田県埋蔵文化財センター主事）
調査協力機関　秋田県山本総合農林事務所
山本町建設課・山本町教育委員会

註１　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(中央版)』　1990(平成２)年
註２　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年
註３　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第308集　2000(平成12)年
註４　山本町教育委員会　『和田Ⅲ－Ｂ遺跡－県営農免農道整備事業金岡西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　2000(平成12)年

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の立地

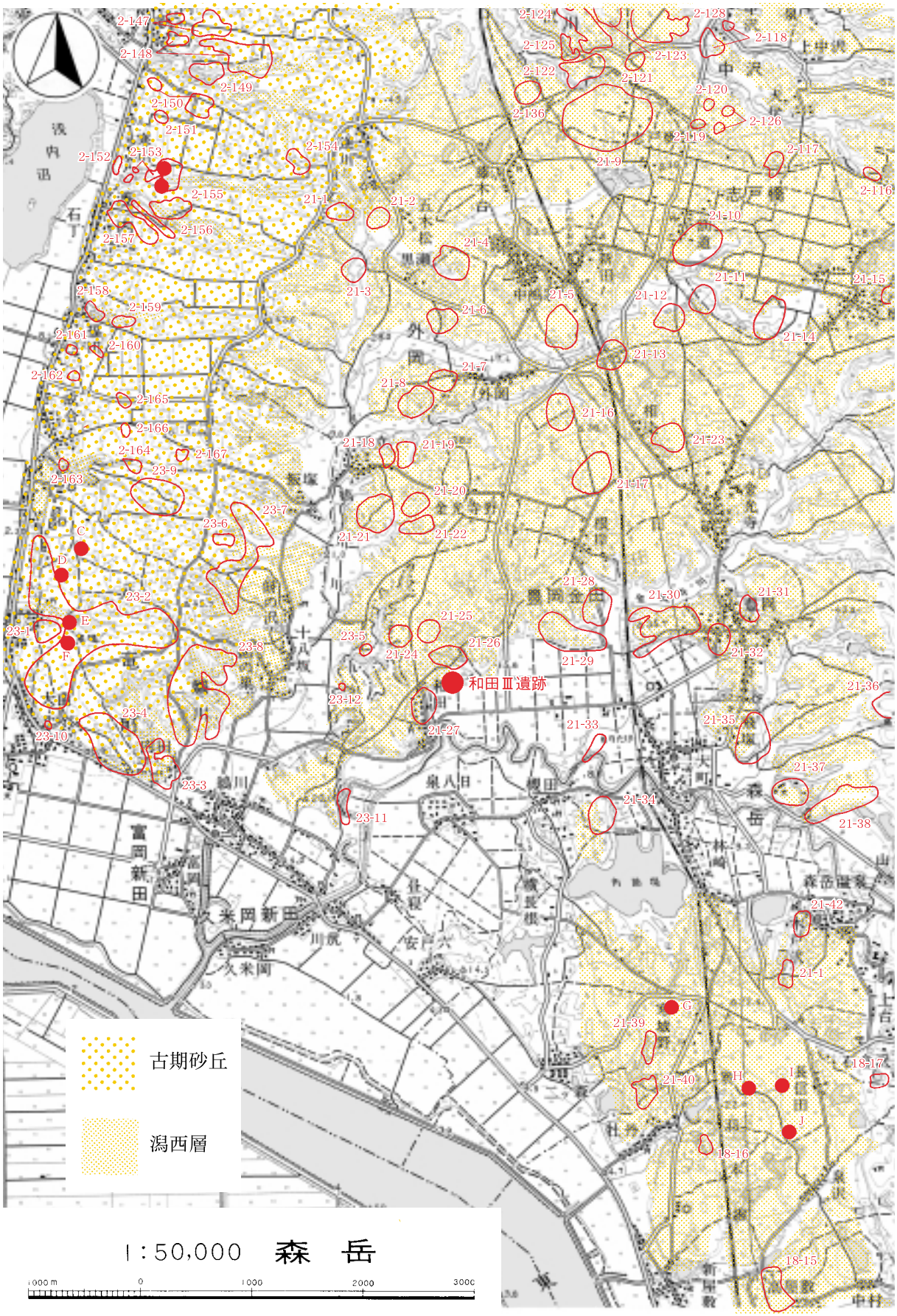
和田Ⅲ遺跡は、東経140°３′　19″、北緯40°６′23″[註1]、山本郡山本町豊岡金田字和田に所在する。山本町周辺の地形は、大勢として、南西側の旧八郎潟沿いの沖積低地およびその北側の日本海に沿った新古の砂丘列、東側の出羽丘陵、さらに両者に挟まれた台地群とに分かれる。遺跡は、このうちの台地群の一つである金光寺野台地の南端東側に立地する。金光寺野台地は、志戸橋野台地などとともに南北方向に断続的に発達する台地群を構成する。台地群は山本町を東西に横断する三種川以北では、北側の志戸橋野台地で標高60m前後、南側の金光寺野台地では標高20m前後となり、相対的に北側が高く、また、台地西側よりも東側が高くなっている。

金光寺野台地の表層地層は、第四紀更新世潟西層に相当する砂礫層で、台地面は武蔵野面相当面とされている。台地南側の比高10～15mの沖積面には、遺跡の東南東約1.2㎞で金光寺川と合流する三種川が、大きく蛇行しながら西流している。この三種川の浸食や台地縁辺への大小の谷の開析により、遺跡が立地する台地東端東側では、台地全体が長さ350m前後、幅250m前後の東向きの舌状台地様の地形となっている。元来、この舌状台地地形の北西隣りの台地縁辺部周辺が、縄文時代の遺物包含地である和田Ⅲ遺跡として周知されていた[註2]。さらに平成11年度の遺跡範囲確認調査によって、和田Ⅲ遺跡の範囲は南東隣りの舌状台地部分まで広がることが確認された[註3]。今回の調査区は、この東向き舌状台地を東西に横断した形となり、農道工事区域内の南北幅10～20m、東西長約260mの狭長な範囲である。調査区は、舌状台地上面の平坦部分西半側が標高18～19m前後、東端側が標高16m前後である[註4]。

第２節　歴史的環境

和田Ⅲ遺跡周辺の遺跡分布を見ると、出羽丘陵の西側に南北に連なる金光寺野台地をはじめとする台地群上とその西側の古期砂丘上に遺跡が集中する傾向を認めることができる。これらの地域では、昭和33年から48年にかけて６次におよぶ発掘調査が実施された八竜町萱刈沢貝塚（第２図23－１）をはじめとし、ほ場整備事業や琴丘能代道路建設事業などの開発事業に係り、およそ20遺跡が発掘調査されている。これら発掘調査された遺跡は、旧石器時代から中世にまでおよぶ。ただし、その帰属する時代には偏りがあり、現時点での資料から台地群とその周辺地域での通時的な遺跡の変遷は詳述し難い。よって、ここでは、発掘調査例を中心に旧石器時代から中世にかけての代表的な遺跡例を概観することとする。

旧石器時代の遺跡調査例には、能代市此掛沢Ⅱ遺跡（第２図２－147）、琴丘町家の下遺跡（同Ⅰ）、八竜町鴨子台遺跡（同Ｃ）などがある。現状では発掘調査例が少ないこともあり、当該時代遺跡の立地等の特徴は判然としない。此掛沢Ⅱ遺跡・家の下遺跡では米ヶ森型台形石器・ナイフ形石器を含む多量の石器群が出土している。両遺跡は石器類の出土量には格差があるが、組成や複数の遺物集中地点が集合する遺物分布状況などには共通性が強い。いずれも約26,000ＢＰとされるＡＴ（姶良丹沢火山



第２図　和田Ⅲ遺跡周辺の遺跡

第１表　和田Ⅲ遺跡周辺の遺跡一覧（１）

地図番号	遺跡名	所在地	主な時代	主な遺構・遺物	文献番号
2-116	大森大台野	能代市大森字大台野	縄文	縄文土器、石器	15
2-117	中沢大台野	能代市中沢字大台野	縄文	縄文土器、石器	15
2-118	古館	能代市中沢字蟻古館	中世	空堀、段築、土師器、須恵器、珠洲系陶器、瀬戸陶器	7
2-119	蟻の台Ⅰ	能代市中沢字蟻の台	縄文	縄文土器、石器	15
2-120	蟻の台Ⅱ	能代市中沢字蟻の台	縄文	縄文土器、石器	15
2-121	蟻の台Ⅲ	能代市中沢字蟻の台	縄文	縄文土器、石匙	15
2-122	蟻の台Ⅳ	能代市中沢字蟻の台	縄文	土器埋設遺構、炭焼窯、縄文土器(後期)	8
2-123	蟻の台Ⅴ	能代市中沢字蟻の台	縄文	縄文土器、石器、石匙	15
2-124	蟻の台Ⅵ	能代市中沢字蟻の台	縄文	石器	15
2-125	蟻の台Ⅶ	能代市中沢字蟻の台	縄文	縄文土器、石器	15
2-126	蟻の台Ⅷ	能代市中沢字蟻の台	縄文	縄文土器、石器	15
2-128	梯能台	能代市中沢字梯ノ台	縄文	縄文土器、石匙、石斧	15
2-136	九郎左ェ門台	能代市浅内字九郎左ェ門台	古代	土師器	15
2-147	此掛沢Ⅰ・Ⅱ	能代市浅内字此掛沢	旧石器 縄文 古代	フラスコ状土坑(縄文)、竪穴住居跡(古代)、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、土坑、弥生土器、土師器、羽口、鉄滓、旧石器	11
2-148	上の山Ⅰ				15
2-148	上の山Ⅱ	能代市浅内字上の山	古代	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、土師器、須恵器、陶磁器	11
2-149	ムサ岱	能代市浅内字ムサ岱	古代	土師器、須恵器、羽口、紡錘車、鉄滓	15
2-150	横長根Ａ、Ｂ	能代市浅内字横長根	縄文・古代	縄文土器、土師器	9
2-151	清水上	能代市浅内字清水上	縄文・古代	縄文土器、土師器、石器	9
2-152	寒川家下	能代市浅内字寒川家下	縄文	フラスコ状土坑	15
2-153	寒川家上ＡＢＣ	能代市浅内字寒川家上			15
2-154	大館南沢	能代市浅内字大館南沢	古代	須恵器	10
2-155	十二林	能代市浅内字十二林	縄文・古代	フラスコ状土坑(縄文)、陥し穴(縄文)、竪穴住居跡(古代)、掘立柱建物跡(古代)、土器焼成遺構(古代)、須恵器窯(古代)、製鉄炉(古代)、鍛冶関連遺構(古代)、縄文土器(前期、中期、後期)、土師器、須恵器、鉄製品、羽口、土錘、陶磁器、炭化米	14
2-156	蟹子沢	能代市浅内字蟹子沢	縄文・古代	縄文土器(後期・晩期)、土師器、須恵器、陶磁器	14
2-157	石丁	能代市浅内字石丁家上	縄文	土坑、陥し穴(縄文)、縄文土器(前期・後期)、石匙	14
2-158	福田上野	能代市浅内字福田上野	古代	土師器、須恵器	15
2-159	福田	能代市浅内字福田上野	古代	陥し穴(縄文)、竪穴住居跡(古代)、掘立柱建物跡(古代)、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、土錘、ガラス玉、銅銭	14
2-160	頭無上Ⅰ	能代市浅内字頭無上	古代	土師器、須恵器	10
2-161	頭無上Ⅱ	能代市浅内字頭無上	古代	土師器、須恵器	10
2-162	向山	能代市浅内字向山	弥生	弥生土器	9
2-163	成合Ａ	能代市浅内字沢辺	縄文	石器	9
2-164	成合Ｂ	能代市浅内字沢辺	縄文	縄文土器(後期)、石匙	9
2-165	成合Ｃ	能代市浅内字成合	縄文	石器	9
2-166	成合Ｄ	能代市浅内字成合・字沢辺	古代	土師器、須恵器	15
2-167	成合Ｅ	能代市浅内字成合	縄文	縄文土器	15
18-15	宝竜前	山本郡琴丘町鹿渡字宝竜前	縄文	土器埋設炉(竪穴住居跡)、フラスコ状土坑、縄文土器片(中期・晩期)、石器	5
18-16	地蔵長根	山本郡琴丘町鹿渡字北蔵長根	縄文	フラスコ状土坑	15
18-17	長信田	山本郡琴丘町鹿渡字長信田家後	縄文	石器	15
21-1	逆川	山本郡山本町外岡字渡道	縄文	縄文土器、石匙	15
21-2	五本松	山本郡山本町外岡字渡道	縄文	縄文土器、石器	15
21-3	渡道	山本郡山本町外岡字渡道	縄文	縄文土器、石器	15
21-4	中嶋	山本郡山本町外岡字中嶋	縄文	縄文土器、石器	15
21-5	志戸橋境	山本郡山本町外岡字志戸橋境	縄文	縄文土器、石器	15
21-6	黒瀬	山本郡山本町外岡字根岸道下	縄文	縄文土器	15
21-7	外岡	山本郡山本町外岡字長者屋敷	古代	土師器、鉄滓、石器	15
21-8	窪ノ沢	山本郡山本町外岡字窪ノ沢	古代	土師器	15
21-9	割道	山本郡山本町志戸橋字割道	縄文	縄文土器、石器	15
21-10	大下Ⅰ	山本郡山本町志戸橋字大下	縄文・古代	縄文土器、土師器(壺)	15
21-11	大下Ⅱ	山本郡山本町志戸橋字大下	縄文	縄文土器	15
21-12	霜谷地	山本郡山本町志戸橋字霜谷地	縄文	縄文土器、石鏃、石匙	15
21-13	大首崎	山本郡山本町外岡字大首崎	縄文	縄文土器	15
21-14	高田	山本郡山本町志戸橋字高田	縄文	縄文土器、土偶、石錘	15

第２表　和田Ⅲ遺跡周辺の遺跡一覧（２）

地図番号	遺跡名	所在地	主な時代	主な遺構・遺物	文献番号
21-16	長峰台	山本郡山本町外岡字長峰台	縄文	縄文土器、石器	15
21-17	乗越	山本郡山本町外岡字乗越	縄文	縄文土器、石器	15
21-18	館城	山本郡山本町豊岡金田字保竜	縄文	縄文土器、石器、仏像一体	15
21-19	保竜館	山本郡山本町豊岡金田字保竜	古代	土師器、石器	7
21-20	保竜Ⅰ	山本郡山本町豊岡金田字保竜	古代	土師器	15
21-21	保竜Ⅱ	山本郡山本町豊岡金田字保竜	古代	土師器	15
21-22	保竜Ⅲ	山本郡山本町豊岡金田字保竜	古代	土師器	15
21-23	相染	山本郡山本町豊岡金田字石持	縄文	石匙	15
21-24	和田Ⅰ	山本郡山本町豊岡金田字駒ヶ崎	縄文	縄文土器、石器	15
21-25	和田Ⅱ	山本郡山本町豊岡金田字駒ヶ崎	縄文	縄文土器、石器	15
21-26	**和田Ⅲ**	山本郡山本町豊岡金田字駒ヶ崎・字和田	縄文	縄文土器	25・本書
21-27	和田部落	山本郡山本町豊岡金田字和田	縄文	縄文土器、石槍、石匙	15
21-28	根岸Ⅰ	山本郡山本町豊岡金田字根岸	縄文	縄文土器	15
21-29	根岸Ⅱ	山本郡山本町豊岡金田字根岸	古代	土師器、石錘	15
21-30	田倉館	山本郡山本町豊岡金田字田倉館	縄文	縄文土器、石器	15
21-31	田の沢	山本郡山本町豊岡金田字田の沢	縄文	縄文土器、石器	15
21-32	豊岡	山本郡山本町豊岡金田字田倉館	縄文・古代	土師器、石鏃、石匙	15
21-33	小狭間館	山本郡山本町森岳字小狭間	中世	井戸、土塁	15
21-34	鳥矢場	山本郡山本町森岳字鳥矢場	縄文	縄文土器(晩期)、石棒	15
21-35	東飛塚館	山本郡山本町森岳字東飛塚	縄文・弥生	フラスコ状土坑(縄文)、竪穴住居跡(弥生)、土器埋設遺構(弥生)	15
21-36	ケゴ館	山本郡山本町森岳字上中沢	中世	段築	7
21-37	関の台	山本郡山本町森岳字関の台	縄文	縄文土器(壺)、石鏃	15
21-38	藤巻館	山本郡山本町森岳字館の沢	中世	空堀４条	15
21-39	古館堤	山本郡山本町森岳字古館堤頭	縄文	縄文土器、石鏃、石匙	15
21-40	古館堤頭	山本郡山本町森岳字古館堤頭	縄文	竪穴状遺構、フラスコ状土坑、縄文土器(中期)、土偶、石鏃、石匙、石錘	4
21-41	東堤沢	山本郡山本町森岳字東堤沢	縄文	縄文土器、石鏃、石匙	15
21-42	木戸沢	山本郡山本町森岳字木戸沢	縄文	縄文土器、石器	15
21-43	木戸沢館	山本郡山本町森岳字木戸沢	中世	空堀４条、土師器、須恵器	7
21-44	塚の岱	山本郡山本町森岳字牛沢	縄文	縄文土器、石器	15
23-1	萱刈沢貝塚	山本郡八竜町鵜川字萱刈沢	縄文	竪穴住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器(前期・中期)、貝類、獣骨、魚骨、人骨、釣針、石器	1･2･3･6
23-2	萱刈沢	山本郡八竜町鵜川字萱刈沢	縄文	縄文土器(前期･中期)、石器	15
23-3	館の上館	山本郡八竜町鵜川字館の上	古代・中世	空堀、段築、土師器、須恵器、青磁、白磁	18
23-4	館の上	山本郡八竜町鵜川字館の上	縄文･弥生･古代・中世	フラスコ状土坑(縄文)、陥し穴(縄文)、土器埋設遺構(弥生)、竪穴住居跡(古代)、掘立柱建物跡(古代)、堀(中世)、縄文土器、土師器、須恵器、鉄滓	24
23-5	上大沢	山本郡八竜町鵜川字上大沢	弥生	弥生土器	15
23-6	舞台沢Ⅰ	山本郡八竜町鵜川字舞台沢	縄文	縄文土器(中期・後期)	15
23-7	舞台沢Ⅱ	山本郡八竜町鵜川字舞台沢	縄文	縄文土器(後期)	15
23-8	苗代沢台	山本郡八竜町鵜川字苗代沢台	縄文	縄文土器	15
23-9	雛沢	山本郡八竜町鵜川字雛沢	縄文	縄文土器	15
23-10	大曲家の上	山本郡八竜町鵜川字大曲家の上	縄文・古代	縄文土器(後期)、土師器	12
23-11	扇田谷地	山本郡八竜町鵜川字扇田谷地	古代	竪穴住居跡(古代)、掘立柱建物跡(古代)、製鉄炉(古代)	23
23-12	放龍	山本郡八竜町鵜川字放竜	弥生(続縄文)	続縄文土器	15
A	寒川Ⅱ	能代市浅内字寒川家上	縄文・続縄文・古代	竪穴住居跡(縄文中～後期)、フラスコ状土坑(縄文)、土器埋設遺構(縄文)、土坑墓(続縄文)、製鉄炉、炭窯	13
B	寒川Ⅰ	能代市浅内字寒川家上	縄文・古代	竪穴住居跡(縄文早期・中～後期、古代)、土坑(縄文)、土器埋設遺構(縄文)、炭窯	13
C	鴨子台	山本郡八竜町鵜川字鴨子台	旧石器 縄文	旧石器、竪穴住居跡、陥し穴、土器埋設遺構、溝跡、縄文土器(早期・前期・中期)、石器	16
D	八幡台	山本郡八竜町鵜川字八幡台	縄文	陥し穴、縄文土器(後期)、石鏃、石匙	16
E	萱刈沢Ⅱ	山本郡八竜町鵜川字萱刈沢	縄文	竪穴住居跡、フラスコ状土坑、土坑、溝跡、縄文土器(早期・前期・中期・後期)、石器、土師器	17
F	萱刈沢Ⅰ	山本郡八竜町鵜川字萱刈沢	縄文	縄文土器(後期)、石器	17
G	古館堤頭Ⅱ	山本郡山本町森岳字古館堤頭	縄文	竪穴住居跡(中期)、掘立柱建物跡、土坑、縄文土器(中期)、土製品、石器、石製品	27
H	中の沢	山本郡琴丘町鹿渡字中の沢	縄文	土坑、フラスコ状土坑、溝跡、縄文土器、石器	19
I	家の下	山本郡琴丘町鹿渡字長信田家の下	旧石器 縄文	旧石器時代遺物集中地点、ナイフ形石器、米ヶ森型台形石器、竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑、土器埋設遺構、縄文土器(前期～晩期)、土偶、石鏃、石匙	20・21
J	泉沢中台	山本郡琴丘町鹿渡字泉沢中台	古代	縄文土器、石鏃、掘立柱建物跡、板塀跡、柱穴列、井戸跡、土坑、製鉄遺構、鉄滓捨場、土師器、須恵器、羽口、鉄滓、鉄塊系遺物、磁器	22

灰)降下以前の、現時点で県内では古段階に属する石器群であろう。鴨子台遺跡は上記遺跡群より後出する。時期が異なる二つの石器群が地点を異にして出土している。ひとつは、ナイフ形石器、彫器、石核、環状石製品などから成り、４箇所の遺物集中地点に分かれる。後期旧石器時代でも相対的に新段階に属する。もう一方の石器群は、細石刃核削片、掻器等12点が散発的に出土したに過ぎない。後期旧石器時代末期に属しようが、その詳細は判然としない。

和田Ⅲ遺跡周辺に限らず、秋田県内では、旧石器時代の詳細な変遷を追えるだけの調査例が乏しく、今後の資料増加を待つ部分が大きい。

縄文時代に入っても、早期以前に属する遺跡例は依然として少ない。上述の鴨子台遺跡では、草創期に属する長者久保型の局部磨製石斧１点が出土している。完形品が単独で出土しており、当該期に特徴的な、いわゆるデポ様の出土状態の一種と認定し得る可能性があろう。早期末になると、能代市寒川Ⅰ遺跡(第２図Ｂ)で、竪穴住居跡７軒が検出されている。県内では早期中葉以降竪穴住居跡により構成される集落跡の検出例が散見されるようになり、相対的に定住度が高まることを想定し得る。和田Ⅲ遺跡周辺でも小規模ながらも集落が形成されつつあった状況を窺うことができる。

秋田県内では、前期中葉以降、遺跡数が増加する。さらに、遺跡規模も拡大する傾向があり、中には拠点集落と評価し得るような大規模遺跡も出現する。能代市杉沢台遺跡(註5)、大館市池内遺跡(註6)、協和町上ノ山Ⅱ遺跡(註7)などが代表例である。しかし、現時点では、和田Ⅲ遺跡周辺では大規模遺跡確認例はない。

中期前半になると、萱刈沢貝塚(第２図23－１)で竪穴住居跡16軒(註8)、フラスコ状土坑14基(註9)が検出されている。遺跡の一部分が調査されたに過ぎないが、現状から、沿岸部の拠点集落であった可能性があろう。竪穴住居跡には竪穴長軸が10mを越えるような大形例と、より小形の例が存在するなど、その構成や帰属時期には和田Ⅲ遺跡と共通点がある。また、琴丘町宝竜前遺跡(第２図18－15)では、詳細は必ずしも判然としないが、竪穴住居跡に伴うと推定できる中期中葉前後の土器埋設炉２箇所、密集して分布するフラスコ状土坑40基以上などが検出されている。

その後、中期後半には、山本町古館堤頭Ⅱ遺跡(第２図Ｇ)で大木９式～大木10式期の環状の竪穴住居配置をなす集落が出現している。また、寒川Ⅰ遺跡では中期後葉の竪穴住居跡３軒が、八竜町萱刈沢Ⅱ遺跡(第２図Ｅ)でも中期後半前後の竪穴住居跡２軒などが、それぞれ検出されている。このように、遅くとも中期になると、和田Ⅲ遺跡周辺でも、一定規模の集落が出現していることを認めることができる。ただし、その遺構群の構成などには変異があり、その性格も必ずしも一様ではないものと推測し得よう。

後期から晩期にかけては、寒川Ⅰ遺跡で後期前葉の竪穴住居跡３軒が、寒川Ⅱ遺跡(第２図Ａ)では中期末から後期初頭の竪穴住居跡２軒が、それぞれ検出されている。これらの遺跡や本遺跡例を除くと、いずれの時期にも竪穴住居跡の検出例が乏しく、大規模遺跡例を認めることができない。現時点では、当該期の集落の実態は判然としない。一方、八竜町萱刈沢Ⅰ遺跡(第２図Ｆ)で、後期前葉十腰内Ⅰ式期の捨て場が、能代市柏子所貝塚(註10)には８基の土坑墓からなる晩期の墓域がそれぞれ存在する。これらの事例なども考慮すると、当該時期には、台地群上において、捨て場あるいは墓域が単独で形成されていた可能性があり、おそらく、墓域や祭祀域と居住域とが分離するなど、それ以前の時期とは居住体制の変化、換言すれば集落形態の変容が生じたものと推定できる。相対的に小形の竪穴住居

あるいは平地住居が単独もしくは少数営まれたと推定できる本遺跡例を重視すれば、当該時期の集団は、通常、小規模に分散し、その居住域は短期的、断続的に利用された可能性があろう。

弥生時代では、館の上遺跡（第２図23－４）から、前期の土器埋設遺構24基をはじめ、土坑56基など、東飛塚館跡（同21－35）からは、前期の竪穴住居跡１軒、土器埋設遺構１基などが検出されている。両遺跡の土器埋設遺構は、基本的に遠賀川系の大形壺を棺身とした土器棺墓である。ただし、館の上遺跡では同時期の住居は確認されていない。墓域が独立して営まれた可能性が強く、住居と土器棺墓とが併存する可能性がある東飛塚館跡とは異なった様相を示しているかもしれない。一方、弥生時代後半（併行期）では、寒川Ⅱ遺跡で土坑墓６基が検出されている。これらの土坑墓は続縄文土器の後北C_2式土器を副葬するなど、北海道南部と共通した墓制を示している。このような状況は、当該期には、系譜を異にする集団が南下し、旧来の集団と交代した、あるいは同一地域内で異なる系譜に属する集団が棲み分けした等の可能性を想定し得るが、資料不足のため、断定できない。さらに、現状では以後の古墳時代とその併行時期に属する遺跡の確認例がなく、その実態は不明である。

古代においては、奈良時代まで遡る確実な遺跡もやはり不明である。これに対し、平安時代に入ると、寒川Ⅱ遺跡、能代市十二林遺跡（第２図２－155）、能代市福田遺跡（同２－159）、八竜町扇田谷地遺跡（同23－11）、八竜町館の上遺跡など、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等から成る集落が多数出現する。これらの遺跡では、土器焼成遺構や製鉄炉、あるいは、十二林遺跡で検出された地下式の須恵器窯跡など、生産関連施設が伴うことが多い。今回の調査では平安時代の竪穴住居跡１軒を検出したのみであるが、本遺跡も鉄滓が出土していることから大きくはこれらの集落群の類例であろう。このような集落内およびその近隣で農耕以外の生産活動の痕跡が顕著であることは、平安時代における秋田県北部集落の特色の一つと評価できる可能性があろう。当該集団の性格や周辺地域との諸関係を考える上で注意すべきである。

中世には、館の上館跡（第２図23－３）をはじめとし、城館（跡）が出現する。このほか、和田Ⅲ遺跡の周辺地域での確認例はないものの、近隣地域では、琴丘町金仏遺跡[註11]のような集落跡、あるいは、琴丘町堂の下遺跡[註12]のような大規模な製鉄関連遺跡も存在する。このうち、堂の下遺跡は、谷を挟んで隣接する古代後半の製鉄関連施設を伴う集落跡である小林遺跡[註13]から継続的に営まれた可能性も想定されている。堂の下遺跡においては、小林遺跡に比べ鉄生産はより大規模に営まれおり、専業集団の出現など、鉄生産体制の大きな画期を認めることも可能かもしれない。今後、古代から中世にかけての集落と生産に関わる諸関係の変遷について検討を進める必要があろう。

第１・２表文献

１　大和久震平　『山本郡八龍村萱刈沢貝塚発掘報告』　秋田県立鷹巣農林高等学校郷土史研究部報告第五冊　1960（昭和35）年

２　八竜町教育委員会　『第２次萱刈沢貝塚概報』　1973（昭和48）年

３　八竜町教育委員会　『第３・４次萱刈沢貝塚概報』　1974（昭和49）年

４　山本町教育委員会　『古館堤頭遺跡発掘調査報告書』　1977（昭和52）年

５　琴丘町教育委員会　『宝竜前遺跡緊急発掘調査報告書』　1978（昭和53）年

６　八竜町教育委員会　『萱刈沢貝塚』　山本郡八竜町萱刈沢貝塚発掘調査報告書　1979（昭和54）年

7　秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年
8　秋田県教育委員会　『真壁地遺跡･蟻ノ台遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第102集　1983(昭和58)年
9　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第103集　1983(昭和58)年
10　能代山本地方史研究会　『能代山本地方史研究』　２号　1983(昭和58)年
11　秋田県教育委員会　『此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第114集　1984(昭和59)年
12　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』　３　昭和59年度　1985(昭和60)年
13　秋田県教育委員会　『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　－寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第167集　1988(昭和63)年
14　秋田県教育委員会　『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　－福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第178集　1989(平成元)年
15　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(中央版)』　1990(平成２)年
16　秋田県教育委員会　『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　－鴨子台遺跡・八幡台遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第230集　1992(平成４)年
17　秋田県教育委員会　『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　－萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第231集　1993(平成５)年
18　秋田県教育委員会　『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　－館の上館遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第249集　1994(平成６)年
19　秋田県教育委員会　『県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　－中の沢遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第255集　1995(平成７)年
20　秋田県教育委員会　『県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　－家の下遺跡(１)－』　秋田県文化財調査報告書第256集　1995(平成７)年
21　秋田県教育委員会　『家の下遺跡(２)　旧石器時代編　－県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』　秋田県文化財調査報告書第275集　1998(平成10)年
22　秋田県教育委員会　『泉沢中台遺跡－県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』　秋田県文化財調査報告書第276集　1998(平成10)年
23　秋田県教育委員会　『扇田谷地遺跡－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』　秋田県文化財調査報告書第283集　1999(平成11)年
24　秋田県教育委員会　『館の上遺跡－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』　秋田県文化財調査報告書第298集　2000(平成12)年
25　山本町教育委員会　『和田Ⅲ－Ｂ遺跡－県営農免農道整備事業金岡西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　2000(平成12)年
26　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』　19　平成12年度　2001(平成13)

年
27　秋田県教育委員会　『古館堤頭Ⅱ遺跡－一般県道森岳鹿渡線地方道踏切除却工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　秋田県文化財調査報告書第338集　2002(平成14)年
28　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』　20　平成13年度　2002(平成14)年

註１　日本測地系による。世界測地系では東経140°３′６″、北緯40°６′33″である。

註２　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(中央版)』　1990(平成２)年

註３　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

註４　本節執筆と第２図作成には下記の文献を参考にした。
秋田県農政部農地整備課　『土地分類基本調査　森岳・羽後浜田』　1984(昭和59)年
地質調査所　『1:50,000地質図　森岳』　1985(昭和60)年

註５　秋田県教育委員会　『杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第83集　1981(昭和56)年

註６　秋田県教育委員会　『池内遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅷ－　遺構篇』　秋田県文化財調査報告書第268集　1997(平成９)年
秋田県教育委員会　『池内遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－　遺物・資料篇』　秋田県文化財調査報告書第282集　1999(平成11)年

註７　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ　－上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第166集　1988(昭和63)年

註８　昭和47年度の発掘調査において確認された竪穴住居跡のうち、第１号(４)および第４号(７)竪穴住居跡は、第２号(５)竪穴住居跡に伴う一段浅い床面部分に相当する可能性があろう。

註９　これらには、竪穴住居に伴うと想定されている例も含む。

註10　秋田県教育委員会・能代市教育委員会　『柏子所貝塚』　1966(昭和41)年

註11　秋田県教育委員会　『金仏遺跡－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』　秋田県文化財調査報告書第333集　2002(平成14)年

註12　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』　17　平成10年度　1999(平成11)年
秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』　18　平成11年度　2000(平成12)年
秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』　19　平成12年度　2001(平成13)年

註13　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』　19　平成12年度　2001(平成13)年

第３章　調査の概要

第１節　遺跡の概観

和田Ⅲ遺跡は、第２章第１節で触れたように、金光寺野台地東端部に立地する周知の遺跡であった。平成11年度の山本町教育委員会による第１次調査および平成12年度の秋田県埋蔵文化財センターによる第２次調査の結果、和田Ⅲ遺跡は台地東端部東側の東向き舌状台地地点周辺においては、縄文時代中期前葉、同晩期前後、平安時代の集落跡が存在することなどが判明した。(註1)

縄文時代中期前葉の集落跡は、舌状台地中央から西半側に立地する。竪穴住居跡10軒、フラスコ状土坑７基などのほか、舌状台地北縁側の開析谷に当該時期の遺物包含層(捨て場)が分布する。竪穴住居跡には竪穴形状が長楕円形平面の大形例と円形平面の相対的に小形例とが存在する。前者のうち竪穴全形が判明したものは竪穴長軸10～12m前後、後者では竪穴長軸５～７m前後である。また、両者には竪穴内にフラスコ状土坑を伴うと判断できる例が存在する。

縄文時代晩期前後の集落跡は、舌状台地東半側に立地する。２軒の竪穴住居跡のほか、小形の柱穴群が分布する。後者は床面まで削平された竪穴住居もしくは平地式住居の柱穴であった可能性が強い。このほかには、土坑が僅かに伴うのみで、当該時期の墓域、遺物包含層などは未確認である。恐らく当該時期には、小規模の集落が断続的に営まれ、墓域等は別地点に形成されたものと推定できる。

また、舌状台地西端部では縄文時代中期後葉の竪穴住居跡１軒が検出されており、舌状台地基部からその北側にかけては縄文時代中期後葉の集落跡が存在する可能性も想定できる。

古代の遺構は、舌状台地中央部と西端側の２箇所に分布する。前者で竪穴住居跡１軒、後者で土坑６基、焼土遺構２基などが検出されたにとどまる。当該時期の詳細な状況は判然としないが、両箇所から鉄滓が出土しており、鉄関連の生産遺構を伴う当該時期の集落が舌状台地基部からその北側に広がっている可能性があろう。

以上のように、２次におよぶ発掘調査の結果、和田Ⅲ遺跡は縄文時代中期前葉、同中期後葉、同晩期前後および古代の集落が時期により中心となる地点を異にしながら、断続的に営まれたものと想定できる。調査範囲が限定されることもあり、各時期の集落の詳細な性格は必ずしも明瞭ではない。現段階の所見からは、縄文時代中期前葉においては、大小の竪穴住居が併存する一定規模の集落であったものと推測できる。一方、縄文時代中期後葉および古代の集落については、その詳細は判然としないが、縄文時代晩期前後においては、上述したように小規模の集落が断続的に営まれたものと想定できよう。

第２節　発掘調査の方法

調査区は、既述のように舌状台地上の農免農道工事区域にほぼ対応し、南北幅10～20m、東西長約260mの狭長な範囲である。ただし、台地上の工事区域内のうち、当初は、調査区西端部を西から北東方向に横切る町道部分とこの町道から分岐する農道と町道との間の斜面は調査対象外であった。調

査区には、日本測地系平面直角座標第Ｘ系に基づき、（Ｘ＝12.07㎞，Ｙ＝－66.35㎞）を原点とし、Ｘ軸・Ｙ軸に沿った各４ｍ間隔の方眼を設定した。方眼の原点を通る南北線をＭＡ、同じく東西線を50とし、南北線はアルファベットの符号を西に向かって昇順となるよう、東西線は数字の符号を北に向かって昇順となるよう、それぞれ付した。なお、南北線に付した２文字のアルファベットはＡ～Ｔまでの20文字の繰り返しとなっている。この方眼によって画する４ｍ四方の区画は、その南東隅を通る南北線の符号と東西線の符号とを組み合わせて、ＭＡ50区のように呼称した（第３図上段）。なお、磁北は、座標北（Ｘ軸）から西へ11°15′25″偏する。

遺構は、ＳＫ01のように01からの通し番号を付し、調査の結果、遺構でないと判断した場合は欠番とした。ただし、柱穴もしくは柱穴様の小穴は調査時もしくは整理時に、ＭＡ50ＳＫＰ１、ＭＢ50ＳＫＰ１のように各区ごとに通し番号を付した。また、竪穴住居跡に関連する柱穴もしくは性格が判然としない小形の掘り込みは、ＳＩ03Ｐ１のように各竪穴住居跡略記号とＰ１からの番号とを組み合わせて表記することとした。この竪穴住居跡関連柱穴もしくは小形の掘り込みの番号は、整理段階で新たに付け直した。なお、竪穴住居跡に伴うと判断したフラスコ状土坑については、ＳＫＦ20のように単独の遺構として番号を付した。

このほか、調査の結果、複数の遺構の重複であることが判明した場合は、遺構番号の末尾にアルファベットの細別記号を付して区分した。ただし、細別記号はＡから任意の順番で付した場合と、ＳＩ01ＥとＳＩ01Ｗのように相対的な方位をアルファベットで付した場合とがある。

調査は、調査区内に多数の切り株が存在し、かつ、表土が厚さ10～20㎝程度と比較的薄く、重機により表土掘削を行うことは、遺構を大きく削平する可能性が高いと判断したことから、当初、表土以下は人力により掘り下げることとした。しかしながら、調査開始後、町道との分岐地点周辺の農道下に縄文時代の遺物包含層が存在し、さらにこの遺物包含層は調査予定範囲外である農道北側の斜面にまで広がることが判明した。このように、調査対象面積が増大することとなるとともに、調査区西側部分には、大形の竪穴住居跡を始めとし、当初の予想を上回る縄文時代の遺構が分布することも判明した。これらのことから、範囲確認調査結果と全体の調査計画の見直しが必要となった。早急に調査区全体の遺構分布状況を把握する必要があることと、現状の埋蔵文化財センターの業務量からは調査期間の大幅な延長や職員の増員は困難であることから、止む終えず、ＬＯ南北線以東の調査区東半部は表土以下を重機（バックホウ）によって除去し、遺構・遺物を検出することとした。

調査区には、調査区中央のＭＡ南北線沿いと調査区西端側のＮＤ南北線沿いの２箇所に南北方向の畦を設定し、遺跡の基本層序を観察・記録することとした。また、調査区中央東側のＬＤ南北線からＬＩ南北線間の調査区北壁および調査区東端ＫＤ南北線からＫＩ南北線間の調査区南壁の土層断面も観察・記録した。

遺構調査は、原則として、当初半截するか、あるいは畦を残して掘り下げ、覆土土層断面を観察し、その実測・写真撮影を行うこととした。ただし、柱穴の多くは、半截後、覆土土層の観察とその特徴の文章による記録のみで完掘した。

第３節　発掘調査の経過

調査は平成12年７月３日から榮以下調査員５名、作業員約40名の体制で開始した。調査終了予定は、平成12年９月29日であった。当初、調査区西端側から人力により表土以下の掘り下げと遺構・遺物の確認作業を実施した。なお、７月12日～14日は榮が埋蔵文化財センター勤務となり、児玉準調査課長補佐が代わって調査に参加した。

調査開始後２週間前後の時点で、本章第２節で触れたように、調査区西側に縄文時代中期前葉の竪穴住居跡を始めとする多数の遺構群を確認するとともに、同時期の遺物包含層が当初の調査予定範囲外の工事区域内に広がっていることが明らかとなった。これにともなって、調査計画全体の見直しが必要となった。しかし、調査期間を大幅に延長すると、その期間中に埋蔵文化財センター内で調査員を充当することが困難な状況であった。このような内部事情から、発掘調査期間の大幅な延長は避けざるを得ず、最終的に、ＬＯライン以東の調査区東半部は、人力ではなく、重機により表土以下の掘り下げと遺構確認作業とを行い、作業の迅速化をはかるとともに、当初予算から作業員賃金を増額補正し、作業員の大幅な増員もはかることとした。

重機による遺構・遺物の確認作業は８月31日、９月４日・６日・７日の４日間実施し、そのうち、８月31日は小山有希文化財主事が調査に参加し、当該作業に従事した。結果、調査区東半部では竪穴

第３表　和田Ⅲ遺跡調査工程

	表土除去（人力）	表土除去（重機）	遺構精査	主な調査状況	特記事項
7月				調査区西半部で縄文時代中期前葉の竪穴住居跡５軒前後、遺物包含層を確認	24～26日現場休み
8月				調査区中央部で縄文時代中期前葉の竪穴住居跡ＳＩ15・16を確認 調査区中央部西寄りでフラスコ状土坑ＳＫＦ19を確認 調査区中央部で古代竪穴住居跡ＳＩ25を確認	埋蔵文化財センター芳賀所長視察（２日） 文化財保護室武藤学芸主事視察（３日） 桜田課長補佐・利部科長視察（４日） 桜田・児玉課長補佐視察（10日） 山本総合農林事務所筒井副主幹・村上技師視察（25日・30日） 埋蔵文化財センター船木副所長・利部科長視察（28日）
9月				調査区西側で縄文時代の竪穴住居跡ＳＩ32・34・41を確認 遺物包含層掘り下げ完了 調査区地山面地形測量	文化財保護室武藤学芸主事視察（７日） 山本総合農林事務所筒井副主幹・村上技師、文化財保護室武藤学芸主事他と調査期間延長と遺跡引き渡し等について協議（27日） 冨樫県立博物館長・文化財保護室武藤学芸主事視察（29日）
10月					山本町新堀教育長一行視察（2日） 埋蔵文化財センター芳賀所長調査終了挨拶（４日）

住居跡３軒、土坑10基前後、柱穴50基前後が分布することを確認し、順次精査を実施した。精査の結果、調査区東半部の遺構群は、調査区西半部の遺構群が主として縄文時代中期前葉に属するのとは異なり、多くはより後出の縄文時代晩期前後に属する可能性が強いことが判明した。なお、９月４日～９月29日までは山本町派遣の嶋田仁埋蔵文化財センター文化財主事が調査に参加した。

今回の発掘調査は、最終的に4,200㎡を対象とし、全体で縄文時代の竪穴住居跡12軒、古代の竪穴住居跡１軒、フラスコ状土坑７基、土坑13基、溝跡３条、柱穴列１列、柱穴70基、縄文土器を中心とした遺物292箱（容量18リットルコンテナ換算）などを検出した。

当初終了予定から３日間調査期間を延長し、平成12年10月４日に出土遺物、発掘機材等を埋蔵文化財センターへ搬出し、発掘調査を完了した。以下、調査経過の概要は第３表に示す。

第４節　整理作業の方法と経過

今回の発掘調査おいては、調査終了段階で容量18リットルコンテナに換算すると縄文土器等221箱、石器71箱が出土した。出土遺物の洗浄は、当初、発掘調査期間中の雨天の日に現場で一定量実施する計画であった。しかし、調査期間中にはほとんど降雨がなく、結果的に雨天による現場作業休止日がなかった。このため、現場では遺物の洗浄はほとんど実施できなかった。出土遺物の洗浄は、発掘調査終了後、埋蔵文化財センターで平成12年11月から平成13年２月と平成13年４月から５月にかけて断続的に実施した。これと平行して洗浄済み遺物の注記作業を平成13年２月から６月まで実施した。

これらの作業と併行して、平成12年10月から平成13年４月まで遺構の第二原図を作成した。これらの遺構第二原図の製図は平成13年11月から平成14年１月にかけて株式会社ハイマーテックに委託した。

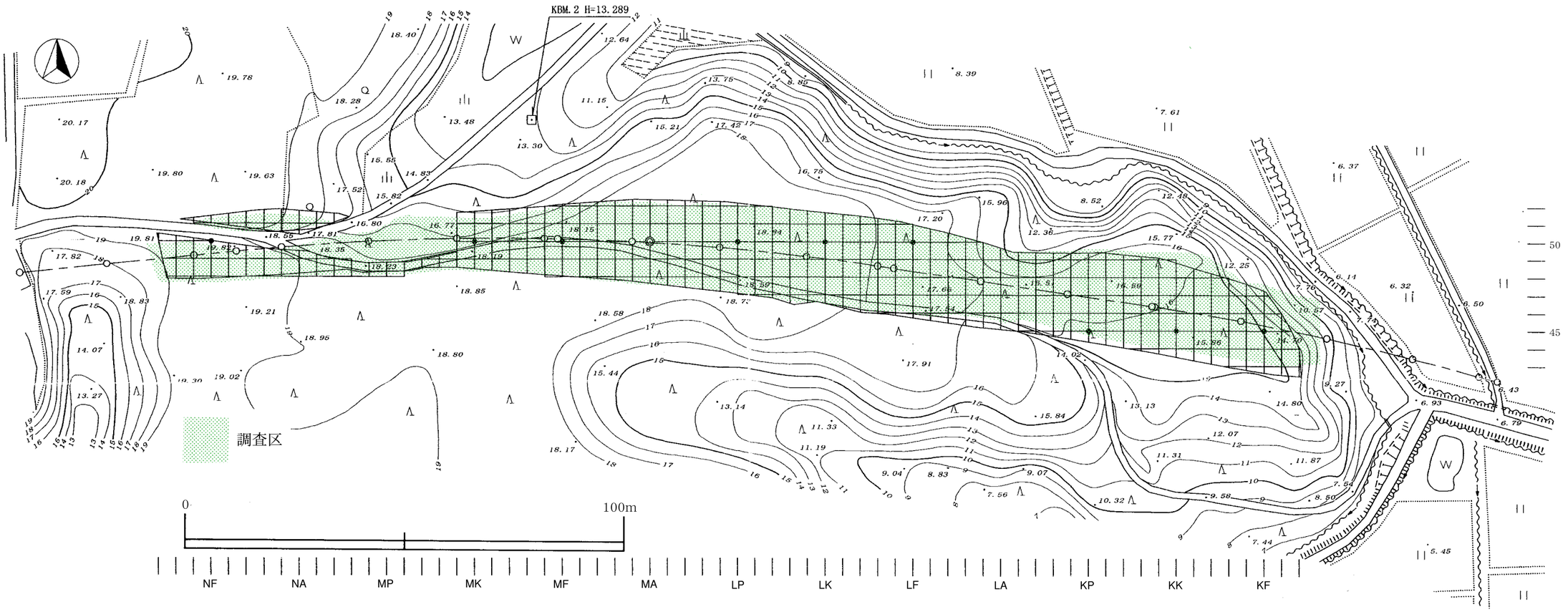
遺物の注記作業完了後、土器の接合復元作業を平成13年１月から10月にかけて行った。この間、遺物を分類し、報告書掲載遺物を選択した。その際、遺構外出土土器類の整理作業については、櫻田隆南調査課長と小林克副主幹の協力を得た。

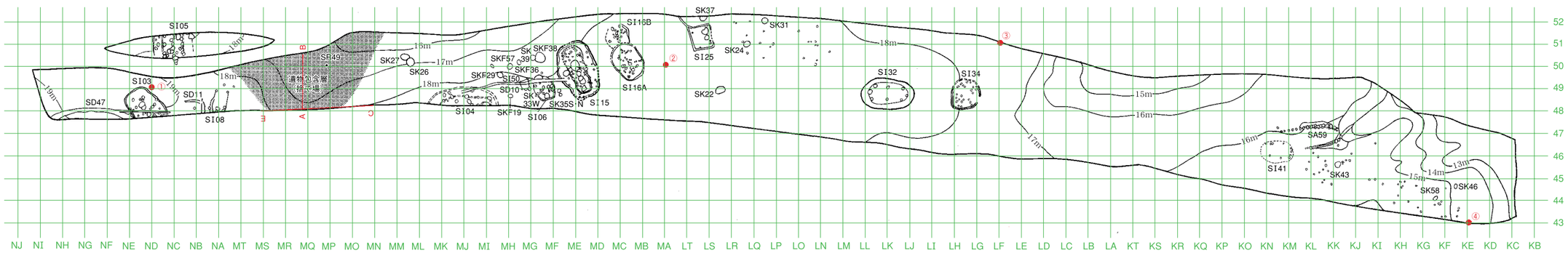
最終的に、土器約800点、石器約300点などを図化した。そのうち、完形土器51点の実測・製図については、平成13年９月から平成14年１月にかけて有限会社アイテックスへ、平成14年５月から９月まで株式会社シン技術コンサルへ、それぞれ委託した。石器189点の実測・製図については、平成12年11月から平成13年３月にかけて株式会社シン技術コンサルへ、平成13年11月から平成14年３月にかけて有限会社アイテックスへ、それぞれ委託した。また、出土遺物の写真撮影は平成14年11月に株式会社シン技術コンサルに委託した。

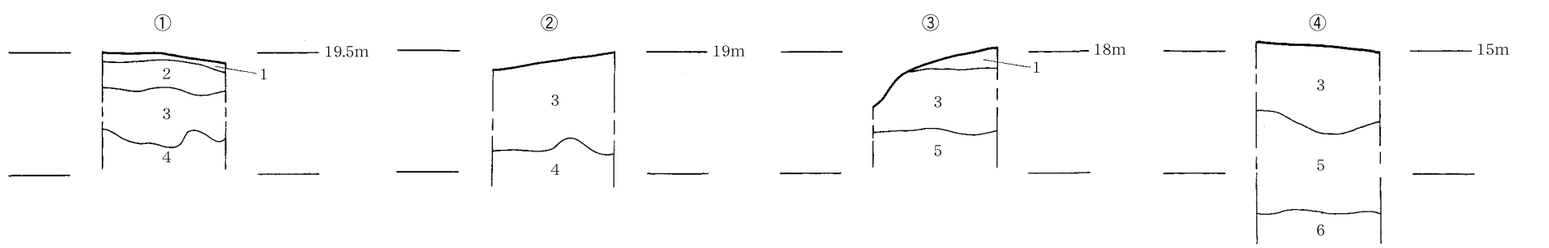
このほか、平成14年７月から９月にかけて岩手県立博物館赤沼英男氏に鉄滓の成分分析を、平成14年11月には、パリノ・サーヴェイ株式会社に石質鑑定をそれぞれ委託した。

原稿は平成14年12月に取りまとめて編集し、平成14年12月末に入稿した。

註１　以下の舌状台地西端部についての記述は、下記の山本町教育委員会による第１次調査報告書に基づく。
山本町教育委員会　『和田Ⅲ－Ｂ遺跡－県営農免農道整備事業金岡西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』
2000（平成12）年







1　黒褐色土(10YR2/2)　粘性中　しまり中　表土(基本層序Ⅰ層)
2　暗褐色土(10YR3/3)　粘性強　しまり強　造成土
3　黒褐色土(10YR2/3)　粘性中　しまり中　黒ボク土(基本層序Ⅱ層)
4　褐色土(10YR4/4)　粘性強　しまり強　地山漸移層(基本層序Ⅲ層)
5　明黄褐色土(10YR6/6)　粘性中　しまり中　地山層(基本層序Ⅲ層)
6　黄褐色砂礫(10YR5/6)　粘性中　しまり強　段丘礫層(基本層序Ⅲ層)

第３図　和田Ⅲ遺跡調査区・遺構配置図・土層柱状図

第４章　調査の記録

第１節　層序

和田Ⅲ遺跡は、第四紀更新世潟西層相当の砂礫層を構成層とする金光寺野台地の南端東側に立地する。この金光寺野台地上面は武蔵野面に相当するとされている。(註1) 遺跡周辺では、大小の開析谷の形成や河川の浸食により東向きの幅30～40m前後の舌状台地様をなしている。今回の調査区は、この舌状台地様部分を東西に横断する南北幅10～20m、東西長約260mの狭長な範囲である。調査区の現況は、調査区西端部を西から北東方向に延びる町道とこの町道から分岐し、調査区中央部をほぼ東西方向に横断する農道を除き、杉林であった。

調査区は、北側の台地崖面沿いに開口するいくつかの小谷状の落ち込み部分を除くと、ほぼ平坦である。平坦部分は、西半側が相対的に広く、東に向かって狭くなり、特に東端部は狭小である。平坦部分では、西側から中央部にかけてが標高18～19m前後、東端側が標高16m前後である。台地下の沖積面との比高は10～15m前後である。

１　基本層序(第３図)

台地の構成層である潟西層は、フラスコ状土坑等の深く掘り込まれた遺構の調査でその最上部を確認した。確認部分では、淘汰の進んだ細砂で、未固結である。その上面標高は、調査区中央部周辺で17.4m前後である。調査区東端部では潟西層の上位に三種川の旧河道に伴うと推定できる層厚50㎝前後の段丘礫層(④地点６層)が不整合に堆積する。当該地点周辺では、潟西層上位は標高14.3m前後まで削平されている。

潟西層および段丘礫層の直上には層厚30～80㎝前後の明黄褐色土(５層)が堆積する。調査区西半側ではその上位は褐色土(４層)に漸移的に変化する(①②地点)が、東半側には明瞭に認めることができない(③④地点)。また、５層は調査区東端部の台地崖際では消失し、段丘礫層(６層)の直上に後述する３層が直接堆積する。今回の調査においては、最終的な遺構確認面は東端部が６層上面であった以外は、４層もしくは５層上面であった。各層はいずれも無遺物層であり、調査においてはそれぞれ地山層(５・６層)、地山漸移層(４層)と判断し、以下では基本層序Ⅲ層としてまとめる。なお、各遺構に関する記述では、この基本層序層番号による表記と潟西層の砂層も含めた地山(土)等の表記が混在する場合がある。

Ⅲ層上位には、調査区全域に黒褐色土が堆積する。土壌層位Ａ層に相当し、淡色黒ボク土壌に分類される。(註2) 本層は段丘崖沿いの小谷状落ち込み部分で相対的に厚くなる以外は、層厚は30㎝前後に過ぎない。特に調査区東端側では厚さ15～20㎝前後と薄くなる。

当該層は、西側では町道造成時の造成土(２層)を挟み、現表土層(１層)と黒褐色土層(３層)とに分かれる(①地点)など、一部の地点では二分することができる。１層は、草根や樹根が密集し、間隙が多い黒褐色土である。層厚は最大で10数㎝程度である。肉眼観察では、典型的な黒ボク土よりも黒味が弱く、腐植の含有が少ない。主として現在の杉林下もしくは同様の森林植生下で発達した土壌と推

定する。３層は、相対的に草根や樹根が少なく、やや緻密になる部分である。色調は、黒褐色を呈し、１層との境界は漸移的である。特に調査区東半側は全体に土壌の発達が弱く、１層と３層との区分は明確には認め難い。

調査では、現表土の１層もしくは３層上位を除去した段階で、縄文時代中期前葉の竪穴住居廃絶後のくぼみに流入したと判断できる黒色土および遺物を確認できることから、３層上面もしくはその付近が縄文時代中期前葉前後の地表面に相当するものと判断できる。これらの層中に明瞭なテフラ層は確認できず、また、遺跡周辺の地形は完新世以降に大規模な浸食作用や堆積作用を受ける可能性は低いと推定できる。これらのことから、おそらく当時の地表面は現地表面とほぼ同一面であったものと推測する。

以下の記述では、現表土層（１層）を基本層序Ⅰ層、表土下の黒褐色土（３層）を基本層序Ⅱ層と表記する。

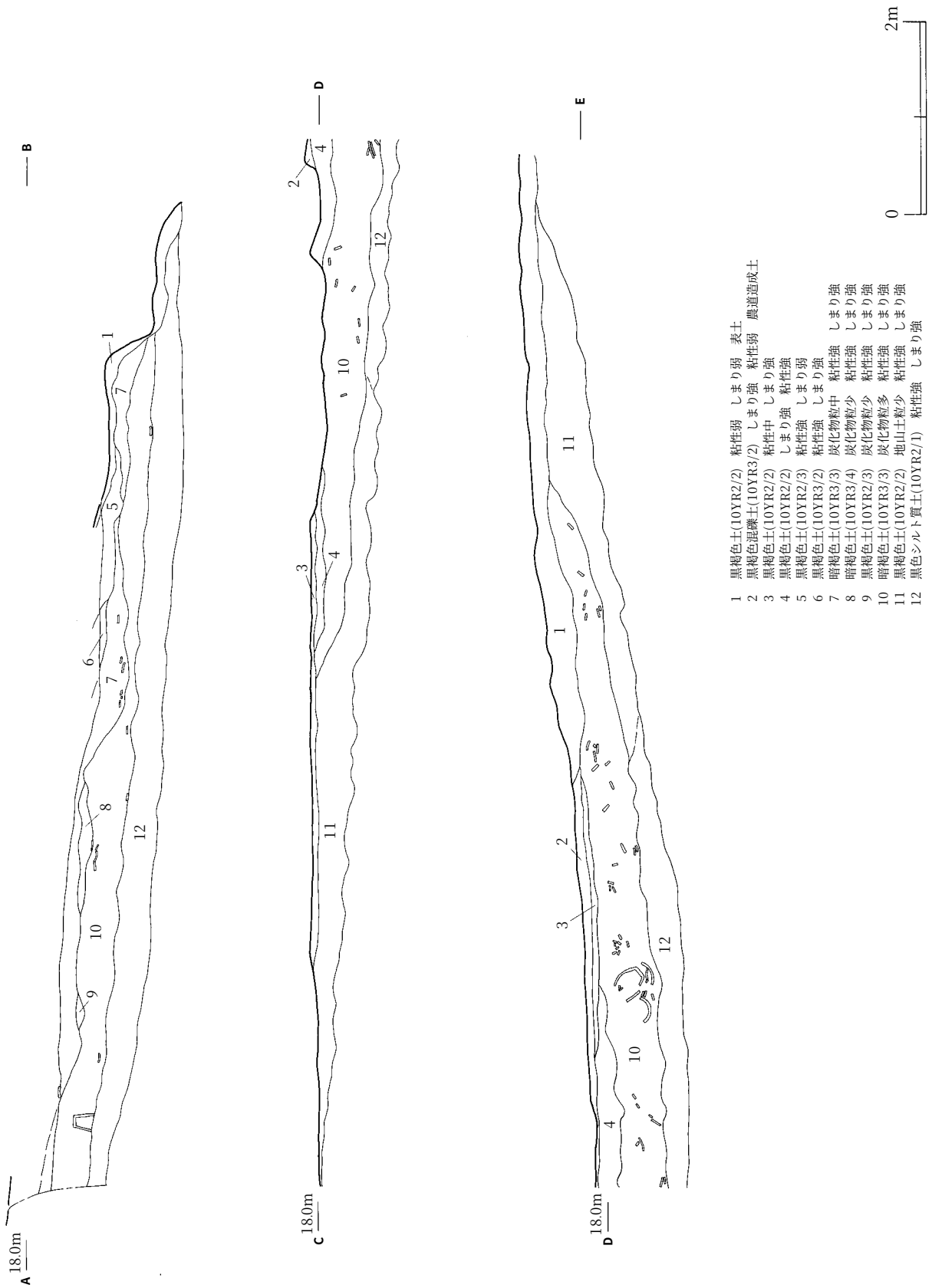
なお、第２節で触れるように、縄文時代中期前葉円筒上層ａ式期の竪穴住居跡のような大形遺構では、廃絶当初に暗褐色土が、その後に１・３層よりも黒味の強い黒褐色土が流入する規則性を認めることができる。前者が竪穴廃絶時点での主として森林植生下で発達した当時の表土層に、後者が竪穴廃絶後形成された草原植生下で発達した黒ボク土を主体とする表土層にそれぞれ由来すると推定する。しかし、現状では、これらの旧表土層を平面あるいは土層断面において明瞭に認めることはできない。完新世以降に発達した極相状態の森林植生から縄文時代中期前葉の集落形成に伴う森林開発と結果としての草原植生の出現[註3]、さらに集落廃絶後、再び森林植生の発達といった植生変遷の過程で、腐植に富む旧表土層は、土壌変成作用の進行によって総体として腐食が溶脱し、現在の淡色黒ボク土壌の特徴を有するに至ったことになろう。ただし、今回の調査においては、遺跡土壌の花粉分析等は実施していないため、ここでの植生の変遷等に関する想定は確定的ではない。

２　遺物包含層（第４図）

縄文時代中期前葉の遺物包含層（捨て場）は、調査区西側ＭＮ48区からＭＳ50区にかけて分布する。舌状台地北西縁に形成された北東向き開析谷の谷頭部分を埋積した堆積層である。調査区南壁および遺物包含層中設定の南北畦断面土層では、その基質および色調の差などで１～12層に分けた。

谷頭底直上には、黒色土（12層）が堆積する。黒泥に近い、均質なシルト質土である。遺物を含まず、縄文時代中期遺物の集中廃棄開始以前に谷頭下部を埋積した流入土である。谷の両側では黒褐色土（11層）に漸移的に変化する。12層の上位に堆積する暗褐色土（10層）は、縄文時代中期前葉の遺物包含層である。層厚は最大で約50㎝に達し、炭化物粒が目立つ。上位にはラミナ様もしくは薄層状の暗褐色土～黒褐色土層（５～９層）が堆積する。これらの層も遺物を含み、各層は廃棄の単位に対応する場合もあり得よう。ただし、遺物包含層掘り下げ時点では、層の違いを明瞭に認定することができず、遺物は一括して取り上げている。本層は調査区内ではおよそ200㎡余りの範囲に広がっていた。遺物包含層の上位には層厚10～20㎝の黒褐色土（４層）が、その上位には新旧の表土もしくは現農道造成土（１～３層）が堆積する。４層は基本的には黒ボク土に相当するが、黒味は弱い。

和田Ⅲ遺跡においては、上述したように、完新世以降には土壌変成作用を伴う土壌層位の変遷は想定し得るが、自然営力による大規模な堆積作用や削平作用の痕跡は認定し難い。少なくとも今回の調


A
B
C
D
E
18.0m
0
2m
1　黒褐色土(10YR2/2)　粘性弱　しまり弱　表土
2　黒褐色混礫土(10YR3/2)　しまり強　粘性弱　農道造成土
3　黒褐色土(10YR2/2)　粘性中　しまり強
4　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
5　黒褐色土(10YR2/3)　粘性強　しまり弱
6　黒褐色土(10YR3/2)　粘性強　しまり強
7　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒中　粘性強　しまり強
8　暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒少　粘性強　しまり強
9　黒褐色土(10YR2/3)　炭化物粒少　粘性強　しまり強
10　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒多　粘性強　しまり強
11　黒褐色土(10YR2/2)　地山土粒少　粘性強　しまり強
12　黒色シルト質土(10YR2/1)　粘性強　しまり強

第４図　遺物包含層土層

査区の平坦部分においては、比較的安定した堆積環境が長期にわたって継続した可能性があろう。

第２節　検出遺構

１　概要

今回の調査で検出した遺構等は、以下の通りである。

縄文時代
　竪穴住居跡12軒
　フラスコ状土坑７基（竪穴住居跡に伴うと判断した例を含む。）
　土坑13基（確実な時期不詳の例を含む。）
　柱穴70基（時期不詳の例を含む。）
　遺物包含層（捨て場）１箇所
古代
　竪穴住居跡１軒
時代不詳
　溝跡３条
　柱穴列１列

今回の調査範囲は、東向きの狭小な舌状台地上に広がる遺跡を、東西に横断した形となっている。調査区中央部から西側にかけては、縄文時代中期前葉の竪穴住居跡、フラスコ状土坑等がまとまって分布するとともに調査区西寄りには東北方向に開析された谷の谷頭部分に遺物包含層（捨て場）が形成されている。また、東側には縄文時代晩期前後の竪穴住居跡２軒等が分布する。さらに、調査区中央には古代の竪穴住居跡１軒が存在している。現時点での知見からは、台地北縁側沿いに縄文時代中期前葉の大小の竪穴住居からなる集落が存在しており、一方、台地東端側は、縄文時代晩期前後に小規模な居住地として断続的に利用されたものと想定できる。古代の遺跡については、鉄滓が出土していることから製鉄関連作業が実施されたものと推定できるものの、詳細な性格は判然としない。

２　縄文時代

（１）竪穴住居跡

ＳＩ03竪穴住居跡（第５・６図）

ＮＣ・ＮＤ47・48区に位置する。当初、現表土（Ⅰ層）下のⅡ層中で、遺物の集中分布を認め、遺構の存在を予想していたが、最終的に、地山（Ⅲ層）上面で竪穴掘り込み平面を確認した。竪穴住居南半は調査区外にかかり、未調査である。また、本遺構は調査区南端を東西方向に走る溝跡ＳＤ47に切られ、さらに東西両側は倒木痕により破壊されている。

現状から、竪穴平面は長軸北西方向の楕円形をなすと推定する。確認長軸長は約7.4m、短軸長は5.2mである。確認部分の竪穴形状から推定すると、本来の長軸長は８m前後であろう。壁は比較的

緩やかに立ち上がり、壁高は0.2m余りである。ただし、表土層直下での遺物確認状況等を勘案すると、当時の生活面と現地表面とには大きな高低差はなく、本来、壁高は0.4m以上あったものと推定できる。床面は多少凹凸があるものの、ほぼ平坦である。床周縁には段は伴わない。

竪穴覆土は１～３層に分けた。大きくは、竪穴床面直上に堆積する暗褐色土（３層）とその上位の竪穴中央部に堆積する黒褐色土もしくは黒色土（１・２層）とにまとめることができる。前者は、竪穴住居廃絶直後に流入した当時の表土を主体とした堆積と推定する。本層は相対的に腐植が乏しく、粘性に富み、かつ緻密である。後者は、前者が一定期間を通じて堆積し、竪穴の過半が埋没した後の残ったくぼみに、黒ボク土を主体とするより後世の表土が流入したものと判断する。

床面中央付近には、地床炉（炉１）が存在する。床面が最大径0.5m程度の範囲にわたって被熱により焼土化している。焼土面は僅かにくぼむが、明瞭な掘り込みは伴わない。また、床面上で、Ｐ１～Ｐ25の大小の柱穴状の掘り込みを確認した。このうち、Ｐ３・Ｐ７・Ｐ12とＰ21・Ｐ19が深さ0.42～0.71m前後と相対的に深く、地床炉を挟んで、それぞれほぼ一直線に並ぶことから、主柱穴であったと判断する。このほか、Ｐ16・17も相対的に深く、主柱穴であった可能性があろう。他の掘り込みは深さ0.2～0.3m前後の浅いものが多く、詳細な性格は判然としない。ただし、竪穴長軸線上に位置するＰ18とＰ25とは上面径が0.8～1.0m前後と大きく、前者はロート形、後者は浅い皿形の形態をなし、柱穴とは性格を異にする特殊ピットと判断する。なお、Ｐ25覆土上面に炉１の焼土面が部分的に広がっている。Ｐ16とＰ17とが切り合うことなども勘案すると、建て替えが行われたことも想定すべきであろうが、断定できない。このほか、入口、壁溝等の施設や貼床面等は未確認である。

遺物は大半が１・２層から出土し、３層からの出土遺物は僅少である。出土土器は、円筒上層a_2式土器（第32図３～16）から同ｂ式土器（同17～23、第33図１～４）を主体とし、ほかに少量の円筒下層ｄ式（同１）、円筒上層a_1式（同２）、同ｃ式（第33図５～８）、大木７ａ式～８ａ式前後（同９～23）の土器破片なども存在する[註4]。また、十腰内Ⅲ～Ⅳ式前後の縄文時代後期土器破片（同９～11）、同晩期土器破片（同12）、土師器坏および甕破片（同15～19）、須恵器甕破片（同20）なども僅かに出土している。このほか、板状土偶の可能性ある土製品（同13）、円盤状土製品（同14）もある。石器類には、石鏃２点（第59図１・２）、石篦４点（同３～６）、スクレイパー６点（第60図１～５、第61図１）、二次加工ある剥片10点、石核１点（第61図２）、磨石類３点（同３・４）、円盤状石製品１点、剥片類112点がある。

本竪穴住居跡は、竪穴覆土出土土器から、その廃絶の上限時期は、円筒上層a_2式期前後であろう。

ＳＩ04竪穴住居跡（第７・８図）

ＭＨ～ＭＫ48区現表土（Ⅰ層）下のⅡ層中で、周囲よりも相対的に黒味の強い黒色土が長軸10m前後の隅丸方形状に広がることを確認し、大形の竪穴住居跡が存在するものと判断した。しかし、Ⅱ層中では、竪穴平面を明瞭に認定することができず、最終的に地山（Ⅲ層）上面で竪穴掘り込み平面を確認した。ただし、その時点では、竪穴壁はほとんど掘り下げており、南北に設定していた畦の断面土層で壁の立ち上がりを確認した。また、南半部は調査範囲外である。本遺構はＳＤ10溝跡に切られる。

竪穴は長軸がほぼ東西方向の楕円形平面をなし、そのうちのほぼ南半分が調査区内に位置するものと推定する。推定長軸長は、約12.5mである。短軸長は3.3mあり、本来、6.6m前後であったものと推定する。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、床面は周縁部が相対的に浅く、中央部が0.1～0.2m

前後深くなる。中央部および周縁部の床面はいずれもほぼ平坦で、顕著には硬化していない。中央部床面の広がりは、現状で長さ約9.4m、幅約1.6mである。確認面から床面までの深さは、周縁部で0.3m前後、中央部で0.5m前後である。

竪穴覆土は、床面直上に堆積した暗褐色土（２層）とその上位の黒色土（１層）とに分けることができる。前者が竪穴廃絶当初の当時の表土由来の堆積土、後者がその後に発達した黒ボク土に由来する堆積土と判断する。

竪穴床面には、中央部の推定長軸線上に３基の炉（炉１～３）が存在する。西側の炉１は床面が現状で径0.3m程度の範囲焼土化した地床炉である。中央の炉２は土器埋設炉である。径20㎝、高さ10㎝ほどの深鉢胴部を掘り込みに据えており、土器周囲の床面が被熱により焼土化している。土器内覆土下位は厚さ約２㎝の炭化物層である。その上位覆土は多量の焼土を含む。東側の炉３は、現状で径約１m、深さ0.04m程の浅い掘り込み底面が被熱により焼土化している。さらに掘り込み中央には径約0.3m、深さ0.26mの円筒状の掘り込みＰ11がある。Ｐ11覆土は多量の焼土塊を含む単一層である。炉３の使用に伴って生成した焼土および灰を掻き出して溜めた掘り込み、あるいは、本来、炉３は土器埋設炉であって、その炉体土器の抜き取り痕等の可能性が想定できるが、その性格は特定し難い。

また、床面上では、先のＰ11を含め、Ｐ１～Ｐ16の掘り込みを確認した。このうち、周縁部と中央部との境界の段差に沿って直線状に並ぶＰ５・７・13・16が主柱穴と判断できる。このうち、Ｐ７中位からは、小形の深鉢胴～底部が逆位で出土した（第37図７）。住居廃絶時に、おそらく腐朽した柱根上位を抜き取った後に、意図的に埋めたものと判断できる。柱もしくは住居の廃絶儀礼の痕跡と想定できよう。このほか、Ｐ１・４・10も具体的な性格は不明であるが、その形態および覆土の特徴から、柱穴であったものと判断する。

一方、Ｐ２・６・８は相対的に浅く、形態からは柱穴とは異なる遺構の可能性が強い。そのうち、Ｐ８では、埋め戻し土直上から深鉢底部の大形破片が出土した（第37図10）。その直上に堆積する①層は竪穴床面直上層（２層）に対比でき、住居廃絶時に、意図的に土器破片を埋めた可能性があろう。同じくＰ２中位からも大形土器破片が出土しており（第37図８）、同様に意図的に埋めた可能性があろう。

また、中央床面東端に位置するＰ14・15は、共に柱痕跡を認めることができず、柱穴とは判断し難い。両者は特殊ピットの範疇に入るものと判断する。Ｐ15は上面が径1.5mと大きく開き、床面下0.6mほどで径0.5mほどに狭まり、以下は円筒状となる。床面から底面までの深さは、約1.3mである。覆土は炭化物粒が目立つ暗褐色土の単一層である。連続的に埋め戻されたものと判断する。Ｐ15に切られるＰ14は、詳細な形態は判然としない。現状では、壁は比較的急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。床面からの深さは0.50mである。覆土は上下に二分できる。下層は多量の地山土塊・炭化物粒を、上層は焼土塊をそれぞれ含み、ともに人為的な埋め戻し土と判断する。Ｐ14・15は焼土や炭化物粒を含むなどの覆土の特徴から、炉の使用と関連する可能性も想定し得るものの、その性格は不明である。なお、両者は形態が異なる可能性が強く、かつ覆土の特徴が異なることから、その機能や使用法には変化があったものと想定し得る。

このほかには、入口、壁溝等の施設は未確認である。また、建て替えの痕跡を認めることはできない。

竪穴覆土出土土器は円筒上層 a_2 式土器（第35図19～22、第36図）を主体とし、少量の円筒下層ｄ式土

器破片（第35図１～４）、円筒上層 a_1 式土器破片（同５～18）、新保式土器破片（第37図４・５）等が伴う。特に竪穴西端側２層上位では円筒上層 a_2 式深鉢の大形破片（第35図19）と口縁部に大木７ａ式類似の平行沈線による波状文を施した円筒上層ａ式深鉢の大形破片（第37図１）とがまとまって出土している。また、炉２の炉体土器（第37図９）は僅かに口胴境界の隆線が遺存し、大きくは円筒上層ａ式に属すると判断できる。このほかＰ５およびＰ15から大木７ａ式前後（第37図２・３）の土器破片が、Ｐ８から円筒上層 a_2 式土器破片（第35図21、第36図３・４）が、それぞれ出土している。なお、竪穴覆土１層出土の縄文土器小破片はＳＩ15竪穴住居跡出土の円筒上層ｃ式土器破片（第48図６）と接合している。

出土石器類には、全体で石鏃５点（第62図１～５）、石槍２点（同６・７）、石錐１点（同８）、石匙１点（同９）、石篦４点（同10・11、第63図１・２）、スクレイパー４点（同３～６）、二次加工ある剥片９点（同７・第64図１）、石核１点（同２）、礫器１点、半円状扁平打製石器３点、磨石類２点（同３）、敲石１点（同４）、台石１点、剥片類132点がある。なお、床面直上から出土した珪質頁岩製剥片のうちの１点は、後述するＳＩ06竪穴住居跡２層出土剥片２点と同一母岩であると判断する。前者は、本住居利用者により床面に遺棄されたもの、後者は、ほぼ同時に、既に廃絶されていた住居跡に廃棄されたものとの想定もあり得よう。

本竪穴住居跡は、竪穴覆土出土土器から、円筒上層 a_2 式期前後に廃絶された可能性が強いと判断する。

ＳＩ05竪穴住居跡（第９・10図）

ＮＢ・ＮＣ50・51区に位置する。当初、現表土（Ⅰ層）下のⅡ層中で遺物の集中分布を認め、遺構が存在することを推測したが、竪穴掘り込み平面は最終的に地山（Ⅲ層）上面で確認した。北側は調査区外に延び、南端側は町道造成時に削平されていたため、竪穴は一部を確認したにとどまる。現状から、竪穴掘り込み平面は、長軸がほぼ南北方向の方形もしくは長楕円形をなすと推定する。竪穴短軸長は約７ｍである。竪穴は床面中央部が周縁部より0.2～0.3m前後深くなる。壁は比較的急傾斜で立ち上がり、確認面から周縁部の床面までの深さは0.1～0.2m前後、中央部の床面までの深さは0.6m前後である。中央部の床面はほぼ平坦で比較的硬くしまっている。周縁部の床面もほぼ平坦であるが、床面硬化の程度は中央部に比べ、相対的に弱い。

竪穴覆土は上下２層に分けた。床面直上に堆積する下層（２層）は相対的に腐植が乏しい暗褐色土である。炭化物粒を少量包含するが、その基質は、当時の表土層に由来するものであろう。これに対し、上層（１層）は腐植に富む黒褐色土で、現表土（Ａ１層）よりも黒味が強い。２層堆積後のくぼみに流入したより後代の黒ボク土であろう。ただし、調査区北壁断面では、現状の表土下の黒ボク土（基本層序Ⅱ層）との上下の境界や壁との境界は明瞭ではなかった。

竪穴床面では長軸線上に並ぶ３基の炉（炉１～炉３）を確認した。北側の炉１と南端側の炉３は土器埋設炉、中央の炉２は地床炉である。２基の土器埋設炉はいずれも径20㎝ほどの深鉢胴部を掘り込みに据えている。ともに埋設土器の周囲が被熱により焼土化している。このうち、炉３は後述する特殊ピットＰ16・17・18と隣接する。このほか、中央部床面北東隅付近には焼土粒が比較的まとまって堆積していた。また、中央部の床面を中心にＰ１～Ｐ29の大小の掘り込みを確認した。このうち、中央部の床面と周縁部の床面との東西の段差に沿って並ぶそれぞれＰ６・10・14とＰ29・26・21とが主柱

穴と判断できる。さらに、Ｐ13・20のようにこれらの柱穴に切られる柱穴や、Ｐ５のように柱抜き取り痕と推定できる掘り込みも存在すること、さらにＰ５およびＰ４を切るＰ３上面周辺には焼土混じりの暗褐色土による貼床が存在すること、長軸線上の南端側に位置する特殊ピット（Ｐ16～Ｐ18）は、少なくとも３期の変遷を想定し得ることなどから、本竪穴住居跡は何度か建て替えがあったものと想定できる。上記のＰ５のほか、Ｐ８・23などの大形の不整形掘り込みは、それぞれ柱の抜き取り痕あるいは炉埋設土器の抜き取り痕であった可能性があろう。これらの柱穴や柱穴の抜き取り痕などの位置には大きな変化がないことから、建て替えにおいて、竪穴規模も大きな変化はなかったと推定しておく。なお、Ｐ22は竪穴覆土２層上面からの掘り込みである。竪穴埋没後に、遺存していた柱材を抜き取った掘り込みとも想定できるが、断定し難い。

このほか、西壁北側では、床面からの深さ約0.06m程度の浅い壁溝が部分的に存在する。現状では、貼床は、上述したＰ３上面周辺でのみ確認した。入り口位置は不明である。

竪穴覆土出土土器には、円筒下層ｃ式～ｄ式前後のもの（第38図１～５）から円筒上層 a_1 式（同６～20）、同上層 a_2 式（同21～23）、同上層ｃ式～ｄ式（同24～31）、大木７ａ～８ａ式前後（第39図１～５）、最花式（同６・７）、新保式～新崎式前後の北陸系土器（同８～16）、縄文時代後期中葉前後の土器（第40図11～13）などがある。全体に比較的小形の破片であるが、主体をなすのは円筒上層 a_1 式土器である。また、炉３炉体土器（第39図21）は円筒上層 a_1 式に属する可能性が強い。出土石器類には、全体で石鏃４点（第65図１～３）、石錐３点（同４・５）、石匙２点（同６・７）、石篦１点（同８）、スクレイパー12点（第66図）、二次加工ある剥片17点（第67図１）、磨石類２点（同２）、石皿１点（同３）、石錘２点（同４・５）、剥片類167点がある。

本竪穴住居跡は、炉体土器から、円筒上層 a_1 式期に営まれた可能性が強いと推定する。

ＳＩ06竪穴住居跡（第11・12図）

ＭＥ・ＭＦ48・49区に位置する。当初、現表土（Ⅰ層）下のⅡ層中で長軸３m前後の楕円形に広がる黒色土を確認し、竪穴住居跡の存在を予想した。しかし、Ⅱ層中では、明瞭な竪穴平面を確認することができず、最終的に地山（Ⅲ層）上面で竪穴掘り込みを確認した。本遺構は古代以降の溝跡ＳＤ10に切られる。

竪穴は長軸約4.7m、短軸約3.8mのやや不整の楕円形平面をなす。長軸方位は北北西方向である。壁は開き気味に立ち上がり、壁高は現状で0.2m前後である。ただし、当初のⅡ層中での黒色土の確認状況から、本来、0.4m以上になるものと推定できる。床面はほぼ平坦で、床周縁部に段差はない。

竪穴覆土は上下２層に分けた。床面直上に堆積する２層は、壁際が相対的に厚く、床面中央部が薄い。炭化物粒を少量含むものの、腐植に乏しく、比較的均質である。基本的に竪穴住居廃絶時の表土に由来するものと判断する。その上位の１層は腐植に富み、下位の２層および現表土（Ⅰ層）や黒ボク土（Ⅱ層）よりも黒味が強い。住居廃絶以降に発達した黒ボク土を主体とする旧表土に由来すると判断する。

床面中央には、土器埋設炉（炉１）が存在する。中央に長径0.44m、短径0.40m、深さ0.07mの浅い掘り込みがあり、その南西側に約0.35m離れて胴径約20㎝の深鉢胴部を埋めた土器埋設部が伴う。両者の周囲の床面は最大で長さ1.2m前後にわたって焼土化し、特に掘り込み底面周辺の焼土化が著しい。

ただし、埋設土器内の覆土には焼土粒を少量含むが、明瞭な焼土面は認め難い。

炉１の北西側には埋設土器１が存在する。深さ0.15mほどの掘り込みに復元高約28㎝の深鉢を逆位に埋設している。深鉢底部は床面から10㎝前後突出している。深鉢は口縁部が破片となって、深鉢内の掘り込み底から出土したが、復元の結果、ほぼ完形となった（第41図６）。本来、完形の深鉢を逆位に埋設したものと判断できる。なお、深鉢内部は、掘り込み底面直上部を除き、空隙であった。

竪穴北北西端には、フラスコ状土坑ＳＫＦ20が存在する。ＳＫＦ20は竪穴の北側壁にほぼ接するように重複すること、出土土器から、ＳＩ06竪穴住居跡と近接した時期に属する可能性が強いこと、後述する覆土上位層の特徴などから、ここでは、ＳＩ06竪穴住居跡に伴う施設として扱う。(註5) 開口部は、長径1.50m、短径1.20mの楕円形平面をなす。掘り込みは、竪穴住居跡床面下約0.2mで一端くびれ、そこから末広がりに大きく広がっている。底面は、長径2.45m、短径1.86mの楕円形平面をなす。底面はほぼ平坦で、竪穴床面から底面までの深さは1.27mである。

土坑覆土は①～⑪層に分けた。底面直上の⑪層は、縄文時代中期前葉円筒上層 a_1 式深鉢破片を含む暗褐色土の薄層で、当初、土坑が開口状態で使用されていた段階の堆積土であろう。その直上の⑩層は厚さ５～20㎝前後の地山土由来の堆積土である。壁の崩落土を、排出せずにそのまま均したものと想定する。その上位の⑥～⑨層は層厚や色調、炭化物粒の混入の度合いなどには違いがあるが、基本的に開口状態下での土坑使用時の堆積層と判断する。⑥層からは、横位状態で円筒上層 a_1 式深鉢（第41図20）が出土している。意図的に埋めたものと判断する。その上位③～⑤層はいずれも地山土に由来し、壁の崩落土と判断できる。②層は炭化物粒が顕著な黒褐色土で、現状ではその性格は判然としない。最上位の①層は、竪穴覆土２層と類似する暗褐色土である。上面には貼床等の痕跡を認めることができず、竪穴廃絶当初に堆積した竪穴覆土２層と一連の堆積層と想定する。なお、ＳＫＦ20からは円筒上層 a_2 式前後の土器破片（第42図７）も出土しているが、詳細な出土状況は不明である。また、出土石器には、石錐１点（第68図４）、石篦１点（同６）、磨石類２点（第71図３・４）、敲石１点、剥片類11点がある。

このほか、床面上および竪穴周辺で、Ｐ１～Ｐ23の大小の掘り込みを確認した。このうち、Ｐ６・12・21・23が床面からの深さ0.42～0.57mと相対的に深く、主柱穴と推定する。また、床面東側に隣接するＰ８・９はより大形で深く、柱痕跡は確認できない。本竪穴とは別の遺構を構成する柱穴であった可能性も想定し得るものの、調査時点では判断できなかった。さらに、竪穴南東端壁際には断面がロート状を呈する特殊ピットＰ15がある。床面上で長径0.80m、短径0.74mの楕円形平面を呈する。掘り込みの東西両縁には、地山の褐色土を削り残した基底部幅0.20m、高さ0.06mの土手を巡らしている。掘り込みは床面下0.25mほどでくびれ、以下は長径0.5m前後の円筒状をなす。床面から底面までの深さは0.90mである。覆土は暗褐色土単一層である。竪穴覆土２層と類似するが、相対的に炭化物粒が目立つ。断面では柱痕跡等は確認できない。現状では覆土の詳細な性格は判然としない。

なお、入口、壁溝、貼床等の施設は未確認である。

竪穴覆土出土土器には円筒下層ｄ式（第41図１～５）、円筒上層 a_1 式（同６～22）、円筒上層 a_2 式前後（第42図１～６）に属する例がある。このほか、大木７ａ式（第42図８）、新保式～新崎式の小破片（同10～16）も少量出土している。炉１炉体土器（第42図18）は円筒上層ａ式、埋設土器１（第41図６）は円筒上層 a_1 式に属する。このほかＰ15から大木７ａ式土器破片（第42図９）が出土している。なお、覆土

上位出土土器とＳＩ15竪穴住居跡覆土上位出土土器（第49図４）が接合したほか、覆土２層出土土器と同一個体と推定できる土器がＳＩ16竪穴住居跡Ａ２層から出土している。また、覆土上位から須恵器甕破片１点（第43図13）が出土している。調査時には明確に確認できなかったが、当該資料はＳＤ10溝跡に伴った可能性があろう。

上記ＳＫＦ20フラスコ状土坑以外からの出土石器類には、全体で石鏃２点（第68図１・２）、石錐１点（同３）、石匙１点（同５）、石篦１点（同７）、スクレイパー１点（同８）、楔形石器１点（第69図１）、二次加工ある剥片10点（同２）、石核２点（同３・第70図１）、半円状扁平打製石器６点（同２～７）、磨石類３点（第71図１・２・５）、石錘１点（同６）、磨製石斧破片１点（同７）、剥片類153点がある。なお、既述のように、２層からＳＩ04竪穴住居跡床面直上出土例と同一母岩剥片が出土している。出土層位を重視すると、本住居はＳＩ04竪穴住居跡よりも古い時期に廃絶されたと可能性があろう。

本竪穴住居跡は、埋設土器から円筒上層 a_1 式期に営まれたと推定する。

ＳＩ08竪穴住居跡（第13図）

ＭＴ・ＮＡ47・48区に位置する。本遺構は古代以降に属するＳＤ11溝跡に切られる。地山（Ⅲ層）上面で、竪穴住居床面上の地床炉であったと判断できる焼土の堆積および焼土面の広がりを確認した。調査区南壁土層の観察および周辺の柱穴分布とから、最終的に長軸方位が北北東方向の楕円形もしくは長方形平面の竪穴住居跡と判断した。ただし、竪穴南端側は調査区外に延び、また、北半側は当該地点周辺で調査区を東西に横断する農道の造成によって削平されている。さらに上述の地床炉確認時点では、その周囲はほとんど地山面まで掘り下げていた。これらのことから、竪穴の詳細な形態は必ずしも判然としない。

調査区南壁土層からは、竪穴は壁が緩やかに開きながら立ち上がり、床面中央部が一段低くなるものと判断する。南壁東側は既に上位を掘り下げていたため、竪穴東壁の形状は不明であるが、先の地床炉が竪穴長軸線上に位置すると想定すると、竪穴の短軸長は６m前後と推定できよう。竪穴掘り込みは、南壁土層では現表土のＩ層（Ａ１層）の下面からほぼ認めることができ、Ａ１層下面から中央部床面までの深さは0.3m前後、周縁部の床面までの深さは0.2m前後である。

竪穴覆土は炭化物粒を僅かに含む黒褐色土である。調査区南壁では明確に分層することはできず、単一層とした。Ａ２層よりも相対的に黒味が弱いが、その差は明瞭でない。

床面中央には長径0.9m前後に焼土面が広がる地床炉（炉１）が存在する。また、床面上ではＰ１～Ｐ10の小穴を確認した。このうち、Ｐ３・５とＰ８・10が、それぞれ炉１を挟んで、ほぼ平行に並ぶことから、主柱穴と判断する。また竪穴中軸線上に位置すると推定できるＰ１・Ｐ２のうち、Ｐ２も深さ0.8m前後と相対的に大形で、かつ柱痕跡を確認できることから主柱穴の可能性があろう。これに対し、Ｐ１は深さ0.7m前後と深いが、柱痕跡を確認することができず、南壁土層から、上面の周囲には地山の褐色土を削り残して高さ0.03～0.05m前後の土手を巡らしたものと判断できることから、特殊ピットに相当すると推定する。

このほか、Ｐ４・６・７は本遺構に伴うかは判然としない。特にＰ６・７は小形方形平面をなし、より後出の柱穴の可能性があろう。また、入口、壁溝、貼床等の施設は未確認であり、建て替えの痕跡も認めることはできない。

竪穴覆土中から、剥片類４点が出土したほか、竪穴覆土および柱穴内から、円筒上層 a_1 式前後の縄文中期前葉土器の小破片が少量出土している（第44図１～５）。竪穴住居跡の形態や構造および円筒上層 a_1 式期の遺物包含層（捨て場）に隣接することも勘案すると、円筒上層 a_1 式期前後に属する可能性が高いと推定する。

ＳＩ15竪穴住居跡（第14～16図）

ＭＣ48区からＭＥ50区周辺にかけて位置する。当初、現表土（Ⅰ層）を除去した段階で、長径８m以上におよぶ楕円形の黒ボク土の広がりを認め、大形の竪穴住居跡の存在を予想した。しかし、この段階では、竪穴の範囲は明瞭ではなく、最終的に地山（Ⅲ層）上面で竪穴掘り込み平面を確認した。竪穴南西端部は倒木痕により一部破壊されている。

竪穴は、現状で長軸10.10m、短軸7.05mの西辺中央が僅かに膨らんだ隅丸方形平面をなす。竪穴長軸方位は北北西方向である。掘り込みは中央部が0.1m前後深くなる。この中央部の床面は長軸8.1m、短軸3.0m前後の隅丸方形平面を呈し、ほぼ平坦である。一方、その周縁部の床面は壁に向かってしだいに浅くなり、壁は緩やかに開きながら立ち上がる。当初の黒ボク土確認面から周縁部床面までの深さは最大0.3m前後、中央部床面までの深さは0.5m前後である。

竪穴覆土は１層～６層に分けた。このうち、６層は後述する炉１に切られる古期の炉２上面の浅いくぼみ内とその周辺に堆積する小規模な層である。炭化物粒を多量に含むことから、炉の使用と関連する堆積の可能性があろう。４・５層は壁際に分布する堆積層である。地山土粒が目立ち、竪穴住居廃絶当初に一部壁の崩壊土を含みながら、周囲から流入した堆積と判断する。３層は竪穴南半部に堆積する暗褐色土である。全体に竪穴中心に向かって傾斜し、竪穴中央付近では床面直上に堆積する。本層は上位層に比べて相対的に腐植が少ない。１・２層は竪穴南半側では３層の上位に、北半側周辺では床面直上に堆積する。共に３層よりも腐植に富む黒褐色土であり、竪穴廃絶後に発達した黒ボク土に由来すると推定する。

竪穴床面上では、２基の炉（炉１・炉２）、62基の大小の掘り込み（Ｐ１～Ｐ62）およびフラスコ状土坑１基（ＳＫＦ64）を確認した。調査段階の竪穴覆土の観察では明瞭に認定できなかったが、炉の切り合い関係や柱穴配置などから、少なくとも１度の建て替えがあり、古期から新期への変遷があるものと判断した。以下、新期、古期の順で記述する。

新期

竪穴覆土土層では、明瞭な竪穴の重複痕跡を認めることができなかったことから、本期の竪穴は前時期から拡張された結果、ほぼ現状の規模となったものと判断する。中央部床面は一段深くなり、床面ほぼ中央に炉１が存在する。炉１は径0.85m前後の不整円形平面で、深さ0.70mの掘り込み中位に口径18㎝、器高22㎝の小形深鉢（第44図15）を正位に据え、その周囲に地山の褐色土を貼って炉床とする土器埋設炉である。炉床面は竪穴床面から最大で深さ0.15m前後の椀形にくぼみ、被熱により焼土化している。ただし、埋設土器内覆土には炭化物粒を含むが、明瞭な焼土を認めることができない。炉１はＰ47および後述する古期の炉２を切っており、炉２の掘り込み周縁部には部分的に地山土からなる貼床が巡る。さらに上述したように、炉２の覆土上面は深さ0.1m前後くぼみ、その上位および周辺には炉１の使用に関連すると推定できる炭化物粒を多量に含む黒褐色土（６層）が堆積する。この

ことから、このくぼみは当該期の炉に伴う施設であったと想定する。

また、原則として床面の段部分の長辺側には、主柱穴Ｐ２・11・20・27、Ｐ57・50・42・32が並ぶ。このうち、中央の４基の柱穴Ｐ11・20・42・50は上面径0.43～0.71m、深さ0.62～0.98mと比較的大形であるのに対し、両端の４基の柱穴は相対的に小形である。特に南端側のＰ27・32は深さ0.2m余りに過ぎず、かなり浅い。これらの主柱穴の規模の変異からは、竪穴中央部と両端部とでは上屋の構造が異なっていた可能性があろう。

このほか、中央床面南端には周囲に土手を巡らした特殊ピット（Ｐ34）が存在する。掘り込みは床面上では長径0.9m前後の円形平面をなし、床面下0.1m前後でくびれ、以下は直径0.6m前後の円筒状を呈する。竪穴床面から底面までの深さはほぼ１mである。竪穴南端壁付近から掘り込みの周りに巡る土手は、現状で、基底部幅0.2m余り、床面からの高さ0.1m程度である。土手の南半部は地山を削り残して作出し、北半部は地山土の褐色ロームを床面上に盛土したものと判断した。両者の境界が古期の中央床面南端側の段部分にほぼ相当し、それより南側が新期の建て替え時に拡張された部分に相当するものと判断する。また、竪穴掘り下げ時には明瞭に確認できなかったが、竪穴南北畦の断面観察からは、土手の上に褐色土（②層）を盛って土手をさらに0.1m以上高くした可能性も想定できる。掘り込み内の覆土は炭化物粒や地山土が目立ち、埋め戻されたものと推定する。柱痕跡を認めることはできない。

なお、竪穴東側の周縁部床面に位置するＰ14・18、Ｐ９・24、Ｐ７・26は、段部分に位置するＰ16を挟んでほぼ対称に位置する。これらは住居入口部分の施設痕跡であった可能性を想定できるかもしれない。

このほか、竪穴西側中央にはフラスコ状土坑ＳＫＦ64が存在する。床面では長径1.30m、短径1.07mの楕円形平面をなし、掘り込みは床面下0.3mでくびれ、以下は末広がりになる。底面は長径約2.1mの円形平面をなし、ほぼ平坦である。竪穴床面から底面までの深さは1.50mである。

この土坑覆土は①層～⑥層に分けた。底面直上に堆積する⑥層は厚さ３㎝前後の薄層で、当初の土坑使用時に流入したものと推定する。その上位の④・⑤層は炭化物粒や地山土粒が目立つ暗褐色土であり、埋め戻し土の可能性が高い。出土遺物は比較的少ない。その上位の③層は地山土を主体とする埋め戻し土である。①・②層は竪穴廃絶時もしくはその後の流入土の可能性があると推定するが、確実ではない。本土坑からは少量の土器破片（第44図６、第47図１、第49図１）のほか、スクレイパー１点（第75図２）、二次加工ある剥片１点、剥片類20点が出土している。

本土坑は、竪穴西壁中央が外側に膨らむ部分に位置すること、出土土器と竪穴床面直上出土土器とが接合する（第49図５）ことから、新期竪穴住居に伴う可能性を認めることができる。しかしその一方、新期の柱穴Ｐ50が土坑下位の壁を掘り込んでいる可能性もある。これらのことから、ここでは本土坑は古期段階に構築され、新期段階には土坑下半の⑤・⑥層が堆積した状態で継続利用したものと想定しておきたい。

古期

本期は、新期の炉（炉１）に切られる炉（炉２）の両側にほぼ並行に並ぶ２列の柱穴群（Ｐ１・３・15・22、Ｐ61・53・45・36）を竪穴住居主柱穴と判断したことから、その存在を認定した。既述のように中央部床面南側は新期よりも0.4m前後短かったものと推定できるが、この柱穴配置から、本期の竪

穴規模は、南端側以外は新期とは大きな違いがなかったものと想定する。また、竪穴南端側壁際のＰ29・30が、上記主柱穴の並びの延長線上に位置する。これらの柱穴も本期に伴うとすると、竪穴南端形状は新期とほぼ一致する可能性があろう。ただし、主柱穴配置の主軸方位は新期のそれよりも僅かに西へ振れている。

本期の炉(炉２)は、中央床面南寄りに位置する。現状では長径0.95m前後の円形平面で、深さ約0.33mの掘り込みの底面やや上位が焼土化した炉床面となる。底面南北両端には不整の掘り込みがあり、土層断面も勘案すると、炉石状施設の抜き取り痕であったと推定する。本炉南隣には、特殊ピットＰ38が存在する。Ｐ38には柱痕跡を認めることができず、覆土には焼土粒や炭化物粒を含んでいる。これらの焼土粒や炭化物粒は隣接する炉２に由来する可能性が強いと判断する。このことから、現状では、本炉がＰ38を切る形になっているが、本来、その境界に炉石を据えて仕切りを設け、同時に利用したものと推定する。このほか、Ｐ47もしくはＰ49は本期の別の炉の炉石あるいは炉体土器の抜き取り痕であった可能性もあろう。なお、炉２もしくはＰ38出土土器とその北西隣の床面直上(竪穴覆土３層)出土土器とが接合した(第45図１)。前者の詳細な出土状況は不明であり、新期炉１に伴う炉２上面のくぼみ(竪穴覆土６層)からの出土であった可能性も想定し得るが、断定できない。

主柱穴は長径0.31～0.45m、深さ0.17～0.66mで、新期に比べ、全体的に小形である。また、上述したように、ＳＫＦ64フラスコ状土坑は本期から構築されていた可能性を想定しておく。

なお、新期の主柱穴群のうち、北東端のＰ２が中央床面の段よりも内側にずれることから、中央床面北東端部は新期・古期とは別段階の床面段に相当する可能性も考慮すべきかもしれない。竪穴床面では上記の新期・古期の柱穴と認定した例以外にも多数の柱穴を確認しており、東辺側段部分に位置するＰ８・13・21が当該段階の柱穴と想定することも可能であろう。これに対応する西辺側列の柱穴としてＰ52・46・37を想定できようか。ただし、いずれの柱穴も新期・古期柱穴に比べて小形で浅く、主柱穴とするには疑問が残る。また、より後出の炉構築時などに削平された可能性などもあり得るが、対応する炉や特殊ピットも想定不能である。さらに調査当初に設定していた東西方向畦の土層断面の観察では、これら住居の重複関係を確認できていない。これらのことから、本竪穴住居は２回以上建て替えられた可能性もあるものの、断定できない。

竪穴出土土器には、円筒下層ｄ式(第44図７～14)、円筒上層 a_1 式(同15～20、第45～47図)、円筒上層 a_2 式(第48図１～５)、円筒上層ｃ式(同６)、大木７ａ式(同７～10)、新保式～新崎式(同11～17)、縄文後期前後の土器(第49図11・12)、大洞Ａ式(同13・14)などがある。出土土器の主体は円筒上層 a_1 式であり、新期の炉１炉体土器(第44図15)も円筒上層 a_1 式に属する。なお、覆土上位出土土器とＳＩ06竪穴住居跡覆土上位出土土器が接合している(第49図４)。このほか、円筒上層ｃ式深鉢の大形破片(第48図６)は覆土中位(１層下位～３層上位)からの出土である。

出土石器類には、全体で石鏃５点(第72図１～５)、石槍５点(同６～10)、石錐１点(同11)、石匙３点(第73図１～３)、石篦２点(同４・５)、スクレイパー17点(同６・７、第74図、第75図１・３～５)、楔形石器２点(第76図１・２)、二次加工ある剥片33点(同３～11、第77図)、石核１点(第78図１)、半円状扁平打製石器２点(同２・３)、磨石類７点(同４)、石皿２点(第79図１)、礫器１点(同２)、磨製石斧２点(同３・４)、剥片類422点がある。

新期炉１炉体土器と竪穴覆土出土土器から、新期竪穴住居は円筒上層 a_1 式期の間に建築および廃絶

されたものと判断する。古期竪穴住居は現状で確実な時期比定の根拠を欠くが、円筒上層 a_1 式より古い遺物の出土は僅少であることから、本期も円筒上層 a_1 式期に属する可能性が強いと想定する。

ＳＩ16Ａ・Ｂ竪穴住居跡（第17～19図）

ＳＩ16Ａ竪穴住居跡はＭＡ～ＭＣ49・50区、ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡はＭＢ・ＭＣ50・51区に位置する。現表土（Ｉ層）直下で、ＭＢ・ＭＣ49区周辺からＭＢ・ＭＣ51区周辺にかけて南北方向に延びる楕円形の黒褐色～暗褐色土の落ち込みを確認し、長軸長10mを越える大形竪穴住居跡と予想し、覆土を掘り下げた。しかし、床面上の炉および柱穴配置と南北畦土層断面の検討から、長軸長５～７m前後の２軒の竪穴住居跡が南北に連なって切り合っているものと最終的に判断し、新しい竪穴住居跡をＳＩ16Ａ、古い竪穴住居跡をＳＩ16Ｂとした。ただし、両竪穴覆土や地山層（Ⅲ層）との識別が困難な部分が少なくなかったこともあって、この時点では両者の切り合い部分の壁やＳＩ16Ｂ竪穴住居跡の西～北壁部分は既に掘り広げてしまっていた。以下、ＳＩ16Ａ竪穴住居跡、ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡の順に記述する。

ＳＩ16Ａ竪穴住居跡

ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡と切り合う北壁周辺は削平してしまったが、南北畦土層断面から、竪穴は長軸6.9m、短軸5.1mのやや不整な楕円形平面をなすと推定する。長軸方位は北北西方向である。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、壁高は0.38m前後である。床面は若干の凹凸があるが、ほぼ平坦で、周縁部に床面が一段高くなるような段構造は存在しない。

竪穴覆土は上下に分けた。竪穴壁際には褐色土（２層）が床面直上に堆積する。本層は竪穴中央部にはほとんど堆積しない。その上位には黒褐色土（１層）が堆積する。大勢として、前者が竪穴廃絶直後に流入した当時の表土由来の堆積土、後者が竪穴廃絶後一定期間が経過した後に発達した黒ボク土を主体とする堆積土と判断する。

竪穴長軸線上北西寄りの床面上では土器埋設炉（炉１）を確認した。さらに、その西側に約0.2m離れて埋設土器１が存在する。

炉１は竪穴長軸線上の南北２箇所に土器埋設部を伴う。両者は約0.3m離れている。北側は、胴径17㎝、現存器高11㎝の深鉢胴部を掘り込み内に埋設する。南側は、掘り込み底に土器破片を敷き、その上に底を打ち欠いた深鉢胴部を正位に埋設する。埋設土器は胴径約20㎝、現存器高は推定40㎝前後である。掘り込み底の土器破片は埋設土器と同一個体の可能性が強い。埋設土器内覆土はともに焼土粒、炭化物粒を含み、中でも後者の覆土中位（②層）は炭化物の薄層状を呈している。また、埋設土器の周囲の床面は、長軸約1.0m、短軸約0.5mの範囲にわたって被熱により焼土化している。

埋設土器１は、深鉢胴部～底部を掘り込み内に正位に据えている。本遺構は、周囲の床面に明瞭な焼土面を確認することができなかったことから、ここでは竪穴床面上の土器埋設遺構として扱った。しかし、土器内覆土に焼土粒や炭化物粒を含み、本来、土器埋設炉であった可能性が強い。北東隣の２基の土器埋設部を伴う炉１と一連の遺構であったとも想定し得る。あるいは、周囲に焼土面が広がらないことから、炉１以前の土器埋設炉で、炉１構築時に焼土面を含めた遺構上位が削平された可能性もあろうが、その判断は困難である。

また、床面上ではＰ１～Ｐ35の柱穴状の掘り込みを検出した。このうち、Ｐ34・35は覆土上面からの掘り込みであり、本遺構廃絶以降のものである。他の掘り込みのうち、炉１を挟んで竪穴中軸線の両側に位置するＰ６・９・14・15とＰ21・22・28・32が相対的に深く、竪穴住居の主柱穴に相当すると判断する。ただしＰ14とＰ15、Ｐ21とＰ22がそれぞれ接近し、全体で整然とした主柱穴配置とはならない。これらのことから、Ｐ６－Ｐ14－Ｐ21－Ｐ32とＰ９－Ｐ15－Ｐ22－Ｐ28のそれぞれ４基の主柱穴からなる２時期の柱穴配置の変遷を想定すべきかもしれないが、断定し難い。

また、炉１から約0.35m南東側に離れた竪穴長軸線上に位置するＰ27は、掘り込み中位～下位は円筒状を呈するものの、上位はややすり鉢状に開き気味となる。覆土中位には焼土粒や炭化物粒が顕著な薄層状の堆積層（３・４層）が存在する。両層は炉１側から流入した断面形状を呈し、炉１使用時に生成した焼土や炭化物を廃棄した堆積の可能性があろう。これらのことから、このＰ27は柱穴ではなく、炉の使用と関連して開口状態で利用された特殊ピットに相当するものと想定する。また、Ｐ10・11は掘り込みが上面平面規模に対して深さが浅い鍋状の形態をなし、特にＰ11では、地山土主体土と暗褐色系土とが累層状に堆積する。いずれも柱穴とは判断し難いが、その詳細な性格は判然としない。

このほか、壁溝や貼床、入口部分などは未確認である。

本竪穴に伴って出土した縄文土器は約180点である。円筒下層ｄ式（第50図１）、円筒上層 a_1 式（同２～７）、円筒上層 a_2 式（同８・９・16）、円筒上層ｂ式（同10）、円筒上層ｄ式（同11）、大木７ａ式土器（同12～14）などがある。

出土石器類には、全体で石鏃３点（第80図１～３）、石錐１点（同４）、スクレイパー３点（同５～７）、二次加工ある剥片３点（同８・９）、磨石類２点（同10・11）、敲石１点（同12）、剥片類122点がある。

本竪穴住居跡は炉体土器（第50図16）から円筒上層 a_2 式期に営まれたと判断する。

ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡

ＳＩ16Ａ竪穴住居跡よりは一回り小規模な竪穴住居跡と推定するが、本竪穴を認定した時点では、ＳＩ16Ａ竪穴住居跡と一連の竪穴住居跡と想定して竪穴西側は本来の規模よりも大きく掘り広げていた。また、竪穴北端部側は北側の段丘崖に向かう緩斜面となっているため、竪穴上位は斜面側に流出しており、明瞭な壁の立ち上がりは確認できなかった。検出した竪穴東壁および床面の炉・柱穴の分布状況を勘案すると、竪穴は長軸4.5m、短軸4.2m程度の楕円形平面をなすかと推定する。壁は遺存する東壁では比較的緩やかに開き気味に立ち上がり、壁高は0.4m前後である。床面は比較的平坦で、周縁には一段高い床面は巡らない。

竪穴覆土は地山（Ⅲ層）に類似した暗褐色土（１層）を主体とする。南側床面直上には不整の塊状の黒褐色土（２層）が堆積する。堆積形状から周囲からの流入土とは想定し難く、層相と後述するＰ１の上位周辺に堆積することから、Ｐ１に据えた竪穴柱材が腐朽した土壌に由来する可能性があろう。

床面では、推定長軸線上北寄りで炉１を確認した。長軸0.9m、短軸0.7m前後の不整形に床面が焼土化し、その内側に平面長径約0.2m、深さ約0.1mの浅い掘り込みがある。この掘り込み北壁に沿って深鉢胴部破片１点が縦位で出土している。これらの状況から、本遺構は、本来、深鉢胴部を掘り込み内に炉体土器として据えた土器埋設炉であったと判断する。その廃絶時点で炉体土器を抜き取った際に、その炉体土器の一部が上記の破片として遺存したものと推定する。

また、床面上ではＰ１～Ｐ15の掘り込みを確認した。このうち、炉１を挟んで、推定竪穴長軸の両側に位置するＰ４・Ｐ７とＰ13・Ｐ８とが相対的に深く、主柱穴に相当すると判断する。さらに推定竪穴長軸線上南端側に位置するＰ１も比較的大形の掘り込みで、主柱穴の可能性があろう。本例は竪穴南端側に向かって斜めに掘り込まれており、柱はその上端が竪穴中心に向くように斜めに据えられていた可能性があろう。このほか、炉１の南隣に位置するＰ14は深さ0.15mほどの浅い鍋底状の掘り込みであり、柱穴とは想定し難い。底面直上覆土は周囲から流入した可能性がある黒色土の薄層、その上位は焼土粒や炭化物粒を含む埋め戻し土である。炉１の使用と関連した特殊ピットの可能性があろう。

このほか、壁溝、入口、貼床等は未確認である。

竪穴からは約200点の土器破片が出土した。円筒下層ｄ式（第51図１～３）、円筒上層 a_1 式（同４～10）、円筒上層 a_2 式（同11～13）、大木７ａ式（同14）、北陸系土器（同15）などがある。その主体は円筒上層 a_1 式である。

出土石器類には、全体で石鏃１点（第81図１）、石槍１点（同２）、石錐２点、石匙１点（同３）、スクレイパー５点（同４～８）、楔形石器２点（第82図１・２）、二次加工ある剥片９点（同３・４）、石核１点（同５）、石皿１点（同６）、剥片類92点がある。

本竪穴覆土には、黒ボク土の堆積を明瞭に認めることができず、基本的に暗褐色土からなる。他の同時期の竪穴には、本例のように暗褐色土によって完全に埋没したと想定できる例がないことから、本竪穴はその廃絶時に土器埋設炉の炉体土器を抜き取るなどして、人為的に埋め立てた可能性が強い。

覆土出土土器から、本住居は円筒上層 a_1 式期に廃絶された可能性が強い。

ＳＩ32竪穴住居跡（第20・21図）

ＬＪ・ＬＫ48・49区とその周辺に位置する。範囲確認調査において地床炉が確認され、竪穴住居跡が存在することが予想されていた。しかし、当該地点周辺以東は、調査工程上、重機によって表土以下を掘削し、遺構・遺物を検出することとしたため、最終的にほぼ地山（Ⅲ層）上面で僅かに竪穴掘り込みを確認したにとどまった。

現状で、竪穴掘り込みは長軸9.6m、短軸5.7mの楕円形平面をなす。長軸方位はほぼ東西方向である。確認時には壁はほとんど削平していたため、その形状は判然としない。現状からは、壁は大きく開きながら緩やかに立ち上がる。周縁の床面が一段高くなる段部分に対応する可能性も想定し得るが、断定し難い。床面はほぼ平坦であるが、全体にあまり堅くしまっていない。確認面から床面までの深さは最大で0.2m程度である。ただし、後述するように竪穴掘り込み面は現地表面付近であった可能性が高いことから、本来の深さは0.4m前後あったものと推定できる。

竪穴覆土は地山土（Ⅲ層）に比較的類似したにぶい黄褐色土（１層）である。ただし、本竪穴周辺では、範囲確認調査時の試掘溝断面で、表土下に相対的に黒味の強い黒ボク土を一定範囲に認めた。このことから、本来、竪穴覆土上位には黒ボク土が堆積していたものと想定でき、竪穴掘り込み面も現表土層付近に対応する可能性が強い。

床面主軸線上では２基の炉（炉１・炉２）を確認した。床面中心からそれぞれ東端側と西端側へ少し寄った場所に位置する。炉１は深鉢底部を炉体土器として掘り込み内に正位に埋設する。炉体土器の

北半部は、分布調査時の試掘坑掘削によってほとんど削平されていた。炉体土器は胴径約20㎝、器高約15㎝である。土器内覆土や周辺床面には明瞭な焼土層や焼土面を確認することはできなかったが、試掘坑の埋め戻し土には多量の焼土粒を含んでいた。このことから、本遺構は、本来、埋設土器の北側に焼土面を伴う土器埋設炉であり、焼土面は試掘坑掘削時に削平されたものと判断した。炉２は地床炉である。床面が長軸0.66m、短軸0.45mほどの不整楕円形の範囲にわたって被熱により焼土化している。現状では炉床面が平坦であったか掘り込まれていたかは判然としない。焼土面の上位には炉の使用に伴って生成したと判断できる焼土塊がまとまって堆積していた（２層）。

また、床面上でＰ１～Ｐ８の８基の柱穴を確認した。竪穴のほぼ主軸線上の東西両端に各１基（Ｐ１・５）、その北側と南側にそれぞれ３基の柱穴（Ｐ２・３・４、Ｐ８・７・６）が位置する。南側の柱穴群はほぼ一直線上に並ぶ。一方、北側の柱穴群のうち、中央側と東側のＰ７・８は南側の柱穴群の並びとほぼ平行する配置であるが、西端側のＰ６は他の柱穴よりも相対的に外側にずれた位置に存在する。これら北側と南側の柱穴群は深さ0.6～1.0m前後であるのに対し、主軸線上に位置する柱穴のうち、Ｐ１は深さ約0.4mと最も浅い。これに対し、Ｐ５は深さ約1.4mと最も深く、かつ掘り込み上位が大きくすり鉢状に開く大形の柱穴である。柱穴底面には地山層が柱の荷重によりグライ化した柱アタリが残る。これらＰ１・Ｐ５は、他の柱穴とは形態が異なることと、長軸両端に突出した配置をなすことから、棟持柱に対応すると想定する。さらに、Ｐ５は上位が大きく開く形態が、一部の特殊ピットと類似し、他とは差別化された柱材が据えられていた可能性もあり得ようか。また、竪穴東西畦の断面土層から、竪穴住居廃絶段階では、Ｐ５の柱は床面より上方部分もある程度遺存していた可能性も想定できる。

このほか、壁溝、貼床、入口等は確認していない。

西端側の床面直上からは、円筒上層ａ式土器破片がまとまって出土した（第52図５）。炉１の炉体土器（同６）は円筒上層ａ式に属する。このほかＰ２から円筒上層 a_1 式土器破片（第52図１）および欠損した磨石類１点（第83図１）、Ｐ４から剥片類１点、Ｐ５から剥片類２点、Ｐ６から大木７ａ式土器破片（第52図２）および剥片類３点がそれぞれ出土している。

本竪穴住居跡は炉体土器および床面出土土器から、円筒上層ａ式期に廃絶されたと推定する。

ＳＩ34竪穴住居跡（第22図）

ＬG48区とその周辺に位置する。表土以下を重機によって掘削した結果、地山（Ⅲ層）上面で、地床炉と壁溝、柱穴を確認し、本来、竪穴住居跡が存在したものと判断した。

壁溝は南北長軸約5.6m、東西短軸5.3mの正円に近い楕円形に巡る。壁溝は、北側２箇所と東側１箇所で途切れる。確認面の高さとの関係からは、北側部分については確認時に削平してしまった可能性が強い。東側については、本来、途切れていた可能性もあるものの、断定し難い。壁溝の幅は確認面で0.2～0.3m前後、深さは0.1～0.2m前後である。溝底面は比較的凹凸があり、全体に不整である。壁溝覆土は、比較的しまりの弱い黒褐色土の単一層である。

床面中央には、地床炉（炉１）が存在する。長径0.6m前後の範囲の床面が被熱により焼土化している。また、炉の上面には焼土塊が堆積していた。

このほか、床面上および壁溝内ではＰ１～Ｐ26の小形の落ち込みを確認した。これらは不整な円形

もしくは楕円形平面をなし、長径0.2～0.5m前後、深さ0.2m以下の小形例が大半である。覆土は暗褐色土もしくは黒褐色土単一層からなり、柱痕跡を確認できた例はない。これらの落ち込みは、壁溝底で確認したＰ５・６も含め、小形で不整なものが多い。しかし、壁溝の外側では類似した落ち込みは顕著でないことから、これらの落ち込みの少なくとも一部のものは竪穴住居の柱穴であったと想定する。柱穴の具体的な配置は不明である。

壁溝内からは、磨滅した縄文土器小破片２点、微小剥離痕ある剥片１点が出土した。縄文土器破片は、胎土の特徴から、それぞれ円筒上層ａ式前後と縄文時代晩期に属する可能性が強い。このほか、柱穴からの出土遺物はない。壁溝の覆土は黒褐色土を主体とし、調査区西半側に分布する縄文時代中期前葉竪穴住居跡の埋没当初の覆土とは特徴が異なる。壁溝の形状や調査区東端側の遺構・遺物の分布状況等も勘案すると、本竪穴住居跡は縄文時代晩期前後に属する可能性が強いと推定する。

ＳＩ41竪穴住居跡（第22図）

ＫＭ45・46区周辺に位置する。範囲確認調査において、ＫＭ45区の地山（Ⅲ層）面で焼土面が確認されていたことから、本来、この焼土面を地床炉とする竪穴住居跡が周辺に存在するものと予想していた。発掘調査では、この焼土面にかかるように南北に畦を設定し、周囲を重機によって掘り下げたが、明瞭な掘り込みを認定することができなかった。また、畦の土層断面の観察でも明瞭な床面や壁の立ち上がりを認めることができなかった。しかし、焼土面を中心とした東西5.8m、南北4.0m前後の範囲の地山面が、周辺と比べて相対的に細かな凹凸が著しいことを認めた。この地山面上の凹凸が竪穴掘り下げ時の底面の掘削痕と推定し、ほぼこの範囲が竪穴掘り込みに対応すると判断した。

推定竪穴床面直上には、微量の炭化物粒を含む暗褐色土が堆積している。貼床の痕跡を認めることはできない。

また、床面上ではＰ１～Ｐ10の掘り込みを確認した。そのうち、Ｐ１・Ｐ６・Ｐ９は深さ0.2mを越えるが、大半は平面長径0.2m前後、深さ0.1m余りの小形例である。覆土は黒褐色土もしくは暗褐色土の単一層である。これらは、調査では柱痕跡を確認することはできなかったが、推定床面範囲の周縁を巡るように分布することから、基本的に竪穴住居柱穴に相当すると判断する。このほか、壁溝等は未確認である。

焼土面（炉１）の東約１ｍの床面直上で同一母岩の分割礫および剥片約10点がまとまって出土した。このほか、推定竪穴覆土中から、石篦１点（第83図２）、スクレイパー１点（同３）、剥片類19点が出土している。

本竪穴住居跡は、詳細な時期は不明である。周辺の遺構・遺物の分布状況からは、縄文時代晩期前後に属する可能性があろう。

ＳＩ50竪穴住居跡（第23図）

当初、ＭＧ49区地山（Ⅲ層）面上で焼土面を確認し、本来、地山層まで掘り下げた竪穴住居跡床面上の地床炉であったと判断した。しかし、この時点では周辺部はすべて地山面まで掘り下げていたため、竪穴掘り込みを確認することはできなかった。焼土面の周辺にはＳＩ06竪穴住居跡床面上で確認した帰属の判然としない柱穴を始め、いくつかの柱穴が分布する。竪穴柱穴配置は、整然とした規格性を

呈するかは確実ではないが、ここでは、焼土面（炉１）を中心として方形に並ぶ４基の柱穴（Ｐ１～Ｐ４）を竪穴住居に伴う柱穴と認定することとした。柱穴間の距離は、芯々間で1.3～1.8m前後で、ばらつきがある。柱穴配置の主軸方向は北北西方向である。なお、Ｐ１はＳＫ33W土坑に切られる。

４基の柱穴のうち、Ｐ２～Ｐ４は平面長径0.2～0.3m前後、深さ0.2～0.6m前後で、比較的小形である。Ｐ１は上面長径が0.8m近く、掘り込み中位で一段くびれ、以下は長径0.3mほどの円筒状となる。調査では明確に確認できなかったが、本例の上半部分は柱材の抜き取り痕に相当する可能性もあろう。

Ｐ１の２層から円筒上層 a_1 式土器小破片２点（第52図７・８）、Ｐ３から剥片類１点出土した。

本遺構は詳細な規模等は不明である。柱穴覆土は周囲に存在するＳＩ04・06竪穴住居跡等の縄文時代中期前葉段階の遺構群の覆土と類似し、本遺構は、これらの遺構群と近接した時期に属する可能性があろう。また、遺構の上位で、ＳＩ04・06竪穴住居跡等のような黒色土の堆積を認めることができなかったことは、消極的ではあるが、竪穴が廃絶時に人為的に埋め戻されたことを示唆している可能性があろう。

（２）フラスコ状土坑

SKF19フラスコ状土坑（第24図）

ＭＧ48区地山（Ⅲ層）上面で確認した。西隣約１ｍにはＳＩ04竪穴住居跡が存在する。

確認面では長径0.88mのほぼ円形平面をなす。確認面下0.6m前後までほぼ円筒状に、以下は末広がりに掘り込んでいる。底面は長径約2.2m、短径約1.8mの楕円形平面をなし、ほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは1.68mである。

覆土は１層～４層に分けた。底面直上に厚さ50㎝以上にわたって堆積する４層は、地山土を主体とする埋め戻し土である。３層は、壁の崩落土と推定できる薄層状の地山土塊を含み、開口状態下で流入したものと判断する。１・２層も色調や地山土の混入量などには相違があるが、いずれも開口下での流入土の可能性が強いものと推定する。

覆土中からの出土遺物は僅少である。円筒上層 a_1 式土器を含む縄文土器小破片約30点（第52図９～11）、出土石器類には石槍１点（第83図４）、二次加工ある剥片１点（同５）、剥片類１点がある。

本土坑は、中位まで埋め戻した後に、開口状態のまま廃棄された可能性が強い。周辺の遺構群と同様に円筒上層ａ式期前後に属すると想定する。

SKF29フラスコ状土坑（第24図）

ＭＨ49区地山（Ⅲ層）上面で確認した。北側の斜面際に位置する。

確認面では、長径1.08m、短径0.87mの楕円形平面をなす。掘り込みは確認面下0.7m前後までほぼ円筒状を呈し、以下は末広がりになる。底面はほぼ平坦で、底面は長径約1.6m、短径約1.5mの円形平面をなす。確認面から底面までの深さは1.55mである。

覆土は１層～９層に分けた。底面直上に堆積する９層は黒褐色土の薄層である。土坑が開口状態で利用されていた時点に周囲から流入した堆積と推定する。底面直上から、円筒上層 a_1 式深鉢の大形破片（第52図12）などが出土している。その上位の７・８層は地山土を主体とするほぼ水平な堆積層で、遺物を含まない。基本的に壁の崩落土に由来し、それを均した堆積であろう。その上位には黒色土の

薄層（６層）が堆積する。本層は縄文土器破片を含み、９層同様開口状態で利用していた段階の流入土であろう。その上位には厚さ40㎝前後の地山土（５層）が堆積する。本層は混入物がほとんどなく、均質である。おそらく、周辺で新たに掘削したフラスコ状土坑の排土を埋めたものと判断する。その上位の堆積のうち、壁際に縦方向に傾斜して堆積する３・４層は基本的に周囲からの流入土と壁の崩壊土に相当すると判断する。上位の堆積の主体を占める１・２層は暗褐色土を基質とし、縄文土器破片や炭化物粒が目立つ。特に２層中では円筒上層 a_1 式深鉢の大形破片（第53図１・２・５、第54図２）がまとまって出土している。両層とも遺物の出土が顕著であることなどから、人為的に埋めたものと判断する。なお、出土石器類には、石鏃１点（第83図６）、剥片類６点があるが、詳細な出土状況は不明である。

本土坑は当初開口状態下で、壁の崩落土を片づけるなどして、一定期間利用されたものと判断する。その後、別のフラスコ状土坑掘削土で、中位まで埋め戻され、最終的に縄文土器破片などとともに埋め立てられたと想定できる。上位の最終の埋め土中の縄文土器は、いずれも破片であり、完形に復元できる例も存在しないことから、これらは廃棄されたものであろう。

本土坑は、出土土器から円筒上層 a_1 式期に廃絶されたものと判断する。

SKF36フラスコ状土坑（第24図）

ＭＦ・ＭＧ49・50区地山（Ⅲ層）上面で確認した。掘り込み上面は長径1.20m、短径0.99mの楕円形平面をなす。確認面下0.6m前後まではほぼ円筒状で、以下は末広がりに掘り込まれている。底面はほぼ平坦で、径２m前後のほぼ円形平面をなす。確認面から底面までの深さは1.68mである。

覆土は１層～６層に分けた。底面直上に堆積する６層および５層は地山土起源の埋め戻し土で、遺物を含まない。別のフラスコ状土坑掘削土を埋め戻した堆積土の可能性があろう。その上位の４層は、炭化物粒を含む暗褐色土である。本層からは、深鉢の大形破片が出土し、意図的に埋めたものと推定する。その上位の１～３層は暗褐色土もしくは褐色土（１・３層）と地山土（２層）から成り、その土層断面は周辺から流入した形状を呈する。これらの層群は土坑の過半を埋め戻した後のくぼみに流入した当時の表土および壁の崩壊土であった可能性が強いと推定する。

４層出土深鉢大形破片（第55図６）は円筒上層 a_1 式である。このほかの出土土器破片も大半が円筒上層 a_1 式に属する。また、剥片類３点が出土している。

本遺構は、出土土器から円筒上層 a_1 式期に廃絶されたと判断する。

SKF38フラスコ状土坑（第25図）

ＭＦ50区地山（Ⅲ層）上面で確認した。ＳＫ39土坑に切られる。掘り込みは長径1.96m、短径1.83mの楕円形平面をなし、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、径1.7m前後の円形平面を呈する。確認面から底面までの深さは1.77mである。

覆土は１層～７層に分けた。底面直上に堆積する７層は厚さ５㎝前後の暗褐色土の薄層である。基本的に土坑開口状態下での利用時に堆積したものと判断する。本層に伴って３個体分の深鉢（第55図９・10、第56図２）が出土している。その直上には、地山土が厚さ10数㎝前後堆積する（６層）。壁の崩壊土を均した堆積の可能性があるものの、下位層に伴って出土している深鉢を意図的に埋めた堆積

であった可能性も想定でき、断定し難い。前者の場合、当初、底面上に３個体の深鉢を納めて使用していた時点に壁が崩落し、その際に破損した深鉢をそのまま放置したと想定できようか。６層上面には厚さ数㎝の黒色土（５層）が堆積する。本層に伴って土坑東壁際から逆位状態で円筒上層 a_1 式深鉢１個体（第56図１）が出土している。その上位に堆積する２層～４層は基本的に地山土を基質とし、本来開口部に向かって内側にせり出していた壁の崩落土に由来する堆積であったと判断する。直下から逆位に置いた深鉢が出土していることから、意図的に壁を崩して埋め立てた堆積の可能性が強いと推定する。最上位に堆積する１層は、潟西層起源と推定できる地山砂質土であり、他のフラスコ状土坑掘削土の埋め戻し土であろう。

覆土中からは、上記の縄文土器のほか、剥片類１点が出土している。

本土坑は、本来、フラスコ状土坑の形態をなしていたものと想定する。当初、開口状態下で利用され、その後、深鉢を逆位に置くなどして埋め戻した可能性が強い。埋め戻しは、新たなフラスコ状土坑構築を契機としている可能性が強いと想定することから、逆位に置いた深鉢は、土坑の廃絶儀礼の痕跡と推定しておく。本土坑は、出土土器から円筒上層 a_1 式期が廃絶時期と判断する。

SKF57フラスコ状土坑（第25図）

ＭＧ49区地山（Ⅲ層）上面で確認した。長径1.04m、短径0.96mの楕円形平面をなす。掘り込みは確認面下0.9m前後までほぼ円筒状を呈し、以下は末広がりになる。底面はほぼ平坦で、直径２m前後の円形平面をなす。確認面から底面までの深さは1.70mである。

覆土は１層～12層に分けた。その特徴から、下層群（４層～12層）と上層群（１層～３層）とに大きくまとめることができる。下層群は底面直上から暗褐色土もしくは黒褐色土と地山土とが互層状に堆積した層群である。前者が開口状態下で使用時の流入土、後者が壁の崩落土と判断する。基本的に壁の崩落ごとにその崩落土を均して使用を続けたものと想定する。一方、上層群のうち、３層は比較的均質な地山土からなり、近辺での土坑掘削土を埋めた堆積層と推定する。１・２層は埋め立て時もしくはその後に生成した間隙や上面のくぼみに周囲から流入した堆積層であろう。

底面直上から円筒上層 a_1 式土器破片（第56図３）が、確認面で円筒上層 a_1 式～ a_2 式土器破片（同４～６）がそれぞれ出土している。このほか、剥片類が２層および７層から各１点出土した。

底面直上出土土器から、本土坑は円筒上層 a_1 式期に属すると判断する。

（３）土坑

SK22土坑（第26図）

ＬＲ48区地山（Ⅲ層）上面で確認した。西端部は現農道造成により削平されている。現状から、推定長径1.65m、短径1.19mの楕円形平面をなすと判断する。平面長軸方位は東北東方向である。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は若干の凹凸がある。確認面から底面までの深さは0.11mと浅い。

覆土は暗褐色土単一層である。周辺の縄文時代中期前葉円筒上層ａ式期段階の遺構覆土と類似するが、その色調は若干黒味が強い。その堆積要因は判然としない。

土坑底面中央から砥石破片１点が出土したほか、覆土中からは、円筒上層ｄ式土器破片（第57図１・２）が出土した。

本土坑の詳細な性格は不明である。出土土器から、本土坑の上限時期は円筒上層ｄ式期と推定する。

SK24土坑（第26図）

ＬＱ50・51区地山（Ⅲ層）上面で確認した。掘り込みは長径1.28m、短径1.04mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北東方向である。確認面からの深さは、現状で最大0.05m程度と極めて浅く、壁の形態は判然としない。周辺の縄文時代中期竪穴住居跡確認状況を勘案すると、本来、現表土面付近から掘り込まれたものであろう。底面は北半部はほぼ平坦であるが、南半部には凹凸がある。

覆土は二分した。南半側に堆積する２層は、周辺の縄文時代中期前葉円筒上層ａ式期段階の遺構覆土と比較的類似する暗褐色土である。土坑中央から北側に部分的に堆積する１層は、炭化物を多量に含む厚さ２㎝程度の薄層である。本層中には焼土粒を含まず、また、本層直下の土坑底面や周囲の地山面には被熱痕跡を認めることはできない。

覆土中からの出土遺物はない。

本土坑は、内部で火を焚いた痕跡がなく、覆土１層は土坑底に埋めた薄層状の有機質物質が腐朽・黒色化したことに由来する可能性も考慮する必要もあろう。しかし、その性格は不明である。あるいは、本遺構周辺からは椀形滓が出土していることから、上部がほとんど削平された古代の鍛冶炉であった可能性も考慮すべきかもしれない。

SK26土坑（第26図）

ＭＬ49・50区の地山（Ⅲ層）上面で確認した。確認時には覆土の大半を掘り上げてしまっていた。台地北側斜面に位置し、北西隣にＳＫ27土坑が存在する。

掘り込みは長径1.50m、短径1.47mの円形平面をなす。現状で、斜面下側の北側壁はほとんど消失し、南側壁はやや開き気味に立ち上がる。底面はほぼ水平な平坦面をなし、確認面から底面までの深さは最大で0.42mである。

遺存していた覆土は、現状で暗褐色土単一層である。縄文時代中期前葉円筒上層ａ式期段階の遺構覆土に類似する。覆土中からは円筒上層 a_1 式前後の縄文土器破片（第57図３）が出土している。

本土坑は、斜面上に立地することから、その上位が流出した可能性が強く、また、覆土の大半を確認時に削平してしまったことあり、その詳細な性格は不明である。本土坑は、出土土器から円筒上層 a_1 式期が上限時期と判断する。

SK27土坑（第26図）

ＭＬ50区地山（Ⅲ層）上面で確認した。台地北側斜面に位置し、南東隣にＳＫ26土坑が存在する。

掘り込みは長径1.44m、短径1.05mの楕円形平面をなす。平面長軸方位はほぼ東方向である。壁は緩やかに開きながら立ち上がる。底面は平坦であるが、全体が斜面下方に向かって傾斜する。確認面から底面までの深さは最大で0.2m前後である。

覆土は暗褐色土単一層である。縄文時代中期前葉円筒上層ａ式期段階の遺構覆土に類似する。本土坑からは、円筒上層 a_1 式深鉢破片２点（第57図４・５）、剥片類１点が出土した。

本土坑は、斜面上に立地することから、その上位が流出した可能性が強い。出土土器から円筒上層 a_1 式期が上限時期と判断する。その詳細な性格は不明であるが、隣接するＳＫ26土坑と同種の土坑であった可能性が強いものと推定する。

SK31土坑（第26図）

ＬＰ51・52区地山（Ⅲ層）上面で確認した。掘り込みは長径1.34m、短径1.15mの楕円形平面をなす。底面は浅くくぼみ、壁は大きく開きながら立ち上がる。確認面から底面までの深さは0.24mである。

覆土は暗褐色土単一層である。少量の炭化物粒を含むほかは、混入物が乏しい。覆土中からは、縄文土器小破片１点（第57図７）が出土した。現状では、覆土の性格は不明である。覆土周縁部の一部は地山土へ漸移的に変化する傾向があり、本土坑は倒木痕であった可能性も想定し得るものの、調査では断定できなかった。

本土坑は、その性格・時期等の詳細は不明である。

SK33W土坑（第26図）

ＭG48区地山（Ⅲ層）上面で確認した。ＳＩ50竪穴住居跡柱穴Ｐ１を切る。

掘り込みは長径0.48m、短径0.40mの楕円形平面をなす。底面は小さく、壁は底面から急傾斜に立ち上がり、確認面下約0.1mで少し開き気味になる。確認面から底面までの深さは0.50mである。掘り込み全体の形態は柱穴状を呈する。

覆土は炭化物粒・地山土粒を含む暗褐色土である。覆土上位からは、正位の状態で深鉢底部（第57図９）が出土した。さらに、その内側には別個体の深鉢底部破片（同８）が逆位に入り、その上位から同じ深鉢の胴部破片も出土している。これらの遺物は、その出土状態から意図的に埋めたものと判断できる。

また、円筒上層 a_1 式土器小破片（第57図７）が出土したほか、本土坑もしくはＳＩ50竪穴住居跡Ｐ１から、新保式土器小破片１点（同10）も出土している。

本遺構は、その形態が柱穴に類似するが、明瞭な柱痕跡は未確認である。掘り込み上位が開き気味になり、この部分に土器を埋めていることから、掘り込み上位までの柱材を抜き取ったあとに、土器を埋める等の廃絶儀礼を執り行った柱穴と想定することもあり得ようが、調査では明確にし得なかった。本遺構は、出土土器から円筒上層ａ式期に属するものと推定する。

SK35N土坑（第26図）

ＭＥ48区地山（Ⅲ層）上位で縄文土器破片が径40㎝ほどの範囲にまとまって出土し、掘り込みの存在を推定した。この時点では南に隣接するＳK35Ｓ土坑を切る小穴と想定していたが、明瞭には認定できず、最終的にⅢ層上面で掘り込み平面を確認した。現状で長径0.54m、短径0.45mの不整楕円形平面をなす。掘り込みは浅い丸底の椀形を呈し、その確認面から底面までの深さは0.1m程度に過ぎない。

覆土は、現状で暗褐色土単一層である。覆土上面からは円筒上層 a_2 式深鉢の口縁部～胴部破片（第57図11）が出土した。土器破片はほぼその確認面上からの出土に限定され、その下位からはほとんど出土していない。本遺構の本来の掘り込み面は、周辺の遺構と同様、より上位である可能性が強いと想定することから、これらの土器破片は、土坑の下部を埋め戻し、その上面に埋めたものと想定する。このほか、本土坑もしくはＳK35Ｓ土坑から円筒上層 a_1 式土器小破片１点（第57図12）が出土している。

本土坑の詳細な性格は不明である。出土土器から円筒上層 a_2 式期に属すると判断する。

SK35Ｓ土坑（第26図）

ＭＥ48区地山（Ⅲ層）上面で確認した。本来、ＳＫ35Ｎ土坑に切られる可能性が強い。掘り込みは現状で長径0.37m、短径0.32mの楕円形平面をなす。掘り込みは、浅い丸底の椀形を呈し、確認面から底面までの深さは0.1mである。

覆土は暗褐色土単一層である。覆土中からは、円筒上層ａ式前後の深鉢胴部破片（第57図13）が出土している。

本土坑の詳細な時期、性格等は不明である。

SK37土坑（第27図）

ＬＳ51・52区地山（Ⅲ層）上面で確認した。ＳＩ25竪穴住居跡の北隣に位置する。

掘り込みは長径1.27m、短径1.01mの楕円形平面をなす。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.11mに過ぎない。

覆土は黒褐色土単一層である。出土遺物はない。

本土坑の詳細な時期・性格等は不明である。覆土の特徴からは、縄文時代中期前葉よりも後出と推定でき、隣接する古代のＳＩ25竪穴住居跡と関連する遺構であった可能性も想定し得るが、確実ではない。

SK39土坑（第25図）

ＭＦ50区地山（Ⅲ層）上面で確認した。ＳＫＦ38フラスコ状土坑を切る。掘り込みは長径0.94m、短径0.85mの楕円形平面をなす。壁は開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは0.43mである。

覆土は暗褐色土単一層である。出土遺物はない。

本土坑は、その詳細な性格・時期等は不明である。

SK43土坑（第27図）

ＫＪ45区地山（Ⅲ層）上面で確認した。掘り込みは長径1.20m、短径1.12mのやや不整な楕円形平面をなす。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は凹凸がある。確認面から底面までの深さは、現状で0.12mと浅い。

覆土は暗褐色土単一層である。地山土塊を含み、埋め戻し土と判断する。覆土中からは、縄文時代晩期前後に属すると推定する土器破片約10点が出土した。いずれも小破片で著しく磨滅していることから、図示していない。

本土坑は、覆土の特徴から土坑墓の可能性も想定し得るが、断定し難い。出土土器から縄文時代晩期前後が上限時期と推定する。

SK46土坑（第27図）

ＫＥ44区地山（Ⅲ層）上面で確認した。掘り込みは長径0.87m、短径0.63mの楕円形平面をなす。平面長軸方位はほぼ北方向である。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、底面は凹凸が著しい。確認面

から底面までの深さは0.15mである。

覆土は炭化物粒を含む黒色土である。覆土中からは縄文時代晩期中葉大洞 C_1 式前後の鉢破片（第57図14・15）など数点の縄文土器破片が出土した。

本土坑は、詳細な性格は判然としない。出土土器から、縄文時代晩期中葉前後に属する可能性が強いと想定する。

SK58土坑（第27図）

ＫＦ43・44区地山（Ⅲ層）上面で確認した。長径0.86m、短径0.64mの楕円形平面をなす。平面長軸方位は北東方向である。北東半の壁は緩やかに開きながら立ち上がり、南西半の壁は比較的急傾斜で立ち上がる。底面は全体が浅くくぼみ、確認面から底面までの深さは0.18mである。

覆土は黒褐色土単一層である。その性格は判然としない。遺物は出土しなかった。

本遺構の詳細な時期・性格等は不明である。

（４）土器埋設遺構

SR49土器埋設遺構（第27図）

ＭＮ50区に位置する。円筒上層ａ式期の遺物包含層下部で深鉢胴部を確認した。深鉢確認時点では、周囲をほとんど掘り下げていたが、胴部下底は地山（Ⅲ層）に達し、その上面に僅かな落ち込みを認めた。さらに、深鉢は胴部が全周完存し、破片状態で出土している周囲の遺物とは遺存状態に差があることから、深鉢胴部を掘り込み内に入れた土器埋設遺構と認定した。

遺構は口縁部、底部を欠いた深鉢胴部破片を逆位で僅かに南側に傾けて埋設する。上述のように、確認段階で既に周囲を掘り下げていたため、掘り込みの形態は不明である。深鉢胴部内の覆土は、黒褐色土単一層である。顕著な混入物はない。

埋設土器（第58図１）は円筒上層ａ式前後に属すると推定する。

（５）柱穴（第29～31図）

今回の調査では、竪穴住居跡の項で記載した柱穴以外に、地山面上で70基の柱穴を確認した（第18表）。柱穴は、平面長径は0.3m以下、確認面からの深さ0.2m以下の小形例が多数を占める。覆土は黒褐色土もしくは黒色土を基調とし、縄文時代中期前葉よりも後出の可能性が強い。柱穴群は、調査区東端側のＫＥ43区からＫＬ45区周辺にかけての地点と、調査区中央のＬＭ50区からＬＱ51区周辺にかけての地点にそれぞれ集中する。前者は、ＫＦ43ＳＫＰ１から縄文時代後期末宮戸Ⅲｂ式土器破片１点（第58図２）が出土していることなど、一部の柱穴の遺物出土状況と縄文時代晩期前後に属すると推定したＳＩ34・41竪穴住居跡やＳＫ46土坑等の遺構が周辺に分布することから、縄文時代後期末～晩期前後に帰属する可能性が強いと推定する。このうち、ＫＫ45区周辺のように、比較的柱穴群がまとまる部分があり、調査時には炉跡等は未確認であるが、当該地点の柱穴群は、本来、竪穴住居、もしくは簡便な小屋掛けを施した平地住居の柱穴であった可能性があろう。当該地点では、検出した遺構・遺物が比較的僅少であることも勘案すると、縄文時代後期末から晩期にかけて断続的に竪穴住居などの小規模な居住施設が営まれたものと推定しておく。

一方、調査区中央部の柱穴群は出土遺物がなく、時期決定の根拠を欠くが、ここでは便宜的に縄文時代の遺構の項で扱う。形態は不整なものが多く、明瞭な柱痕跡を確認することもできない。また、

明確な配置も認定し難い。西隣に位置する古代に属するＳＩ25竪穴住居跡と併存する時期の所産である可能性も想定し得るが、断定できない。

３　古代以降

（１）竪穴住居跡

ＳＩ25竪穴住居跡（第28図）

ＬＲ・ＬＳ50・51区とその周辺に位置する。当初、地山（Ⅲ層）上面付近で焼土および被熱した凝灰岩礫のまとまりや土師器破片を確認し、古代のカマド跡と推定していた。周辺を精査した結果、地山面で方形に巡る壁溝を確認し、最終的に古代の竪穴住居跡と認定した。

本遺構は、竪穴住居跡と認定した時点では、既に地山面まで掘り下げており、壁溝とカマド跡、さらに若干の柱穴等を確認したにとどまる。壁溝は長軸4.5m、短軸4.1mの方形に巡る。ただし、カマドが位置する北東隅で壁溝は途切れ、東側中央部分は竪穴住居跡確認時点には、既に削平してしまっていた。また、この壁溝の北西隅には、北西方向に向かう溝が取り付き、調査範囲外の斜面へ延びている。壁溝の幅は0.3～0.4m前後、確認面からの深さは0.1m前後である。壁・底面とも全体に不整であるが、底面には明瞭な柱穴を認めることはできない。覆土はⅡ層と類似した黒褐色土である。北西隅に付設された溝の底面は北西の斜面側に向かって緩やかに傾斜しており、排水溝と判断できる。

竪穴平面の長軸方位は北北西方向で、カマドは竪穴北東隅に位置する。床面を平面長径約1.3m、深さ約0.2mのやや不整なすり鉢形に掘り込み、その掘り込みを埋め戻した上面を火床とする。火床には支脚（第58図13）が遺存する。カマドの袖等の上部構造部分は破壊されており、詳細不明である。カマドの崩壊土層（①層）中からは、芯材であったと推定できる凝灰岩礫のほか、須恵器坏破片（第58図５）および土師器甕破片（同６～12）も出土している。煙道は火床や支脚の位置から北東向きであったと推定するが、確認できなかった。

このほか床面ではＰ１～Ｐ６の大小の掘り込みを確認した。ただし、Ｐ２・Ｐ３は、既にその周辺を本来の床面よりも掘り下げてしまった段階で確認した。Ｐ２は、現状で長径0.92m、短径0.81mの楕円形平面をなす大形の掘り込みである。床面からの深さは推定0.25m前後である。覆土は多量の地山土塊を含む埋め戻し土である。出土遺物はない。カマドに隣接することから、カマドに関連する施設の可能性も想定し得るが、その性格は判然としない。

一方、Ｐ１・Ｐ３～Ｐ６は径0.3～0.4m前後で、Ｐ５を除き、深さ0.1m前後の小形の掘り込みである。明瞭な柱痕跡は確認できないが、竪穴に伴う柱穴の可能性があろう。ただし、壁と壁溝との関係をはじめ、具体的な上部構造は不明である。

このほか、貼床、入口等を確認することはできなかった。

本竪穴住居跡は出土土器から、９世紀後半～10世紀前半に属すると判断する。なお、本竪穴住居跡付近のＬＲ51区表土層から、椀形滓１点が出土している。[註6] 本例は本来竪穴覆土からの出土であった可能性も想定し得る。本竪穴住居跡内には、鉄関連の炉跡を確認していないことから、本遺構が鉄関連の工房址とは断定できないが、少なくとも近辺には鉄関連の遺構が存在していた可能性が強いと推定する。

（２）溝跡

SD10・SD11・SD47溝跡（第３図）

現状ではＳＤ10溝跡はＭＩ49～ＭＦ49区周辺、ＳＤ11溝跡はＮＡ48区周辺、ＳＤ47溝跡はＮＣ47～ＮＨ47区周辺で部分的に確認した。調査時点では、それぞれ別の溝跡としていたが、その位置関係や覆土の特徴の共通性などから、本来、調査区西端の開析谷からほぼ西に向かって延びる総延長90m以上の一連の溝跡であった可能性も想定でき、以下ではまとめて記述する。ＳＤ47溝跡はＳＩ03竪穴住居跡を、ＳＤ10溝跡はＳＩ04・06竪穴住居跡をそれぞれ切る。

溝跡は幅0.4～0.8m前後、深さ0.1～0.2m前後である。壁から底面にかけての横断面形は全体に丸みをおびる。ＮＥ47区ではＳＤ47溝跡は北側と南側とに分岐している。北側の溝跡がより東側のＳＤ10・11溝跡につながる可能性も推定できるが、南側の溝跡は調査範囲外に延び、その詳細は不明である。溝跡底面標高は西側のＮＡ47～ＮＤ47区周辺（ＳＤ11）が標高18.9～19.0m前後と最も高い。調査区西端の開析谷につながるＮＨ47区周辺（ＳＤ47）では標高18.5m前後、東端側のＭＩ48区周辺（ＳＤ10）では標高18.1m前後とそれぞれ低くなっている。

覆土はいずれも黒褐色土を基調とする単一層である。地山土粒を含むものの、砂粒やシルト分は顕著でなく、覆土堆積に流水の影響を認めることはできない。

ＳＤ10溝跡からは縄文土器破片５点、スクレイパー１点、半円状扁平打製石器１点、剥片類１点が出土した。いずれも混入したものと判断する。また、ＳＤ47溝跡からは須恵器甕破片１点（第58図13）のほか、縄文土器破片約60点、石槍１点、石錐１点、剥片類９点が出土した。これらも基本的に混入したものと判断する。ただし、須恵器甕破片については、本来、本溝跡に伴った可能性も想定し得るが、断定できない。

本溝跡は、覆土が黒褐色土を基質とすることと出土遺物とから、古代以降に属すると推定する。基本的に開口状態下で機能したものと推定するが、覆土の特徴から水路であったとは想定できない。その方向が、現状の農道と大勢として対応することから、現農道造成以前の道路跡と関連する可能性も想定し得るものの、断定し難い。本遺構の詳細な性格は不明である。

（３）柱穴列

SA59柱穴列（第29図）

ＫＪ～ＫＭ46・47区地山（Ⅲ層）上面で確認した。調査区東端の段丘崖には、ほぼ平列して存在する２条の開析谷状の成因不明の落ち込みがあり、その北側落ち込みの谷頭相当部から南北２列の柱穴列が段丘面上を西に向かって延びる。２条の柱穴列は内向きに対向する弧状を呈し、両者の間隔は最大の中央部で３m、最も狭い東端側で約1.4mである。柱穴は東半側では落ち込みの谷頭相当部から西へ延びる幅0.6～1.1m前後、深さ0.1～0.2m前後の溝状掘り込みの底面に掘り込まれている。北列は15基の柱穴から成り、総延長約10.4m、柱穴間の距離は0.3m前後で、ほぼ等間隔である。南列は総延長約6.8mで、東端部と西端部にのみ計８基の柱穴が存在する。

南列では柱穴が偏在することから明確ではないが、北列では、個々の柱穴は東側例が相対的に大形で、西に向かうにつれて小形化する傾向を認めることができる。東側では、柱穴は長径0.7～0.8m前後、短径0.4～0.6m前後の楕円形平面で、深さ0.2～0.6m前後である。一部には底面に列方向と直交して２箇所のくぼみが並ぶ例があり、２本の柱を並立させたかもしくは２基の柱穴が切り合っている

可能性も想定し得る。西側では径0.4m前後の円形平面で、深さ0.1m程度の例が多い。

覆土は一般にシルト質のグライ土壌を基質とする。地山土粒を混入するほか、筋状酸化鉄の沈着も目立つ。このような覆土の特徴は、古代以前のそれとは大きく異なり、本遺構は、古代よりも後出の遺構であると推定する。現状では、近現代に属する可能性が強いと予想するが、出土遺物がなく、断定できない。

本遺構は、柱を立て並べた柵列であったと想定するが、その具体的な性格は不明である。

第３節　出土遺物

１　概要

今回の発掘調査出土遺物の内訳は、容量18リットルコンテナ換算で以下の通りである。

	縄文土器	石器	土師器・須恵器	その他	計
遺構内	111	41	1		153
遺構外	241	59	3	1	304
計	352	100	4	1	457

このうち、第２節で触れた遺構内出土遺物については、フラスコ状土坑内からほぼ完形で出土し、意図的に埋めたと判断できる縄文土器、縄文時代竪穴住居跡内の炉体土器、古代の竪穴住居跡のカマドから出土した土製支脚などの少数例が遺構の機能時もしくは廃絶時と直接関連し、かつ、遺構の帰属時期を示すと判断できるに過ぎない。それ以外の遺物は、遺構廃絶後に廃棄されたか、もしくは周囲から二次的に流入したものである。

一方、遺構外出土遺物のうち、ＭＮ48区～ＭＳ50区周辺出土の縄文土器約220箱、石器約40箱は、縄文時代中期前葉の遺物包含層、いわゆる捨て場からの出土である。捨て場の形成は、一定期間にわたる継続的な遺物の廃棄行為が累積した結果と想定できる。しかし、第１節で触れたように、主体をなす遺物包含層は明瞭に分層することが困難であった。結果、調査では、個々の遺物廃棄行為の単位を認定し、それに従って遺物を取り上げることができなかった。

これらのことから、本節では先に掲載した遺構内出土資料についても適宜言及しながら、基本的に出土遺物を一括し略述する。

２　縄文土器

今回の発掘調査で出土した縄文土器の主体は、遺構内外ともに縄文時代中期前葉円筒上層ａ式およびその前後に属する土器である。ここでは、出土状況も勘案し、口縁部文様をもつ当該土器群の中から以下のＡ群～Ｄ群を抽出する。

Ａ群（第84図など）

平縁で、口縁部が直立もしくは外反する。口縁部が内屈する例（第84図20）も含める。縦位の隆線は

伴わない。口縁部は全体が肥厚する例（第84図13）もある。口唇部は断面が尖り気味もしくは丸みがある。口唇部に縄文の圧痕を施す例もあるが、いずれも口唇部は明瞭に肥厚しない。口縁胴部界は僅かに突出する例があり、突出部にはヘラ状工具、縄文もしくは絡条体による刺突を施す（第84図８・18など）。口縁部には主として縄文の側面圧痕を横位に数条施す。ほかに部分的に縦位の縄文側面圧痕を併用する例（第84図３など）、ヘラ状工具による「Ｃ」字状刺突をあわせて施す例（同９・10など）、絡条体圧痕を施す例（同11～21など）もある。胴部には結束第１種羽状縄文を横位回転施文する例（第84図１・２・５など）と木目状撚糸文を縦位回転施文する例（同８・24など）が多い。他に斜行縄文を施した可能性のある破片も存在するが、小片であるため確実ではない。また、胴部上位には結節回転文を１条横位に施す例（第84図13など）がある。一般に内面はミガキ調整を施す。胎土には繊維を僅かに含む。焼成は比較的良好で、にぶい褐色～にぶい黄燈色の色調を呈するものが多い。

本群は山内清男による「青森県是川一王寺貝塚出土　円筒下・上層式の型式別写真」[註7]（以下、山内資料と略称する）における円筒下層ｄ式の主体を占める土器群に対比できる。

Ｂ群（第85図～第98図１など）

口縁胴部界が隆線状に突出する。この突出は、原則として口縁部粘土帯の外傾接合下端部を器表に突出させて作出する。場合によっては粘土帯端部上にさらに粘土紐を貼り付けた例（第85図27など）もある。口縁部は、平縁が主体をなす。ほかに小さな山形突起を付す例（第93図３・４など）、あるいは低波状口縁を呈する例（第86図19～25、第87図、第93図４、第95図～第97図、第98図１など）がある。後者には波頂部に抉りが入り、二又もしくは三又に分かれる例（第93図４、第97図２・３、第98図１など）が僅かに存在する。口縁部断面形は、内湾する例、直立する例、外傾する例などの変異がある。口唇部は丸く整形する。粘土紐貼り付けによって強く肥厚する例（第94図３など）は僅少である。口唇部および口縁胴部界には縄文あるいはヘラ状工具による刺突を施す例が多い。口縁部には瘤状突起や山形突起下に隆線を貼り付ける例（第88図１、第89図１、第93図３・４、第94～97図など）がある。口縁部には主に絡条体圧痕を横位に施す。縄文の側面圧痕を施す例（第86図17、第93図２、第94図２、第97図２など）も少数存在する。部分的に縦位に絡条体圧痕を施す例（第89図２、第90図３など）や瘤状突起上面で圧痕の方向を変える例（第89図１、第92図１など）がある。胴部は２段の縄文を横位回転施文する例が多数を占める。同一の撚りの縄文を結束し（第１種）、横位回転施文した例（第85図１・22、第88図１・４、第89図１・２など）もある。このほか、結束第１種羽状縄文を横位回転施文する例（第85図23、第86図24、第89図３など）、結節回転文を縦位施文する例（第92図３など）なども僅かに存在するが、木目状撚糸文は本群に認めることはできない。内面はミガキ調整を施す例のほか、ナデ調整例もある。胎土には繊維を僅かに含む例が多い。焼成は比較的良好で、Ａ群同様にぶい褐色～にぶい黄燈色の色調を呈するものが多い。

本群は今回の出土土器の多数を占める。本群の過半は大和久震平による仮称狐岱１に対比できる[註8]。波頂部が二又から三又に分かれる例は同じく仮称狐岱２に相当する。しかし、両者の口縁部施文には顕著な相違は認め難い[註9]。なお、後に大和久は仮称狐岱１を円筒上層ａ式の旧段階に相当する円筒上層a_1式に、同じく仮称狐岱２を新段階相当の円筒上層a_2式にそれぞれ含めている[註10]。山内資料には良好な対比資料を認めることはできない。

Ｃ群（第98図４～第99図）

口縁部が断面「く」字形に外反する。平縁例と小形の山形突起が付く例とがある。口縁部粘土帯下端は突出せず、口縁胴部界には水平に隆線を１条貼り付ける。口縁部には縄文もしくは絡条体圧痕を数条横方向に施す。胴部は羽状縄文もしくは結束した斜行縄文を横位回転施文する。このうち、第99図１は、口縁胴部界の隆線上には横「Ｉ」字状の突起を、その上方には２条の隆線をそれぞれ貼り付ける。隆線および突起上には「Ｃ」字状刺突を施す。口縁端部は粘土紐貼り付けにより肥厚する。口縁部には部分的にＬＲ縄文を横位回転施文し、さらにＬＲ縄文の側面圧痕を水平に５条施す。胴部はＬＲ縄文を横位回転施文する。内面はナデもしくはミガキ調整を施す。胎土には繊維を僅かに含む。焼成は中程度で、色調はにぶい黄燈色を呈する。

本群の出土量は僅少である。口縁部～胴部の成形法は本遺跡で主体をなすＢ群のそれとは異なる。縄文もしくは絡条体圧痕による口縁部の施文はＢ群と共通し、基本的に両者は併存するものと判断できる。本群も山内資料には対比資料を認めることはできない。

Ｄ群（第100図～第101図１～６）

口縁胴部界が隆線状に突出するとともに、口縁端部や口縁部に多数の粘土紐を貼り付ける。口縁部は外反し、頂部が分かれた大波状縁をなす。口縁胴部界には隆線を貼り付けるほか、波頂部から複数の隆線を垂下する例（第100図１、第101図１・２など）もある。また、波頂部下に橋状把手を付ける例（第100図）がある。口縁部には縄文の側面圧痕を波状に施す例（第100図２）、横位と縦位の縄文側面圧痕を組み合わせた例（第100図１）、縄文側面圧痕を数条同時に施す例（第101図１～６）がある。絡条体圧痕はほとんどない。胴部には結束第１種羽状縄文もしくは斜行縄文を横位回転施文する。内面にはナデもしくはミガキ調整を施す。胎土には繊維はほとんど含まない。焼成は良好で、色調は一般に燈色を呈する。

本群は山内資料の円筒上層ａ式の主体をなす部分に対比できる。

このほか、山内資料の円筒上層ｂ式以降に相当する例（第101図７～10など）は、僅少である。このうち、第107図９などは現在の円筒上層ｃ式である。

以下、各群の出土状況を検討する。ＭＮ48区～ＭＳ50区周辺の遺物包含層（捨て場）出土資料（★印）では、Ｂ群例が過半を占める。これに少量のＡ群が伴い、Ｃ群・Ｄ群は僅少である。既述のようにＢ群・Ｃ群は山内資料には認めることができない。大和久は円筒式土器に地域差が存在することを認めることから、秋田県北部に地域を限定し、狐岱１・２・３を仮称として認定した。Ｂ群は秋田県北部を中心に分布する地域色の強い土器群であった可能性を想定し得る。Ｃ群は他地域の系統につながる同時期の土器群である可能性もあろうが、資料が乏しく、断定できない。

一方、ＳＩ03竪穴住居跡出土資料には、Ｂ群土器はほとんど存在せず、複数の縄文を同時に押圧して波状文様を施す例（第32図６）や縄文の弧状圧痕を施す例（同18）などが主体をなす。これらは山内資料の円筒上層ａ式および円筒上層ｂ式の一部に相当する。前者はここでのＤ群に当たる。このほか、ＳＩ04竪穴住居跡出土土器もＤ群が主体をなすものと判断できる。

このような出土状況と、大勢として円筒下層ｄ式では隆線がほとんど施されないものが、円筒上層ｂ式以降には隆線が多用される変遷等を勘案すると、Ｂ群とＤ群とには時期差を認め、Ｂ群からＤ群へ変化したものと想定することができる。また、先の遺物包含層からは、大木７ａ式土器および北陸

系土器も少量出土している。大木７ａ式と判断できる例には五領ヶ台１式類似例（第102図５）、水平沈線や鋸歯状沈線文を施す例（同７～９）などがあり、総体として、Ｂ群と大木７ａ式および五領ヶ台１式との併行関係を示しているものと判断する。一方、北陸系土器（第103図２～４、第104図、第105図１～13）は基本的に新保式の範疇で捉えることができる。(註11)新保式土器は遺物包含層（捨て場）中から一定量出土しているのに対し、Ｄ群（および円筒上層ｂ式）が主体をなすＳＩ03竪穴住居跡出土資料には新保式土器を認めることができない。このことは、Ａ群もしくはＢ群と新保式土器が併存し、Ｄ群には新保式土器が伴わない可能性を示唆する。Ａ・Ｂ群とＤ群とには時期差があったとする想定の傍証となろう。

既述のように、Ａ群は山内資料の円筒下層ｄ式に、Ｄ群は同じく円筒上層ａ式に対比できる。一方、山内資料にはＢ群およびＣ群相当例を欠く。施文の特徴と今回の出土状況とからは、両群はＡ群とＤ群の中間段階に位置するものと判断できる。ここでは、胴部に木目状撚糸文等の縦位回転施文が原則として存在しないことを評価し、円筒上層ａ式の古段階とする。本報告では、Ｂ・Ｃ群相当例を円筒上層 a_1 式、Ｄ群相当例を円筒上層 a_2 式と分類する。(註12)

このほか、縄文時代後期中葉前後の深鉢（第107図１・２）、片口土器（同３）、注口土器（同４・５）、壺（同６）なども僅かに出土している。

３　土製品（第107図７～11）

第107図７は過半を欠失するが、鼓形をなすものと推定する。表面中央には径約３㎜の穿孔があり、その周囲には同心円状に縦長の小刺突を密に巡らす。刺突は側面の表面側にも２列施している。器表には比較的平滑なナデ調整を施す。胎土・焼成は円筒上層ａ式土器と類似する。土製耳飾り破片であろう。第107図８～10は板状土偶の胴部破片である。いずれも胎土・焼成は円筒上層ａ式土器と類似する。８は現存幅３㎝の小形例で、全体に磨滅する。胴部表面中央付近に粘土粒を貼り付け、その下に細沈線を放射状に施す。粘土粒の上方には刺突を充填した平行弧状細沈線を対称に施していたようである。裏面には明瞭な施文を認めることはできない。９は下端側が二股に分かれ、脚を表出する。胴部表面中央に粘土粒を貼り付け、全面に弧状～直線状の細沈線を施す。脚部右側面には小刺突痕がある。裏面には下端中央に縦位の低い隆線を貼り付け、全面に縦横の細沈線を施す。10は上端側を欠失する。胴部中央に粘土粒を貼り付け、その上方には垂直方向に、下方には放射状にそれぞれ細沈線を施す。裏面は無文である。第107図11は遺存状態が不良で、本来の形状が判然とせず、性格不明である。胎土・焼成は円筒上層ａ式土器と類似する。

４　石器・石製品

ここでは、加工痕あるいは使用痕が残るいわゆる狭義の石器と剥片・砕片（本書では剥片類と一括する）、石核、原石等の一連の剥片剥離工程に関わるもの、および石製品も包括し、石器類と総称する。器種分類名称は、従来からのものを原則として踏襲する。ただし、磨石類には、器表に敲打痕を残す凹石状のものや長辺に狭小な磨面を残す半円状扁平打製石器類似例も含めている。

今回の調査で検出した石器等は第４表の通りである。なお、ここではＳＩ25竪穴住居跡出土例など古代以降の遺構出土資料は遺構外として集計した。

第４表　和田Ⅲ遺跡出土石器類一覧

	石　鏃	石　槍	石　錐	石　匙	石　箆	スクレイパー	楔形石器	二次加工ある剥片	石　核	半円状扁平打製石器
遺構内	22	9	11	8	14	56	5	91	7	11
遺構外	35	22	6	16	7	182	6	240	20	65
計	57	31	17	24	21	238	11	331	27	76
	磨石類	敲　石	石　皿	台　石	石　錘	磨製石斧	礫　器	砥　石	線刻礫	円盤状石製品
遺構内	21	3	4	1	2	4	1			1
遺構外	26	3	1		29	11	8	6	3	
計	47	6	5	1	31	15	9	6	3	1

今回の遺構・遺物の検出状況から、出土石器類は、大勢として縄文時代中期前葉に属するものが主体をなすと推定できる。石器類の組成を見ると、いわゆる定型的な剥片石器では、石鏃が主体をなすほか、石槍が比較的目立つ。礫石器では、半円状扁平打製石器および磨石類が卓越する。これに対し、石皿・台石の出土は僅少であり、半円状扁平打製石器および磨石類とあわせて使用されたとするには、出土量に不均衡があろう。石錘も一定量出土するが、大量に出土する状況とは想定できない。現時点では、十分な比較資料を準備できていないが、これらの石器類の組成は、縄文時代前期円筒下層式土器に伴う石器類の組成を基本的に継承しているものであろう。(註13)

以下では、石鏃などいくつかの石器類についてのみ略述する。

石鏃

基部形態を凹基(第108図１～４など)、平基(同５)、円基(第68図２など)、尖基(第108図６～９など)、有茎(同10など)に大別すると、凹基14例、平基４例、円基５例、尖基20例、有茎６例、破損等により不明８例となる。有茎例はいずれも円基有茎形態を呈し、明瞭な基部のかえりはない。

石槍

平面形態を柳葉形(第108図11など)と木葉形(第109図１・２など)とに分けると、前者が19例、後者が８例となる。ただし、ともに二次加工が充分でなく、未成品の可能性あるものも少なくない。このほか、大形の円基石鏃状を呈する例(第108図12)が１例、欠損のため詳細不明な例が３例ある。

石錐

形態から、錐部が針状のもの(第109図３など)、錐部が厚手棒状のもの(第65図５など)、素材の一端に短い錐部を作出した不定形のもの(第62図８など)とに大別すると、針状例が４点、棒状例が２点、不定形例が７点、分類不能例が４点となる。針状例のうち、ＫＪ45ＳＫＰ１出土例(第83図７)は基部側に一対の抉りを入れたつまみ部を作出した特徴的な形態をなす。この柱穴からは、ほかに縄文時代晩期前後の土器破片(第58図３)が出土しており、本例も当該時期に属する可能性が強い。

石匙

つまみ部の中心軸に対する主たる刃部の位置関係から、横型(第109図４・５など)、縦型(第110図１・２など)、斜め型(同３・４など)に大別すると、横型は７例、縦型は12例、斜め型は４例となる。刃部の二次加工の形態には変異が大きく、一定の傾向を認めることはできない。縦型には第73図１のように石刃様の縦長剥片素材と判断できる例もある。ただし、表面に長い平行剥離痕を残す例は認めることはできない。斜め型には器端の一方が尖頭状を呈する特徴的な形態をなす例(第110図３など)がある。

石箆

二次加工の状態により、ほぼ両面に二次加工を施すもの（第110図５・６、第111図１・２など）、主として表面にのみ二次加工を施すもの（第59図４・６など）、周縁部にのみ二次加工を施すもの（第62図11など）に大別すると、両面例は14点、表面例が４点、周縁例が３点となる。後二者での素材と刃部との位置関係を見ると、素材の打面側、末端側、側縁側のそれぞれに刃部を作出する例があり、一定しない。このうち、第62図26はやや縦長の剥片打面側から両側縁にかけてのみ二次加工を施し、素材末端側は未加工のまま刃部としている。いわゆるトランシェ様石器である。

スクレイパー

剥片素材に連続した二次加工を施し、刃部を作出したと認定したものを一括した。素材の形状、二次加工の形態と部位などには、極めて変異が大きい。第111～113図には出土例の一部のみ掲載した。第111図３～５は形態は異なるが、いずれも素材の末端側に比較的急傾斜の二次加工を施し、厚手の刃部を作出する。そのうち、５は石刃状の縦長剥片を素材とし、旧石器時代のエンド・スクレイパーに類似する。第112図１は表面に自然面を残す横長剥片末端裏面に二次加工を施し、刃部を作出する。第112図２は素材の両側縁側に両面から二次加工を施し、小形撥形に整形する。末端表面に二次加工を施し、刃部を作出している。第112図３・４は素材側縁表面に二次加工を施し、刃部を作出する。第112図５、第113図１～３は素材側縁に両面から二次加工を施し刃部を作出したものである。

二次加工ある剥片

ここで二次加工ある剥片としたものは、一定のまとまりを認定し難いものを一括したため、その形態は多様である。石器未成品もしくは剥片を素材とする残核例も少なくないと推定できるものの、個々の石器単独ではその判断は容易ではない。第114図１～４、あるいは第76図４～７などは石鏃の未成品の可能性があると想定した例である。その素材の形態は変異に富む。例えば、第114図１は横長の小形剥片を素材とし、同３は両極剥片もしくは楔形石器を素材とする可能性がある。また、同２は大形の剥片打面側を折断し、素材としている。これらが石鏃の未成品とするならば、現状では素材の選択と加工の方法には有意な傾向を認めることはできない。

石核

大きくは打面と作業面を90°前後転移し、直方体状を呈するもの（第114図６、第115図、第116図１など）と打面と作業面を交互に入れ替え、両面調整石器状を呈するもの（第117図など）とに分かれる。いずれも顕著な打面調整は施さない。また、小形例が多く、最終段階で剥離された剥片も小形例が大半であったと想定できる。第78図１は自然面を大きく残し、剥片剥離の初期段階で放棄された前者の石核例と判断する。その作業面高は４㎝前後に過ぎず、剥離された剥片は縦横比の近い小形例と判断できる。

このほか、第64図２は黒曜石の小円礫を素材とする。両極打法により極小の縦長剥片を剥離している。ただし、今回の出土資料中にはこのような極小の黒曜石剥片を素材とする石器を認めることはできない。

半円状扁平打製石器

扁平な円礫の長辺側に基本的に二次加工を施し、刃部状に縁辺を整形したものをまとめた。縁辺が幅の狭い磨面を形成しているものは磨石類に含めた。二次加工は原則的に両面に施すが、その部位に

は、一辺のみから全周までの変異がある。なお、第70図２のように、両短辺に二次加工により抉りを作出した例もある。また、折損例のうち、第118図１・２は図の上方からの加撃により折損している。一般に折損は刃部と相対する長辺に二次加工を伴う例に認めることができ、折損の多くは長辺への二次加工時に生じた可能性もあろう。

磨石類

上記の半円状扁平打製石器の縁辺が狭小な磨面を形成する例（第119図、第120図１～４）、扁平円礫の長辺側縁に同様に狭小な磨面を形成する例（同５・６）、円礫もしくは板状礫の器表に敲打痕がある例（第121図）、円礫の器表に磨面がある例（第122図１）などがある。これらの使用部位の特徴には相違があり、それぞれの用途は異なったものであった可能性が強い。しかし、１個体に複数の異なった特徴の使用部位が併存する例があることから、ここでは一括した。第121図７は扁平円礫の長辺に狭小な磨面、表面中央に敲打痕を伴う。また、第71図１は下面に狭小で平坦な磨面、表裏面中央には敲打痕が残る。さらに遺存する短辺には両面から二次加工を施している。

砥石

出土砥石のうち、図示した３例（第124図２～４）は形態から鉄器用砥石の可能性が強く、古代に属する可能性があろう。

５　土師器・須恵器・羽口

古代の土師器および須恵器は、調査区中央部に位置するＳＩ25竪穴住居跡周辺を除くと、主としてＭＤライン以西の調査区西側から散発的に出土した。土師器坏破片（第107図12・13）、土師器甕破片（同14）などがあり、全体で容量18リットルコンテナで約１／２程度の出土量である。いずれも小破片のため、詳細な特徴は判然としない。大きくは９世紀代から10世紀前半に属するものであろう。

今回の調査では確実な古代の遺構は調査区中央のＳＩ25竪穴住居跡１軒のみであり、調査区西側では未確認である。[註14] 山本町教育委員会による第１次調査では、古代の土坑等が検出されており、当該時代の遺跡の中心は今回の調査区の西側、第１次調査区の北もしくは南側の台地上であった可能性があろう。

ＬＱ50区出土羽口（第107図15）は残存長3.7㎝、全周の１／５程度が遺存するに過ぎない。推定内径２㎝前後である。炉装着部側には、外面に釉状物質が融着する。

６　鉄滓

調査区中央部のＬＱ50・51区、ＬＲ51区および調査区西端部のＮＦ49区から鉄滓が出土している。いずれも椀形滓の破片である。調査区中央部では５点、総重量約1.3kg、調査区西端部では２点、総重量約0.2kg、合計で約1.5kgである。

出土鉄滓のうち、遺存状態が比較的良好なＬＲ51区およびＮＦ49区出土椀形滓各１点を岩手県立博物館に分析を委託し、分析結果を第５章に掲載した。

註１　秋田県農政部農地整備課　『土地分類基本調査　森岳・羽後浜田』　1984(昭和59)年

註２　註１文献

註３　例えば、佐瀬隆等は十和田火山東方地域では、完新世以降、丘陵、台地では人類の活動が活発となり、それに伴い、森林が破壊され草原が拡大して黒ボク土層の生成が広域で始まったとし、黒ボク土の生成が人為による森林破壊と関連するとしている。

佐瀬隆・細野衛　「黒ボク土層生成論－その“堆積性”と“人為との関わり”について－」　『紀要ⅩⅧ　－20周年記念論集－』　1998(平成10)年　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

註４　以下の記述では、円筒土器群の細分については、原則として下記の三宅文献に従う。ただし、今回の調査資料には、三宅の円筒下層 d_2 式相当例を明確に認めることができないことから、円筒下層ｄ式細分は採用しない。また、第３節で触れるように、今回の調査における出土状況をもとに、円筒上層ａ式を独自に新古に２分し、それぞれ円筒上層 a_1 式および上層 a_2 式と呼称する。

三宅徹也　「円筒土器の概念とその崩壊」　『青森県立郷土館研究年報』　第３号　1977(昭和52)年　青森県立郷土館

註５　本ＳＫＦ20フラスコ状土坑は、後述するＳＩ15竪穴住居跡に伴うと判断したＳＫＦ64フラスコ状土坑とともに覆土に地山土主体の埋め戻し土層を伴わない。竪穴住居跡外に位置する他のフラスコ状土坑にはいずれも地山土主体の埋め戻し土層が堆積する状況とは対照的であり、このことも両フラスコ状土坑が竪穴住居に伴ったことの傍証となろう。

註６　当該椀形滓については、岩手県立博物館に分析を委託し、第５章にその分析結果と所見を掲載した。

註７　山内先生没後25年記念論集刊行会　「青森県是川一王寺貝塚出土　円筒下・上層式土器の型式別写真」　『画龍点睛』　1996(平成８)年

註８　大和久震平　『北秋田郡森吉町米内沢狐岱遺跡調査報告』　1958(昭和33)年　秋田県文化財保護協会

註９　本Ｂ群中の仮称狐岱２相当例には、狐岱遺跡調査報告に掲載されている絡条体による横位平行圧痕間に縦位圧痕を充填する例(狐岱遺跡調査報告６図７)は認めることはできない。平行圧痕間に直交した圧痕を充填する施文は、ＳＩ04竪穴住居跡出土例(第36図１)のようにＤ群相当土器に認めることができる。ただし、Ｄ群相当土器では、絡条体ではなく、縄文原体による施文である。

註10　大和久震平　「円筒上層式の細分」　『秋田考古学』　第16号　1960(昭和35)年

註11　利波匡裕　「新保・新崎式土器様式の編年と地域性」　『考古学と遺跡の保護』　1996(平成８)年　甘粕健先生退官記念論集刊行会

註12　既述のように、大和久震平は、円筒上層ａ式を a_2 式と a_1 式の新旧に細分した。結果として仮称狐岱１を円筒上層 a_1 式、同狐岱２を円筒上層 a_2 式に対比している。これに対し、三宅徹也は青森市野木和遺跡調査報告書において、円筒上層ａ式を三分した。そこでは、仮称狐岱２を中期初頭の野木和Ⅱａ類に対比する。文脈から、三宅は野木和Ⅱａ類(仮称狐岱２)を円筒上層ａ式の最古段階に編年していると判断できる。このほか、石神遺跡報告中で江坂輝彌が設定した円筒上層 a_1 式および同 a_2 式の内容は、上記の細分のいずれとも必ずしも整合しない。

一方、Ｂ群の主体をなす仮称狐岱１相当例は、青森県オセドウ貝塚出土の円筒土器下層式例(長谷部言人文献第四図版３)に対比される可能性がある。山内清男が、1937年作成の編年表で円筒土器下層式が４型式「以上」に細分されると記しているのは、オセドウ例が是川一王寺貝塚出土の山内資料に欠落し、別の細別型式となる可能性を予測していたためかもしれない。しかしながら、大和久が当初秋田県北部に地域を限定して仮称狐岱１～３を設定したことに窺われるように、Ｂ群の分布は、現状では秋田県北部を中心とした日本海側に集中するようである。

このように、現段階では、円筒下層ｄ式から円筒上層ａ式の細分およびその地域ごとの変異については、なお検討すべき部分が大きい。本報告では、記述の煩雑さを避ける意味もあり、本文に記載したように、ここでのＢ・Ｃ群土器は一括して円筒上層ａ式の範疇に含め、これらを円筒上層 a_1 式、Ｄ群を円筒上層 a_2 式と呼称しておく。

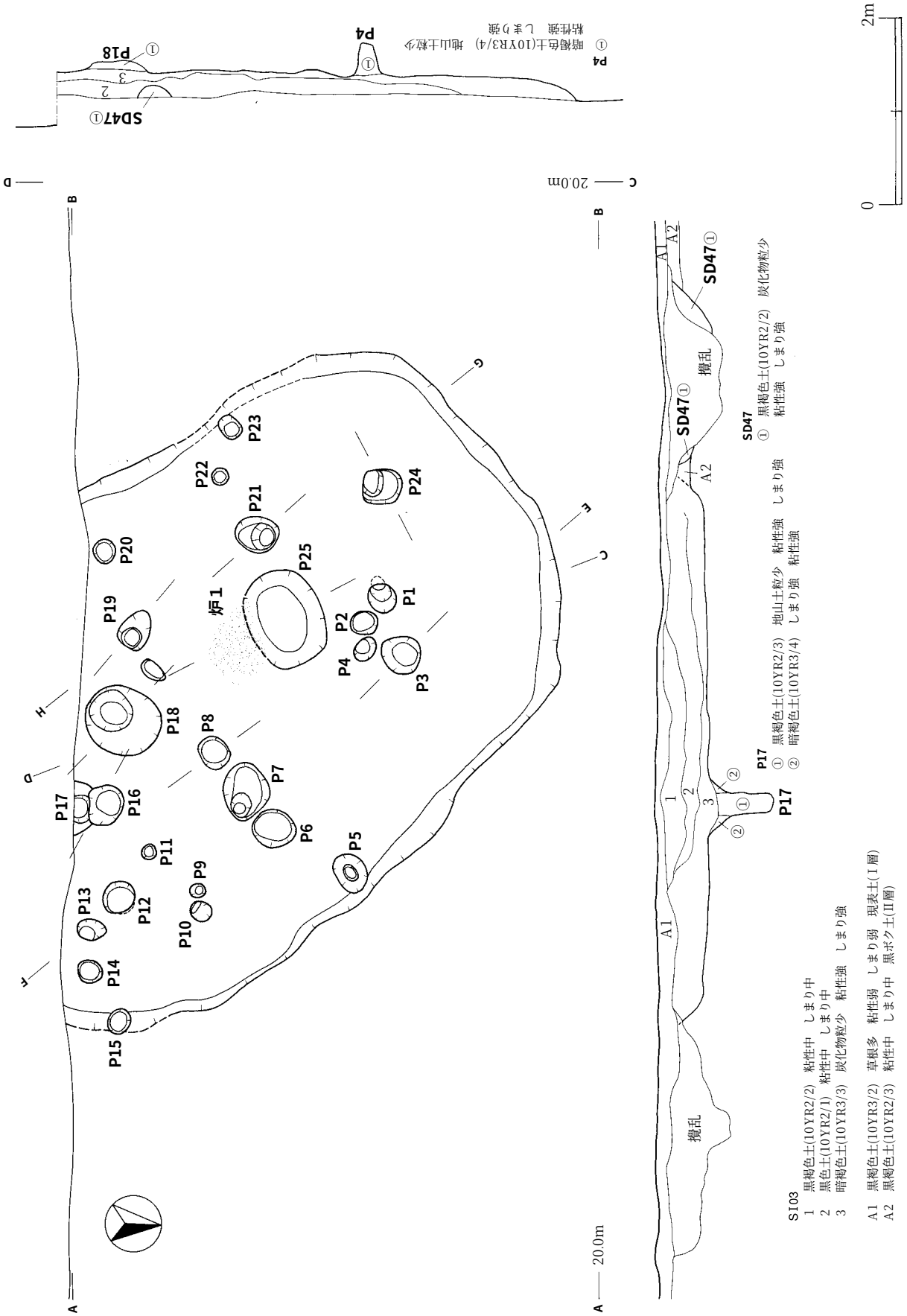
註10大和久文献

青森市教育委員会　『野木和遺跡調査報告書』　青森市の埋蔵文化財　５　1971(昭和46)年

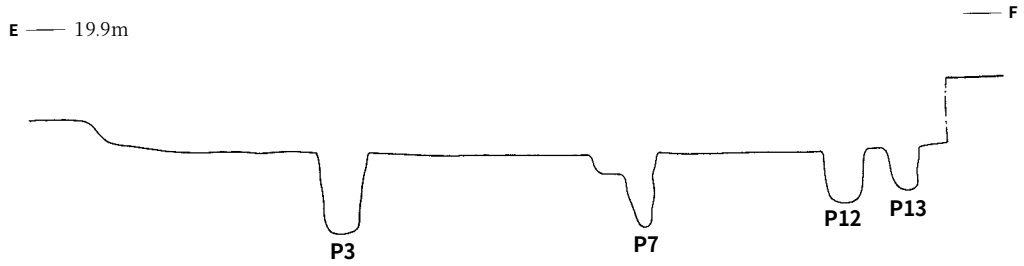
江坂輝彌編　『石神遺跡』　1970(昭和45)年　ニュー・サイエンス社
長谷部言人　「円筒土器文化」　『人類学雑誌』　第42巻第１号　1927(昭和２)年
山内清男　「関東北に於ける繊維土器」　『史前学雑誌』　第１巻第２号　1929(昭和４)年
山内清男　「縄紋土器型式の細別と大別」　『先史考古学』　第１巻第１号　1937(昭和12)年

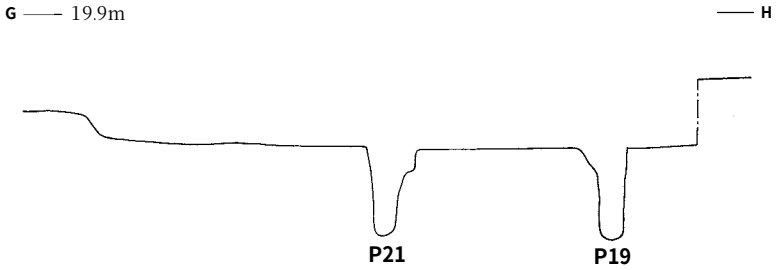
註13　例えば、縄文時代前期中葉から後葉を主体とする大館市池内遺跡では、台地上面での遺構外出土石器には、石鏃14点、石槍72点、石錐８点、石匙137点、石箆72点、半円状扁平打製石器139点、磨石類101点、石皿20点、台石３点、石錘43点などがある。石鏃の占める割合が低いものの、石槍が一定量出土している点、半円状扁平打製石器・磨石類がまとまって出土しているのに対し、石皿・台石が相対的に少ない点などに本遺跡との類似性を認めることができよう。
秋田県教育委員会　『池内遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』　秋田県文化財調査報告書第282集　1999(平成11)年

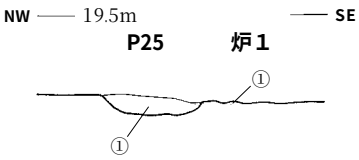
註14　ＳＫ37土坑、ＳＤ10・11・47溝跡も古代に属する可能性があるが、断定できない。

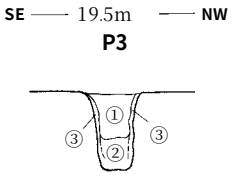


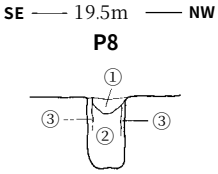
第５図　ＳＩ03竪穴住居跡（１）

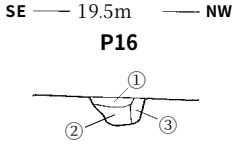












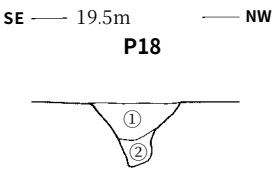
P25
① 黒褐色土(10YR3/2)　焼土粒少
地山土粒少　粘性強　しまり強

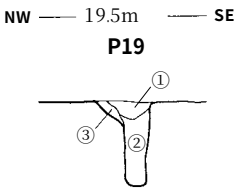
炉1
① 赤褐色土(5YR4/8)　粘性弱
しまり強　焼土化層

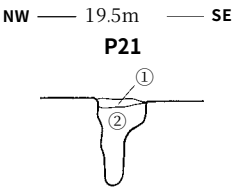
P3
① 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少
地山土粒少　粘性強　しまり強
柱痕跡
② 暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒少
地山土粒中　粘性強　しまり強
柱痕跡
③ 暗褐色土(10YR3/4)　地山土粒多
粘性強　しまり強　根固め

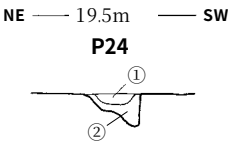
P8
① 暗褐色土(10YR3/4)　地山土粒少
粘性強　しまり強　柱痕跡
② 黒褐色土(10YR3/2)　炭化物粒少
地山土粒少　粘性強　しまり強
柱痕跡
③ 褐色土(7.5YR4/4)　粘性強
しまり強　根固め

P16
① 黒褐色土(10YR3/2)　粘性強
しまり強　柱痕跡
② 黒褐色土(10YR2/3)　炭化物粒中
地山土粒多　粘性強　しまり強
柱痕跡
③ 黒褐色土(10YR3/2)　炭化物粒少
地山土粒多　粘性強　しまり強
根固め









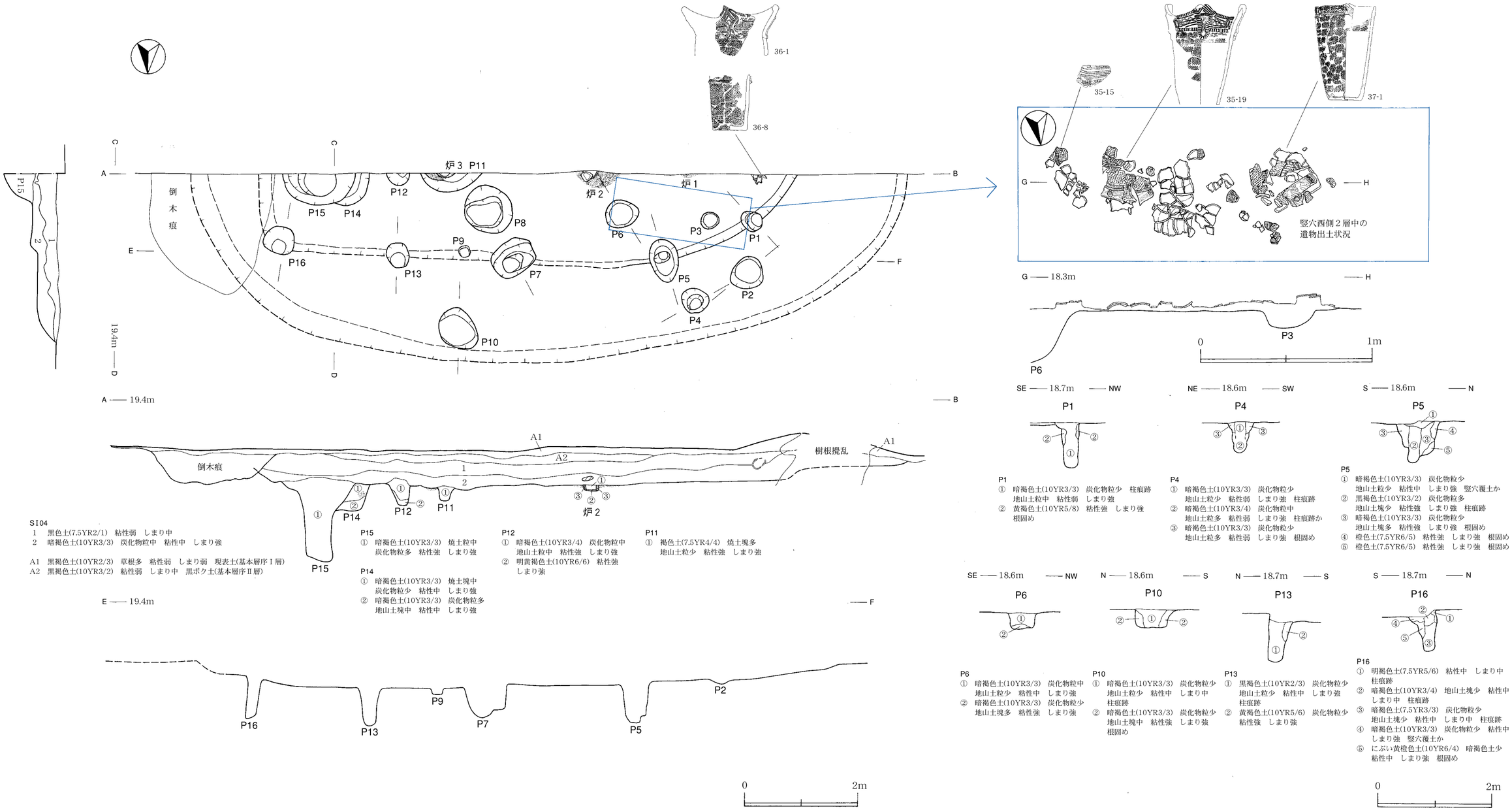
P18
① 黒褐色土(10YR2/3)　暗褐色土多
地山土粒多　粘性強　しまり強
② 褐色土(10YR4/4)　炭化物粒少
地山土粒多　粘性強　しまり強

P19
① 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少
粘性強　しまり強　竪穴覆土か
② 暗褐色土(10YR3/4)　地山土粒多
粘性強　しまり強　柱痕跡
③ 褐色土(10YR4/4)　地山土粒多
粘性強　しまり強　根固め

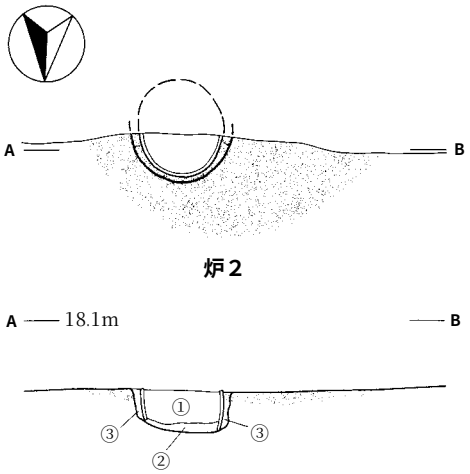
P21
① 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少
粘性強　しまり強　竪穴覆土か
② 黒褐色土(10YR3/2)　炭化物粒少
地山土粒少　粘性強　しまり強

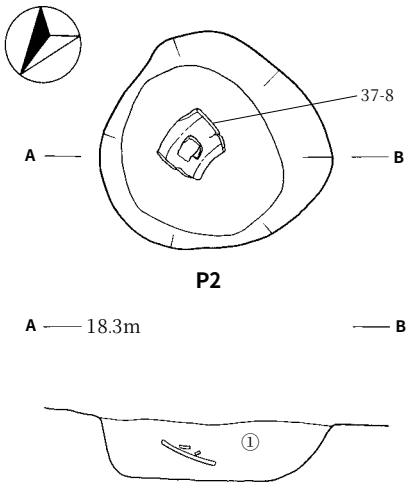
P24
① 褐色土(10YR4/4)　炭化物粒少
地山土粒少　粘性弱　しまり弱
② 褐色土(10YR4/6)　粘性強
しまり強

第６図　ＳＩ03竪穴住居跡（２）



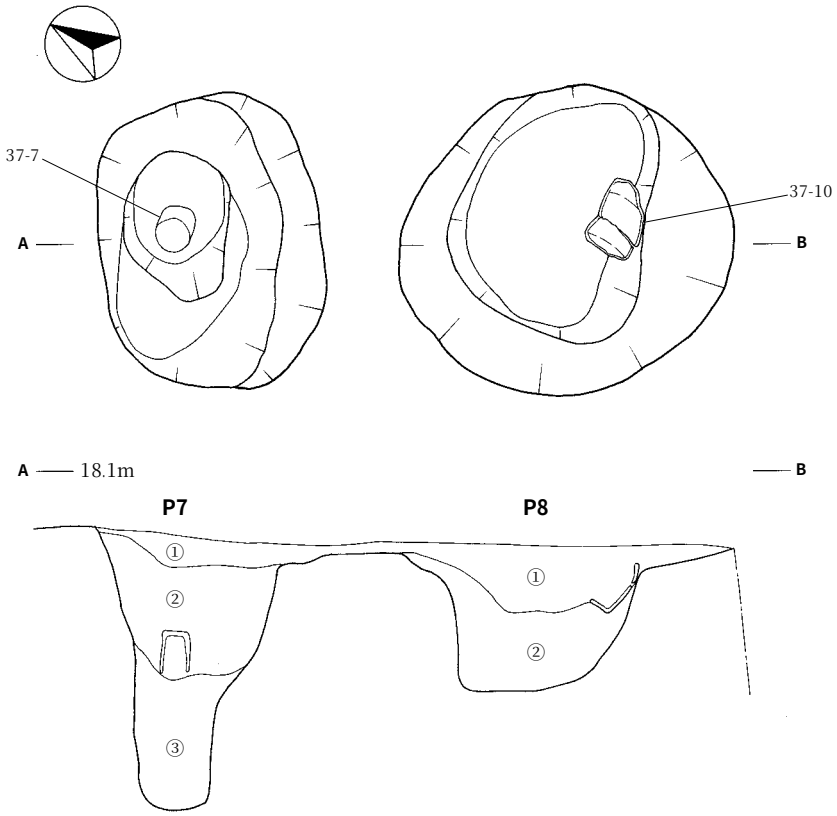
第７図　ＳＩ04竪穴住居跡（１）





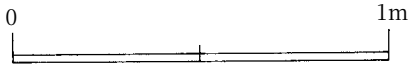
炉2
① 暗赤褐色土(2.5YR3/2) 焼土粒多 炭化物粒多 粘性強 しまり強
② 黒色土(5YR1.7/1) 粘性中 しまり弱 炭化物層
③ 褐色土(7.5YR4/4) 焼土塊多 炭化物粒多 粘性強 しまり強

P2
① 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物粒少 地山土塊中 粘性弱 しまり強

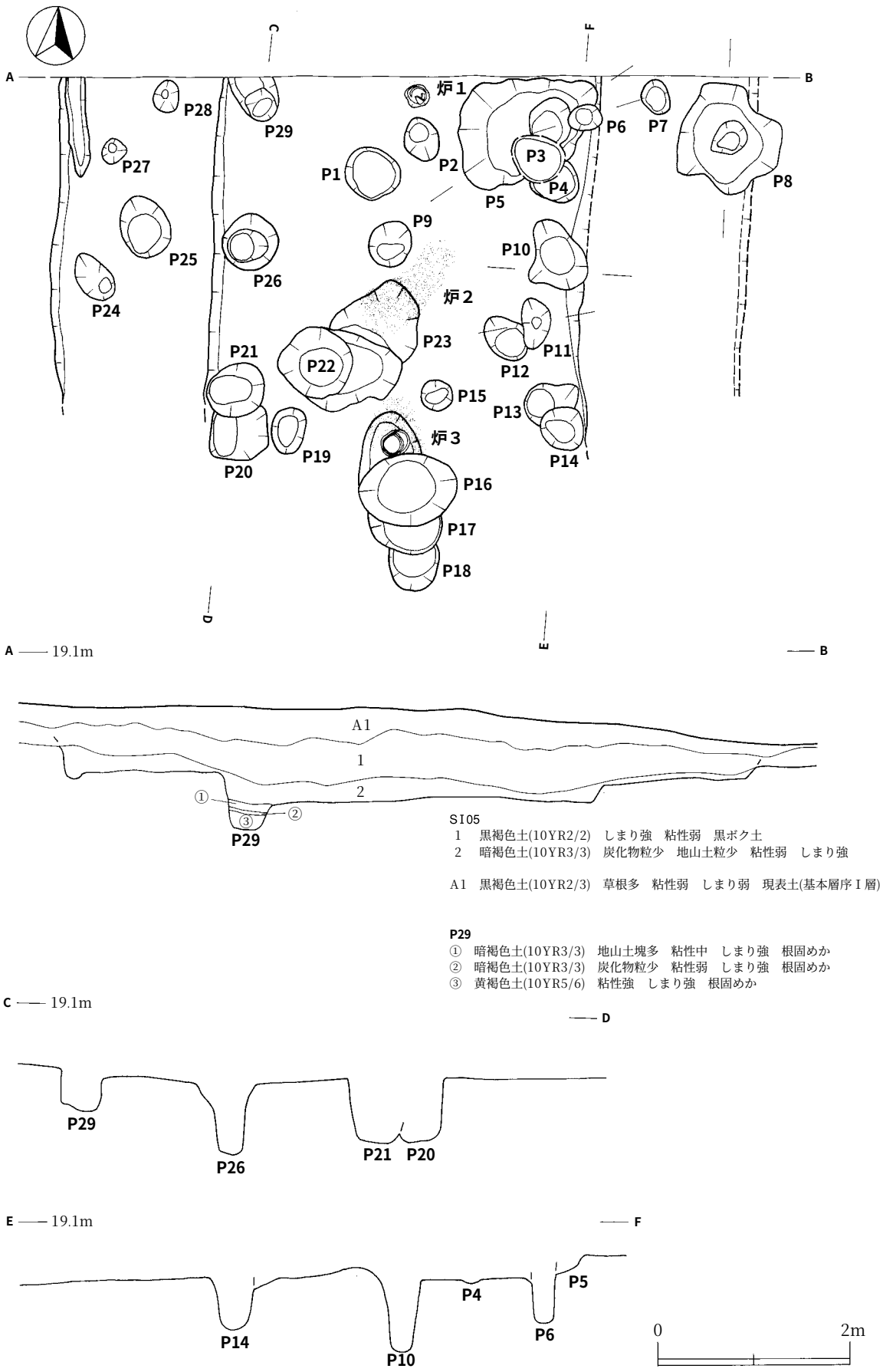


P7
① 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物粒少 粘性強 しまり強
② 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物粒少 地山土粒中 粘性中 しまり強
③ 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物粒多 地山土粒多 粘性強 しまり強

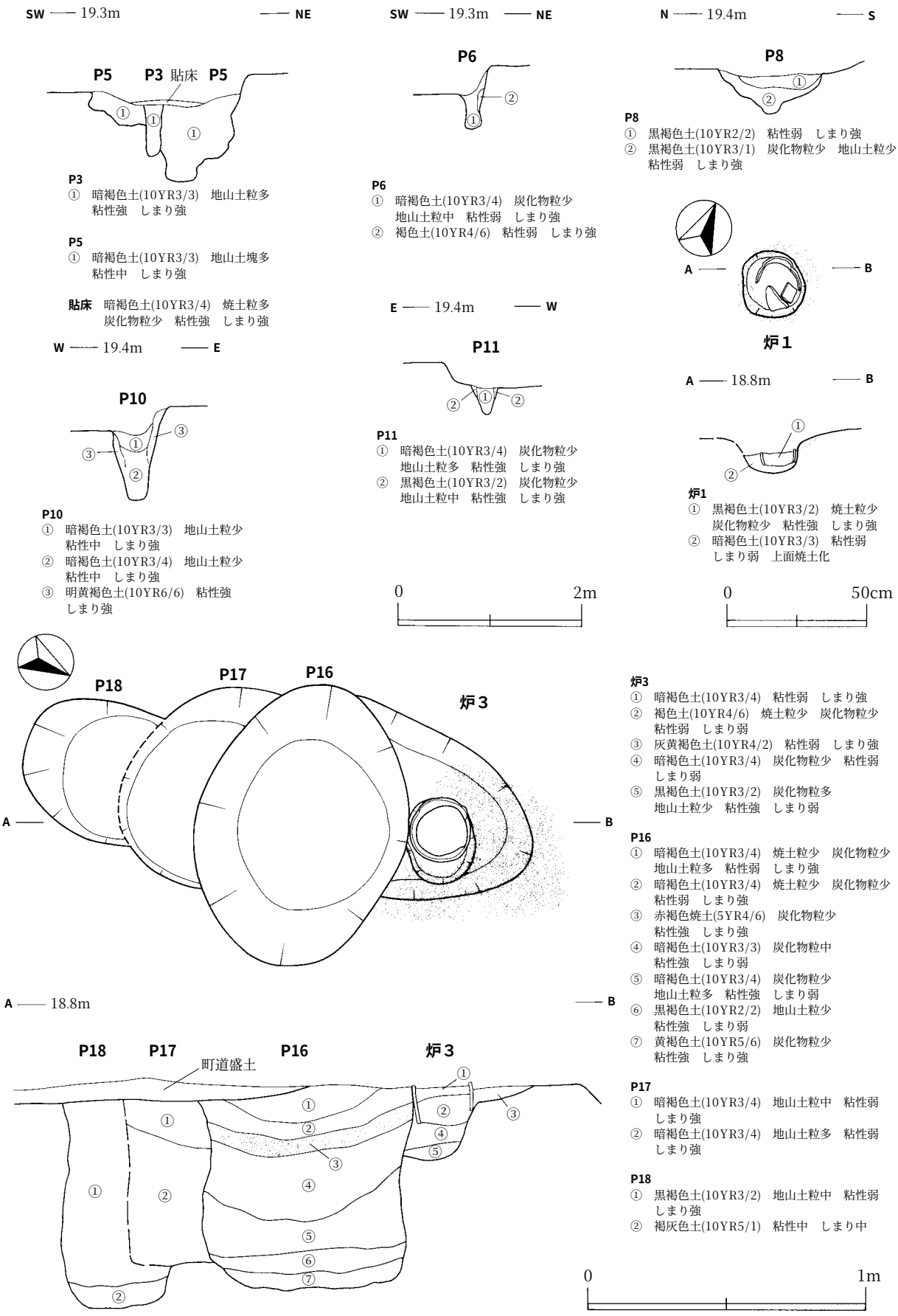
P8
① 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物粒少 粘性強 しまり強
② 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物粒少 地山土粒中 粘性強 しまり強



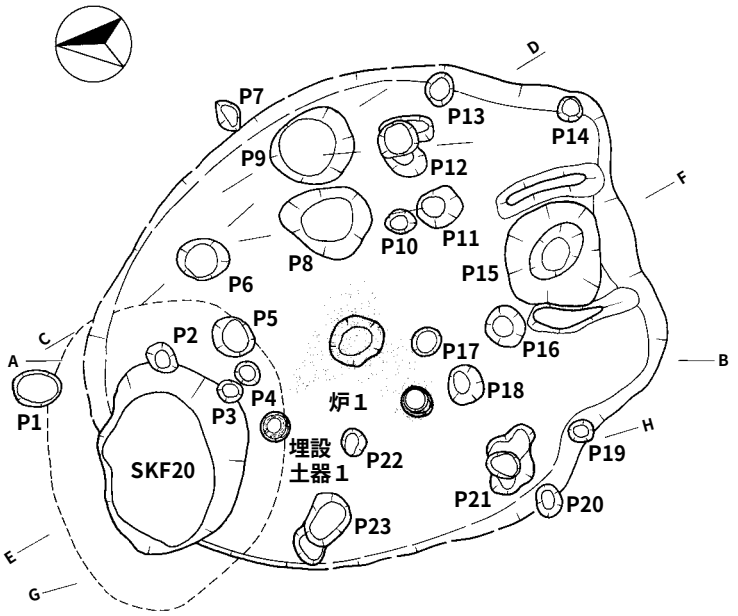
第８図　ＳＩ04竪穴住居跡（２）

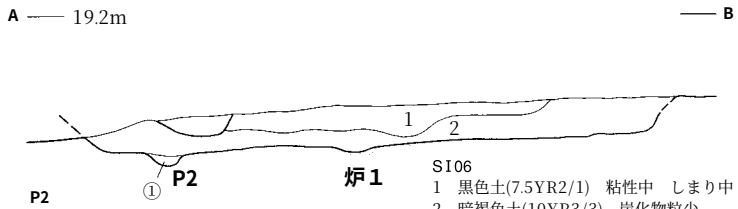


第９図　ＳＩ05竪穴住居跡（１）



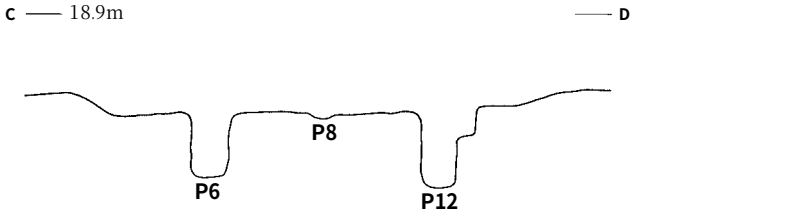
第10図　ＳＩ05竪穴住居跡（２）

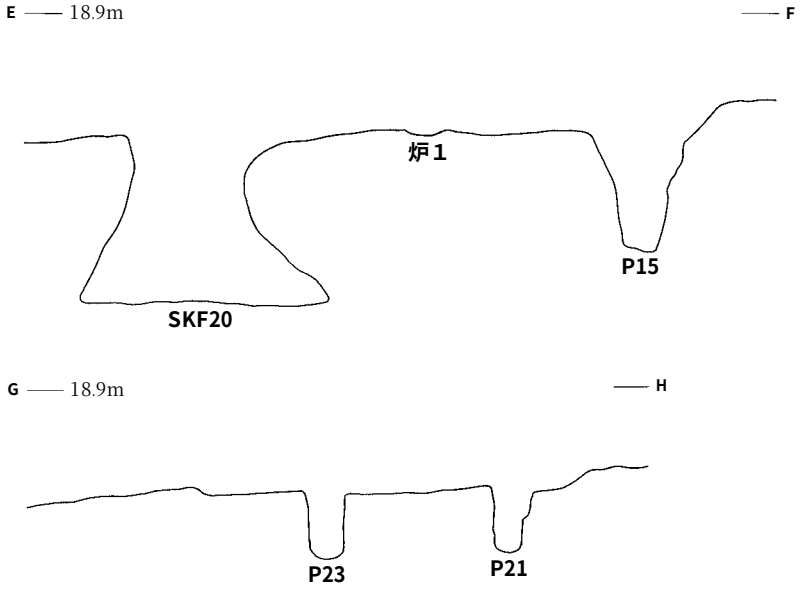


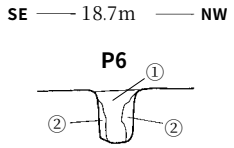


P2
① 暗褐色土(10YR3/4)　地山土粒少
粘性中　しまり中

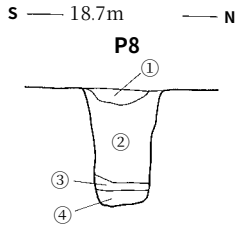
SI06
1　黒色土(7.5YR2/1)　粘性中　しまり中
2　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少
粘性中　しまり強



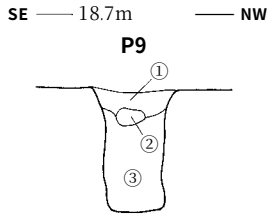




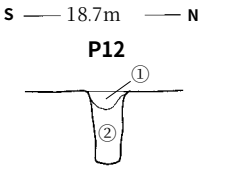
P6
① 褐色土(10YR4/4)　炭化物粒少　地山土粒少
粘性中　しまり中　柱痕跡
② 黄褐色土(10YR5/6)　炭化物粒少　粘性中
しまり中　根固め



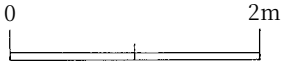
P8
① 暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒少　粘性弱
しまり中　竪穴覆土2層
② 黄褐色土(10YR5/6)　炭化物粒少　粘性中
しまり中
③ 褐色土(10YR4/4)　粘性強　しまり中
④ にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性中　しまり強



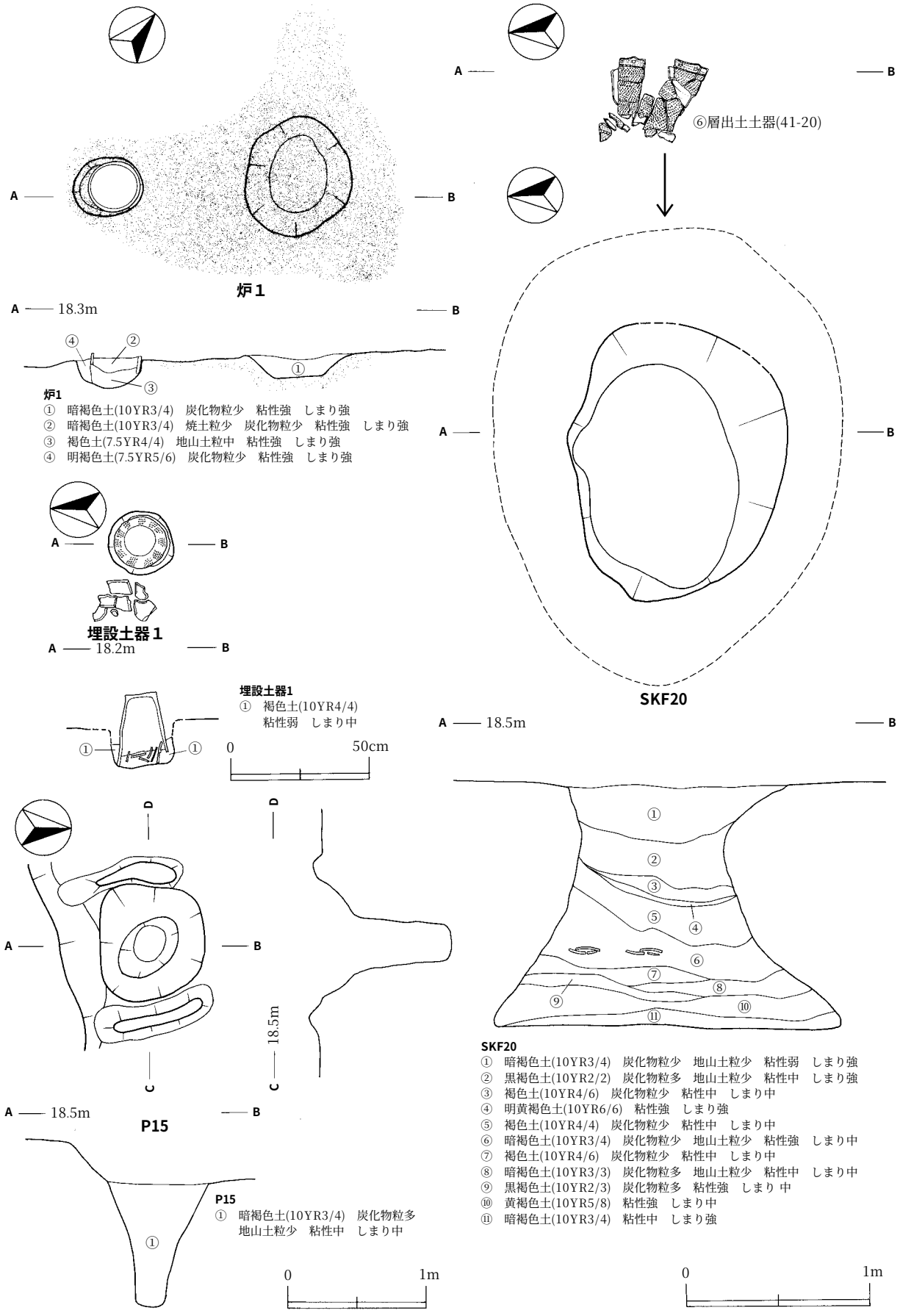
P9
① 褐色土(10YR4/4)　炭化物粒少　粘性強
しまり強
② 明黄褐色土(10YR6/6)　粘性中　しまり中
③ 褐色土(10YR4/6)　炭化物粒少　粘性中
しまり中



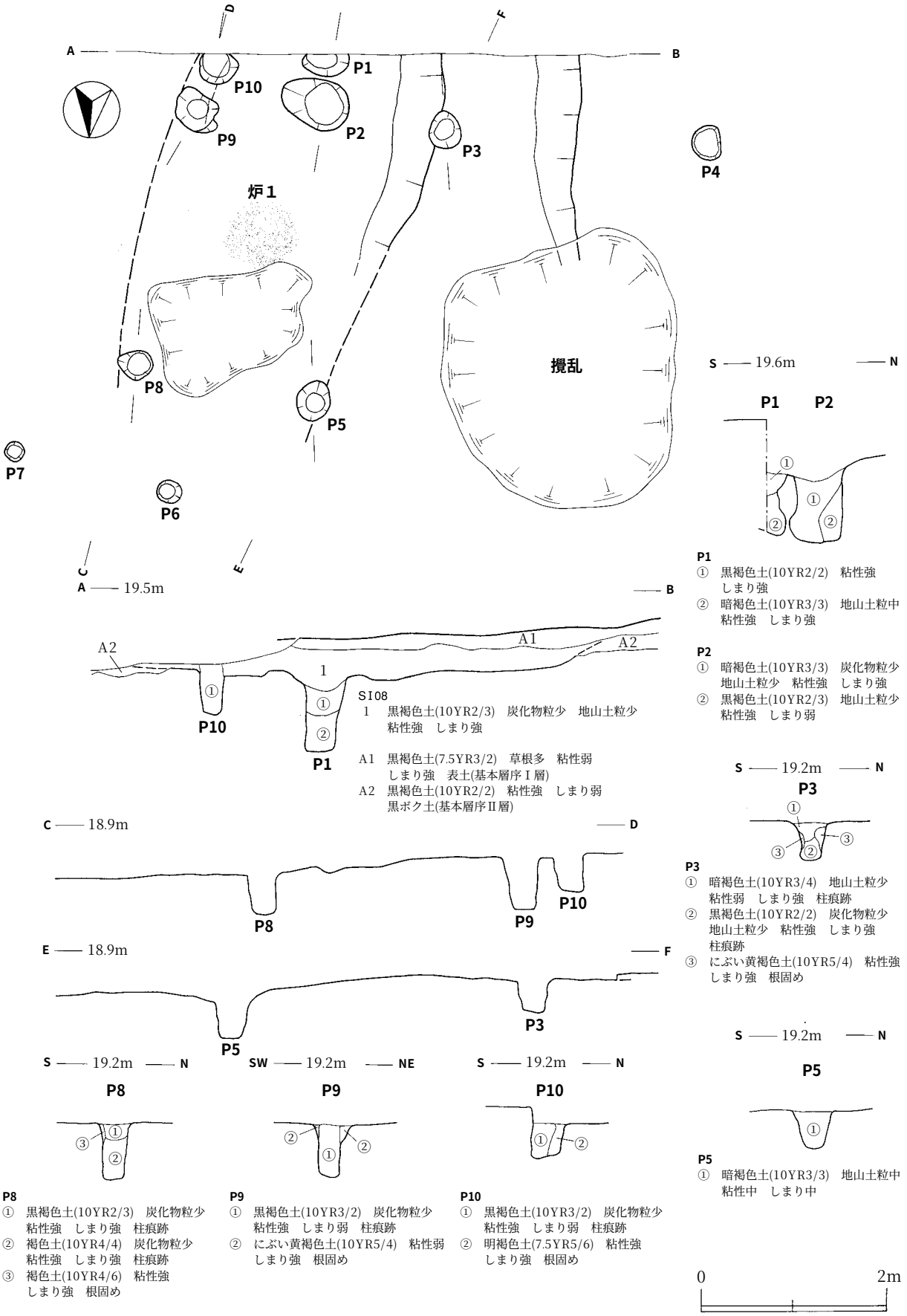
P12
① 暗褐色土(10YR3/4)　粘性弱　しまり中
② 褐色土(10YR4/4)　粘性強　しまり中



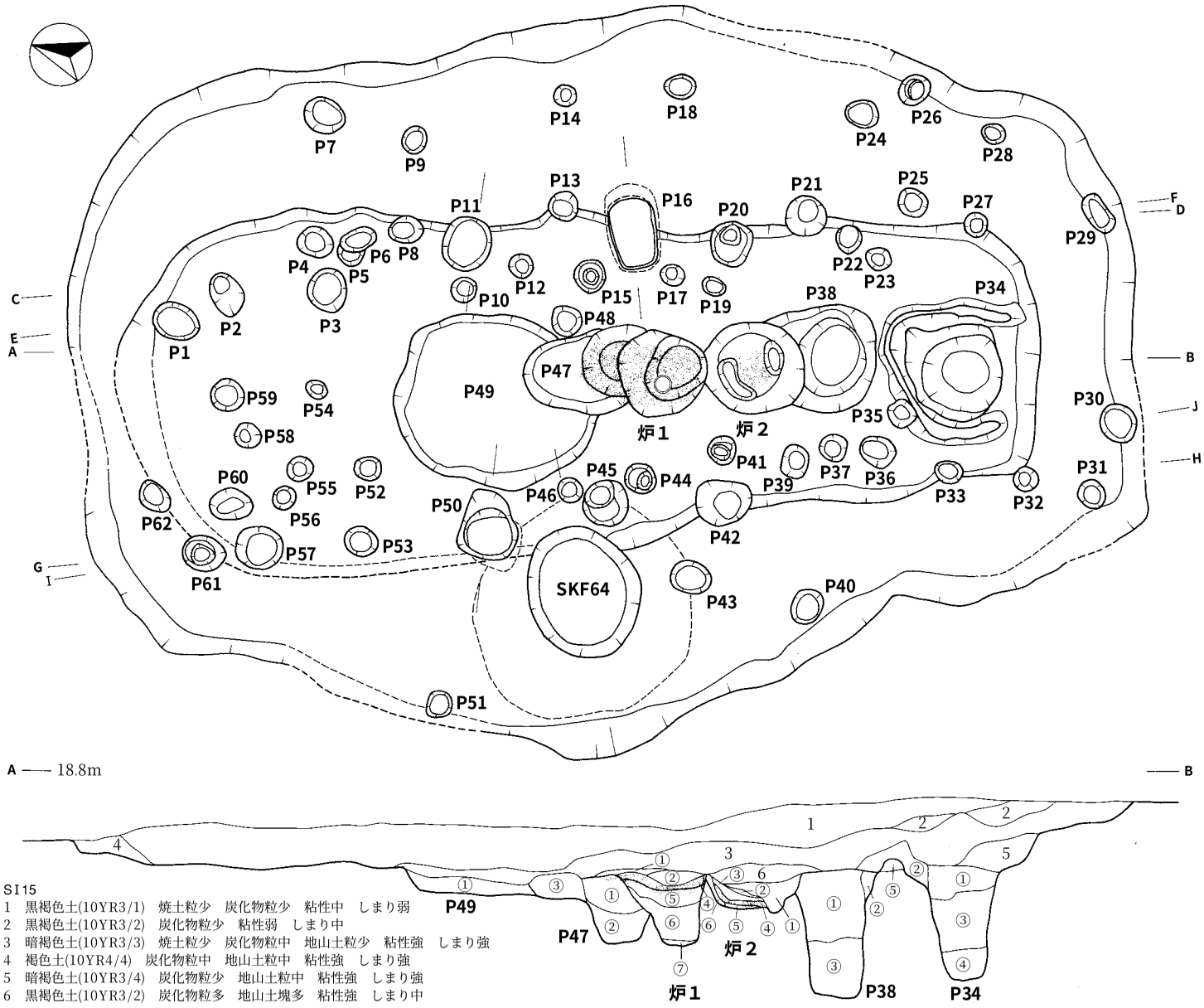
第11図　ＳＩ06竪穴住居跡（１）



第12図　ＳＩ06竪穴住居跡（２）



第13図　ＳＩ08竪穴住居跡



P49
① 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物粒中
地山土塊少 粘性強 しまり強

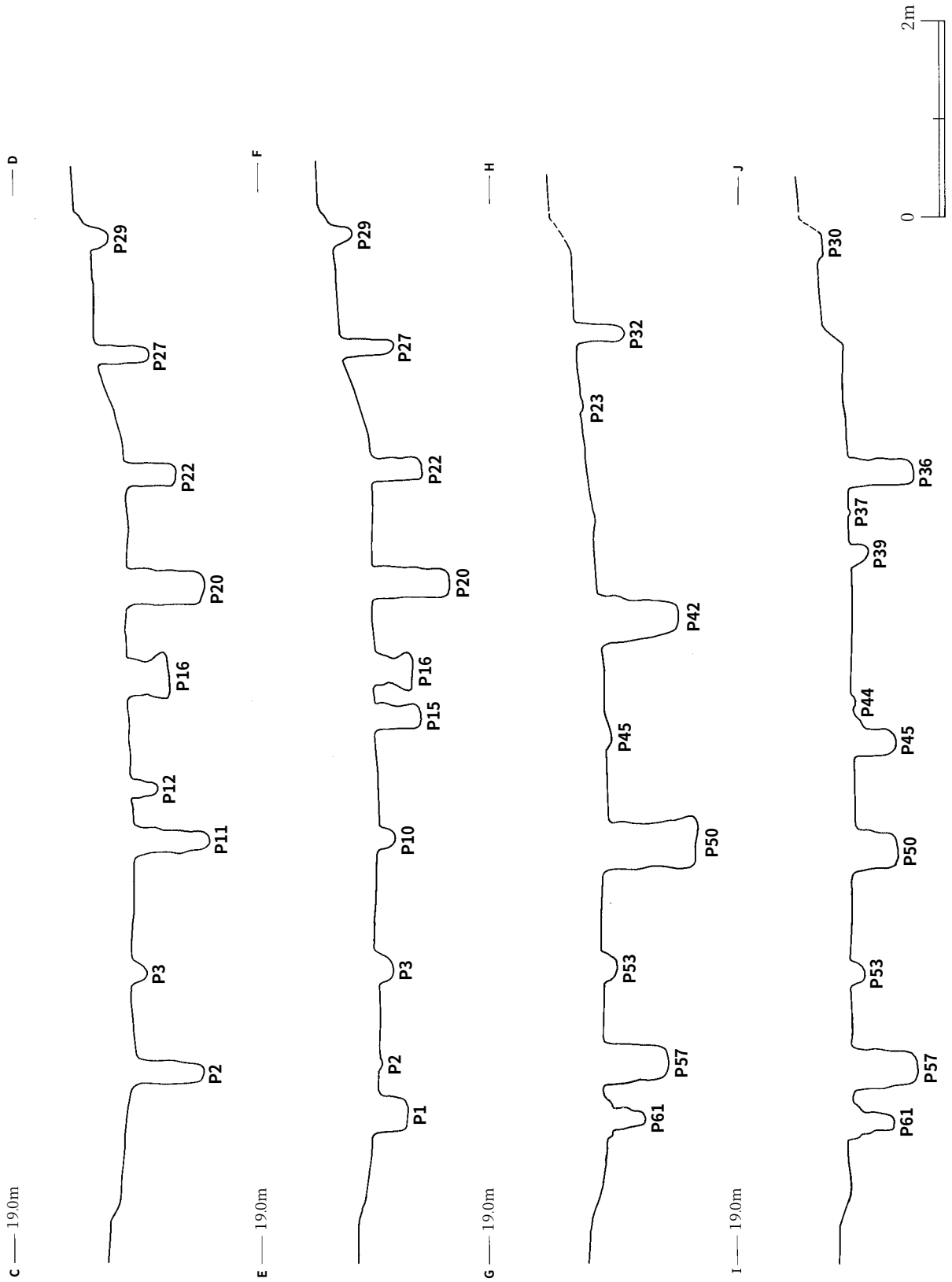
P47
① にぶい黄褐色土(10YR4/3) 炭化物粒中
地山土塊中 粘性強 しまり強
上位焼土化
② 褐色土(10YR4/4) 炭化物粒少
地山土塊多 粘性強 しまり強
③ にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粘性強
しまり強 地山土塊

炉2
① 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒少
炭化物粒多 地山土塊少 粘性中
しまり強
② 褐色土(10YR4/4) 炭化物粒中 粘性強
しまり強
③ 赤褐色土(2.5YR4/6) 粘性弱 しまり強
④ 赤褐色土(5YR4/6) 粘性弱 しまり強
焼土
⑤ 黒色土(10YR2/1) 炭化物粒多 粘性弱
しまり弱
⑥ 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒中
地山土粒多 粘性強 しまり強

P38
① 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒少
炭化物粒多 地山土塊中 粘性強
しまり強
② 暗褐色土(10YR3/4) 地山土塊多
粘性強 しまり強
③ 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物粒中
地山土塊少 粘性強 しまり強

P34
① 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物粒中
地山土塊多 粘性強 しまり強
② 褐色土(10YR4/4) 炭化物粒少
地山土塊多 粘性強 しまり強
③ 暗褐色土(10YR3/4) 炭化物粒中
地山土塊中 粘性強 しまり強
④ にぶい黄褐色土(10YR4/3) 炭化物粒少
地山土塊中 粘性強 しまり強
⑤ 褐色土(10YR4/4) 暗褐色土塊少
粘性中 しまり中

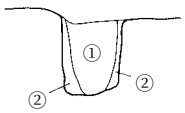
第14図 SI15竪穴住居跡(1)



第15図　ＳＩ15竪穴住居跡（２）

E ── 18.6m ── W

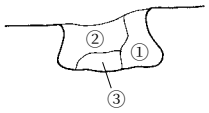
P11



P11
① 暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒中
粘性強　しまり強
② にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山土塊多
粘性強　しまり強

SW ── 18.6m ── NE

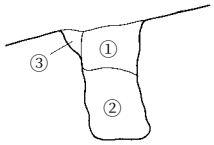
P16



P16
① にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物粒少
地山土塊中　粘性強　しまり強
② 暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒少　地山土粒少
粘性強　しまり強
③ 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少　地山土粒少
粘性強　しまり強

E ── 18.6m ── W

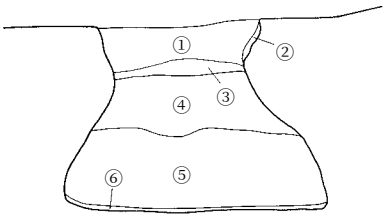
P50



P50
① 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少
地山土粒少　粘性強　しまり強
② 暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒少
地山土粒多　粘性中　しまり中
③ にぶい黄褐色土(10YR4/3)
地山土塊多　粘性強　しまり強

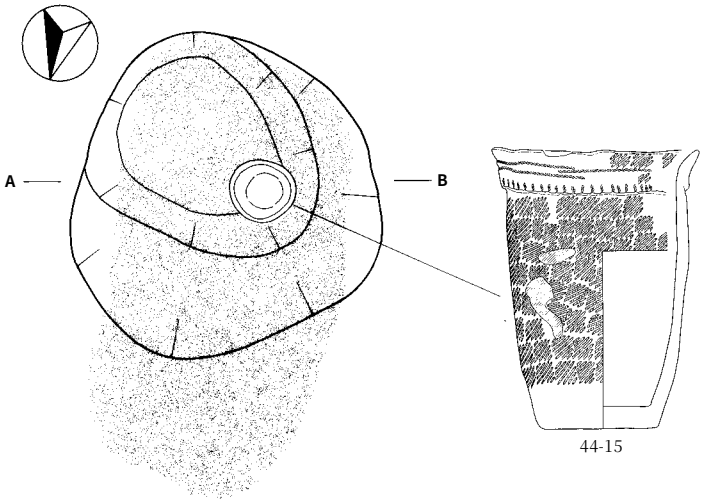
E ── 18.6m ── W

SKF64



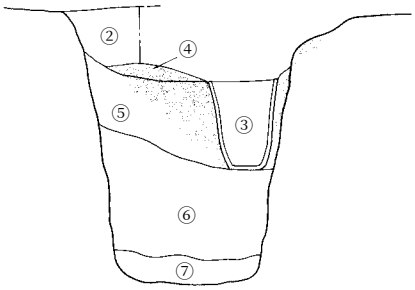
SKF64
① 黒褐色土(10YR3/2)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり強
② にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山土塊多　粘性強　しまり強
③ 褐色土(10YR4/4)　地山土塊多　粘性強　しまり強
④ 暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒中　地山土塊中　粘性強　しまり強
⑤ 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒中地山土塊少
⑥ にぶい黄褐色土(10YR4/3)　炭化物粒少　地山土粒多　粘性中　しまり中

0　2m



炉1

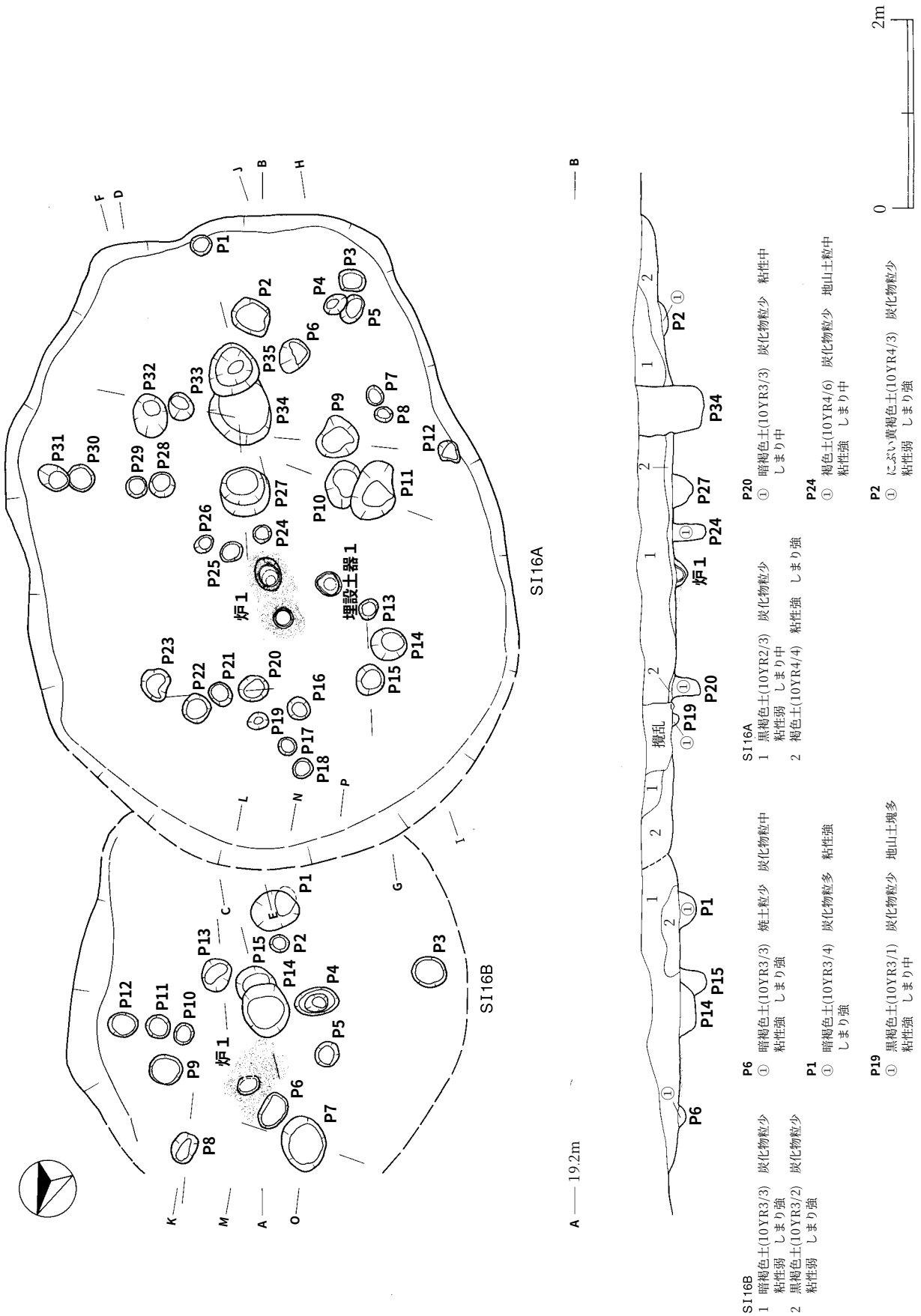
A ── 18.0m ── B



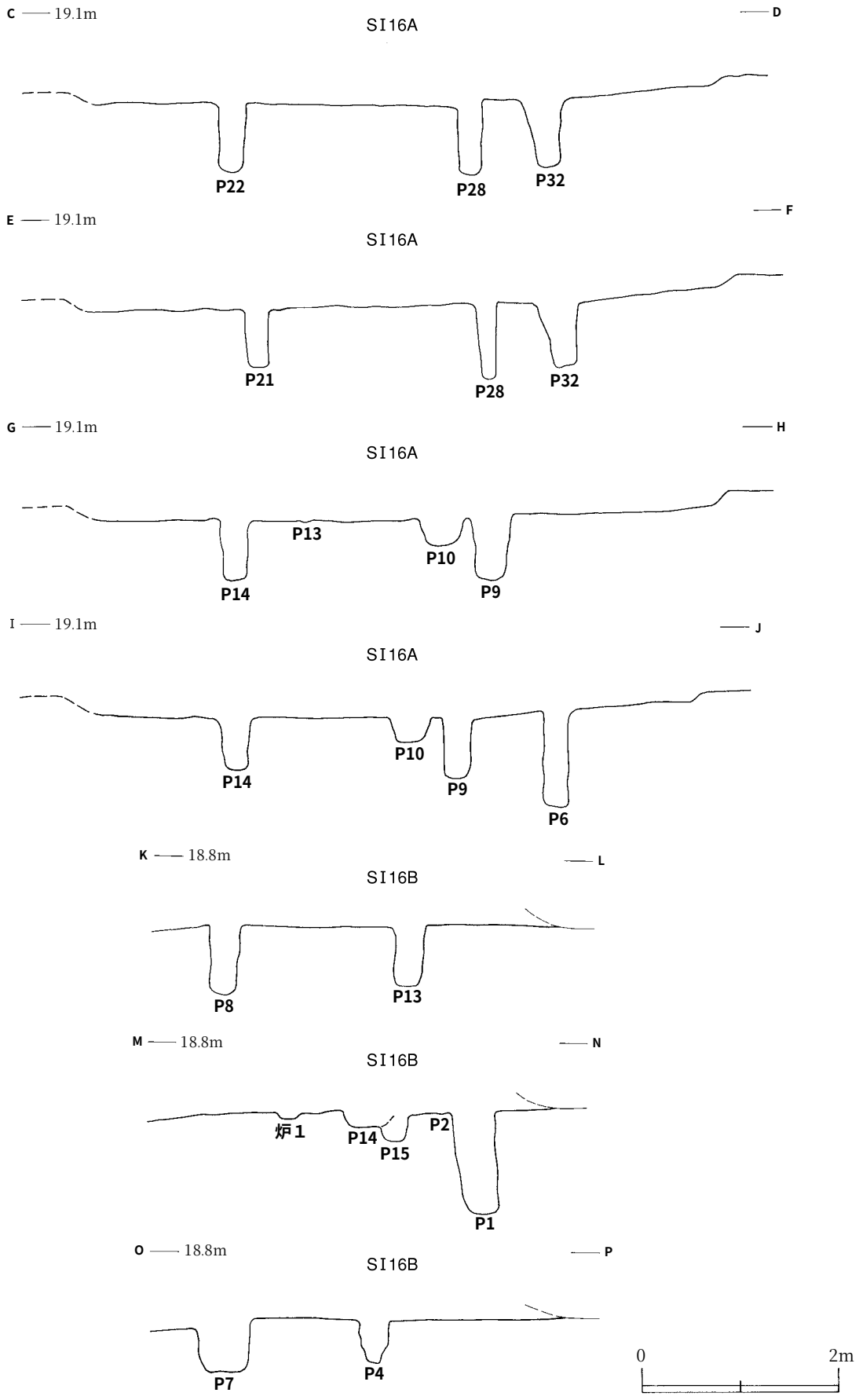
炉1
① 暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒少　地山土粒多　粘性強　しまり強
② 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒中　地山土粒多　粘性強　しまり強
③ 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少　地山土粒中　粘性強　しまり中
④ にぶい赤褐色土(5YR4/4)　炭化物粒少　粘性中　しまり強　焼土
⑤ にぶい黄褐色砂(10YR4/3)　炭化物粒少　粘性弱　しまり強
⑥ 暗褐色砂(10YR3/4)　炭化物粒中　暗褐色土中　粘性弱　しまり強
⑦ 黄灰色砂(2.5Y4/1)　炭化物粒少　地山土塊多　粘性弱　しまり強

0　1m

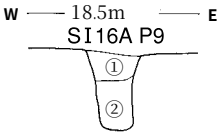
第16図　ＳＩ15竪穴住居跡（３）



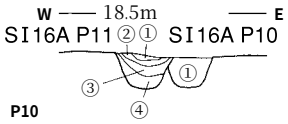
第17図　ＳＩ16Ａ・ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡（１）



第18図　ＳＩ16Ａ・ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡（２）

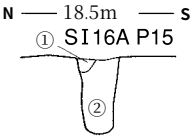


P9
① 暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒中　地山土塊少　粘性中　しまり強
② 明黄褐色土(10YR6/8)　炭化物粒少　粘性強　しまり強

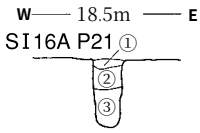


P10
① 黄褐色土(10YR5/6)　粘性強　しまり強

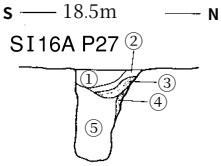
P11
① 褐色土(10YR4/4)　粘性中　しまり強
② 黄褐色土(10YR5/8)　粘性中　しまり強
③ 暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒多　粘性強　しまり強
④ 黄褐色土(10YR5/6)　粘性強　しまり強



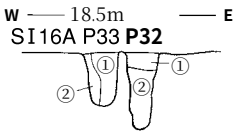
P15
① 黒褐色土(10YR2/3)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり弱
② 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少　地山土塊多　粘性弱　しまり中



P21
① 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒中　粘性強　しまり強
② 明黄褐色土(10YR6/6)　粘性強　しまり強
③ 明黄褐色土(10YR7/6)　粘性強　しまり強

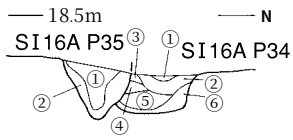


P27
① 褐色土(7.5YR4/4)　炭化物粒中　粘性強　しまり強
② 黄褐色土(10YR5/6)　粘性強　しまり強
③ 赤褐色土(2.5YR4/6)　焼土粒多　炭化物粒多　粘性強　しまり強　焼土層
④ 赤褐色土(5YR4/6)　焼土粒多　粘性強　しまり弱　焼土層
⑤ 褐色土(10YR4/6)　炭化物粒少　粘性強　しまり強



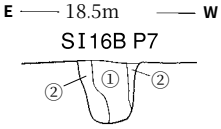
P32
① 褐色土(10YR4/4)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり強
② 褐色土(7.5YR4/4)　焼土粒少　炭化物粒少　粘性強　しまり弱

P33
① 暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒多　地山土粒多　粘性中　しまり強
② にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性強　しまり弱

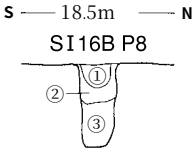


P34
① 黒褐色土(10YR3/2)　炭化物粒少　粘性弱　しまり強
② 黒色土(10YR2/1)　炭化物粒少　粘性中　しまり強
③ 黒褐色土(10YR3/2)　炭化物粒少　粘性弱　しまり強
④ 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり強
⑤ 黒褐色土(10YR3/2)　炭化物粒多　地山土塊少　粘性強　しまり強
⑥ 褐灰色土(10YR5/1)　炭化物粒少　粘性強　しまり強

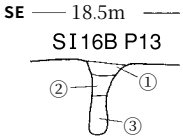
P35
① 褐色土(10YR4/4)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性中　しまり中
② 褐色土(10YR4/4)　炭化物粒中　地山土塊中　粘性中　しまり中



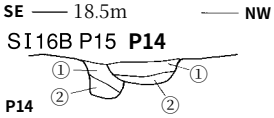
P7
① 褐色土(10YR4/4)　焼土粒少　炭化物粒少　粘性強　しまり強　柱痕跡
② 褐色土(10YR4/6)　炭化物粒少　地山土塊多　粘性強　しまり強　根固め



P8
① 褐色土(10YR4/4)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性強　しまり強
② にぶい黄橙色土(10YR6/6)　炭化物粒少　粘性強　しまり強
③ 明黄褐色土(10YR7/6)　粘性弱　しまり強

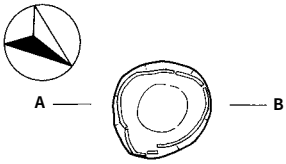


P13
① 暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒中　粘性強　しまり強
② 明黄褐色土(10YR6/6)　炭化物粒少　粘性強　しまり強
③ 褐色土(10YR4/4)　炭化物粒中　粘性強　しまり中



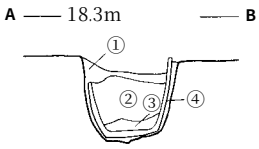
P14
① 褐色土(7.5YR4/4)　焼土粒少　炭化物粒中　地山土粒多　粘性強　しまり強
② 黒色土(10YR2/1)　炭化物粒少　粘性強　しまり強

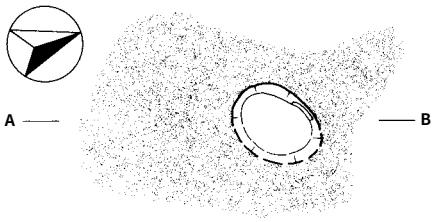
P15
① 明褐色土(7.5YR5/6)　炭化物粒少　粘性強　しまり強
② 褐色土(7.5YR4/4)　炭化物粒中　地山土粒多　粘性中　しまり中



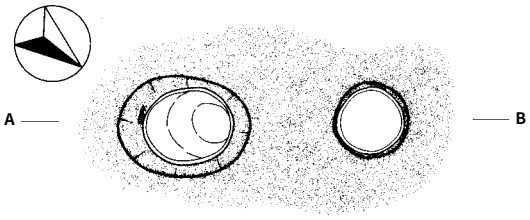
SI16A　埋設土器１

埋設土器1
① 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒多　地山土粒多　粘性強　しまり強
② 明黄褐色土(10YR7/6)　炭化物粒少　粘性強　しまり強
③ 暗褐色土(10YR3/3)　焼土粒中　炭化物粒中　粘性強　しまり弱
④ 暗褐色土(10YR3/3)　粘性強　しまり強



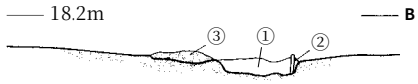


SI16B　炉１

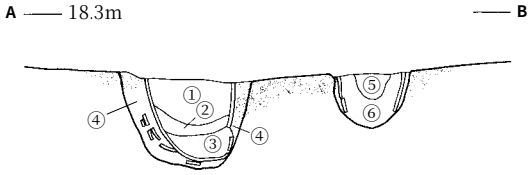


SI16A　炉１

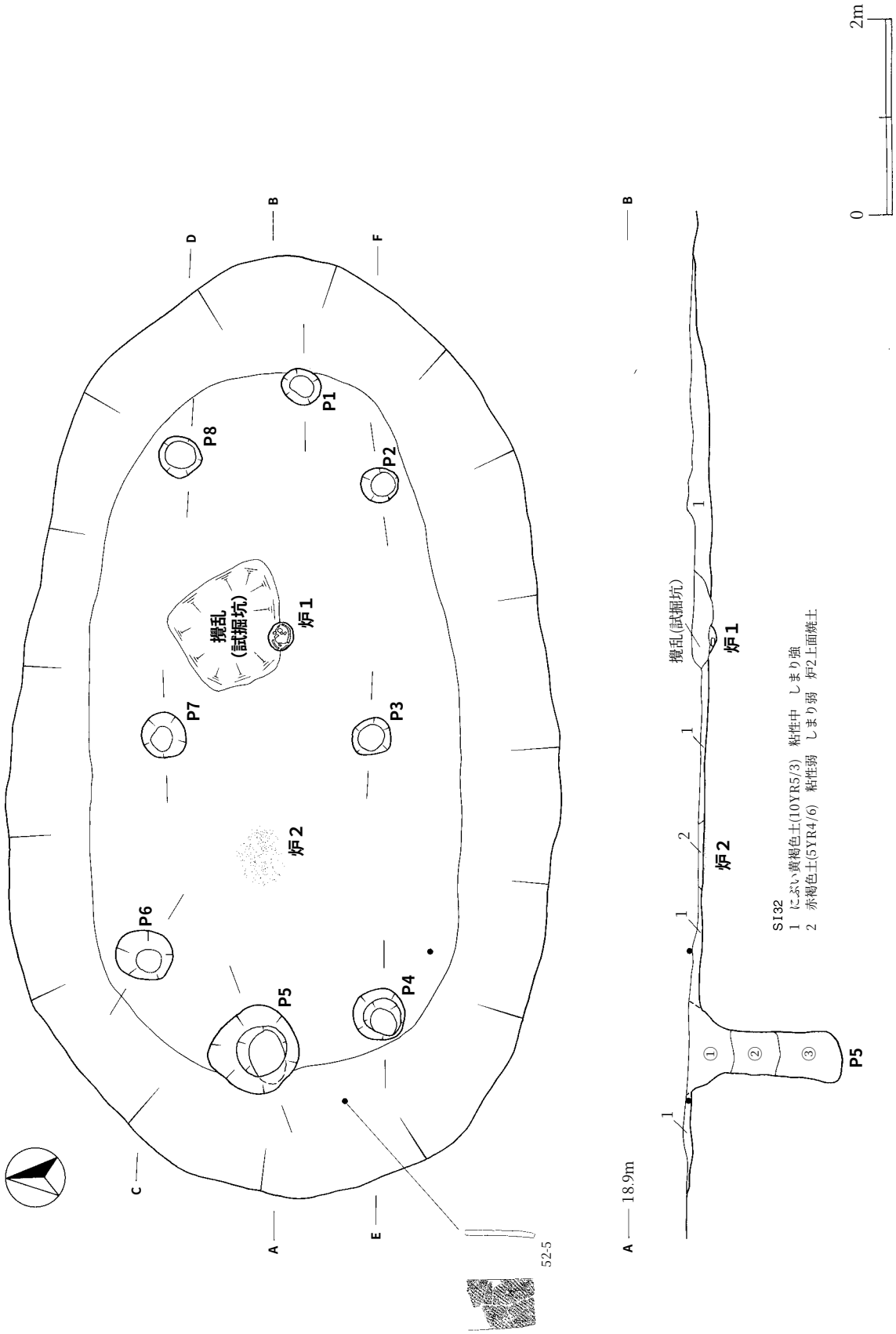
炉1
① 暗褐色土(7.5YR3/4)　焼土粒中　炭化物粒多　粘性強　しまり強
② 黒色土(7.5YR1.7/1)　炭化物粒多　粘性中　しまり弱　炭化物層
③ 褐色土(7.5YR4/4)　焼土粒多　炭化物粒中　粘性中　しまり弱
④ 暗褐色土(10YR3/3)　粘性中　しまり中　上位焼土化
⑤ 暗褐色土(10YR3/3)　焼土粒中　炭化物粒多　粘性強　しまり強
⑥ 黒褐色土(10YR3/2)　焼土粒多　炭化物粒多　粘性強　しまり強



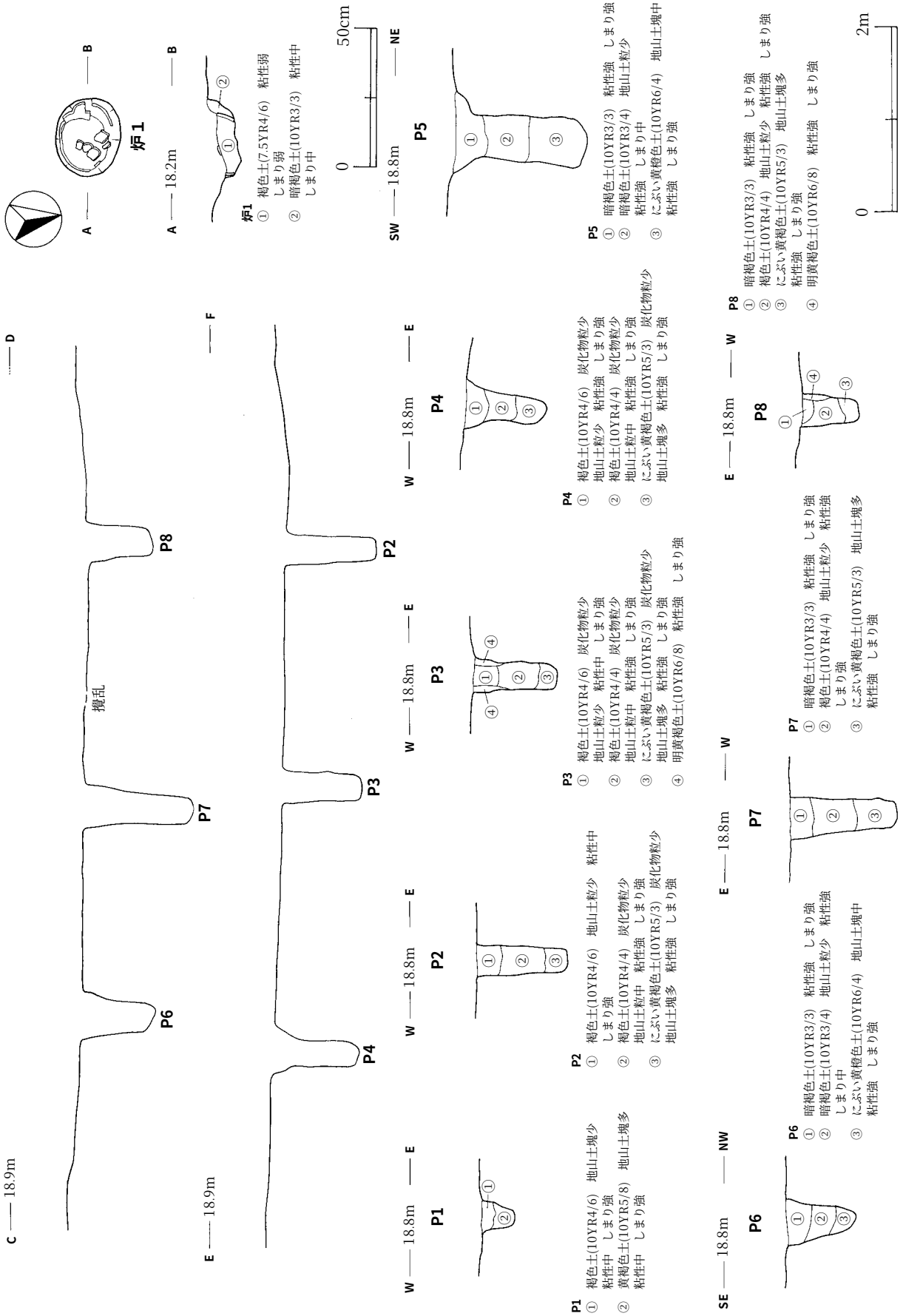
炉1
① 褐色土(7.5YR4/4)　炭化物粒少　粘性中　しまり中
② 暗褐色土(10YR3/3)　粘性中　しまり中
③ 明赤褐色土(2.5YR5/8)　粘性弱　しまり強　焼土塊



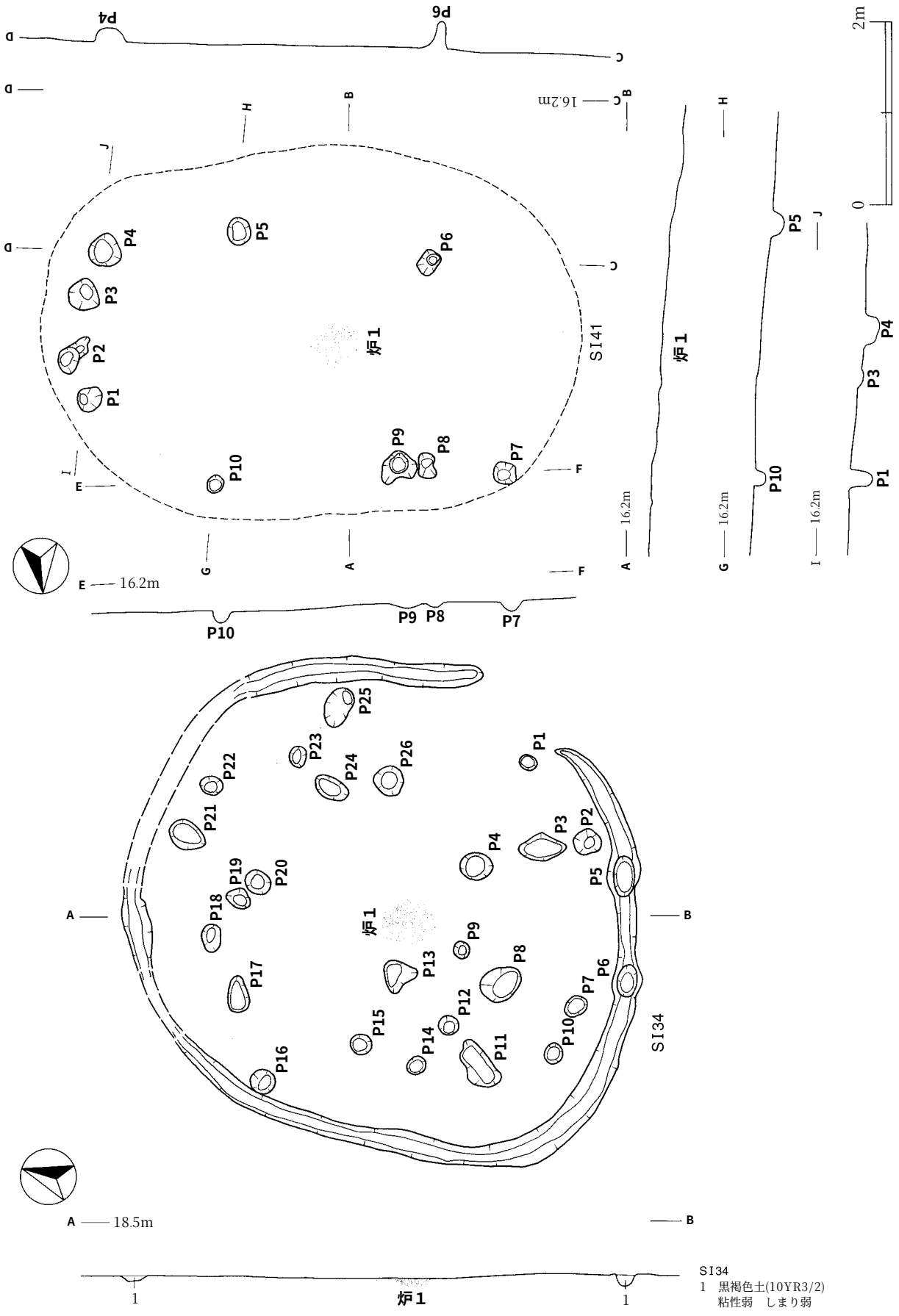
第19図　ＳＩ16Ａ・ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡（３）



第20図　ＳＩ32竪穴住居跡（１）

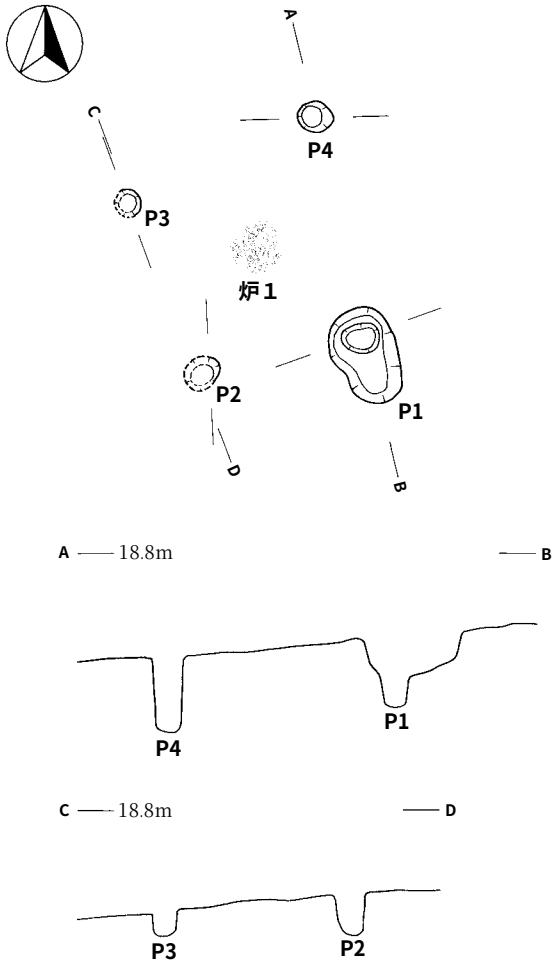


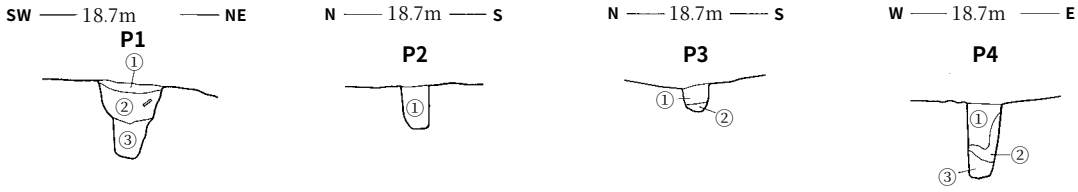
第21図　ＳＩ32竪穴住居跡（２）



SI34
1　黒褐色土(10YR3/2)
　粘性弱　しまり弱

第22図　ＳＩ34・ＳＩ41竪穴住居跡



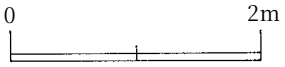


P1
① 褐色土(10YR4/4)　粘性強　しまり強
② 黄褐色土(10YR5/6)　粘性強　しまり強
③ 褐色土(10YR4/6)　粘性強　しまり強

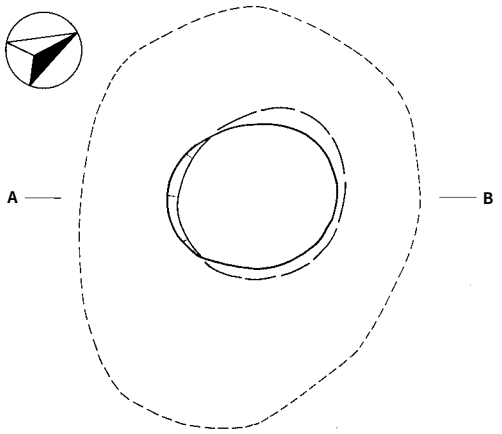
P2
① 暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少　地山土粒中　粘性強　しまり強

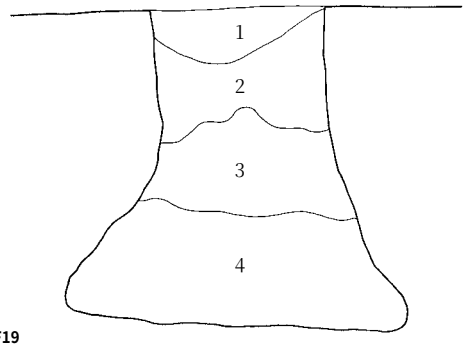
P3
① にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山土粒中　粘性弱　しまり強
② 暗褐色土(10YR3/4)　地山土粒多　粘性強　しまり強

P4
① 褐色土(10YR4/4)　炭化物粒少　地山土粒少　しまり強　粘性強
② 明黄褐色土(10YR6/6)　炭化物粒少　粘性強　しまり強
③ 褐色土(7.5YR4/4)　炭化物粒少　粘性強　しまり強

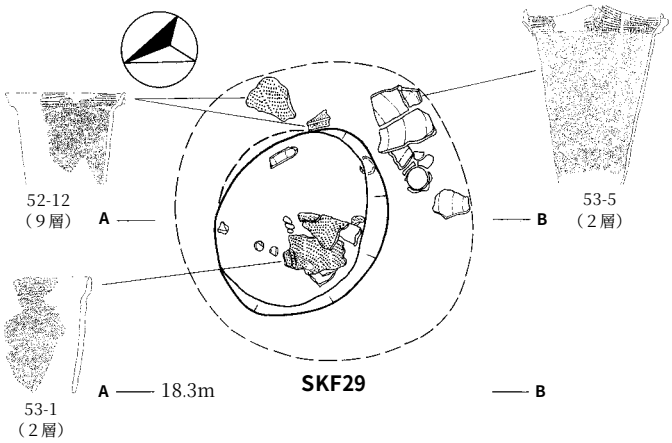


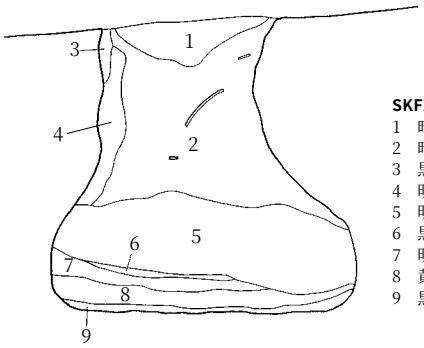
第23図　ＳＩ50竪穴住居跡



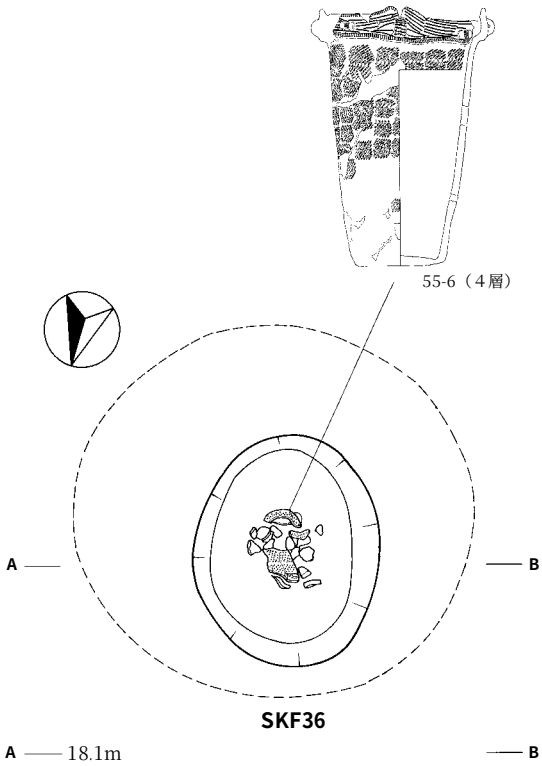


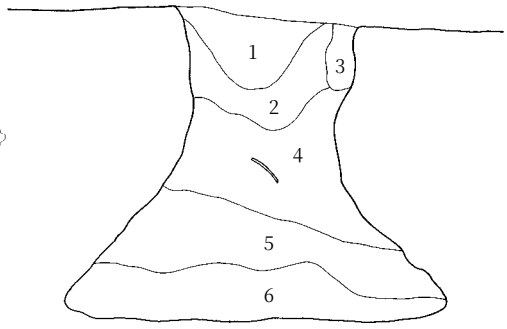
SKF19
1　黒褐色土(10YR2/3)　地山土粒中　粘性中　しまり中
2　黒褐色土(10YR2/3)　炭化物粒少　地山土粒少　粘性中　しまり中
3　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少　薄層状地山土塊少　粘性強　しまり強
4　明黄褐色土(10YR7/6)　地山土塊多　粘性中　しまり中



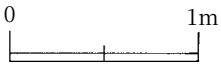


SKF29
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱
2　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒中　粘性弱　しまり中
3　黒褐色土(10YR3/2)　粘性中　しまり強
4　明黄褐色土(10YR6/6)　粘性強　しまり強
5　明黄褐色土(10YR7/6)　粘性強　しまり強
6　黒褐色土(10YR2/2)　粘性強　しまり強
7　明黄褐色土(10YR7/6)　粘性強　しまり強
8　黄褐色土(10YR5/6)　粘性強　しまり中
9　黒褐色土(10YR3/2)　粘性強　しまり強

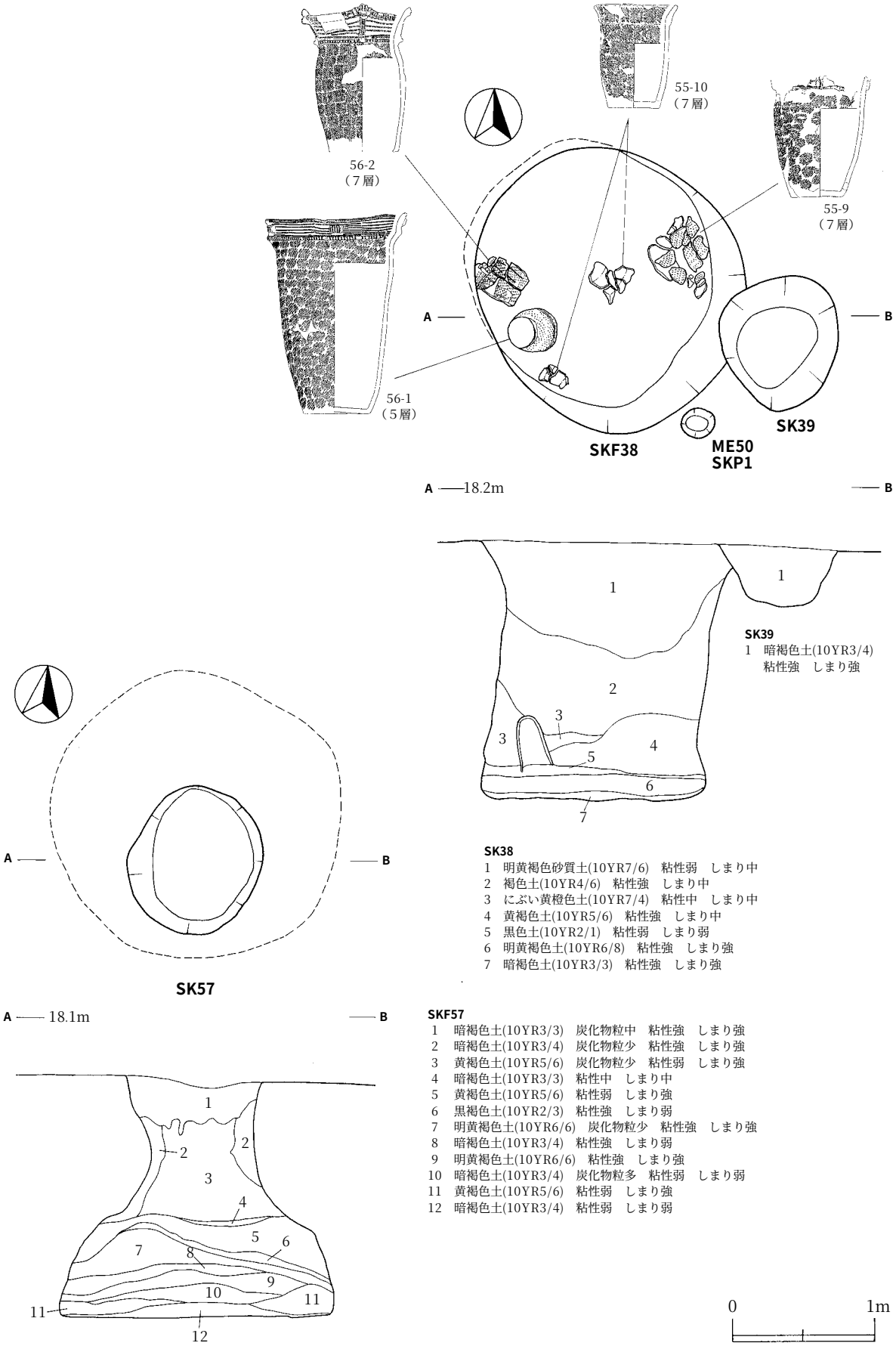




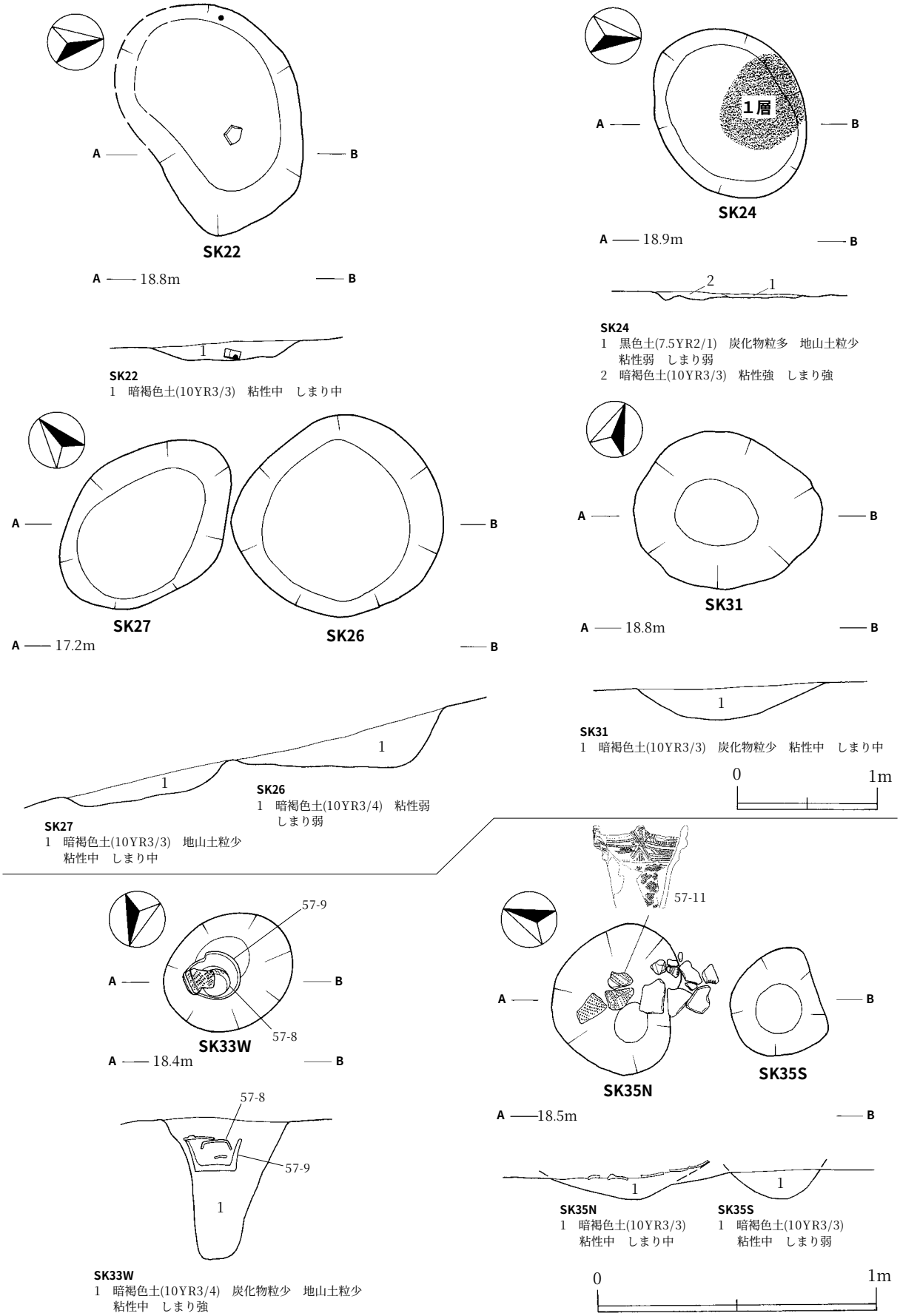
SKF36
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒中　粘性強　しまり強
2　明黄褐色土(10YR6/6)　炭化物粒少　粘性強　しまり強
3　褐色土(10YR4/4)　炭化物粒少　粘性強　しまり強
4　暗褐色土(10YR3/4)　炭化物粒多　粘性強　しまり中
5　明黄褐色土(10YR7/6)　粘性強　しまり強
6　黄褐色土(10YR5/8)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱



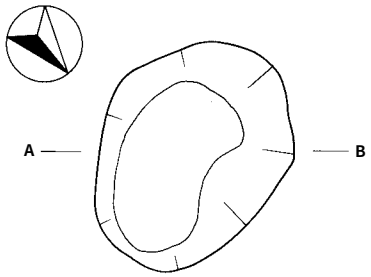
第24図　ＳＫＦ19・ＳＫＦ29・ＳＫＦ36フラスコ状土坑



第25図　ＳＫＦ38・ＳＫＦ57フラスコ状土坑、ＳＫ39土坑

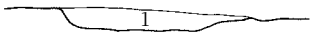


第26図 ＳＫ22・ＳＫ24・ＳＫ26・ＳＫ27・ＳＫ31・ＳＫ33W・ＳＫ35Ｎ・ＳＫ35Ｓ土坑

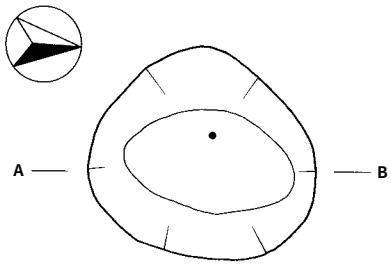


SK37

A ── 18.8m ── B

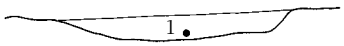


SK37
1　黒褐色土(10YR2/2)　粘性弱　しまり中

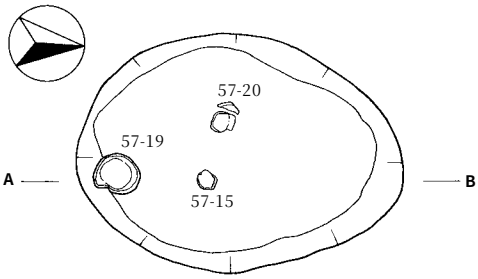


SK43

A ── 16.1m ── B



SK43
1　暗褐色土(10YR3/3)　地山土塊中　粘性中　しまり中



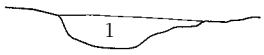
SK46

A ── 15.0m ── B

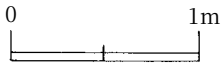
SK46
1　黒色土(10YR2/1)　炭化物粒少　粘性弱　しまり弱

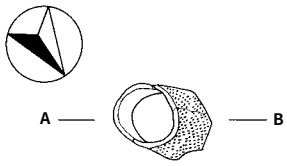
SK58

A ── 15.5m ── B



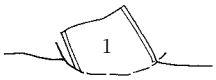
SK58
1　黒褐色土(10YR2/2)　地山土塊少　粘性弱　しまり弱





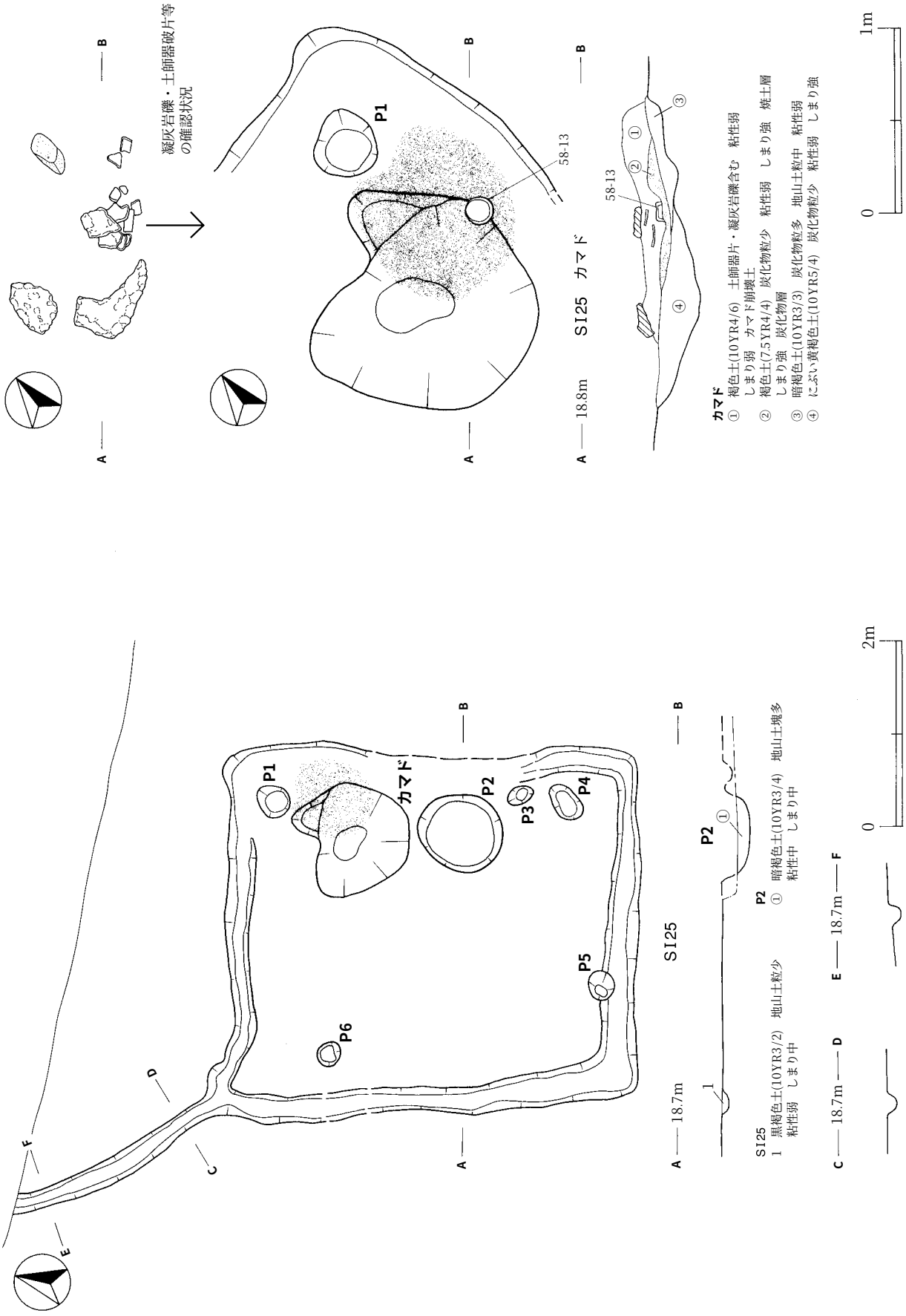
SR49

A ── 16.3m ── B

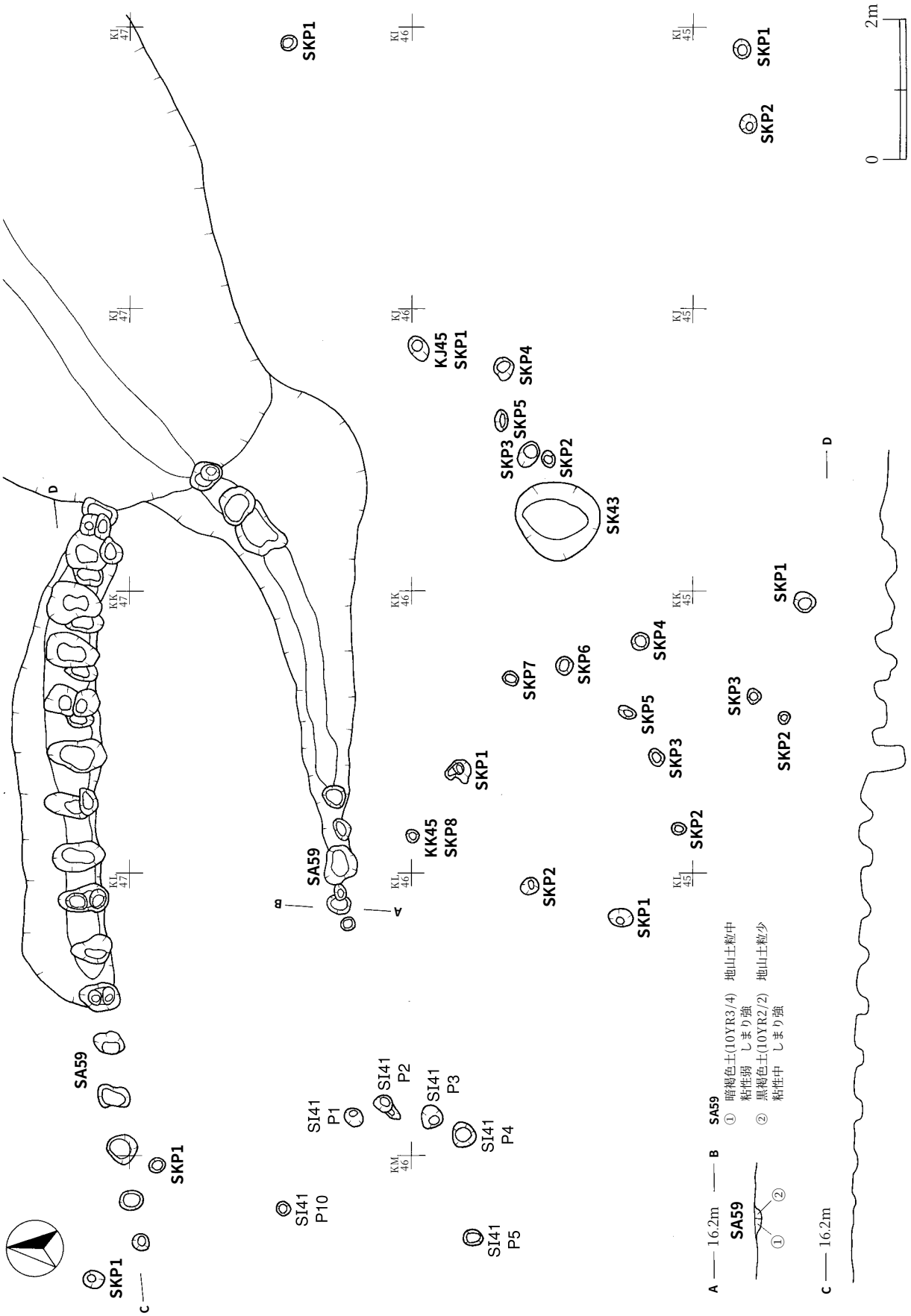


SR49
1　黒褐色土(10YR2/2)　炭化物粒少　粘性中　しまり弱

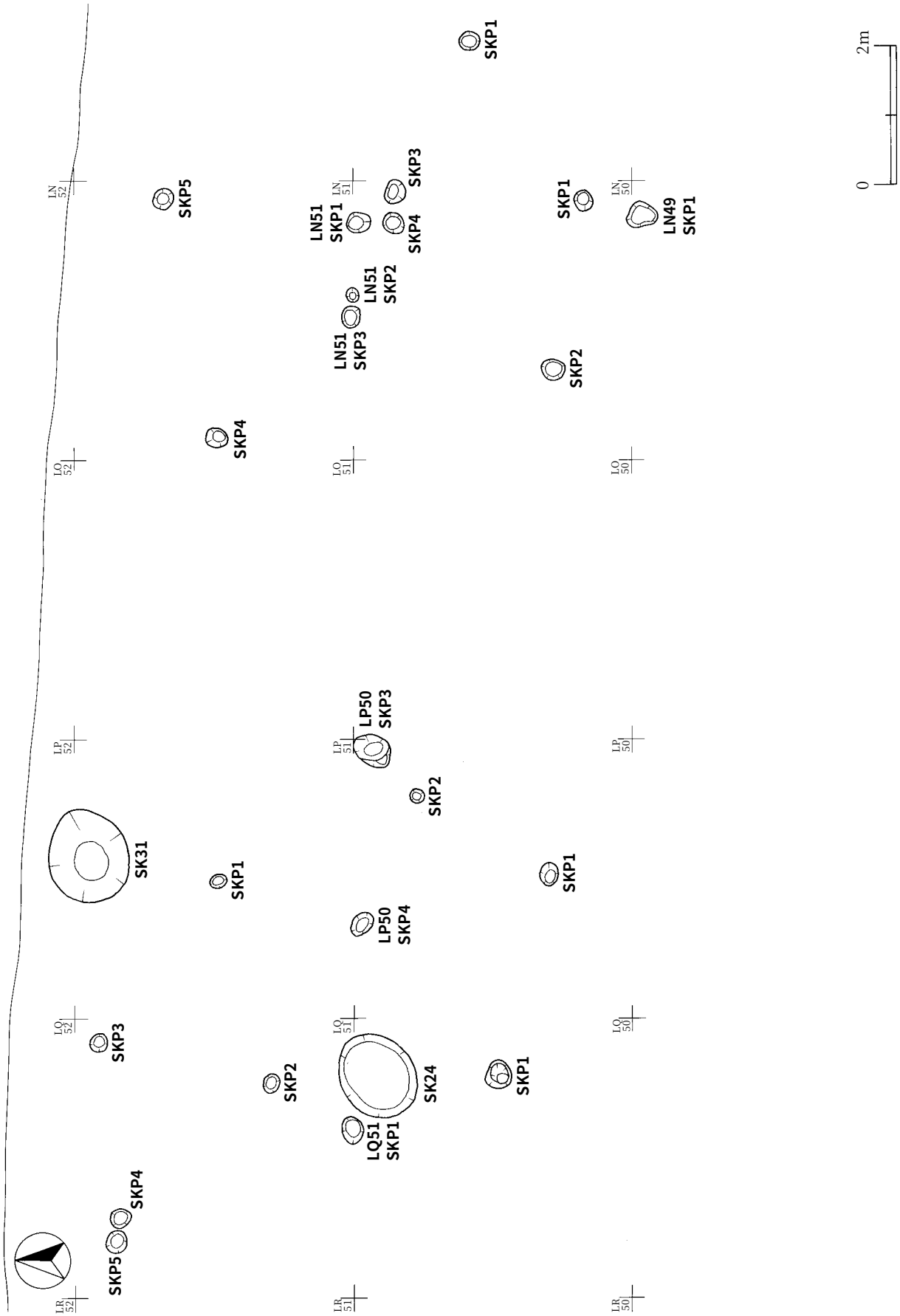
第27図　ＳＫ37・ＳＫ43・ＳＫ46・ＳＫ58土坑、ＳＲ49土器埋設遺構



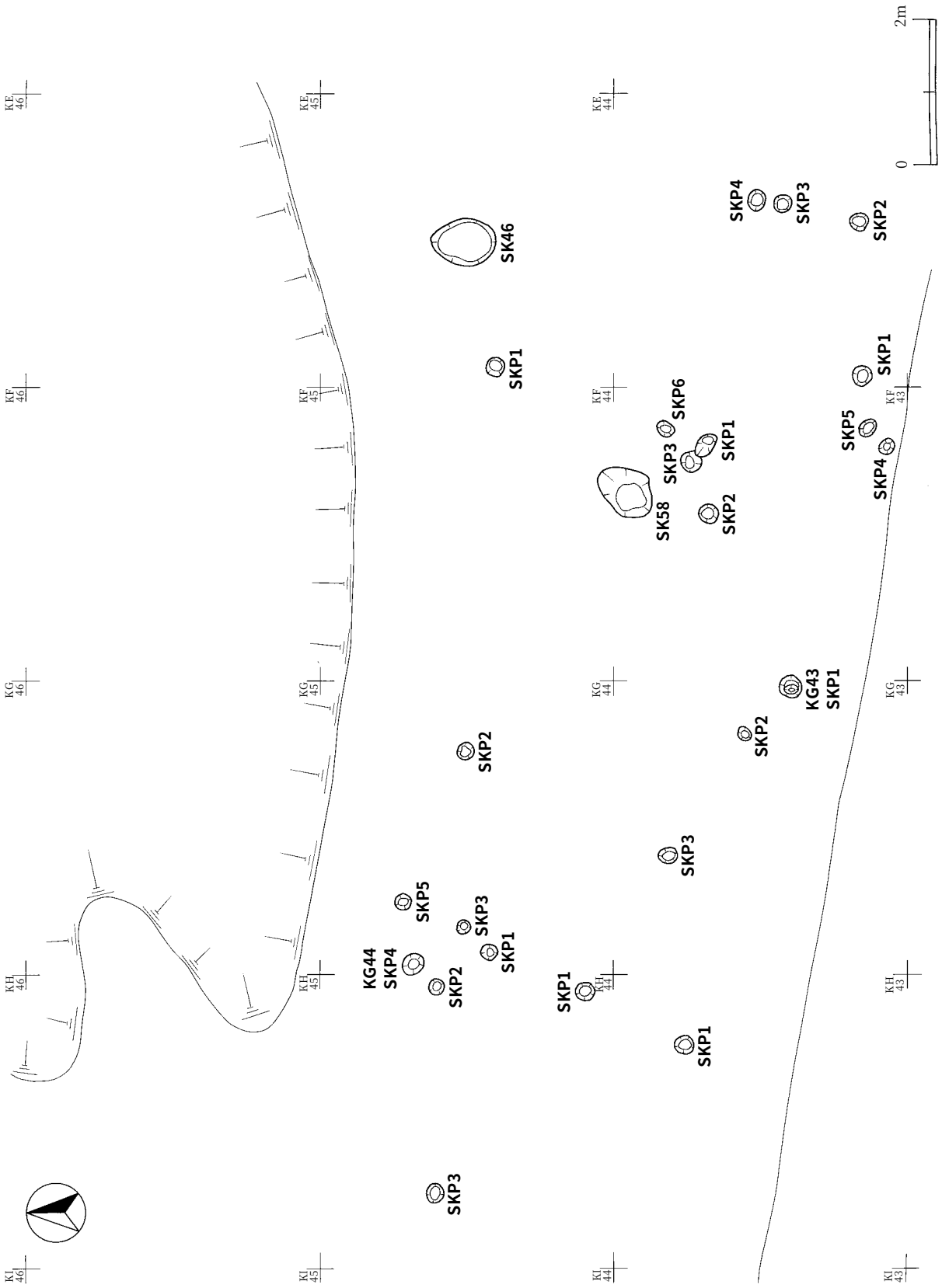
第28図　ＳＩ25竪穴住居跡



第29図　ＳＡ59柱穴列・柱穴配置図（１）


LN 52
LO 52
LP 52
LO 52
LR 52
SKP5
SKP4
SKP3
SK31
SKP1
SKP2
SKP5
SKP4
LN51 SKP1
LN51 SKP3
LN51 SKP2
SKP4
SKP3
LP50 SKP3
SKP2
LP50 SKP4
LQ51 SKP1
SK24
LN 51
LO 51
LP 51
LO 51
LR 51
SKP1
SKP2
SKP1
SKP1
LN 50
LO 50
LP 50
LO 50
LR 50
LN49 SKP1
0
2m

第30図　柱穴配置図（２）


KE 46
KE 45
KE 44
KF 46
KF 45
KF 44
KF 43
KG 46
KG 45
KG 44
KG 43
KH 46
KH 45
KH 44
KH 43
KI 46
KI 45
KI 44
KI 43
0
2m
SK46
SKP1
SKP2
SKP3
SKP4
SKP5
SKP6
SK58
KG44
KG43

第31図　柱穴配置図（３）

第５表　ＳＩ03竪穴住居跡柱穴一覧※以下（ ）は推定値、〔 〕は現状値。

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
Ｐ１	円形	32	30	53	18.33	
Ｐ２	楕円形	30	26	23	18.62	
Ｐ３	楕円形	44	39	63	18.26	
Ｐ４	楕円形	28	22	36	18.50	
Ｐ５	楕円形	43	33	35	18.54	
Ｐ６	楕円形	46	40	20	18.63	
Ｐ７	楕円形	62	49	56	18.27	
Ｐ８	楕円形	36	28	58	18.26	
Ｐ９	円形	16	15	38	18.45	
Ｐ10	楕円形	24	20	38	18.46	
Ｐ11	楕円形	17	14	11	18.71	
Ｐ12	円形	37	33	42	18.41	
Ｐ13	楕円形	30	25	33	18.51	
Ｐ14	円形	25	24	16	18.71	
Ｐ15	楕円形	27	22	34	18.56	
Ｐ16	不整円形	46	39	28	18.56	Ｐ17を切る
Ｐ17	円形？	(59)	〔19〕	71	18.13	Ｐ16に切られる
Ｐ18	楕円形	82	70	50	18.33	特殊ピット
Ｐ19	不整形	43	33	71	18.13	
Ｐ20	円形	25	22	33	18.53	
Ｐ21	楕円形	46	38	69	18.16	
Ｐ22	円形	18	16	9	18.77	
Ｐ23	楕円形	28	21	22	18.69	
Ｐ24	楕円形	44	37	26	18.62	
Ｐ25	楕円形	106	77	16	18.70	特殊ピット

第６表　ＳＩ04竪穴住居跡柱穴一覧

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
Ｐ１	楕円形	41	34	79	17.31	
Ｐ２	円形	61	53	18	17.88	
Ｐ３	円形	31	28	8	17.92	
Ｐ４	円形	48	46	53	17.49	
Ｐ５	楕円形	76	50	73	17.30	
Ｐ６	円形	59	48	27	17.67	
Ｐ７	不整楕円形	79	61	75	17.21	
Ｐ８	円形	90	82	38	17.52	
Ｐ９	円形	22	21	27	17.65	
Ｐ10	楕円形	80	62	32	17.68	
Ｐ11	円形？	〔29〕	〔6〕	23	17.64	
Ｐ12	楕円形？	〔40〕	〔22〕	39	17.57	
Ｐ13	円形	47	40	65	17.21	
Ｐ14	円形	75	29	46	17.46	Ｐ15に切られる　特殊ピット
Ｐ15	円形	126	52	140	16.58	Ｐ14を切る　特殊ピット
Ｐ16	不整楕円形	57	51	73	17.39	

第７表　ＳＩ05竪穴住居跡柱穴一覧（１）

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
Ｐ１	円形	58	55	21	18.39	
Ｐ２	楕円形	47	37	52	18.09	
Ｐ３	円形	56	49	55	18.88	Ｐ４・５を切る
Ｐ４	円形	〔52〕	〔42〕	45	18.06	Ｐ３に切られ、Ｐ５を切る
Ｐ５	不整円形	163	110	97	17.61	Ｐ３・４・６に切られる　柱抜き取り痕か
Ｐ６	円形	36	26	66	18.27	Ｐ２・５を切る
Ｐ７	楕円形	36	28	41	18.38	
Ｐ８	不整円形	118	113	48	18.34	旧ＳＫ18
Ｐ９	円形	47	44	60	17.95	

第８表　ＳＩ05竪穴住居跡柱穴一覧（２）

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
P10	不整楕円形	77	62	98	17.79	
P11	楕円形	52	29	34	18.23	P12を切る
P12	楕円形	53	30	51	18.00	P11に切られる
P13	不整楕円形	60	〔36〕	45	18.24	P14に切られる
P14	円形	51	46	43	18.10	P13を切る
P15	円形	33	33	32	18.22	
P16	楕円形	105	76	73	17.76	P17を切る　特殊ピット
P17	円形？	〔77〕	〔41〕	60	17.86	P16に切られ、P18を切る　特殊ピット
P18	楕円形	〔48〕	51	75	17.71	P17に切られる　特殊ピット
P19	楕円形	46	35	13	18.34	
P20	楕円形	〔57〕	61	64	18.01	P21に切られる
P21	円形	62	54	52	18.00	P20を切る
P22	不整楕円形	127	83	69	17.86	P23を切る　竪穴住居跡覆土中位からの掘り込み
P23	不整楕円形？	〔88〕	〔86〕	59	17.97	P22に切られる
P24	楕円形	54	34	15	18.70	
P25	楕円形	64	51	31	18.52	
P26	円形	59	55	71	17.83	
P27	円形	26	24	14	18.70	
P28	楕円形	34	26	16	18.67	
P29	楕円形	〔60〕	〔46〕	20	18.28	

第９表　ＳＩ06竪穴住居跡柱穴一覧

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
P１	楕円形	38	28	30	17.74	
P２	円形	26	23	12	18.00	
P３	円形	20	18	22	17.80	
P４	円形	21	18	9	17.96	
P５	円形	35	31	10	17.97	
P６	楕円形	42	32	42	17.68	
P７	楕円形	27	18	15	18.04	
P８	不整円形	72	56	92	17.20	
P９	不整円形	68	58	98	17.14	
P10	円形	24	20	12	18.00	
P11	円形	36	31	46	17.71	
P12	不整楕円形	51	48	57	17.52	
P13	円形	26	22	13	18.04	
P14	円形	20	20	32	17.86	
P15	不整円形	80	74	90	17.10	特殊ピット
P16	円形	32	30	37	17.77	
P17	円形	24	21	8	17.73	
P18	円形	32	30	17	17.95	
P19	円形	21	18	15	18.01	
P20	楕円形	26	20	18	17.99	
P21	不整楕円形	57	40	54	17.61	
P22	円形	21	19	17	17.88	
P23	不整楕円形	59	31	54	17.61	

第10表　ＳＩ08竪穴住居跡柱穴一覧

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
P１	楕円形	49	〔17〕	67	17.77	特殊ピット
P２	楕円形	74	53	78	17.70	
P３	円形	40	34	39	18.23	
P４	円形	35	32	19	18.61	
P５	円形	42	36	40	18.00	
P６	方形	26	25	37	17.98	
P７	方形	20	19	30	18.04	
P８	円形	38	31	69	17.97	
P９	不整楕円形	54	40	56	18.00	
P10	楕円形	41	〔32〕	37	18.20	

第11表　ＳＩ15竪穴住居跡柱穴一覧

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
Ｐ１	楕円形	45	36	33	17.56	
Ｐ２	楕円形	42	30	72	17.12	
Ｐ３	楕円形	43	37	17	17.68	
Ｐ４	楕円形	35	28	19	17.64	
Ｐ５	円形？	28	(26)	32	17.52	Ｐ６に切られる
Ｐ６	楕円形	35	12	13	17.72	Ｐ５を切る
Ｐ７	楕円形	39	32	17	17.89	
Ｐ８	楕円形	33	28	17	17.73	
Ｐ９	楕円形	27	22	19	17.84	
Ｐ10	円形	25	24	17	17.67	
Ｐ11	楕円形	52	46	62	17.26	
Ｐ12	円形	24	23	26	17.58	
Ｐ13	円形	28	27	23	17.75	
Ｐ14	円形	21	21	23	17.82	
Ｐ15	円形	31	29	66	17.21	
Ｐ16	隅丸方形	68	44	49	17.47	
Ｐ17	円形	22	20	30	17.55	
Ｐ18	楕円形	29	23	12	18.00	
Ｐ19	楕円形	22	17	6	17.81	
Ｐ20	楕円形	43	39	98	17.00	
Ｐ21	円形	39	39	63	17.44	
Ｐ22	円形	26	25	63	17.38	
Ｐ23	円形	24	22	52	17.41	
Ｐ24	円形	32	26	22	17.98	
Ｐ25	円形	28	26	53	17.59	
Ｐ26	楕円形	32	26	29	18.15	
Ｐ27	円形	23	22	54	17.65	
Ｐ28	楕円形	23	18	38	17.95	
Ｐ29	不整楕円形	40	20	21	18.07	
Ｐ30	円形	38	34	13	18.17	
Ｐ31	円形	28	25	23	18.02	
Ｐ32	円形	24	23	53	17.65	
Ｐ33	楕円形	27	22	53	17.59	
Ｐ34	不整円形	108	92	100	16.81	Ｐ35に切られる　特殊ピット
Ｐ35	方形	28	28	18	17.74	Ｐ34を切る
Ｐ36	楕円形	32	28	65	17.26	
Ｐ37	円形	27	26	38	17.51	
Ｐ38	楕円形	〔108〕	100	99	16.64	炉２に切られるか　特殊ピット
Ｐ39	楕円形	32	26	19	17.70	
Ｐ40	楕円形	34	29	13	17.93	
Ｐ41	円形	27	26	27	17.62	
Ｐ42	楕円形	54	45	90	17.10	
Ｐ43	楕円形	37	30	7	17.91	
Ｐ44	円形	30	28	12	17.77	
Ｐ45	円形	45	44	43	17.44	
Ｐ46	円形	25	22	23	17.64	
Ｐ47	楕円形	〔126〕	80	66	17.14	Ｐ49を切り、炉２に切られる
Ｐ48	円形	30	28	15	17.70	
Ｐ49	楕円形	(195)	166	27	17.59	Ｐ47に切られる
Ｐ50	不整楕円形	71	58	95	16.94	ＳＫＦ64を切る？
Ｐ51	楕円形	27	24	15	17.80	
Ｐ52	円形	25	24	18	17.69	
Ｐ53	円形	32	28	16	17.73	
Ｐ54	楕円形	20	18	26	17.61	
Ｐ55	円形	24	22	31	17.52	
Ｐ56	円形	23	22	42	17.41	
Ｐ57	円形	45	42	66	17.23	
Ｐ58	円形	26	24	15	17.69	
Ｐ59	円形	32	31	43	17.43	
Ｐ60	楕円形	42	31	23	17.63	
Ｐ61	円形	41	33	46	17.45	
Ｐ62	楕円形	34	26	44	17.48	

第12表　ＳＩ16Ａ竪穴住居跡柱穴一覧

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
Ｐ１	円形	21	19	60	17.97	
Ｐ２	不整方形	44	36	12	18.24	
Ｐ３	楕円形	28	22	14	18.19	
Ｐ４	楕円形	24	20	14	18.18	Ｐ５を切る
Ｐ５	楕円形	32	20	16	18.16	Ｐ４に切られる
Ｐ６	楕円形	36	31	96	17.31	
Ｐ７	円形	20	17	15	18.12	
Ｐ８	円形	19	16	10	18.15	
Ｐ９	不整円形	45	44	65	17.58	
Ｐ10	楕円形	52	(35)	25	17.92	Ｐ11に切られる
Ｐ11	不整楕円形	65	45	29	17.92	Ｐ10を切る
Ｐ12	不整楕円形	28	20	67	18.12	
Ｐ13	楕円形	22	18	15	18.03	
Ｐ14	円形	38	35	50	17.68	
Ｐ15	円形	31	30	61	17.57	
Ｐ16	円形	24	22	71	17.46	
Ｐ17	円形	20	17	29	17.90	
Ｐ18	円形	20	20	9	18.07	
Ｐ19	楕円形	20	18	27	18.09	
Ｐ20	円形	32	27	28	17.89	
Ｐ21	円形	25	22	53	17.64	
Ｐ22	円形	31	30	66	17.53	
Ｐ23	不整円形	35	30	14	18.07	
Ｐ24	円形	19	18	32	17.83	
Ｐ25	楕円形	25	20	35	17.79	
Ｐ26	円形	20	18	34	17.79	
Ｐ27	円形	55	53	73	17.49	特殊ピット
Ｐ28	円形	27	26	74	17.48	
Ｐ29	円形	22	21	10	18.14	
Ｐ30	円形	28	27	5	18.19	Ｐ31に切られる
Ｐ31	楕円形	34	26	9	18.17	Ｐ30を切る
Ｐ32	楕円形	44	36	61	17.58	
Ｐ33	円形	28	26	43	17.78	
Ｐ34	楕円形	〔64〕	63	32	17.84	Ｐ35に切られる
Ｐ35	円形	58	52	49	17.76	Ｐ34を切る

第13表　ＳＩ16Ｂ竪穴住居跡柱穴一覧

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
Ｐ１	楕円形	50	42	102	17.12	斜めに掘り込み
Ｐ２	円形	20	18	16	17.95	
Ｐ３	円形	36	30	6	18.13	
Ｐ４	楕円形	46	28	53	17.59	
Ｐ５	円形	26	24	21	17.94	
Ｐ６	不整楕円形	38	26	11	18.02	
Ｐ７	円形	57	45	50	17.62	
Ｐ８	楕円形	32	23	66	17.45	
Ｐ９	円形	34	32	7	18.07	
Ｐ10	円形	21	19	21	17.93	
Ｐ11	円形	26	24	13	18.02	
Ｐ12	円形	30	25	14	18.03	
Ｐ13	楕円形	36	30	58	17.53	
Ｐ14	円形	58	48	19	17.95	Ｐ15を切る　特殊ピットか
Ｐ15	円形？	40	(35)	29	17.84	Ｐ14に切られる

第14表　ＳＩ32竪穴住居跡柱穴一覧

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
Ｐ１	円形	40	37	37	17.66	
Ｐ２	円形	38	36	98	17.09	
Ｐ３	円形	42	39	91	17.21	
Ｐ４	円形	54	53	89	17.30	
Ｐ５	円形	93	90	146	16.72	
Ｐ６	円形	60	51	76	17.38	
Ｐ７	円形	47	46	117	16.94	
Ｐ８	円形	44	43	60	17.42	

第15表　ＳＩ34竪穴住居跡柱穴一覧

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
Ｐ１	円形	18	15	7	17.81	
Ｐ２	円形	29	26	19	17.72	
Ｐ３	不整楕円形	52	29	12	17.78	
Ｐ４	円形	34	30	9	17.82	
Ｐ５	楕円形	42	22	6	17.72	
Ｐ６	楕円形	33	20	11	17.74	
Ｐ７	楕円形	24	20	16	17.74	
Ｐ８	不整楕円形	44	34	13	17.82	
Ｐ９	円形	17	15	10	17.83	
Ｐ10	円形	21	19	10	17.87	
Ｐ11	不整楕円形	57	30	10	17.89	
Ｐ12	円形	22	20	29	17.61	
Ｐ13	不整楕円形	34	34	11	17.82	
Ｐ14	円形	20	16	14	17.77	
Ｐ15	円形	24	21	7	17.89	
Ｐ16	円形	27	24	29	17.66	
Ｐ17	楕円形	39	21	12	17.76	
Ｐ18	楕円形	29	20	12	17.83	
Ｐ19	楕円形	26	20	7	17.86	
Ｐ20	楕円形	29	24	19	17.72	
Ｐ21	楕円形	42	30	10	17.76	
Ｐ22	円形	24	20	14	17.72	
Ｐ23	楕円形	23	18	11	17.81	
Ｐ24	楕円形	38	22	14	17.75	
Ｐ25	楕円形	45	27	38	17.58	
Ｐ26	円形	32	31	16	17.74	

第16表　ＳＩ41竪穴住居跡柱穴一覧

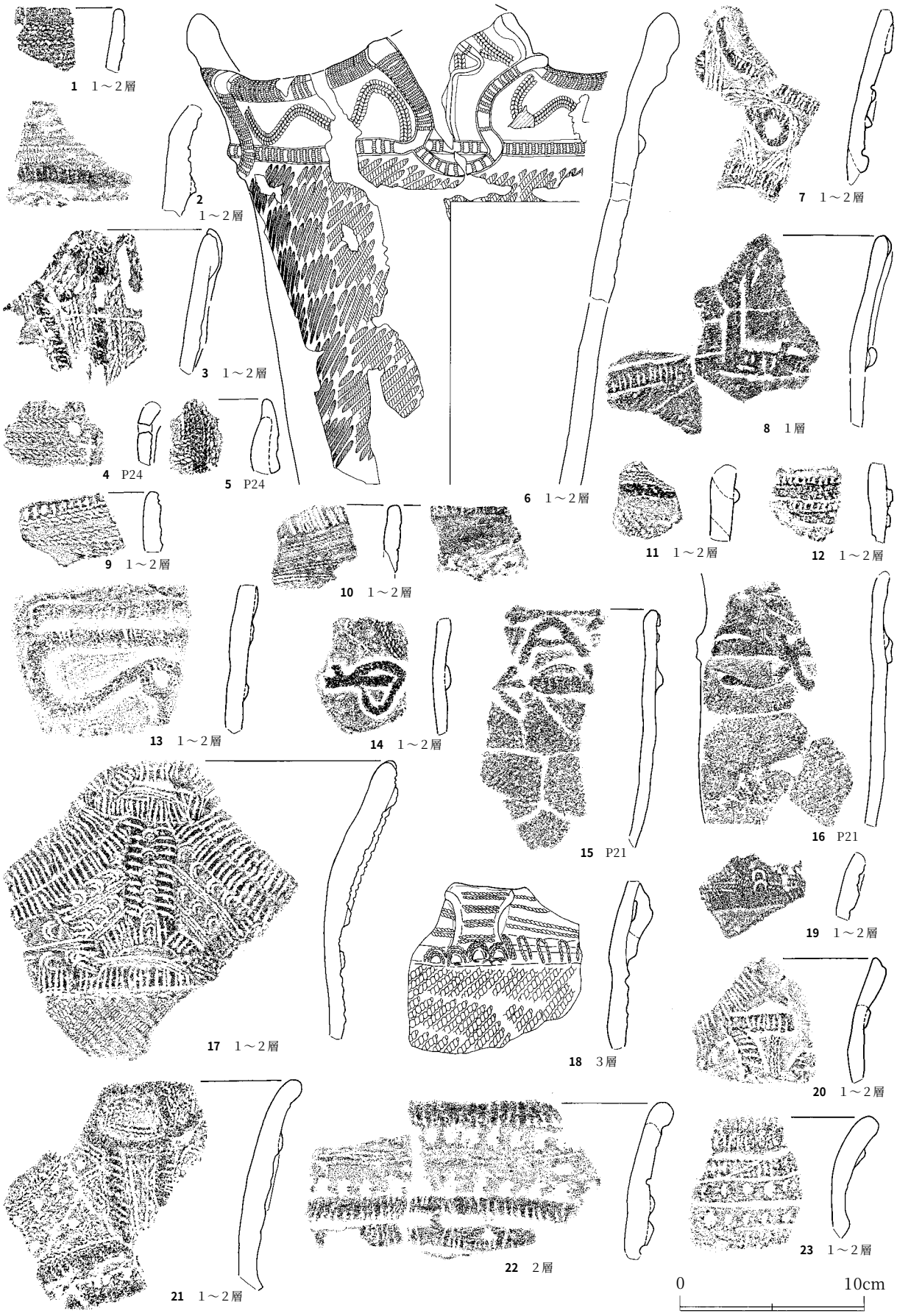
番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
Ｐ１	楕円形	29	26	26	15.60	
Ｐ２	不整楕円形	44	23	15	15.68	
Ｐ３	円形	36	33	15	15.60	
Ｐ４	円形	36	34	15	15.54	
Ｐ５	楕円形	28	23	13	15.55	
Ｐ６	隅丸方形	26	21	29	15.40	
Ｐ７	方形	28	27	11	15.75	
Ｐ８	不整楕円形	28	18	14	15.75	
Ｐ９	不整楕円形	41	32	23	15.67	
Ｐ10	円形	19	18	12	15.75	

第17表　ＳＩ25竪穴住居跡柱穴一覧

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
Ｐ１	円形	37	35	9	18.21	
Ｐ２	楕円形	92	81	12	18.10	
Ｐ３	楕円形	28	19	8	18.19	
Ｐ４	楕円形	43	28	9	18.31	
Ｐ５	円形	31	27	30	18.11	
Ｐ６	円形	26	24	6	18.29	

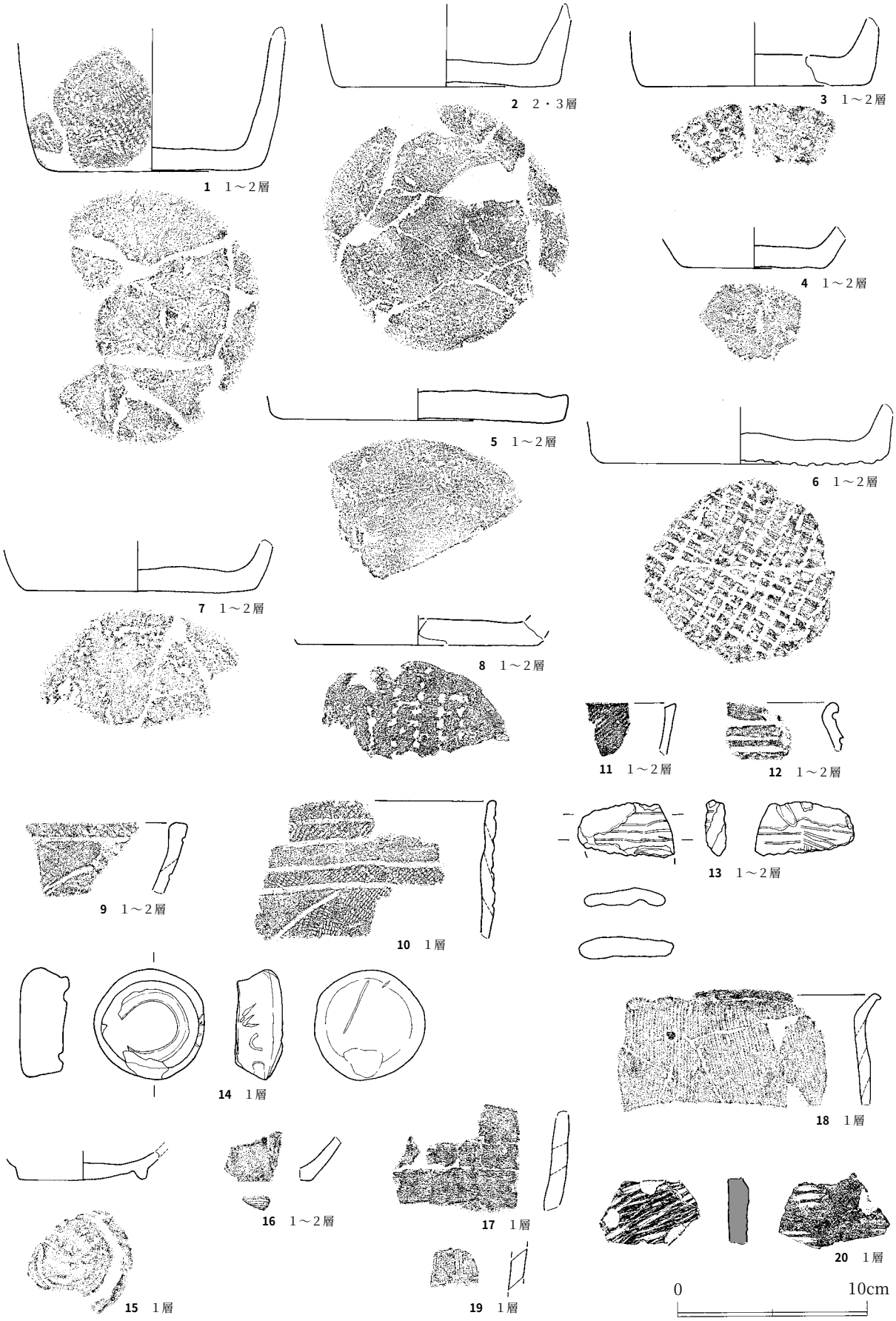
第18表　柱穴一覧

番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	遺物	備考
KE43SKP1	楕円形	27	23	21	14.71	縄文土器片２	
KE43SKP2	円形	24	22	17	14.60		
KE43SKP3	円形	23	22	12	14.61		
KE43SKP4	楕円形	28	23	23	14.46		
KE44SKP1	円形	24	24	20	14.68	縄文土器片２	
KF43SKP1	楕円形	36	23	28	14.79	縄文土器片(宮戸Ⅲｂ式)１　剥片１	KF43SKP３を切る
KF43SKP2	円形	26	23	13	15.01	剥片１	
KF43SKP3	円形	28	26	32	14.77		KF43SKP１に切られる
KF43SKP4	円形	21	21	28	14.71		
KF43SKP5	楕円形	24	18	9	14.89		
KF43SKP6	楕円形	22	17	20	14.82		
KG43SKP1	円形	28	28	19	15.05		
KG43SKP2	楕円形	18	16	14	15.30		
KG43SKP3	楕円形	24	20	22	15.17		
KG44SKP1	楕円形	22	20	21	15.24		
KG44SKP2	円形	23	21	15	15.22		
KG44SKP3	円形	18	17	9	15.37		
KG44SKP4	楕円形	32	28	19	15.28		
KG44SKP5	円形	22	22	15	15.48		
KH43SKP1	円形	25	24	11	15.22		
KH44SKP1	円形	24	22	19	15.22		
KH44SKP2	円形	21	19	17	15.28		
KH44SKP3	楕円形	24	20	26	15.18		
KI44SKP1	円形	26	25	27	15.16		
KI44SKP2	楕円形	26	21	12	15.28		
KI46SKP1	楕円形	22	17	13	15.54		
KJ45SKP1	楕円形	35	25	19	15.56	縄文晩期土器片？１　石錐１	
KJ45SKP2	楕円形	21	17	18	15.45		
KJ45SKP3	楕円形	39	26	25	15.43		
KJ45SKP4	不整円形	32	28	20	15.50		
KJ45SKP5	楕円形	29	17	32	15.40		
KK44SKP1	円形	29	28	26	15.12		
KK44SKP2	円形	17	16	17	15.25		
KK44SKP3	円形	20	18	12	15.34		
KK45SKP1	不整楕円形	36	36	37	15.42	縄文土器片２	
KK45SKP2	楕円形	20	17	20	15.35		
KK45SKP3	楕円形	24	19	29	15.26		
KK45SKP4	円形	24	22	29	15.27		
KK45SKP5	楕円形	26	16	10	15.48		
KK45SKP6	円形	24	24	24	15.40		
KK45SKP7	楕円形	22	18	10	15.59		
KK45SKP8	円形	18	17	11	15.71		
KL45SKP1	楕円形	33	24	17	15.44	縄文晩期土器片１　剥片１	
KL45SKP2	円形	25	22	24	15.51		
KM46SKP1	楕円形	22	20	6	15.94		
KM47SKP1	楕円形	30	25	13	15.91		
LM50SKP1	楕円形	27	23	15	18.14		
LN49SKP1	不整楕円形	42	34	21	18.18		
LN50SKP1	円形	28	25	14	18.23		
LN50SKP2	楕円形	33	28	13	18.28		
LN50SKP3	楕円形	32	27	14	18.19		
LN50SKP4	円形	28	26	20	18.14		
LN51SKP1	楕円形	33	26	18	18.15		
LN51SKP2	楕円形	18	16	19	18.15		
LN51SKP3	楕円形	30	26	17	18.19		
LN51SKP4	楕円形	33	26	26	18.10		
LN51SKP5	円形	29	26	19	18.10		
LP50SKP1	楕円形	32	24	22	18.20		
LP50SKP2	円形	20	18	15	18.25		
LP50SKP3	不整楕円形	58	40	37	18.04		
LP50SKP4	楕円形	36	25	17	18.25		
LP51SKP1	楕円形	20	17	12	18.32		
LQ50SKP1	楕円形	39	34	36	18.13		
LQ51SKP1	楕円形	38	28	16	18.32		
LQ51SKP2	楕円形	25	22	8	18.38		
LQ51SKP3	円形	24	22	13	18.32		
LQ51SKP4	円形	27	24	11	18.37		
LQ51SKP5	円形	31	28	14	18.33		
MF50SKP1	円形	22	21	16	17.11		旧SKP53
MH49SKP1	不整楕円形	60	48	20	17.17	縄文土器片１	旧SKP56

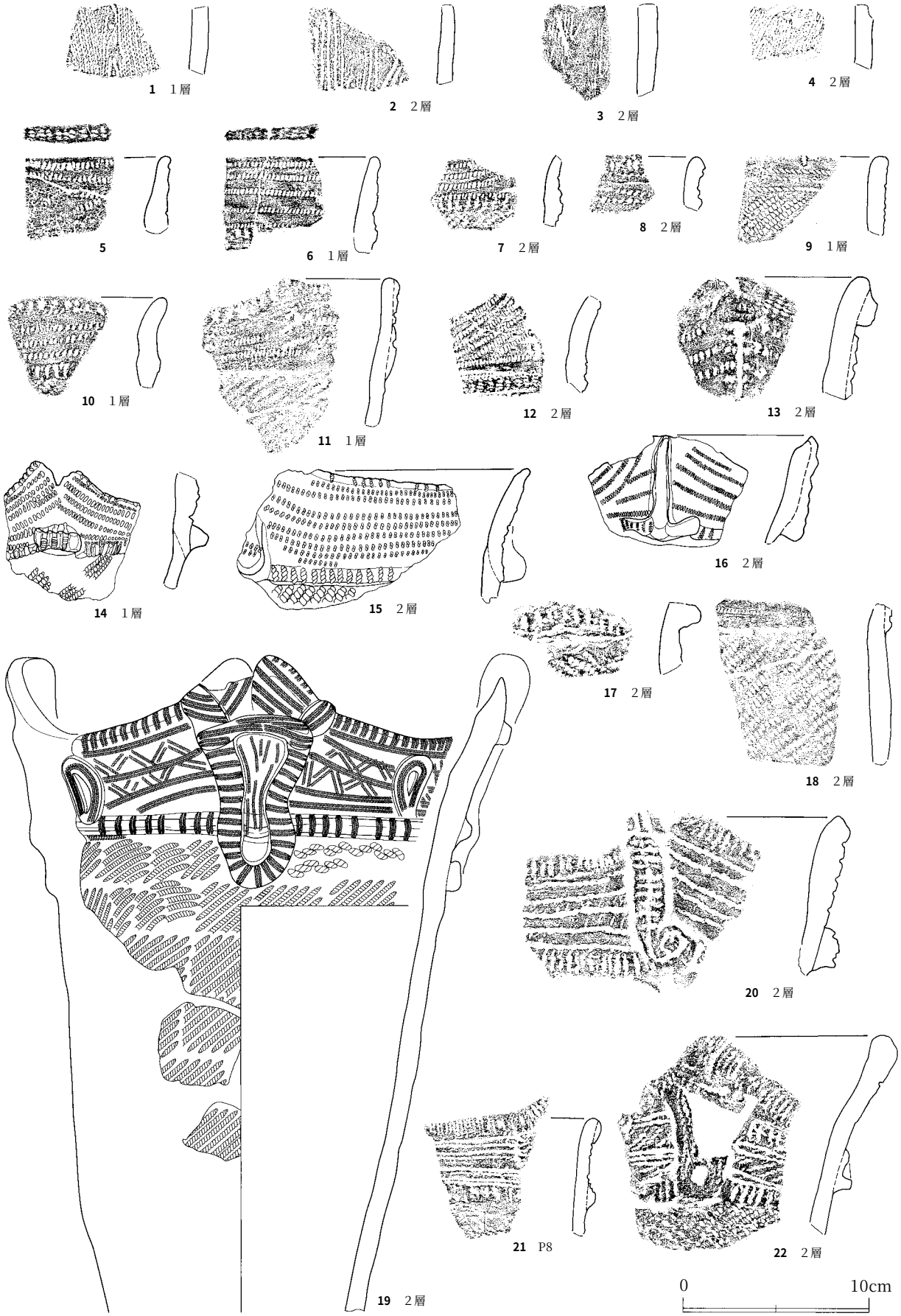


第32図　遺構内出土土器類（1）（ＳＩ03）

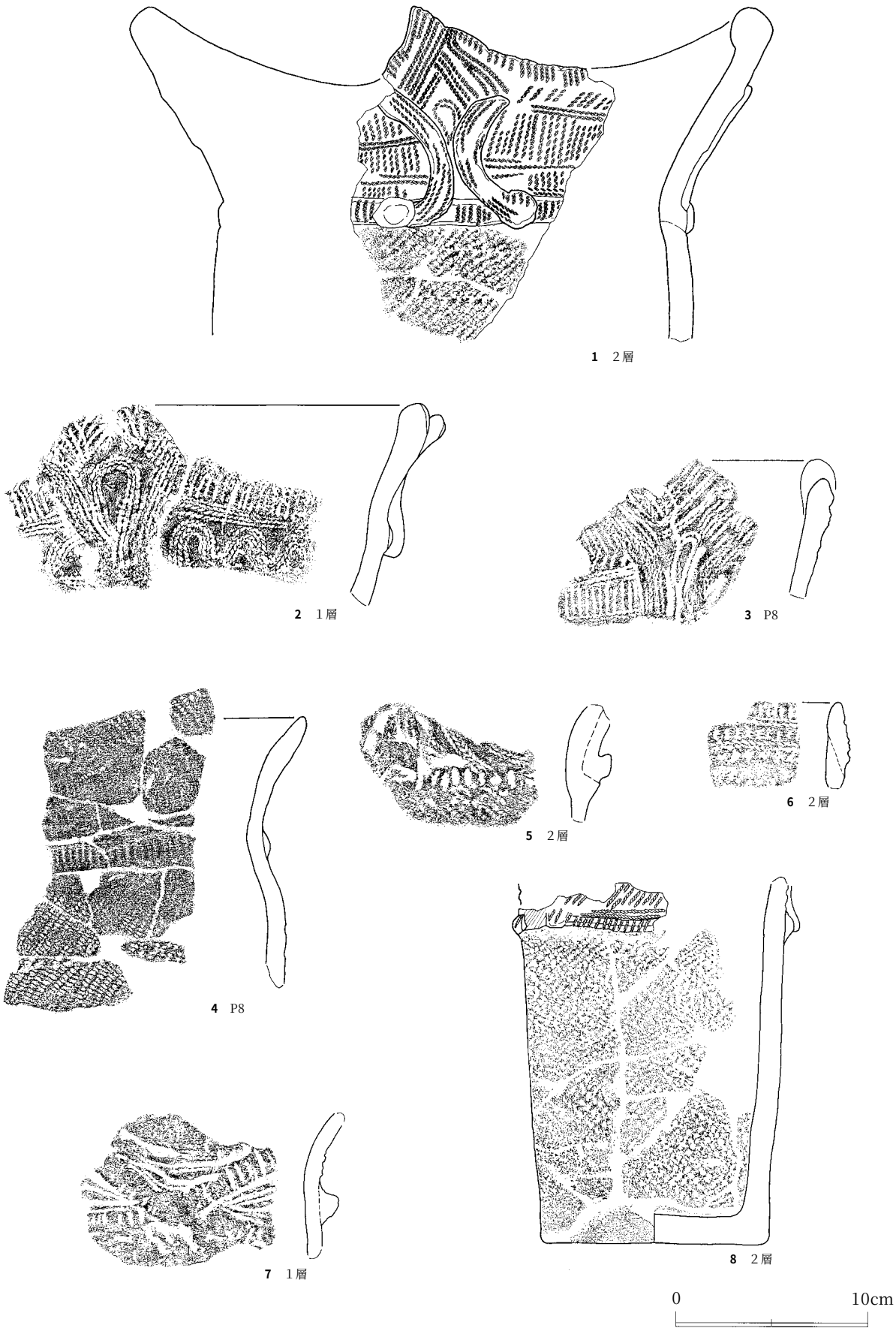
第33図　遺構内出土土器類（２）（ＳＩ03）



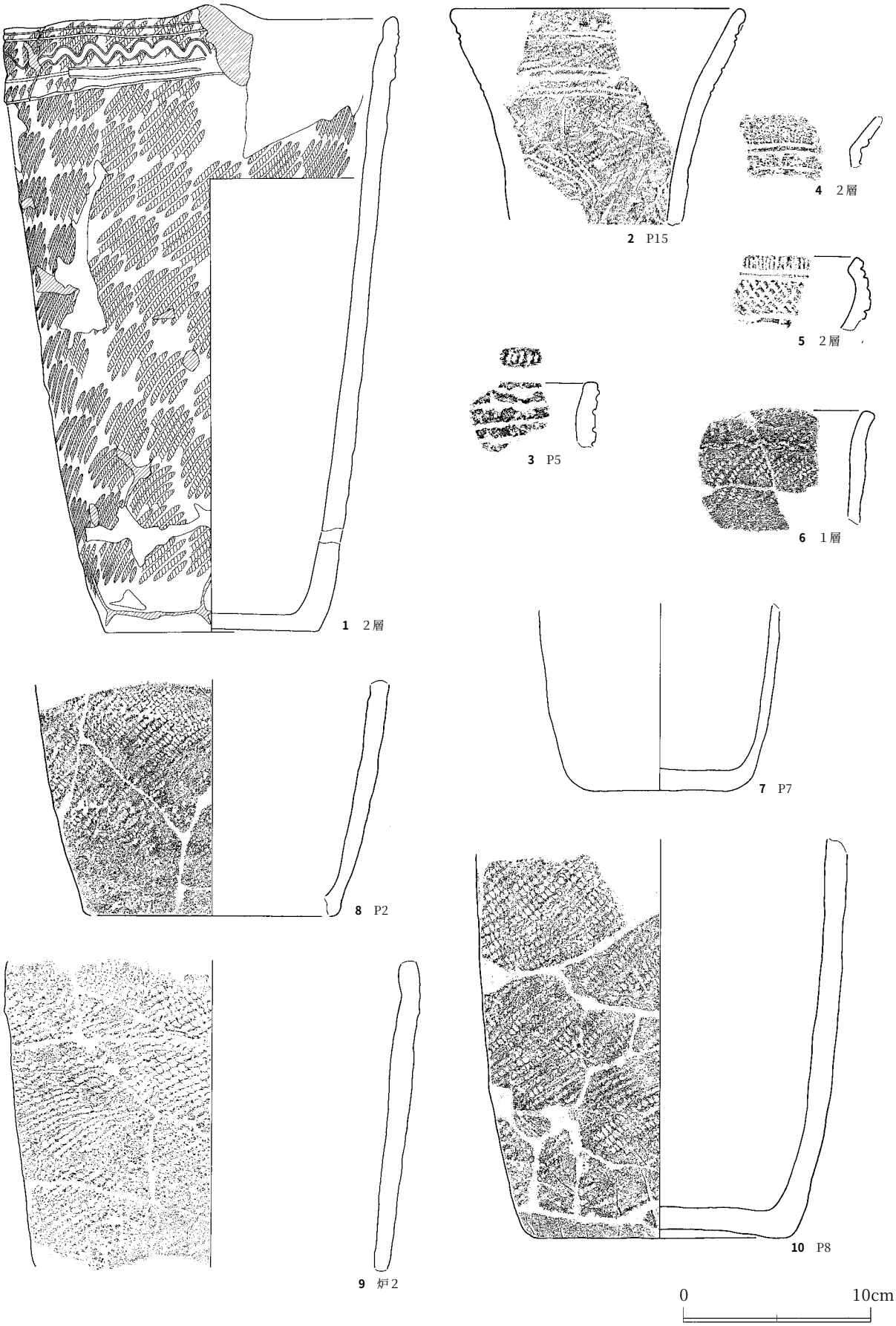
第34図　遺構内出土土器類（３）（ＳＩ03）



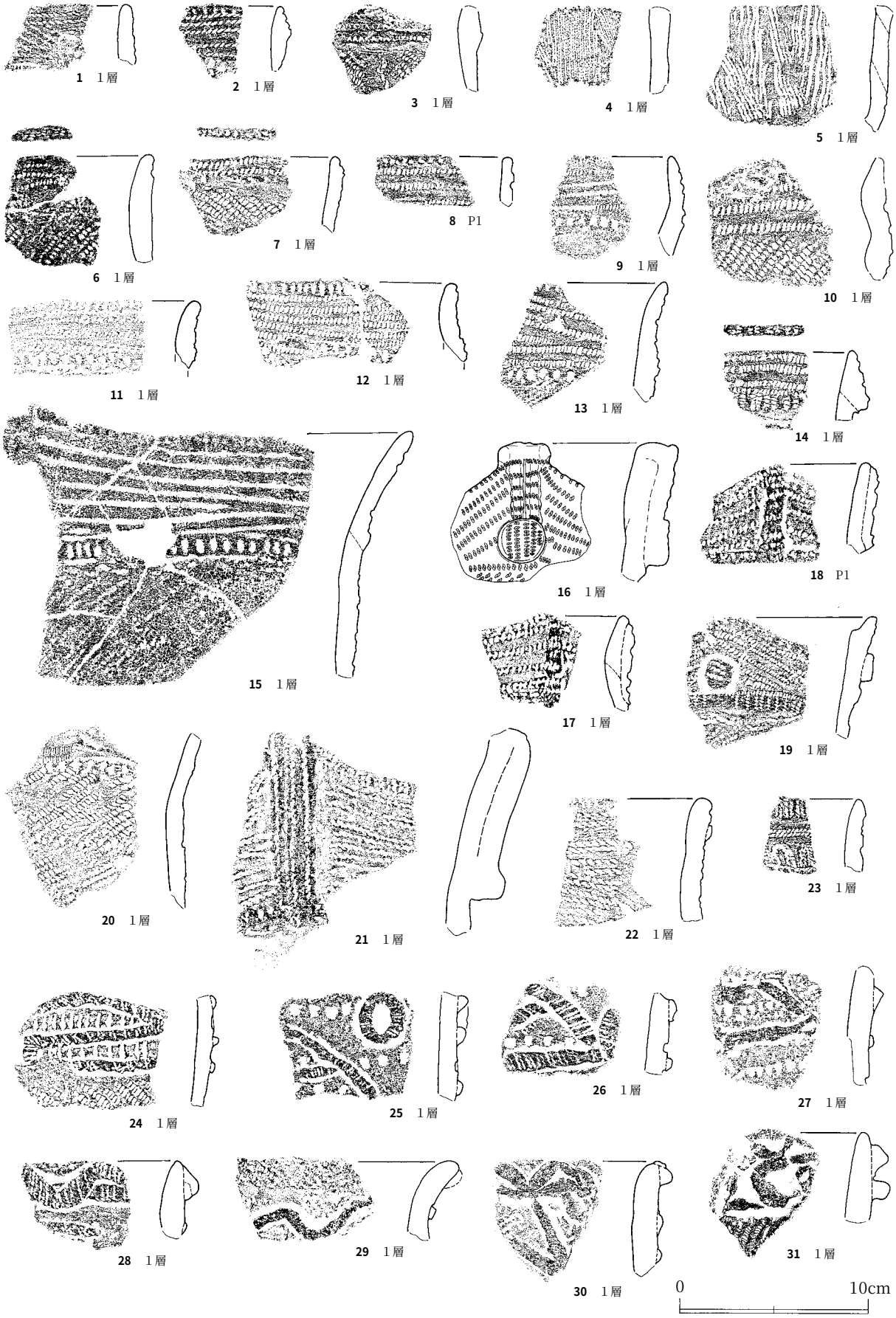
第35図　遺構内出土土器類（４）（ＳＩ04）



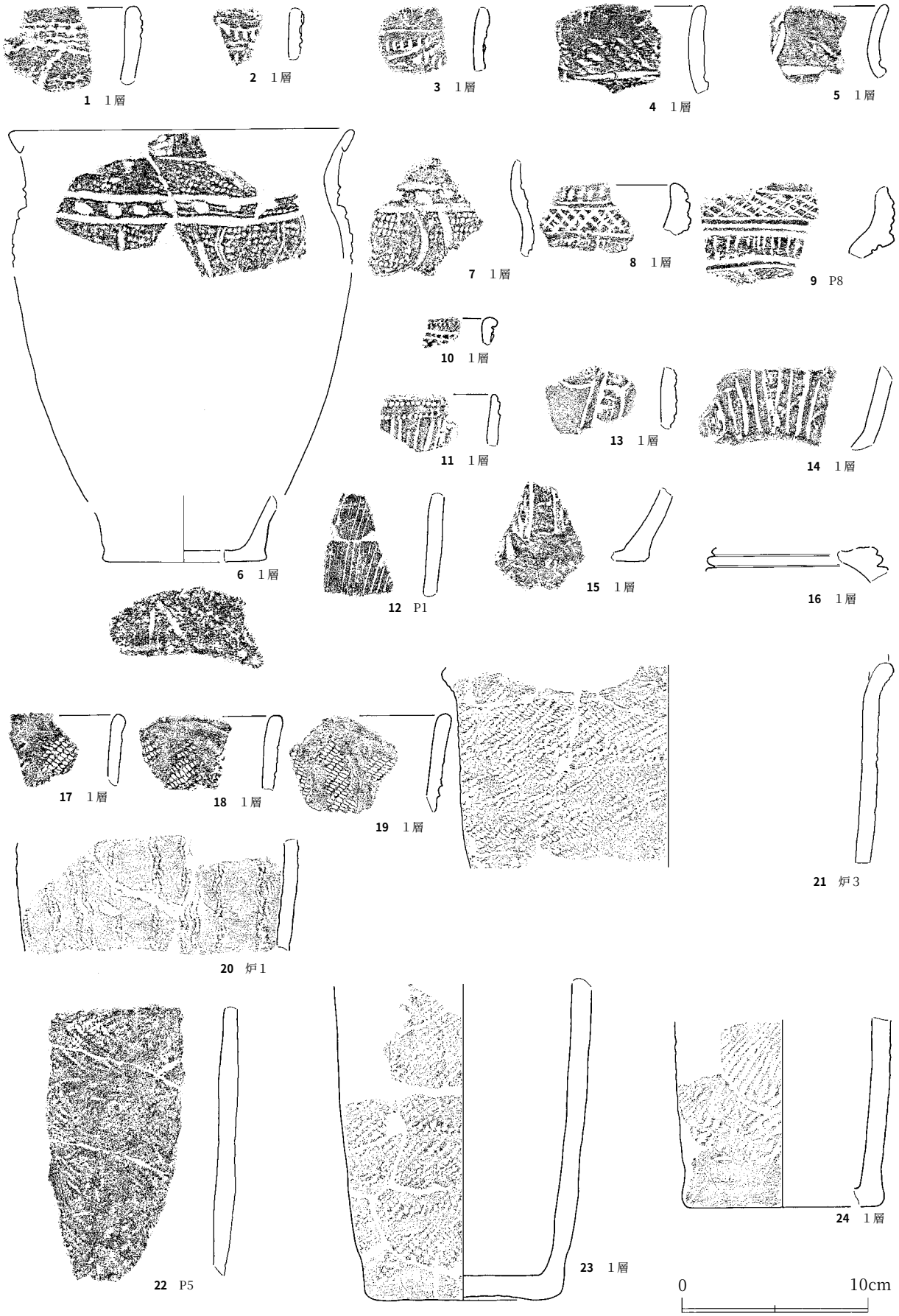
第36図　遺構内出土土器類(5)(SI04)



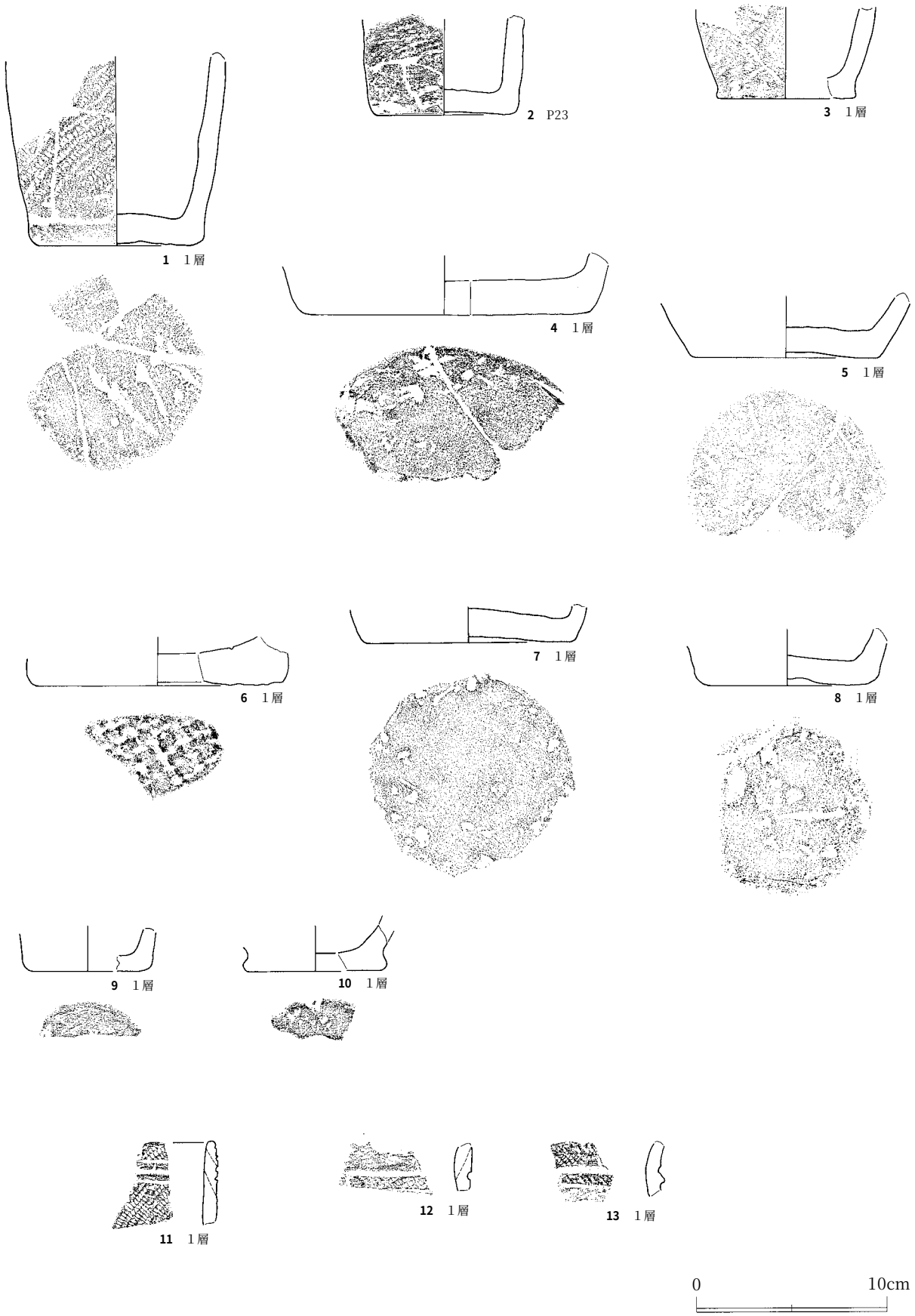
第37図　遺構内出土土器類（６）（ＳＩ04）



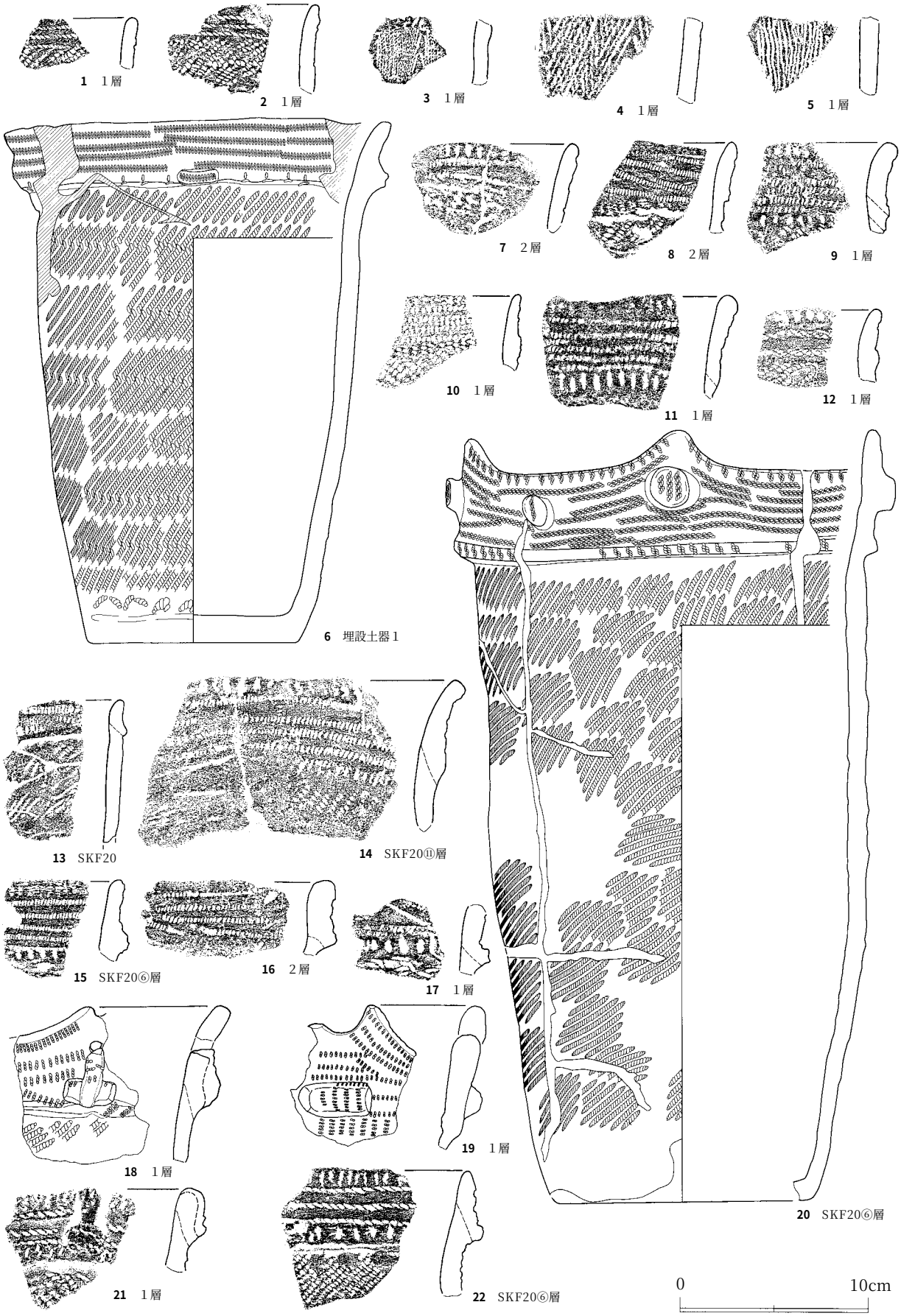
第38図　遺構内出土土器類(7)(SI05)



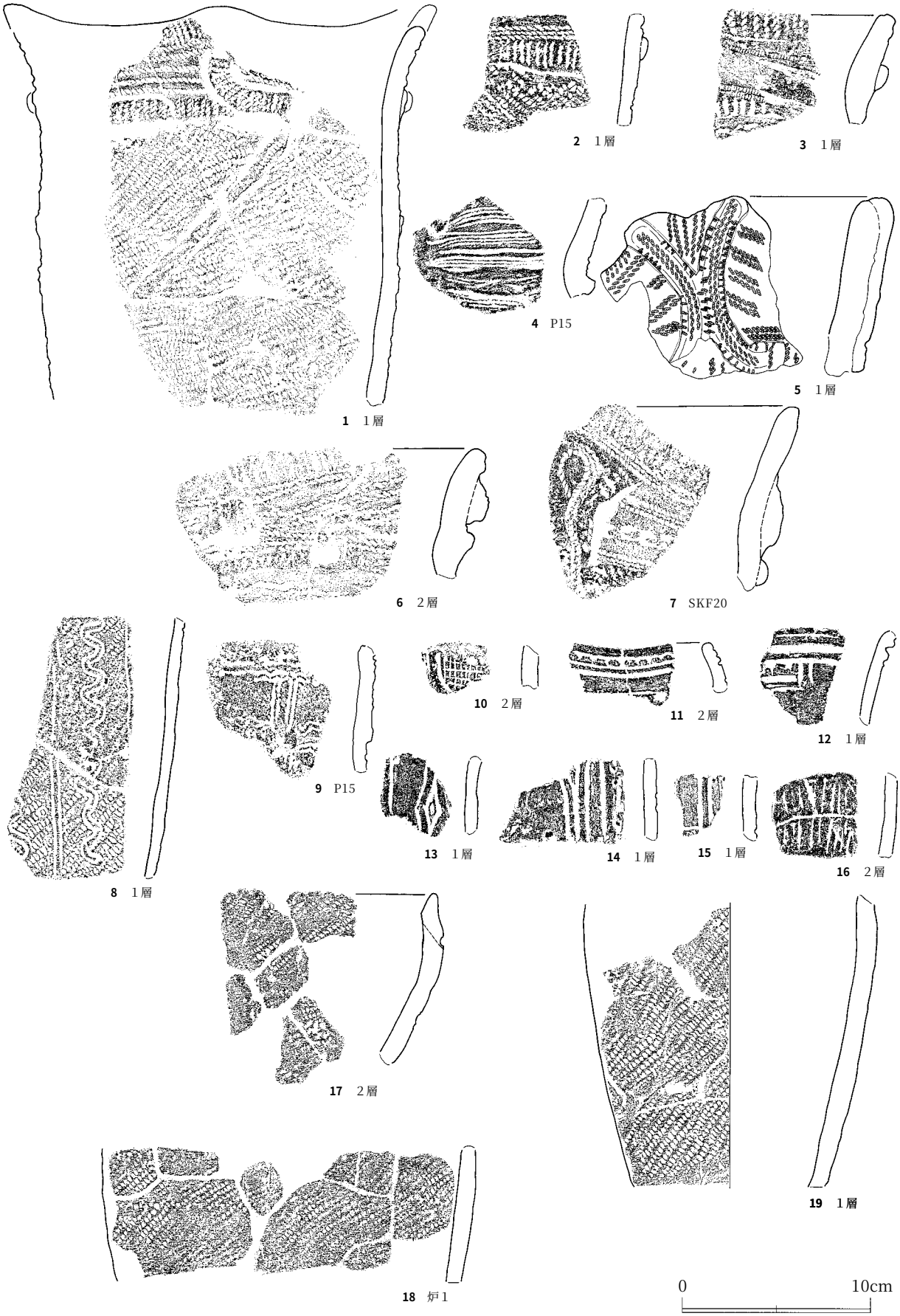
第39図　遺構内出土土器類（８）（ＳＩ05）



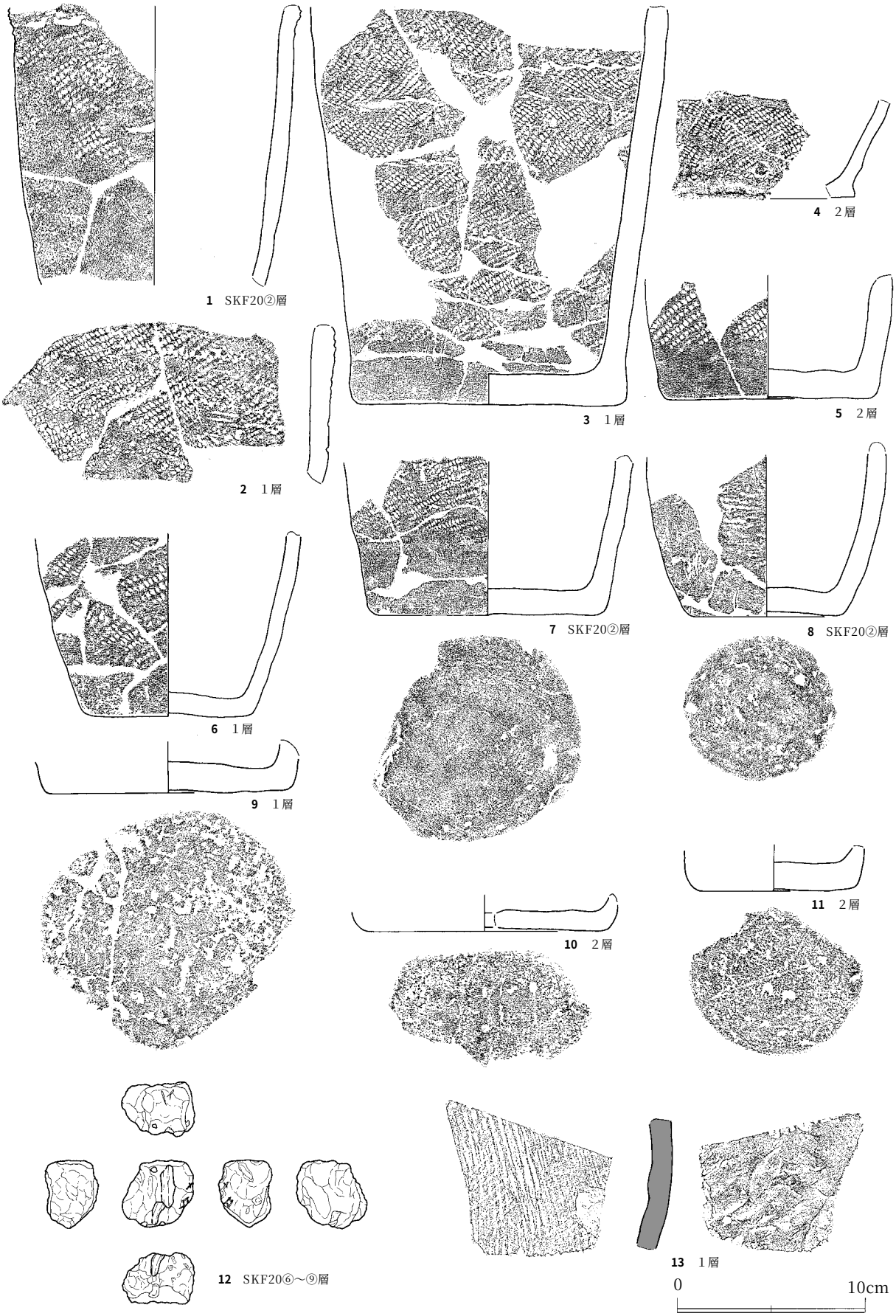
第40図　遺構内出土土器類(9)(SI05)



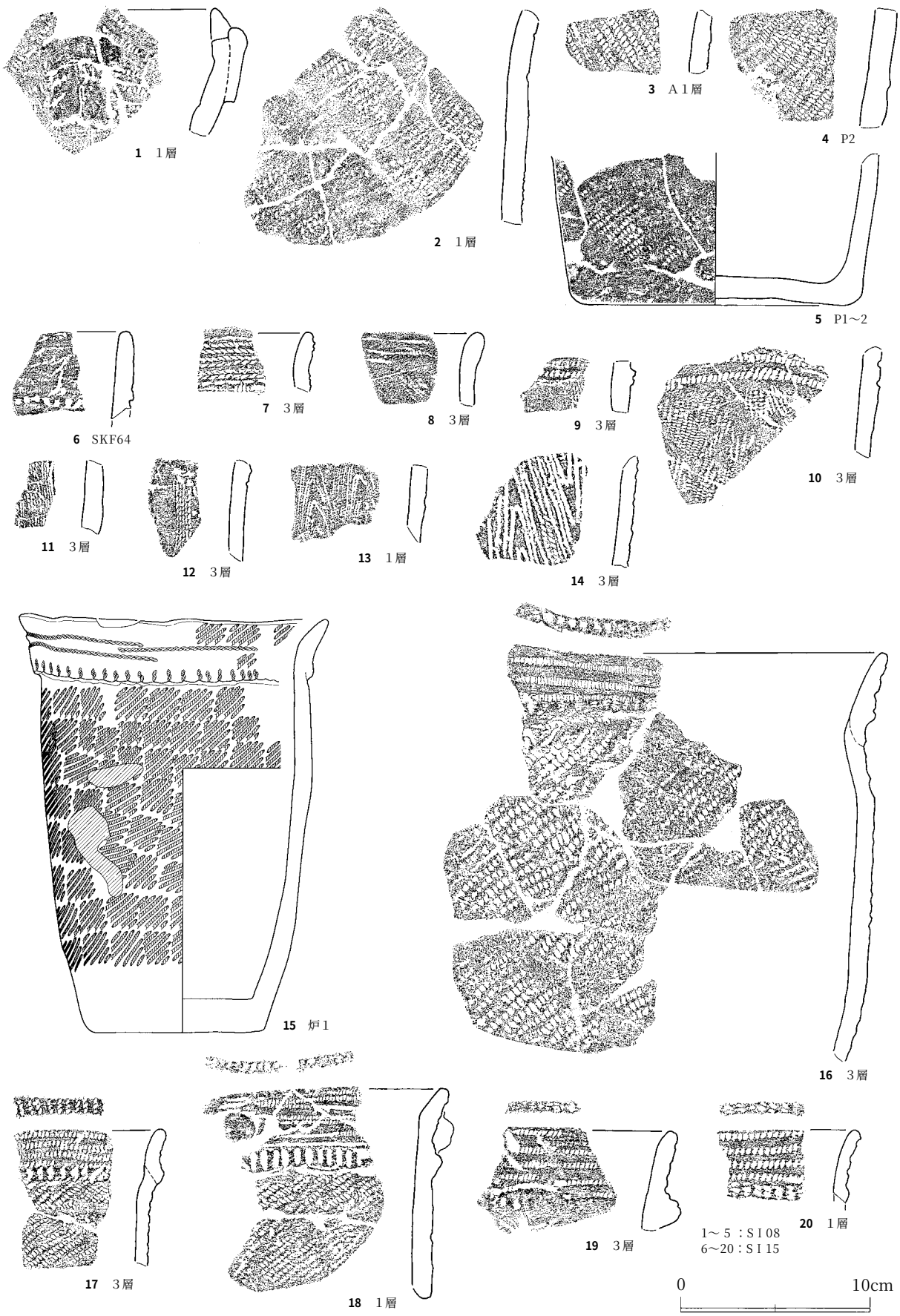
第41図　遺構内出土土器類(10)（ＳＩ06）



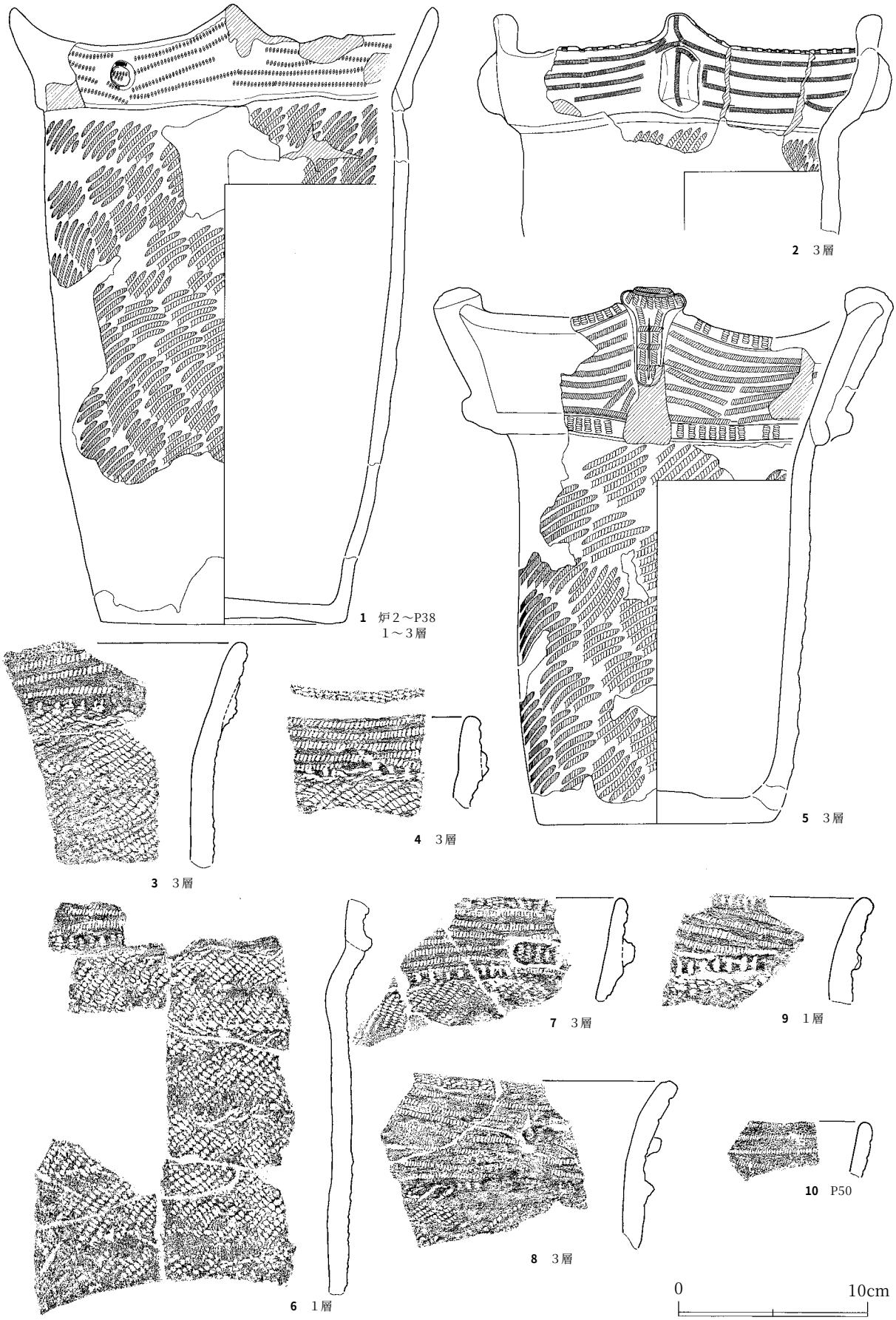
第42図　遺構内出土土器類(11)（ＳＩ06）



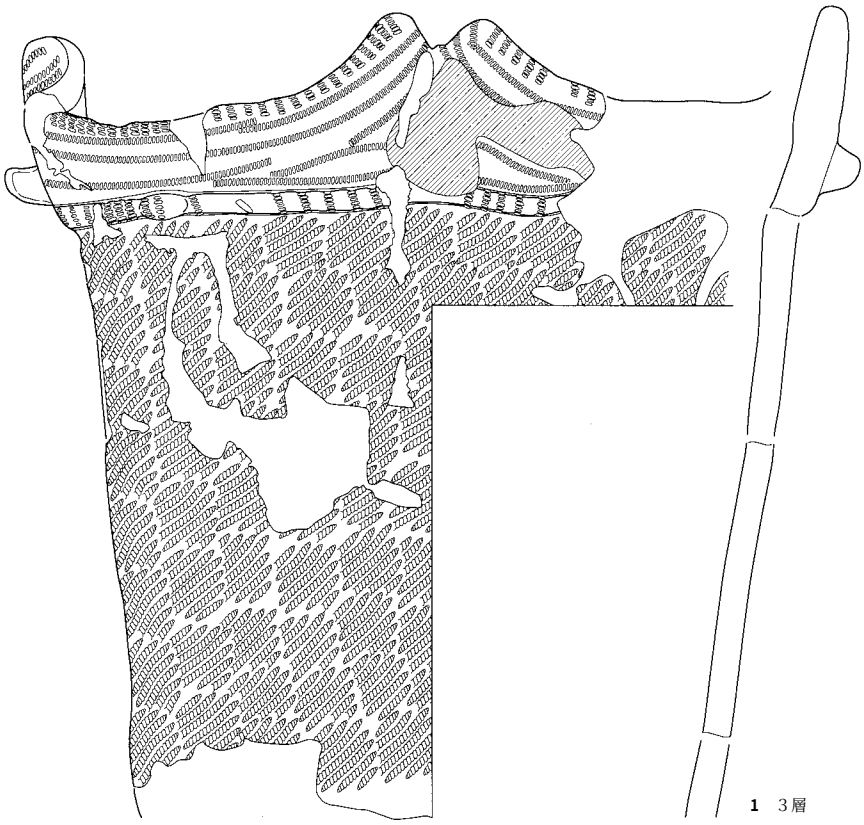
第43図　遺構内出土土器類(12)（ＳＩ06）

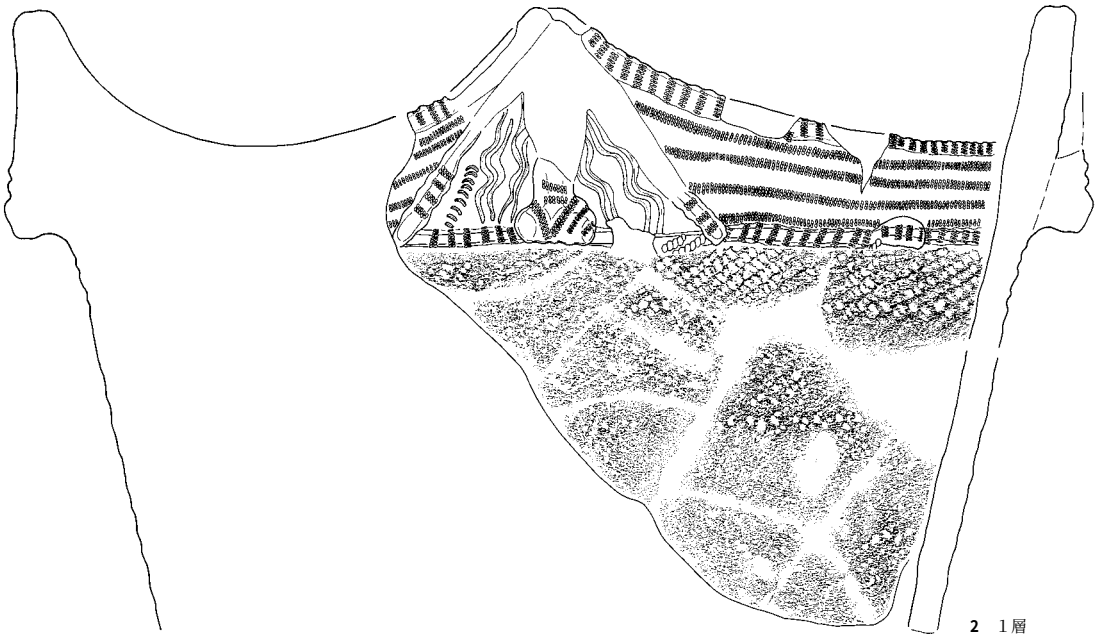


第44図　遺構内出土土器類(13)（ＳＩ08･15）



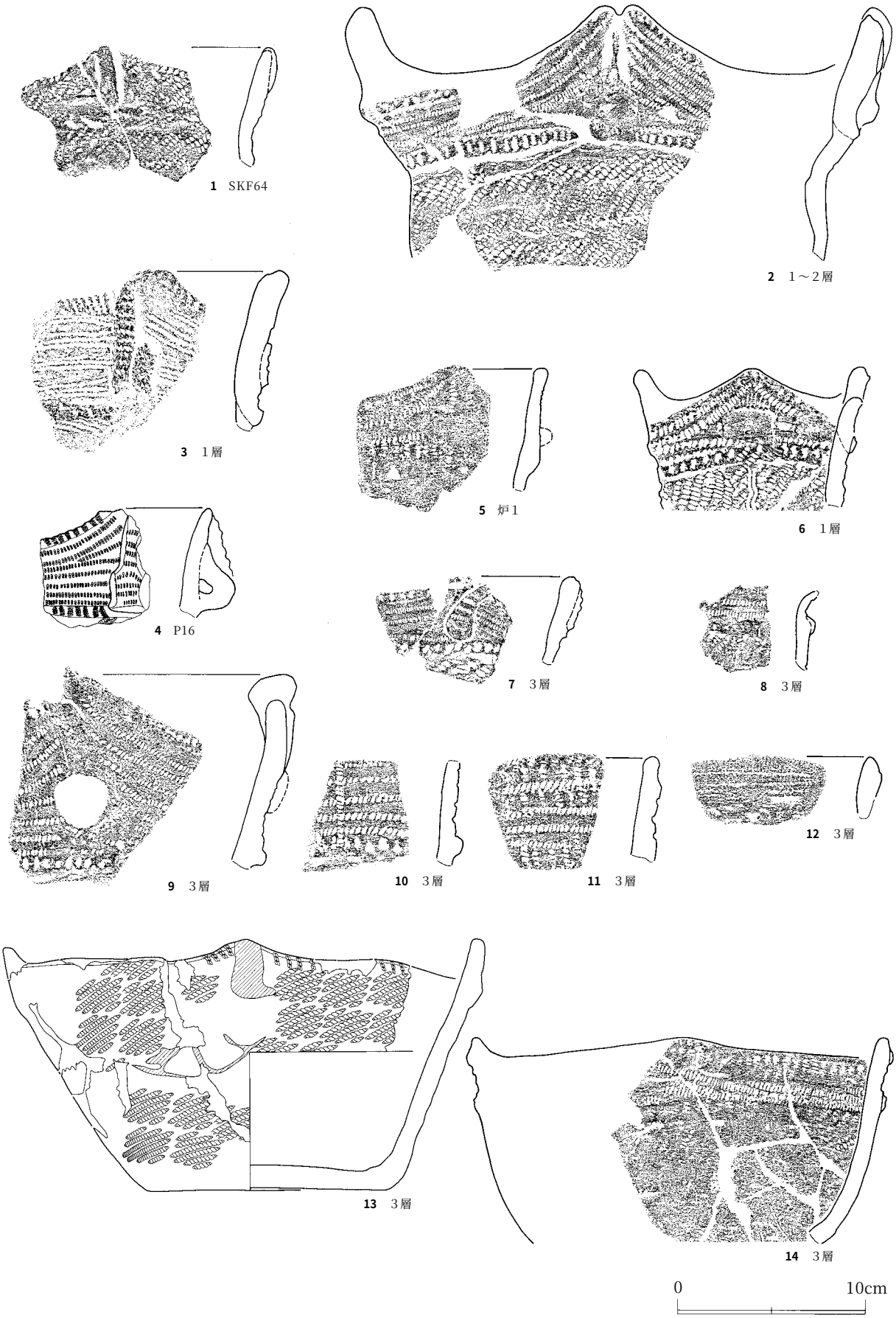
第45図　遺構内出土土器類(14)（ＳＩ15）



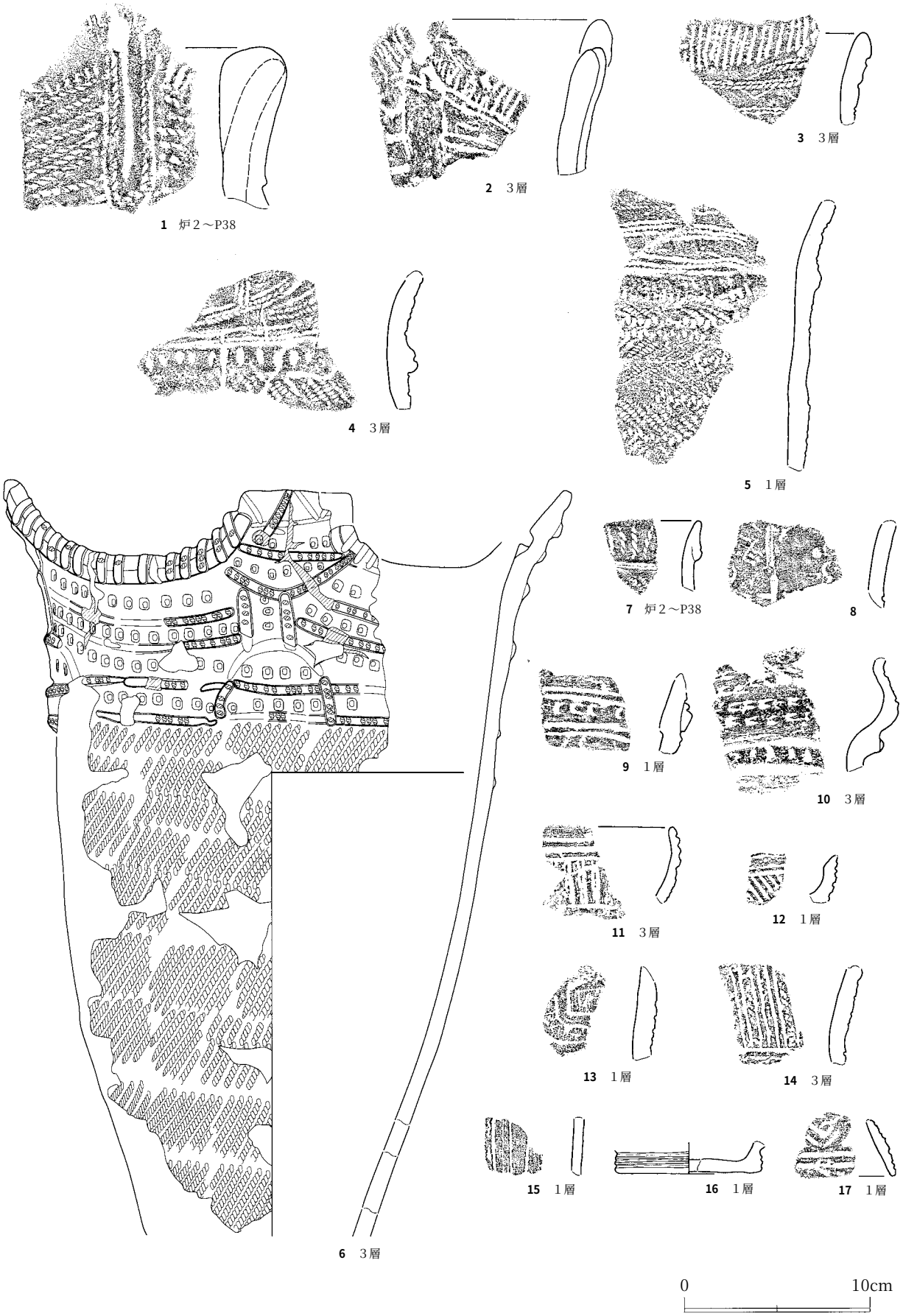


0 10cm

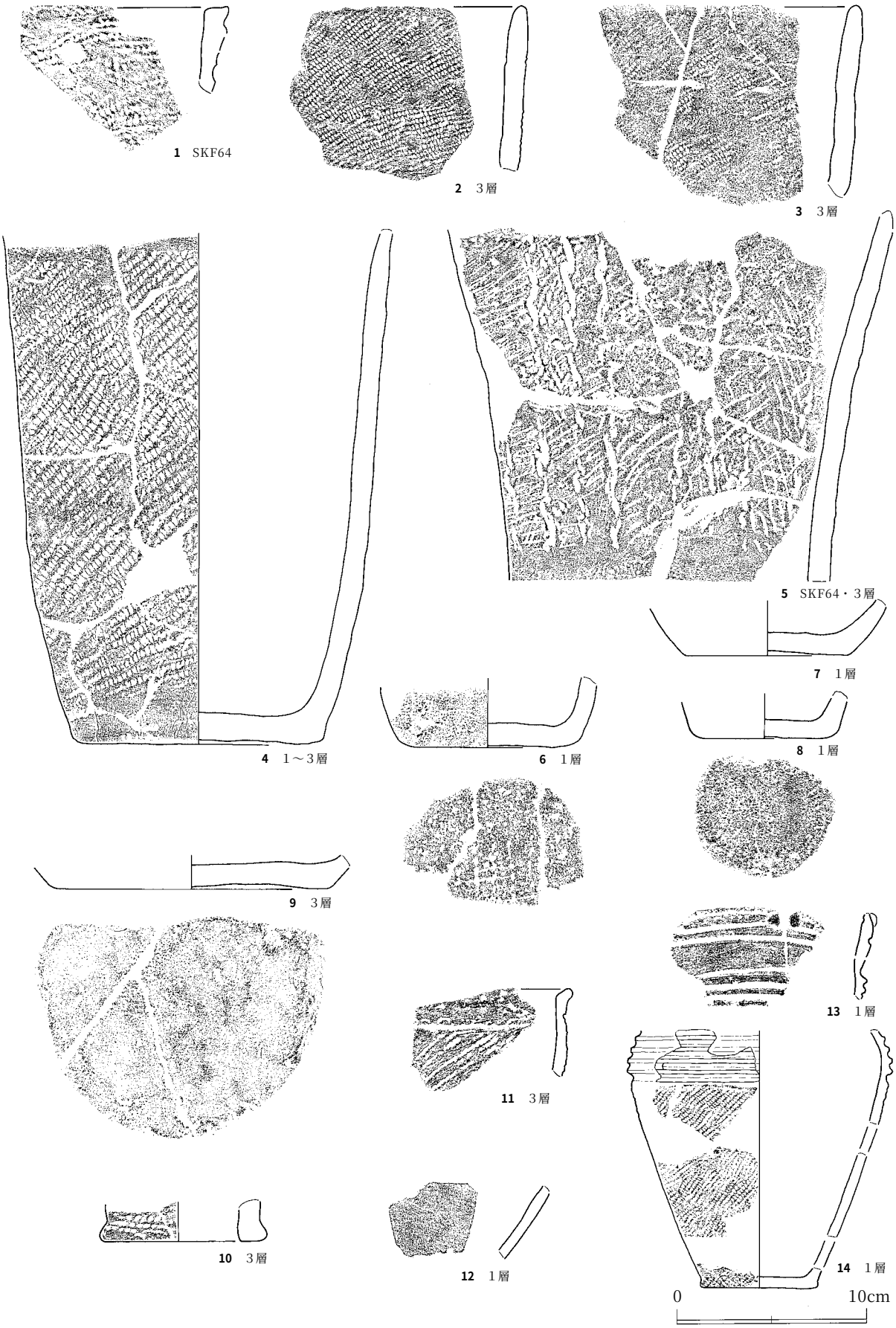
第46図　遺構内出土土器類(15)（ＳＩ15）



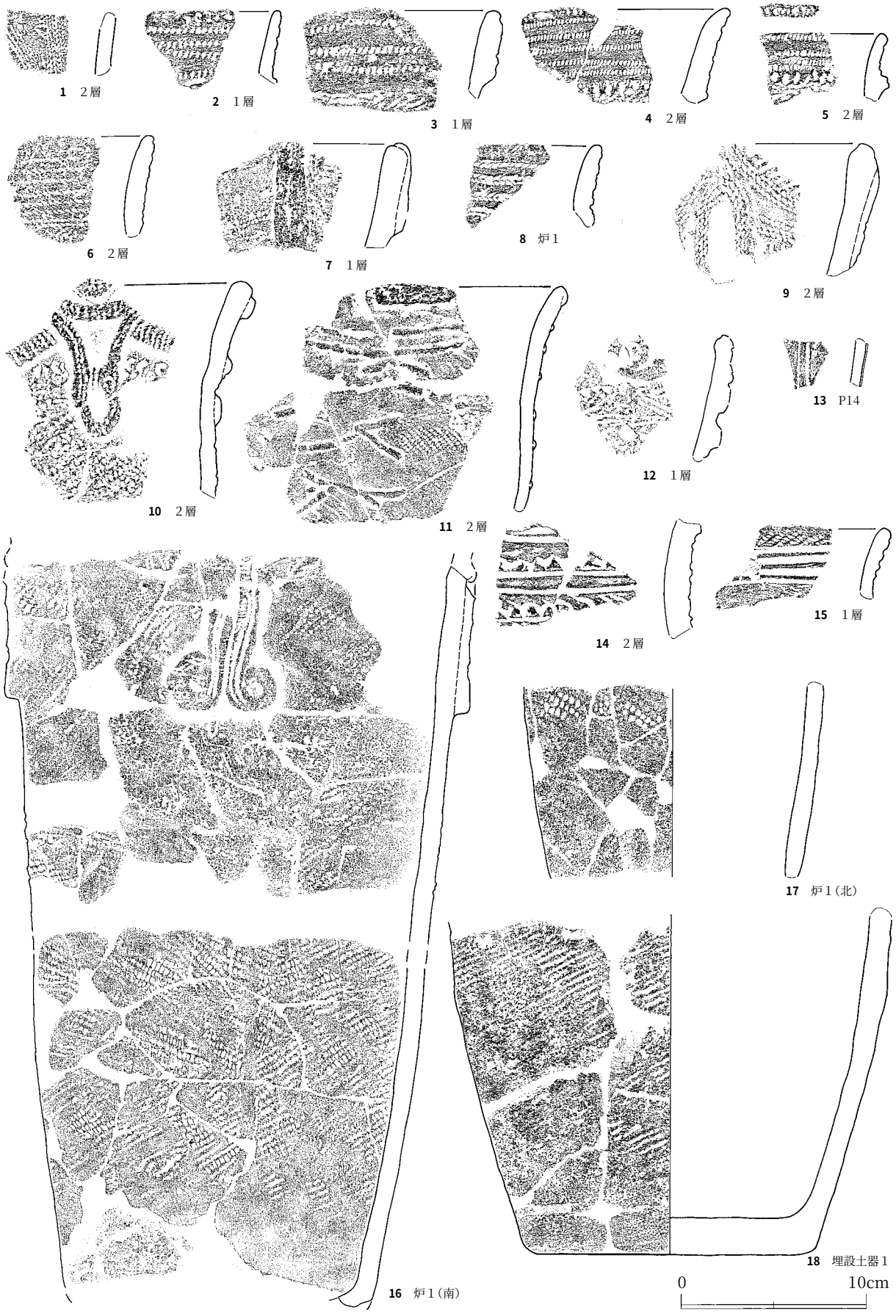
第47図　遺構内出土土器類(16)（ＳＩ15）



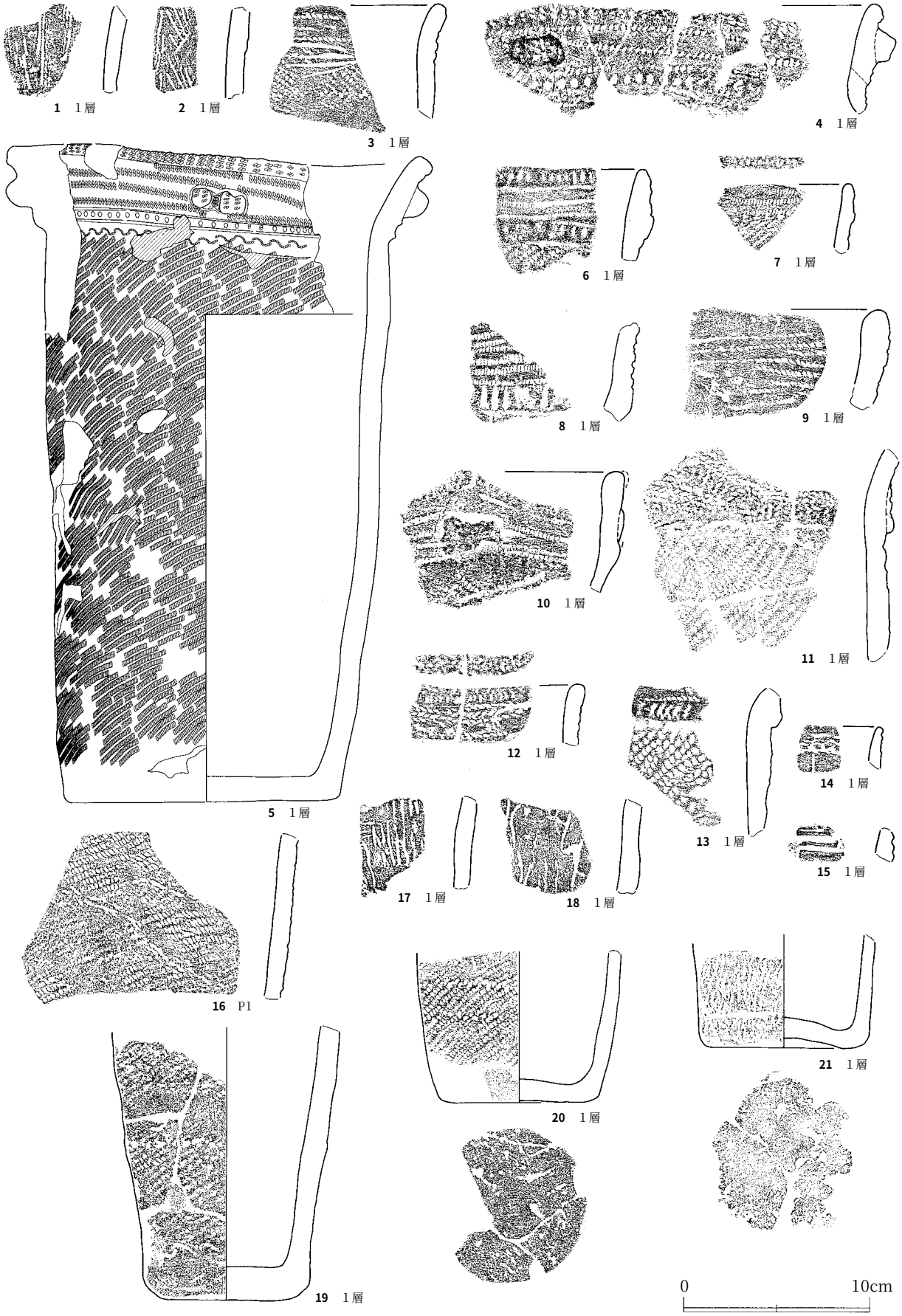
第48図　遺構内出土土器類(17)（ＳＩ15）



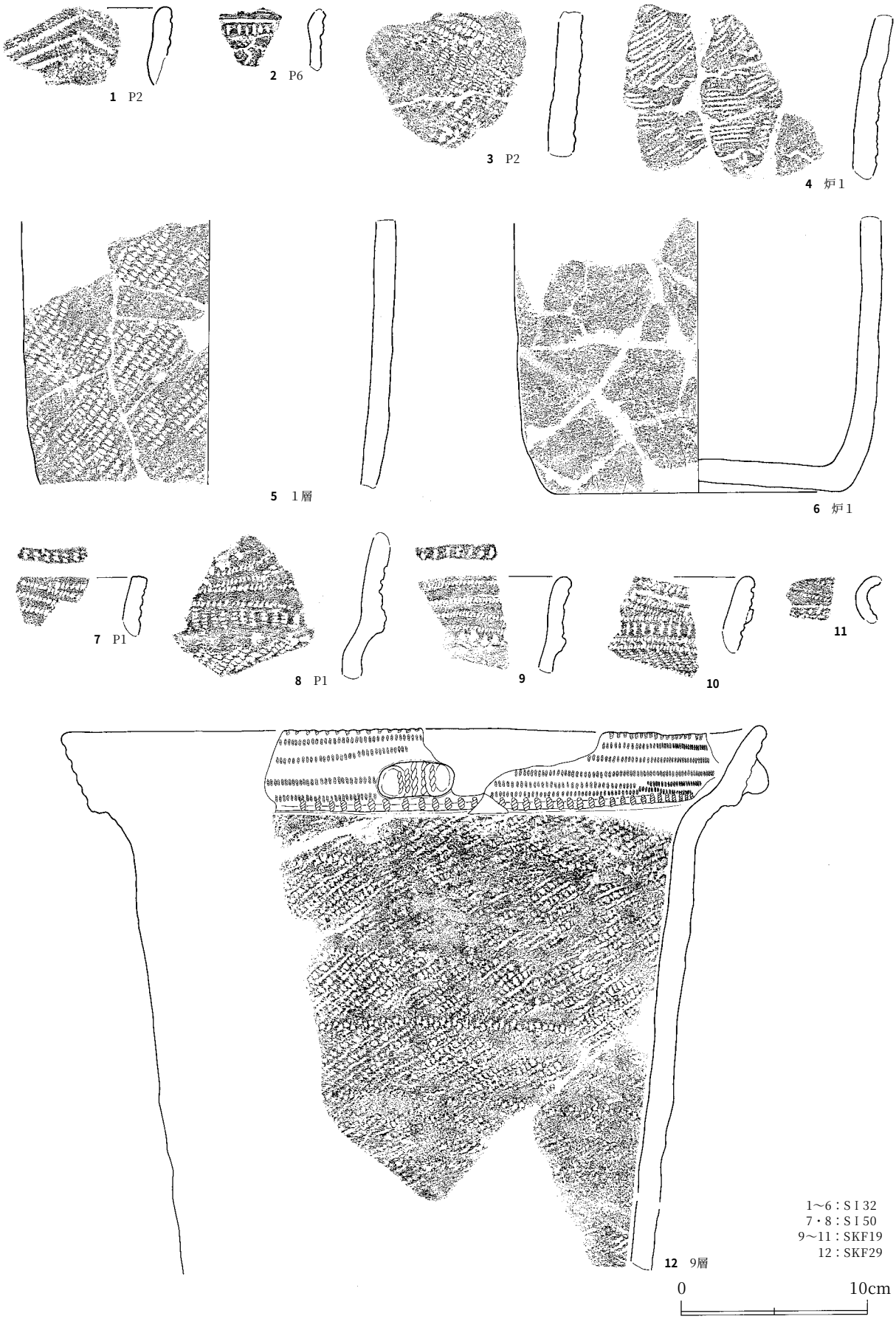
第49図　遺構内出土土器類(18)（ＳＩ15）



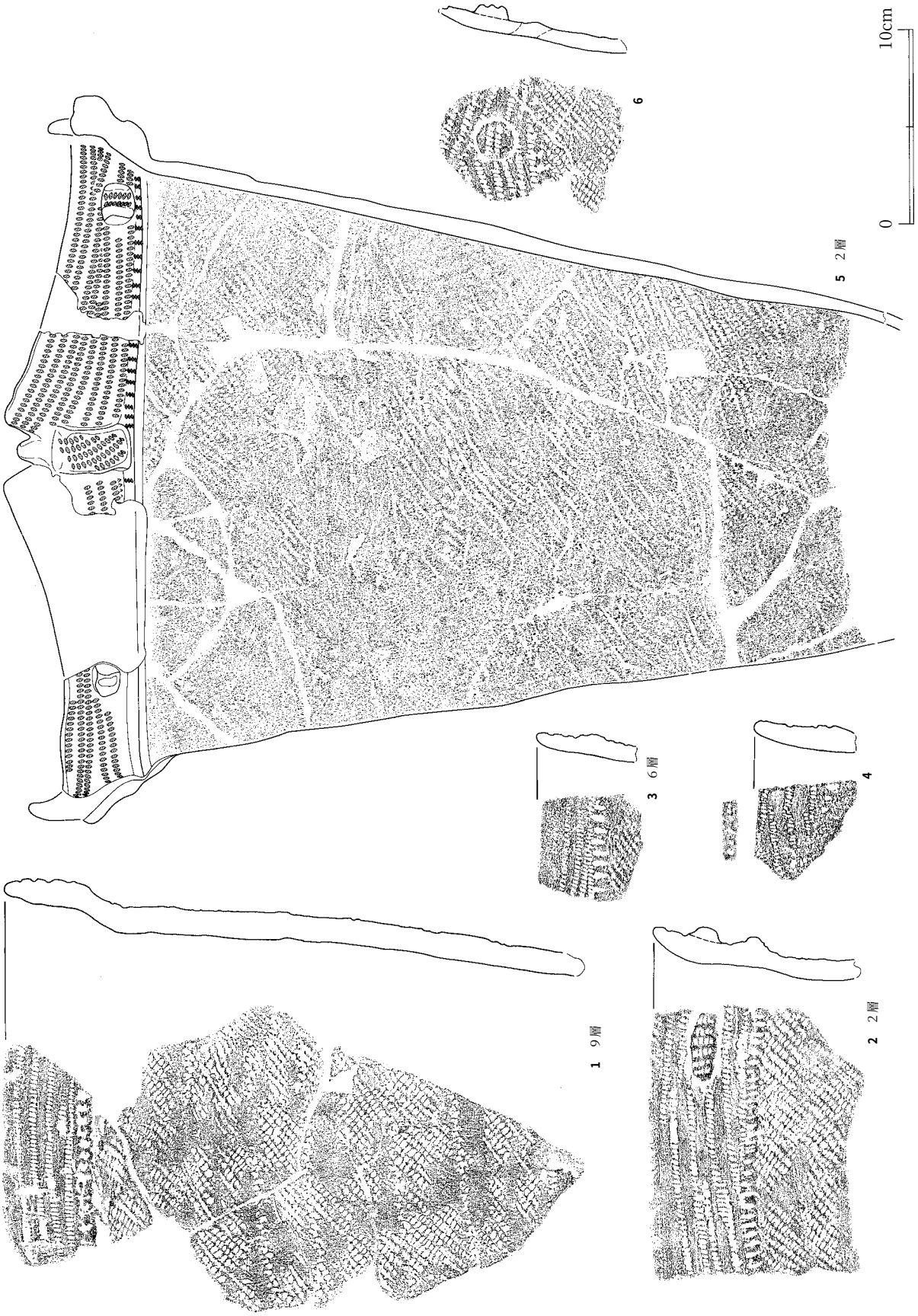
第50図　遺構内出土土器類(19)(ＳＩ16A)



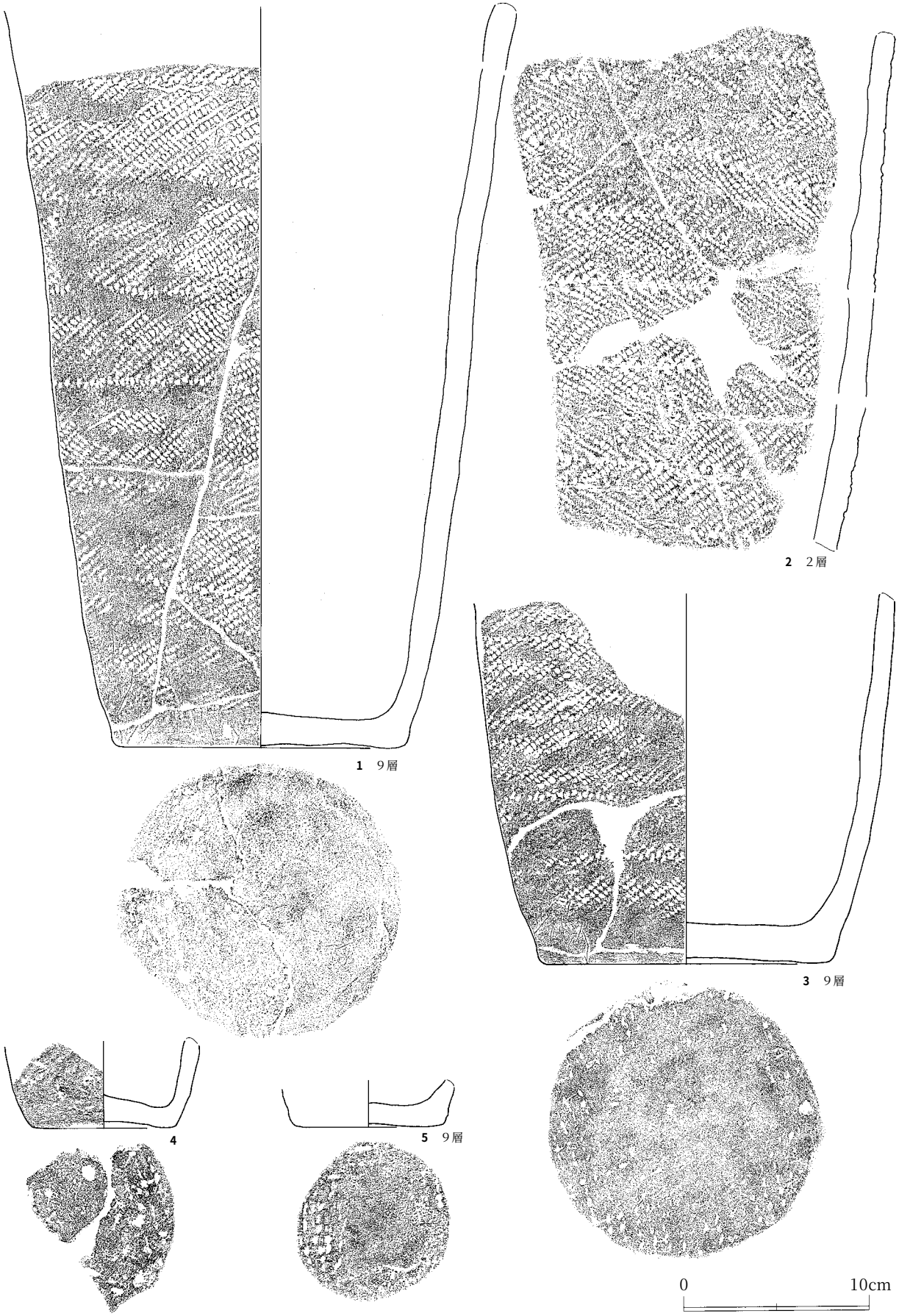
第51図　遺構内出土土器類(20)（ＳＩ16Ｂ）



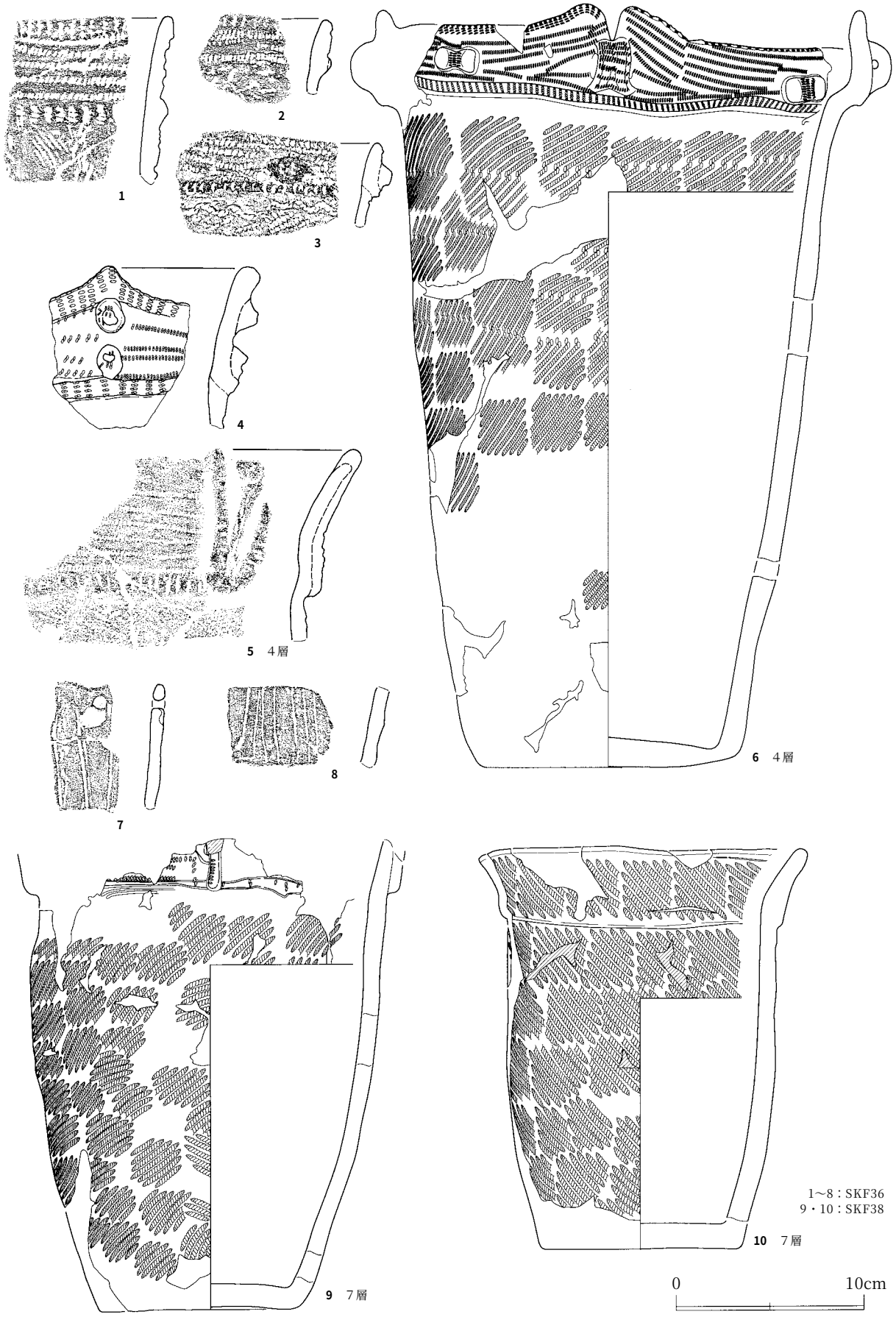
第52図　遺構内出土土器類(21)（ＳＩ32･50、ＳＫＦ19･29）



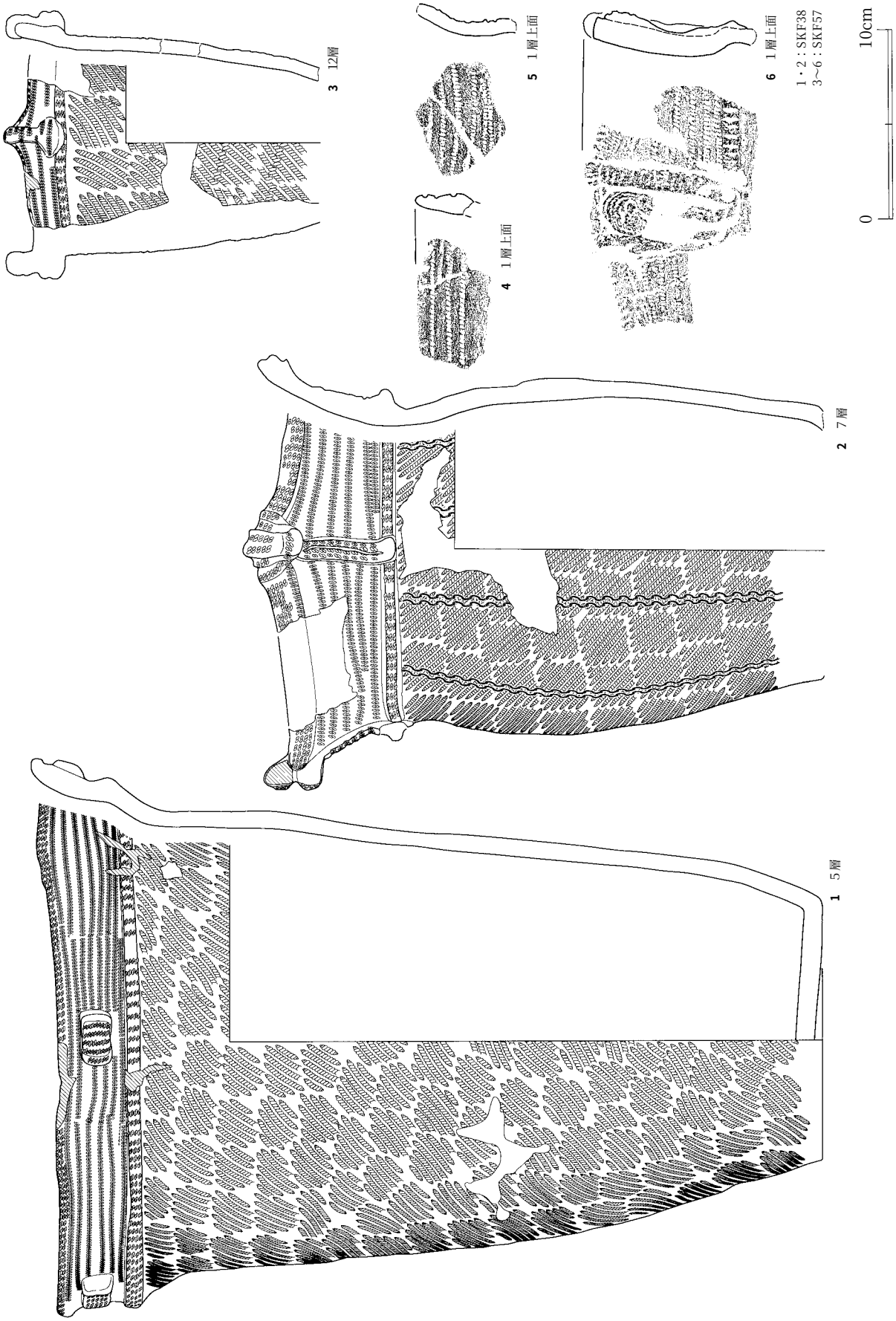
第53図　遺構内出土土器類(22)（ＳＫＦ29）



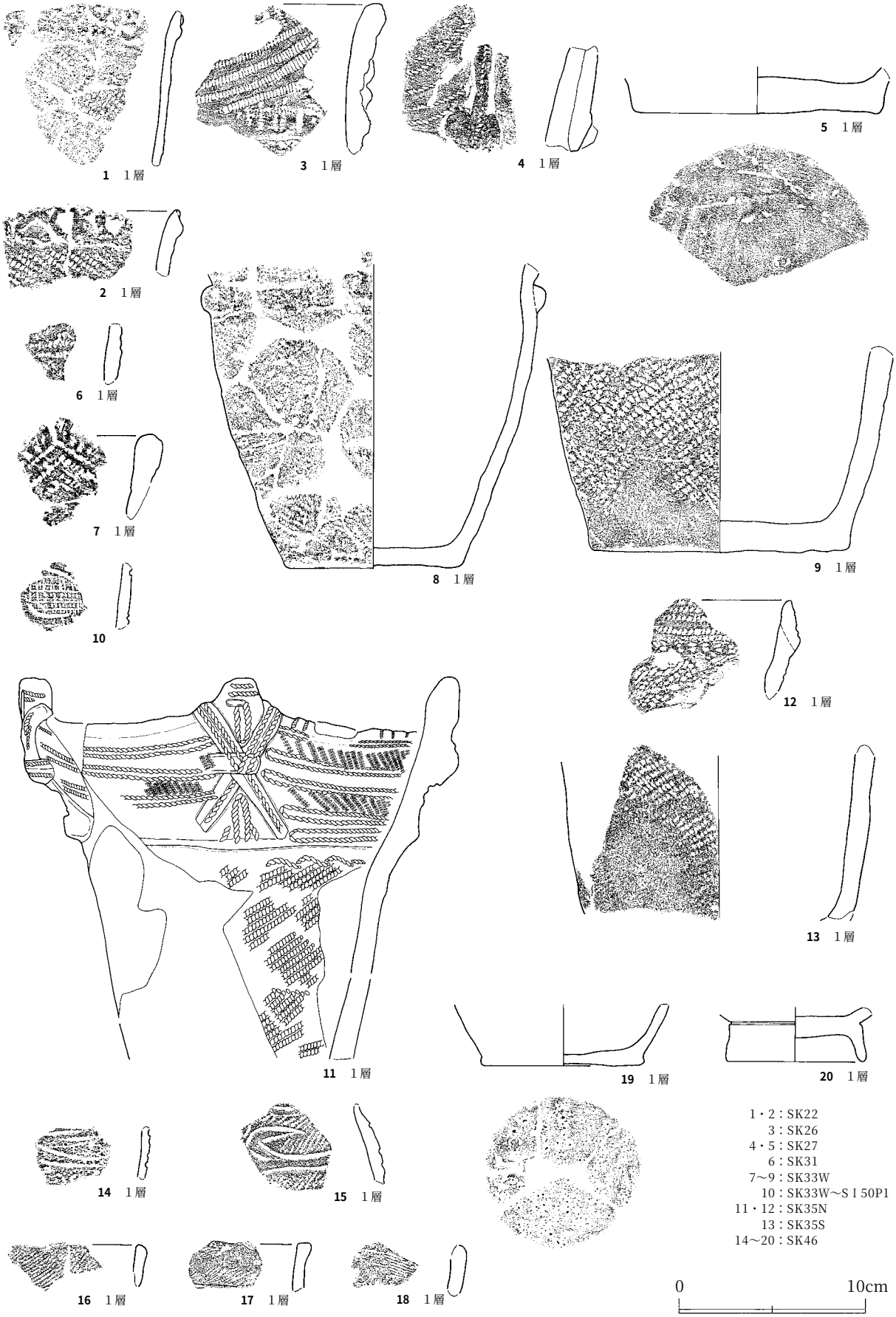
第54図　遺構内出土土器類(23)（ＳＫＦ29）



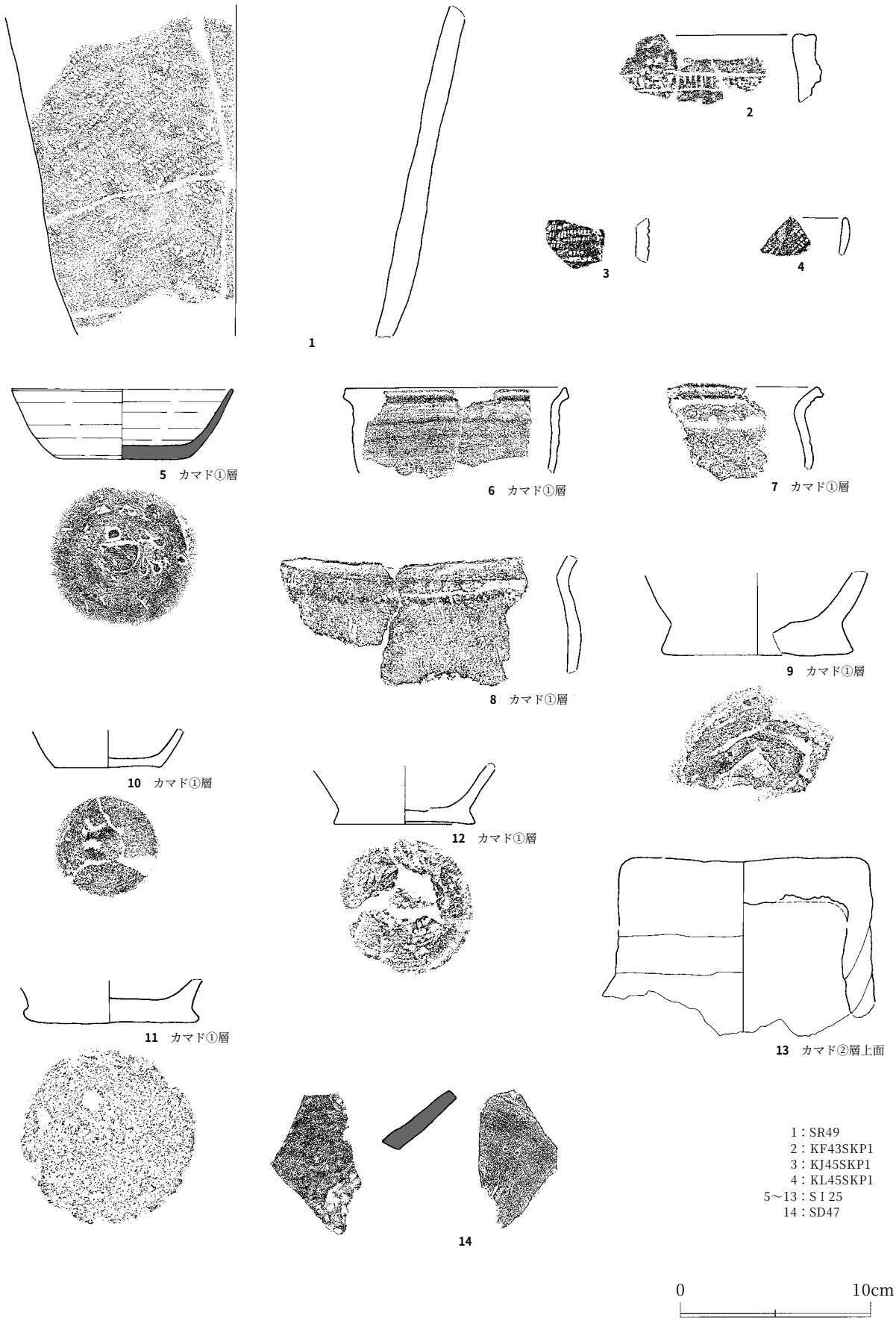
第55図　遺構内出土土器類(24)（ＳＫＦ36･38）



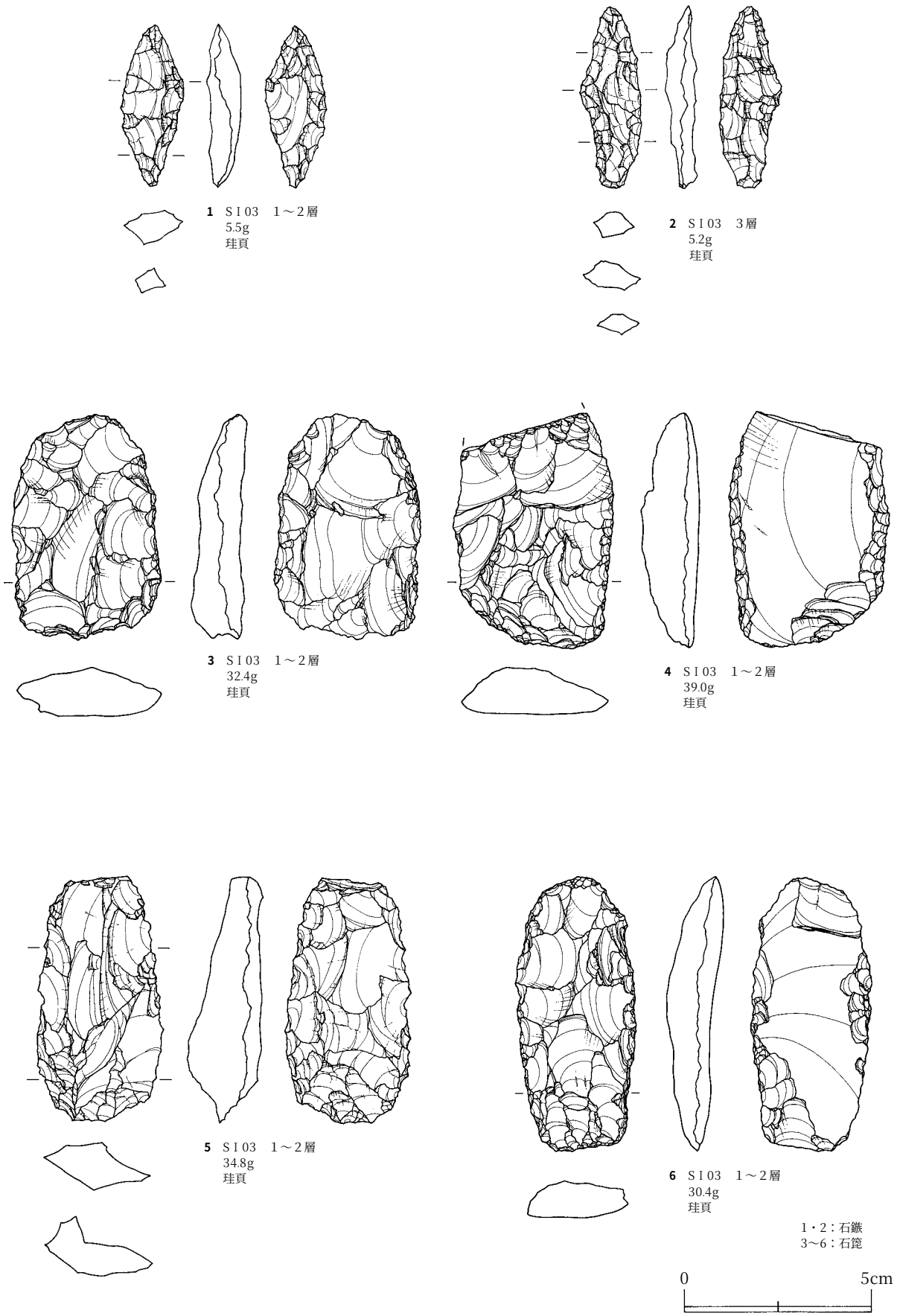
第56図　遺構内出土土器類(25)（ＳＫＦ38･57）



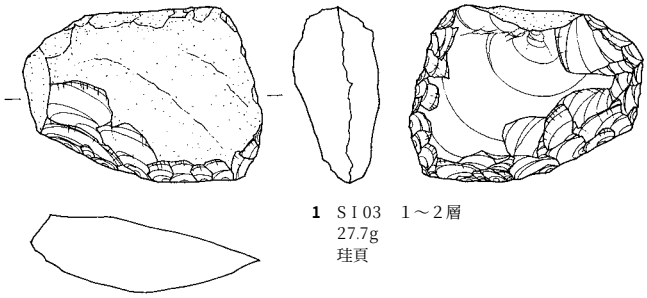
第57図　遺構内出土土器類(26)（ＳＫ22･26･27･31･33W･35N･35Ｓ･46）



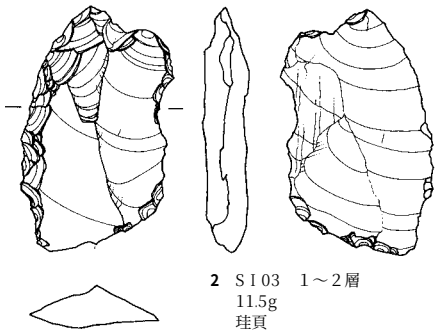
第58図　遺構内出土土器類(27)（ＳR49、ＳＫＰ、ＳＩ25、ＳD47）



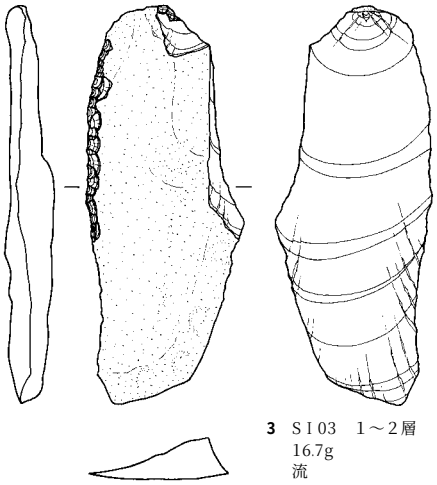
第59図　遺構内出土石器類（１）（ＳＩ03）



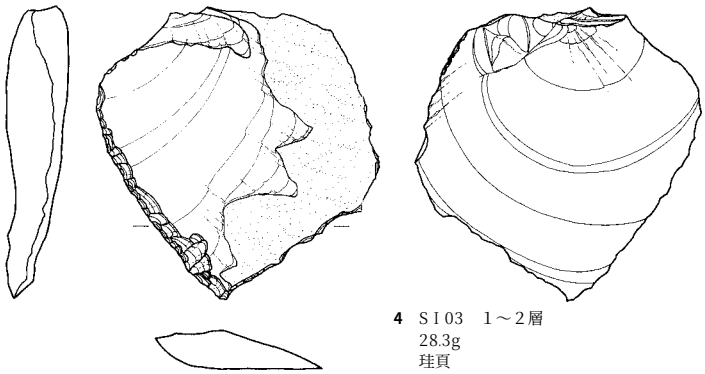
1 ＳＩ03　１～２層
27.7g
珪頁



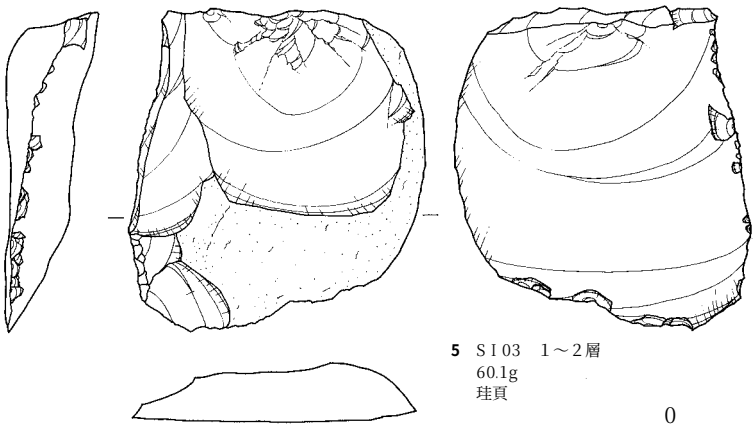
2 ＳＩ03　１～２層
11.5g
珪頁



3 ＳＩ03　１～２層
16.7g
流



4 ＳＩ03　１～２層
28.3g
珪頁

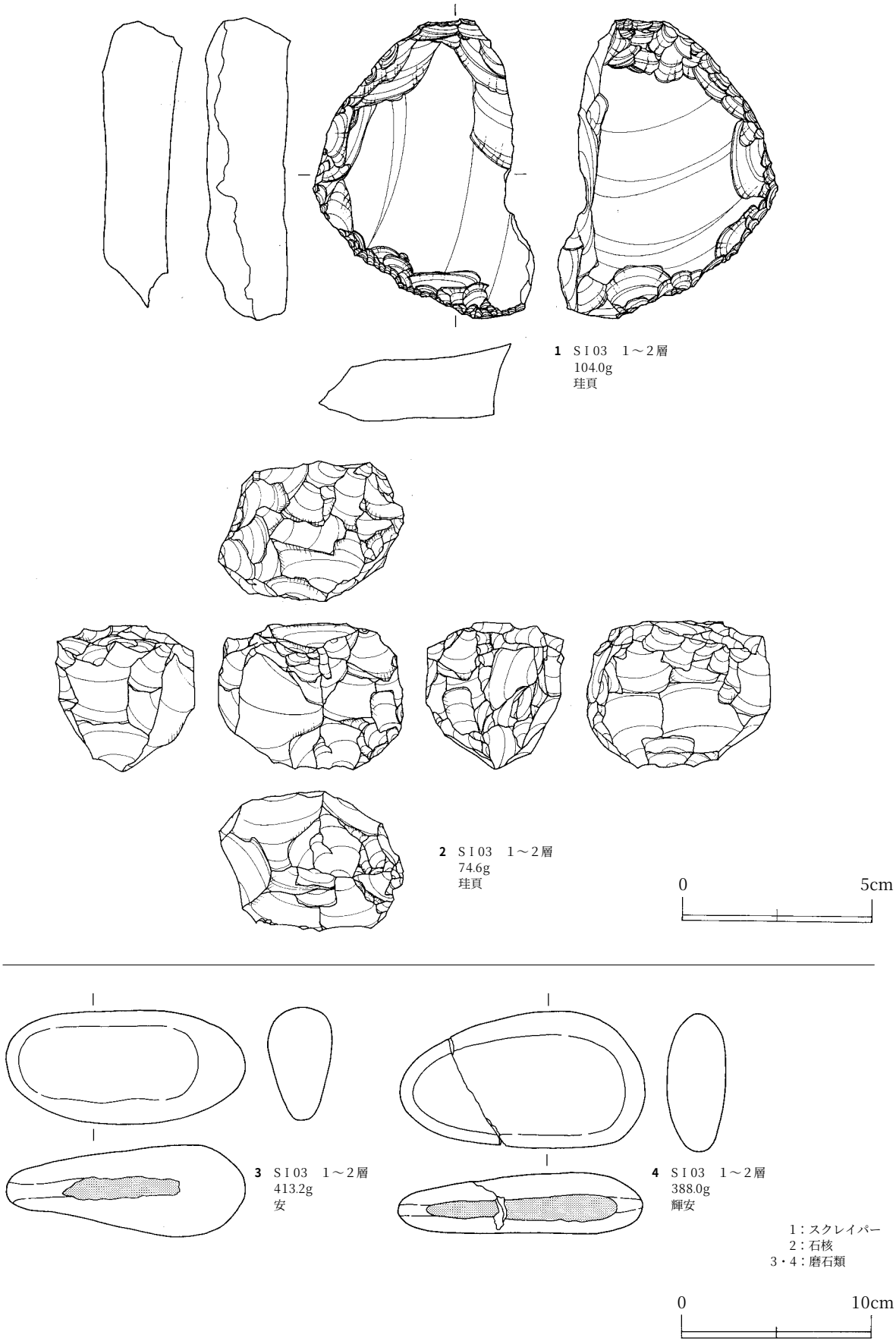


5 ＳＩ03　１～２層
60.1g
珪頁

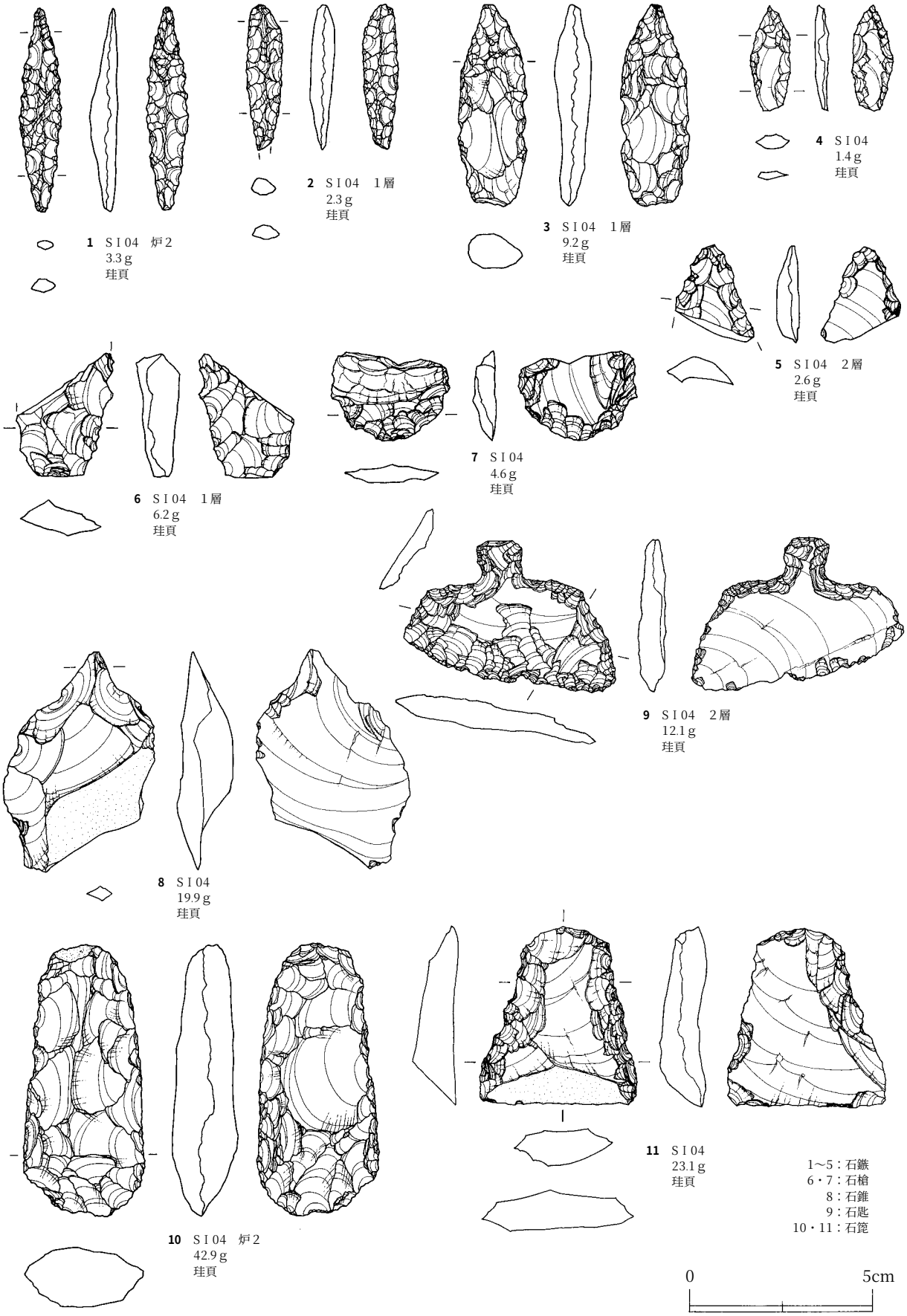
1～5：スクレイパー

0　5cm

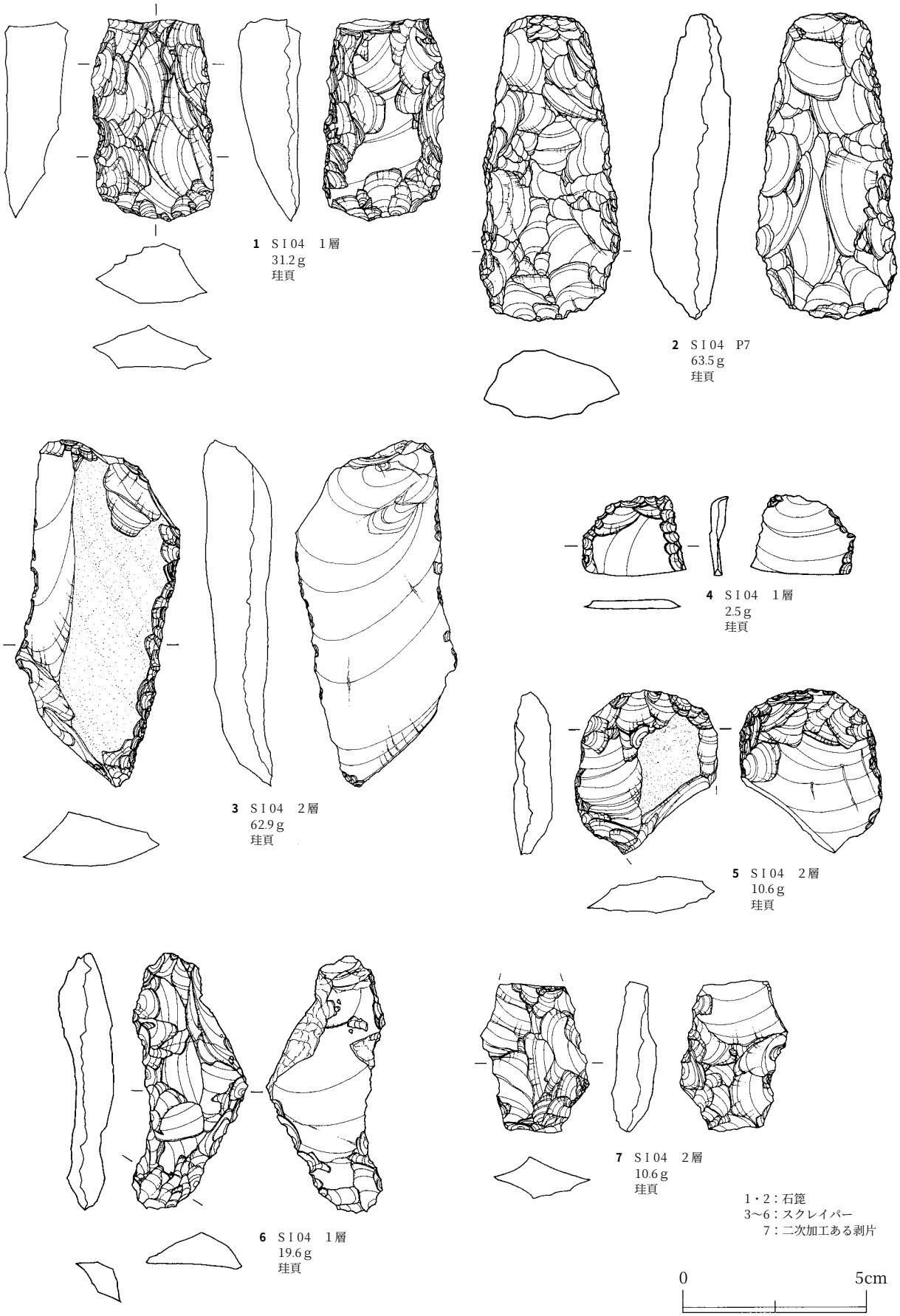
第60図　遺構内出土石器類（２）（ＳＩ03）



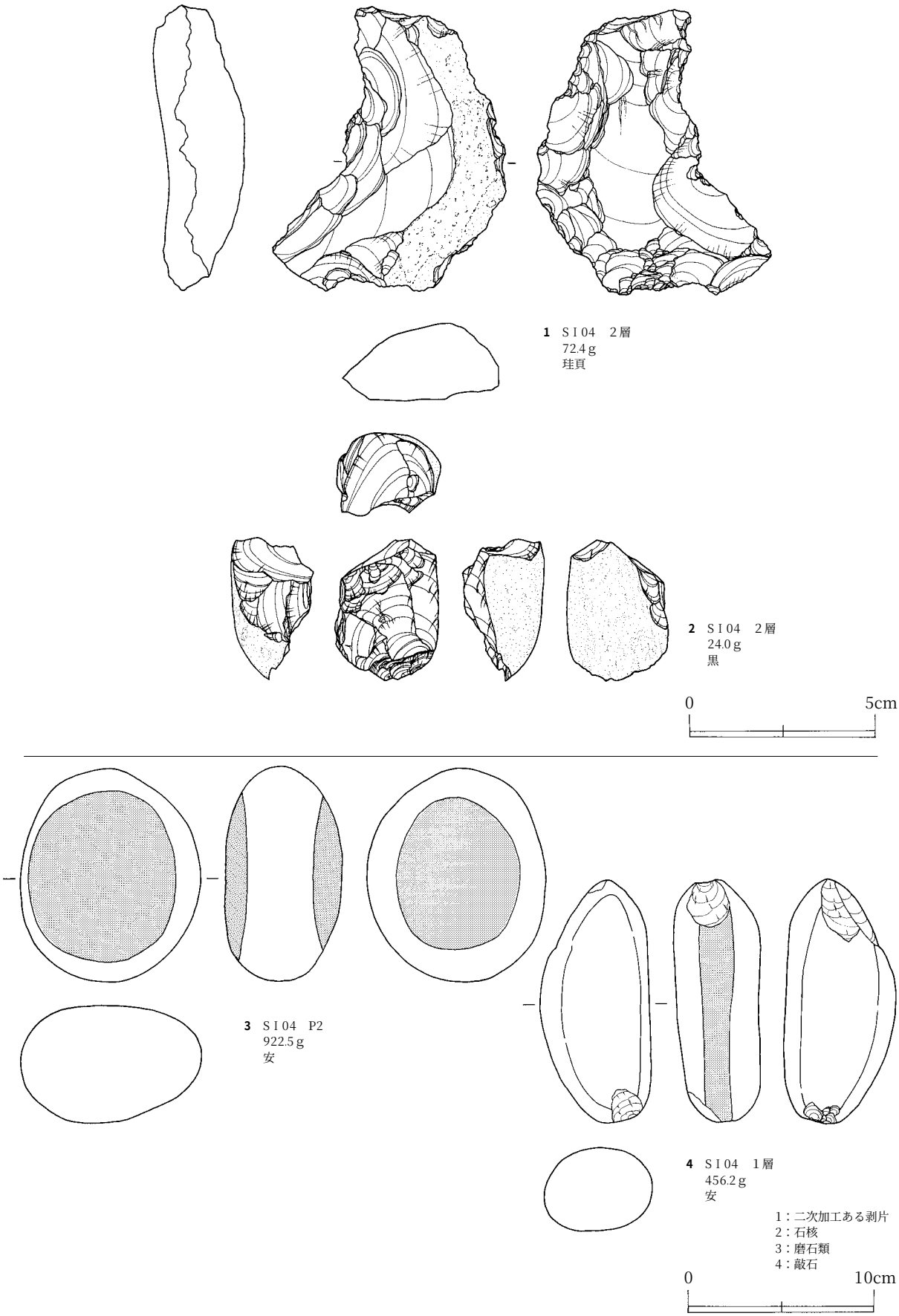
第61図　遺構内出土石器類（３）（ＳＩ03）



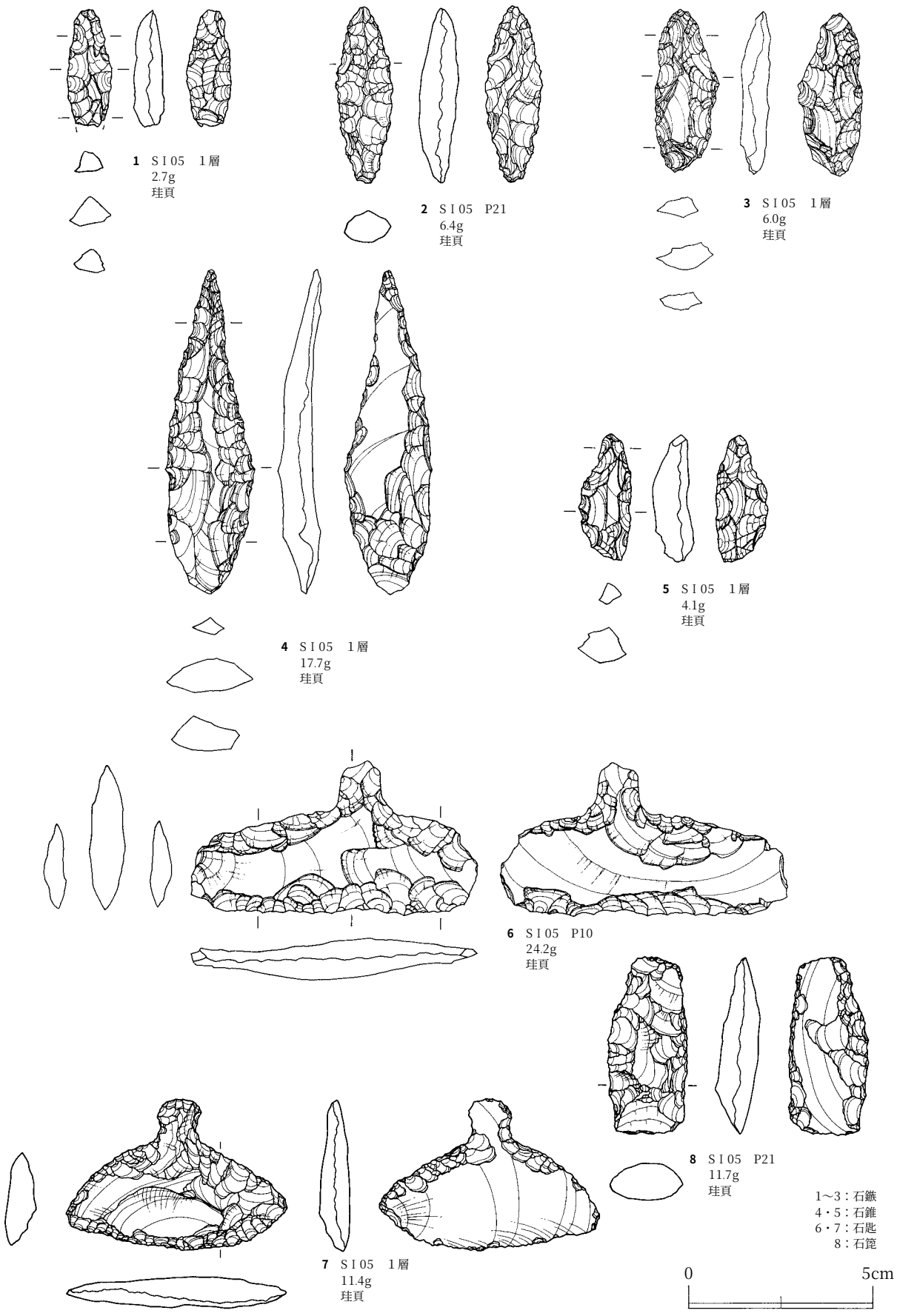
第62図　遺構内出土石器類（4）（SI04）



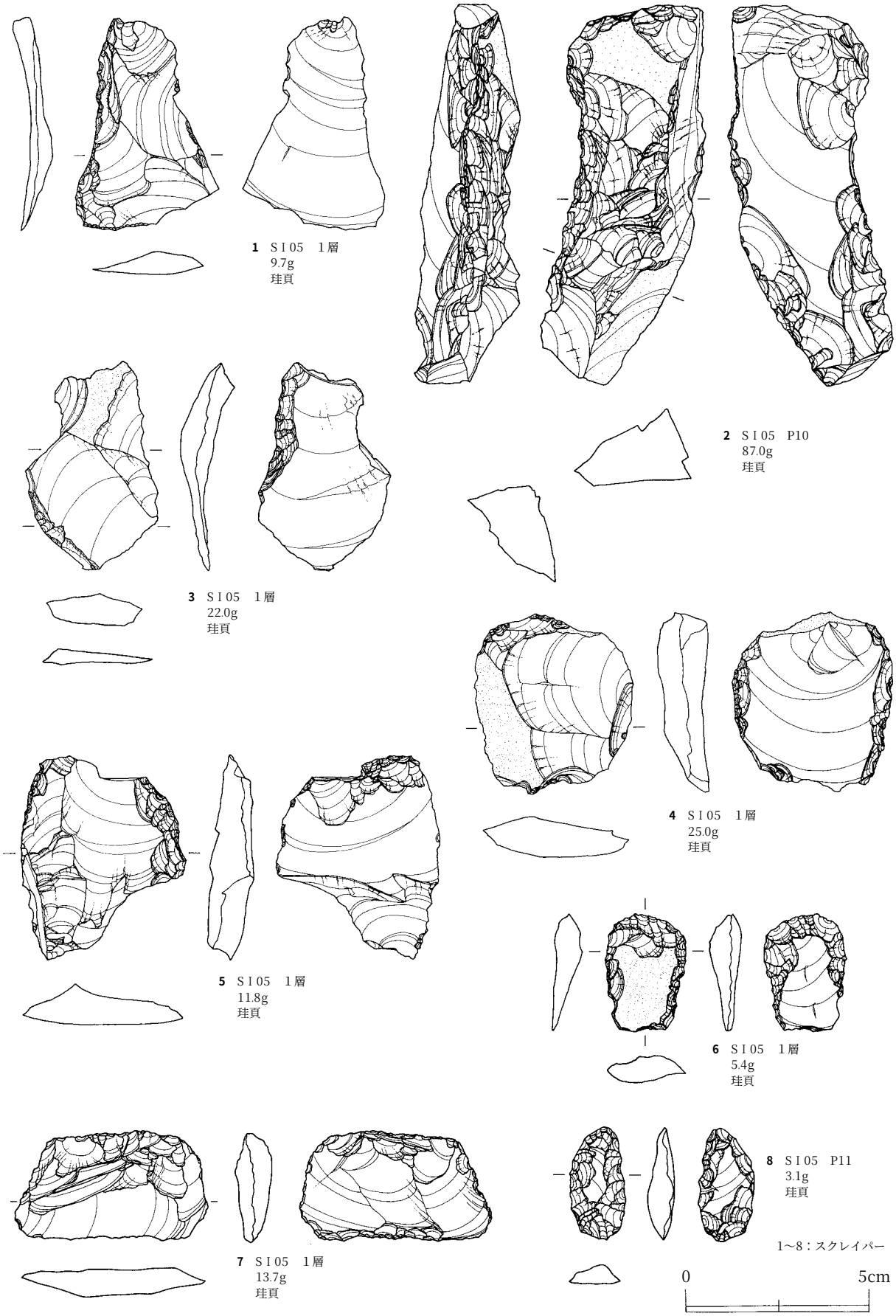
第63図　遺構内出土石器類（５）（ＳＩ04）



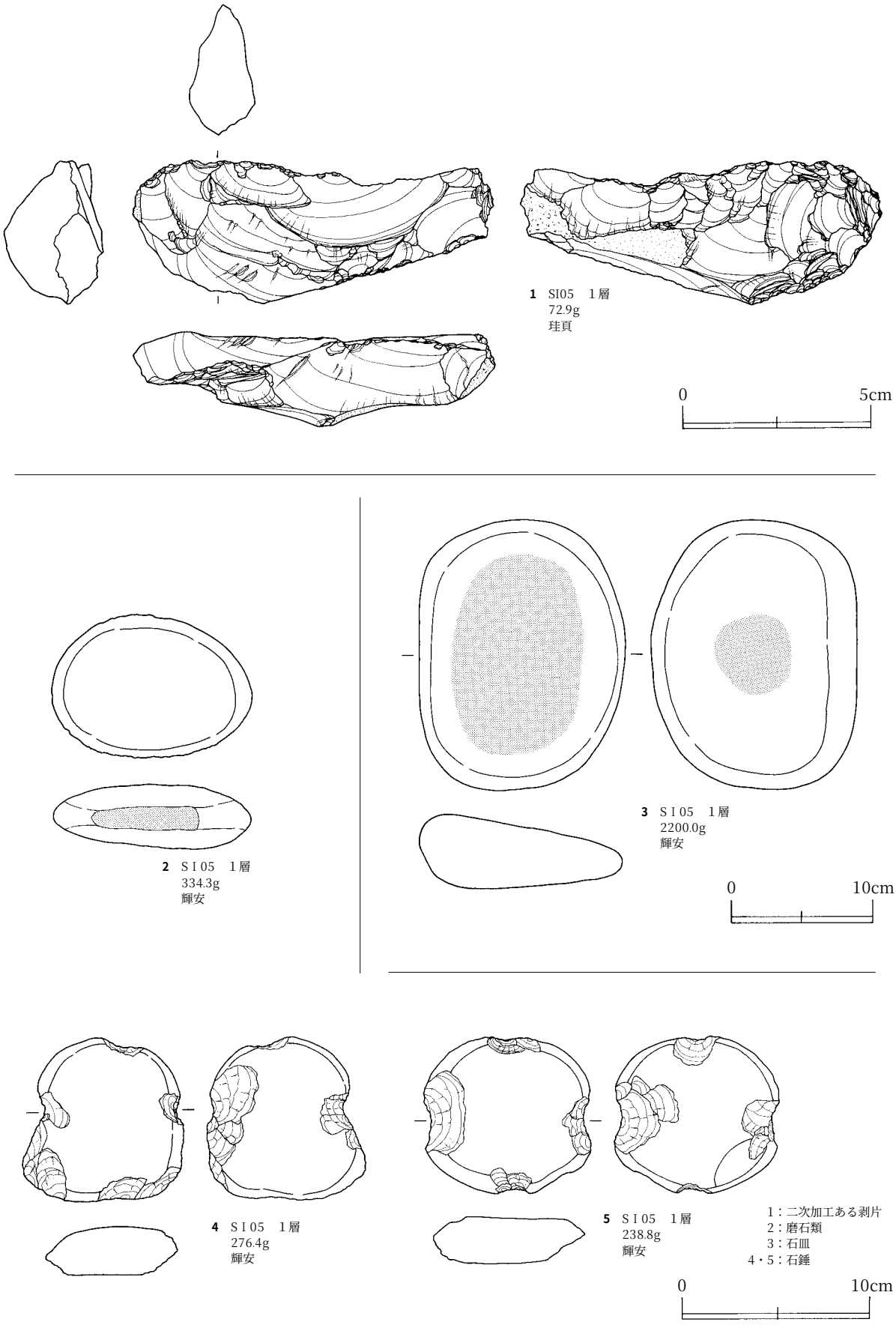
第64図　遺構内出土石器類（6）（SI04）



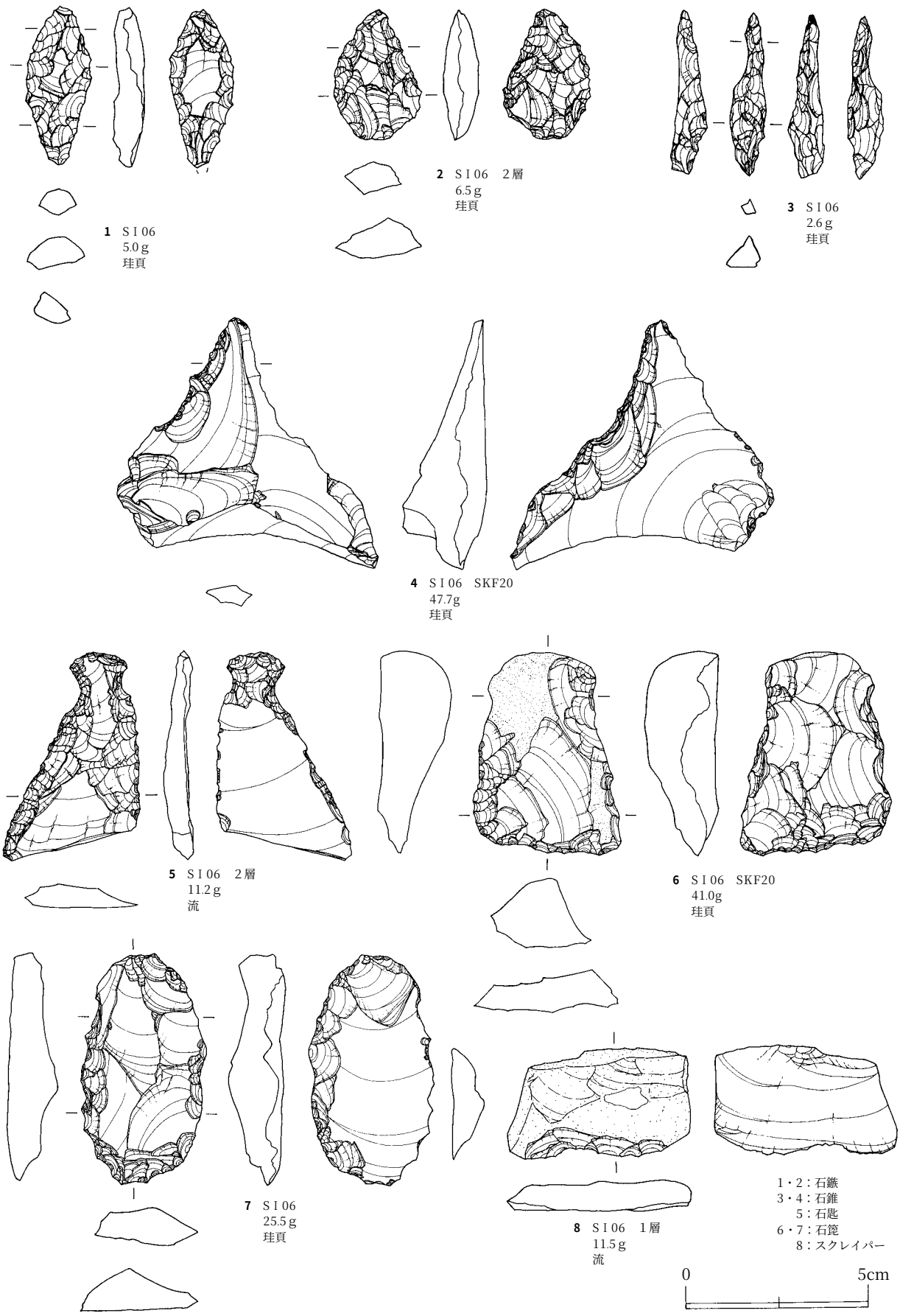
第65図　遺構内出土石器類（７）（ＳＩ05）



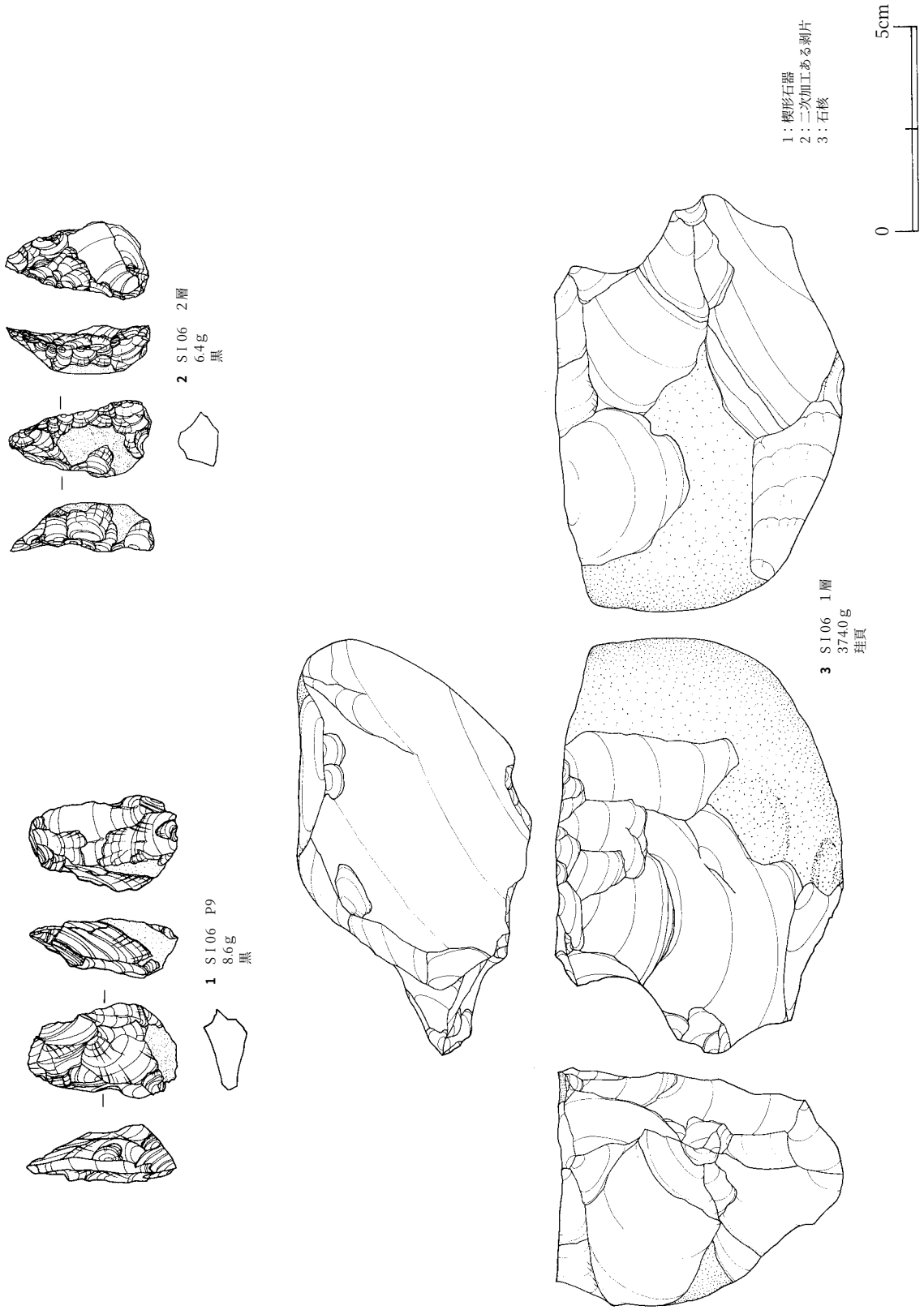
第66図　遺構内出土石器類（8）（SI05）



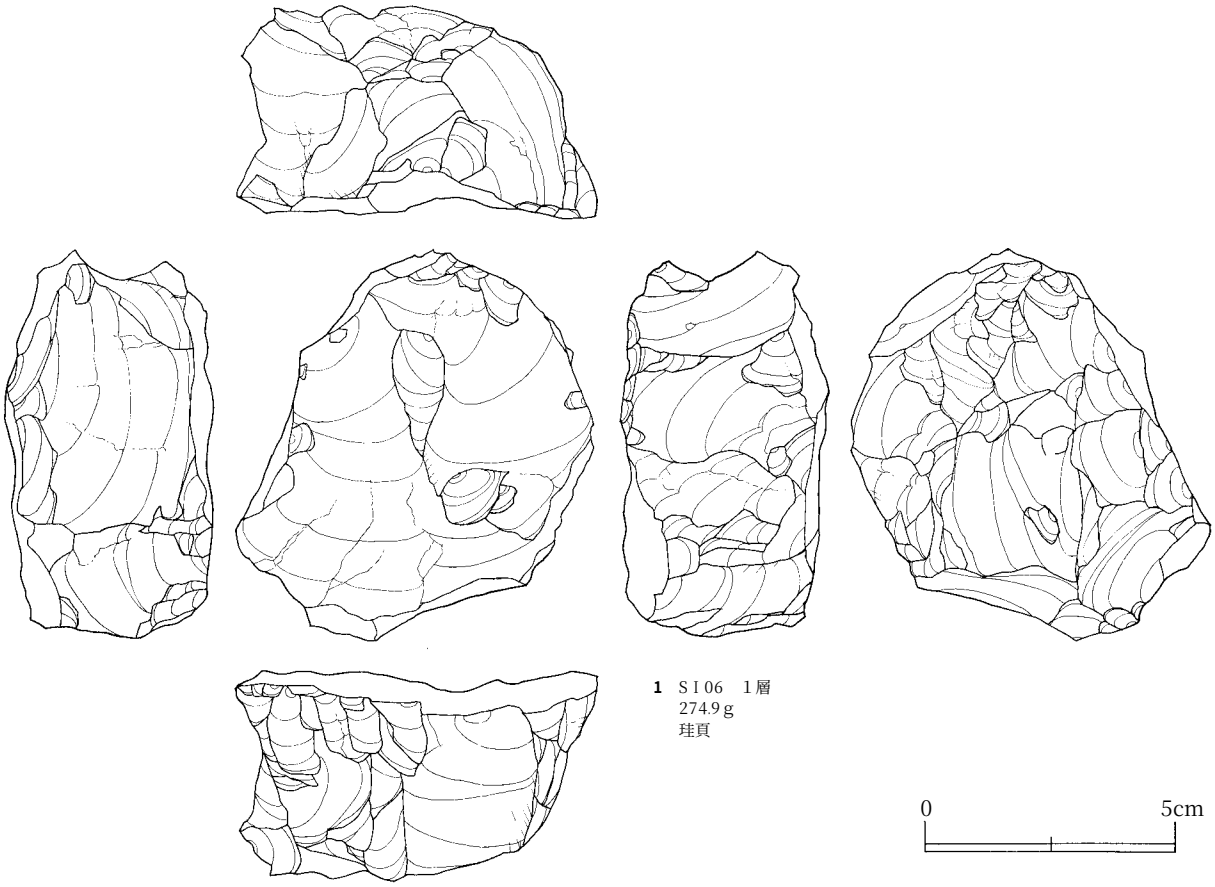
第67図　遺構内出土石器類（９）（ＳＩ05）

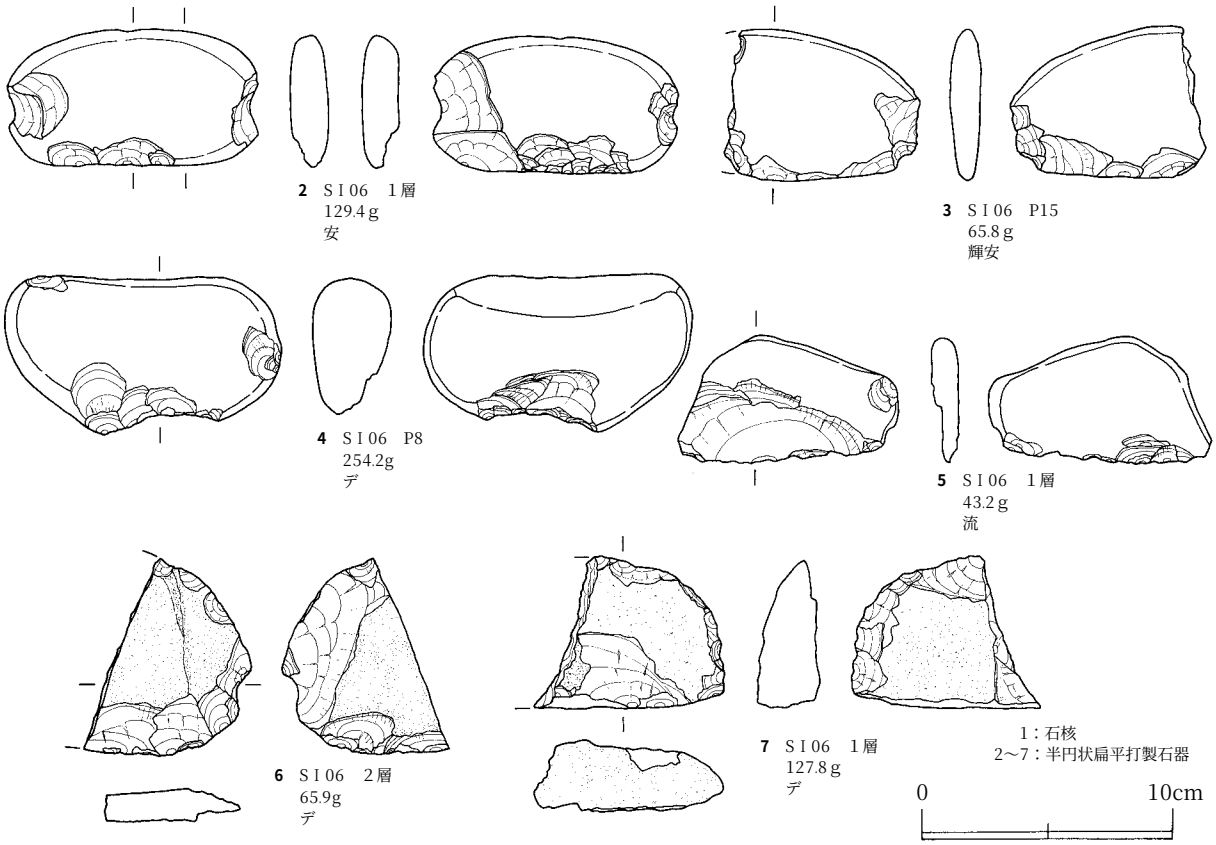


第68図　遺構内出土石器類(10)（ＳＩ06）

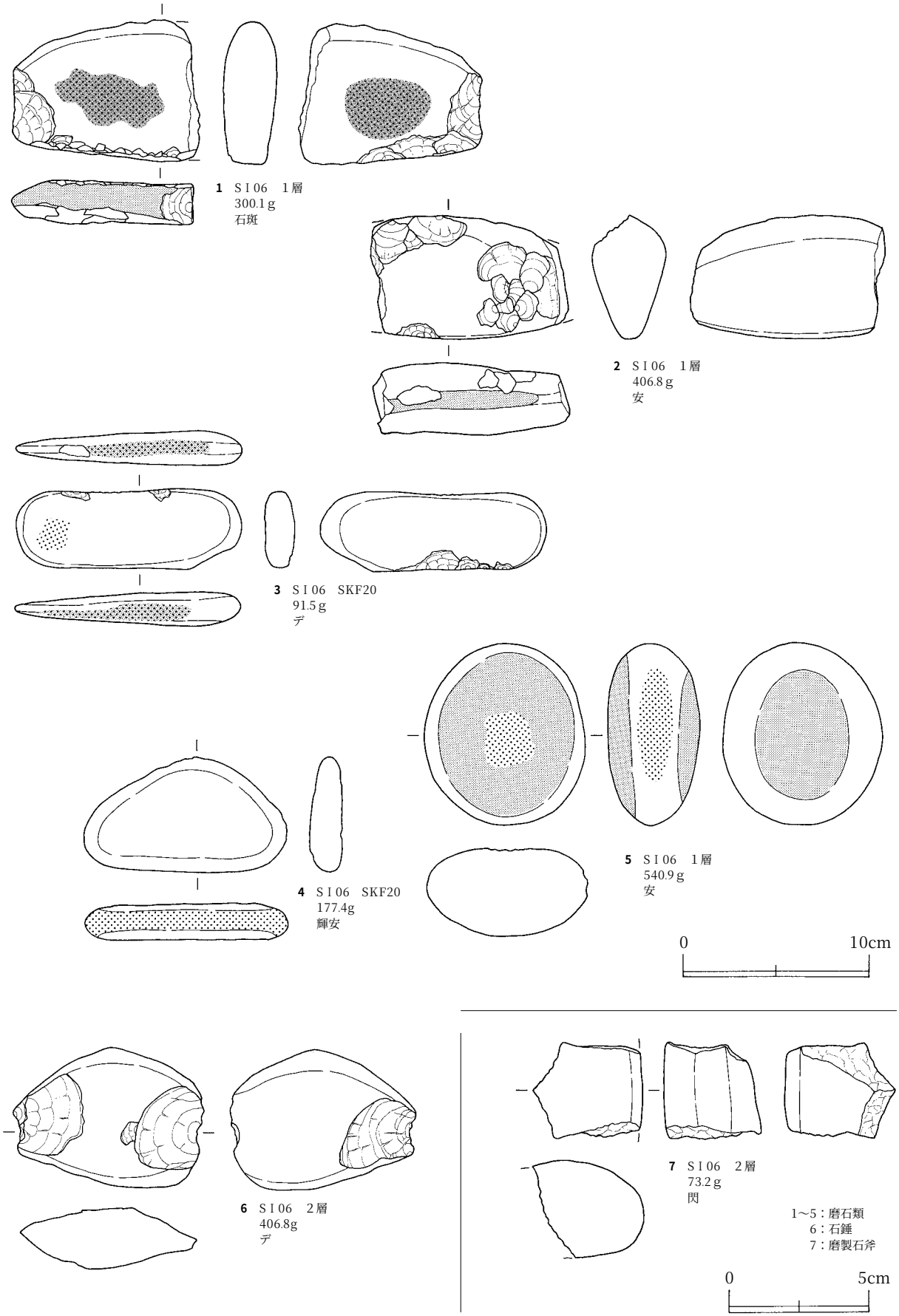


第69図　遺構内出土石器類(11)（ＳＩ06）

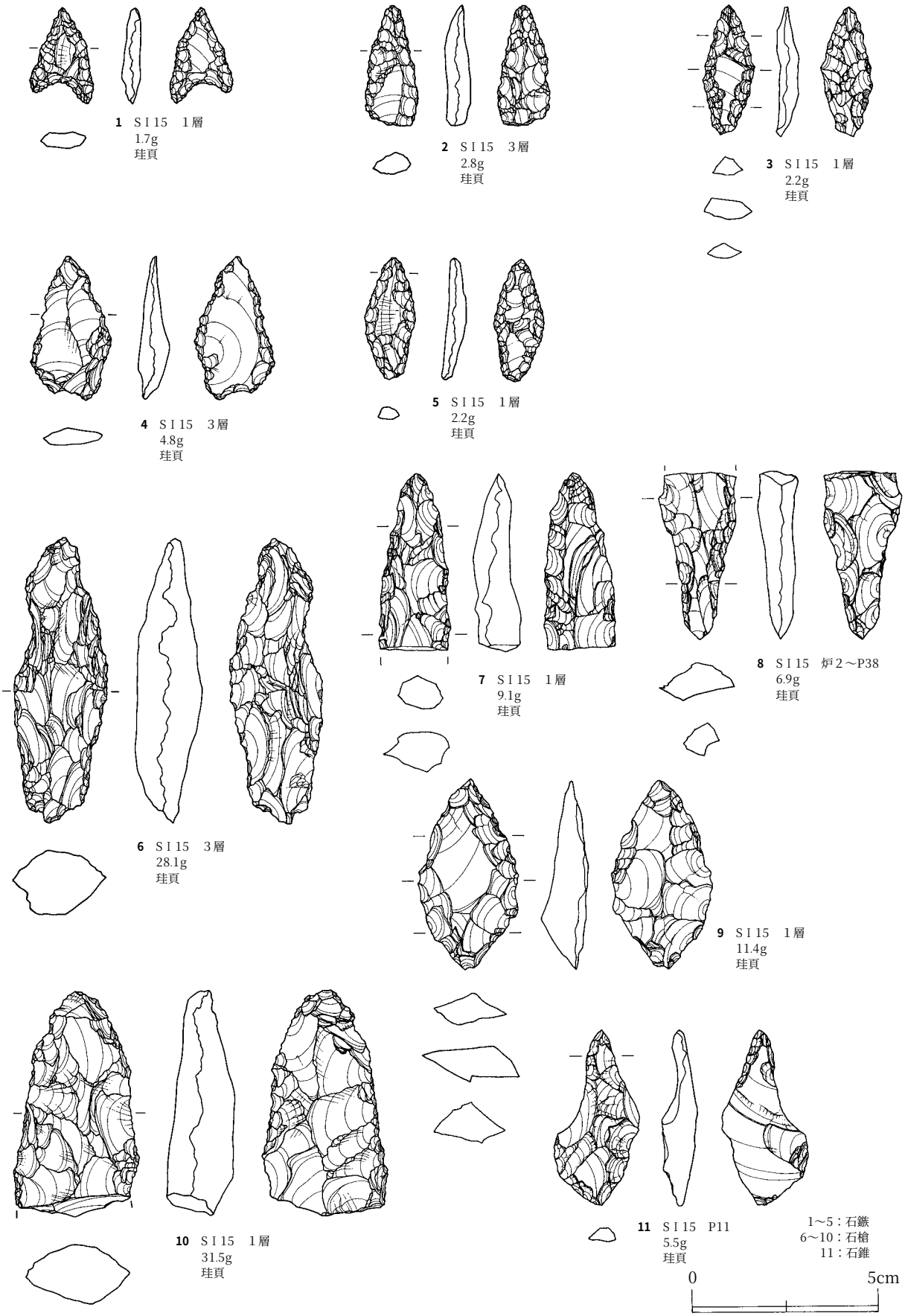




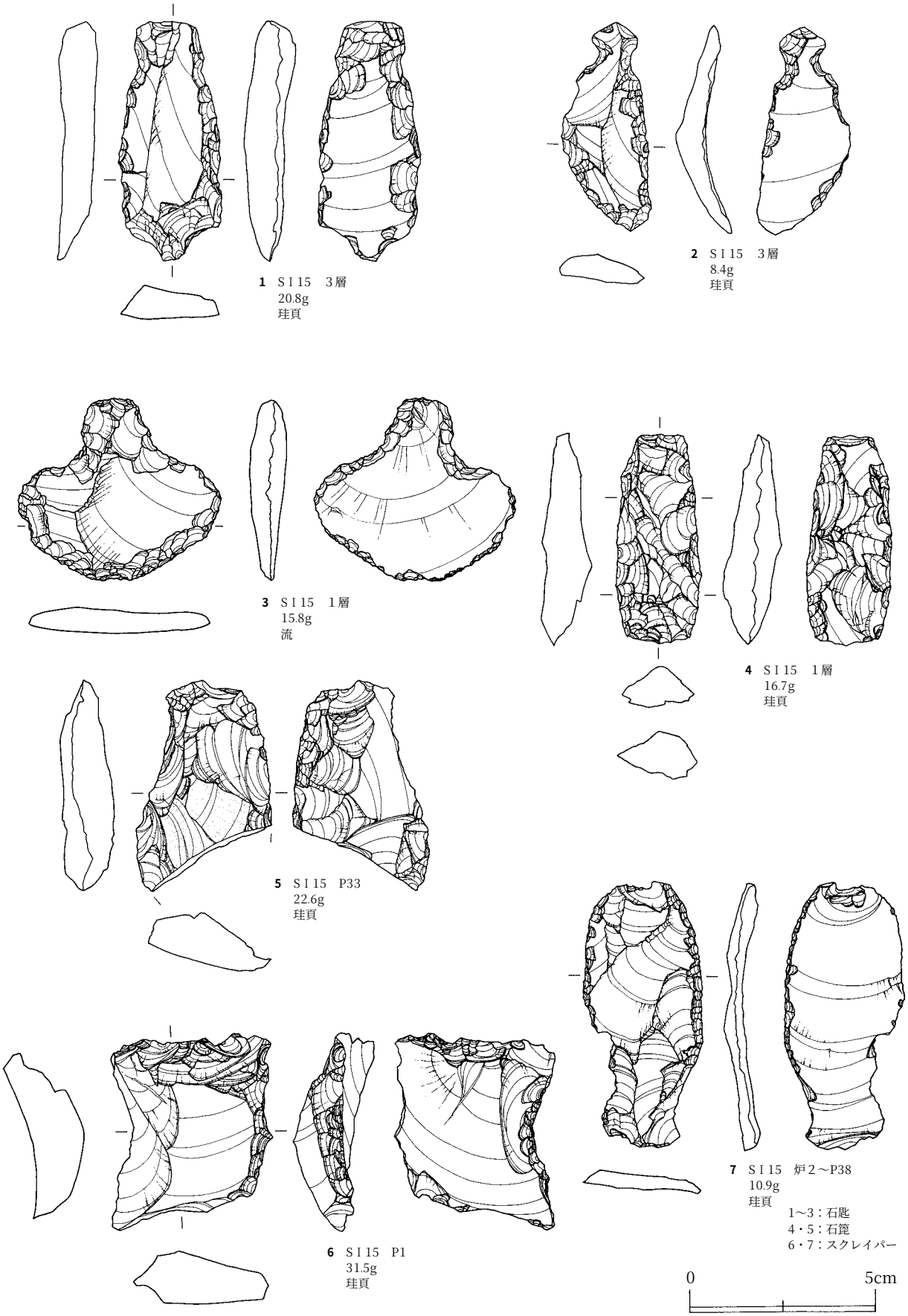
第70図　遺構内出土石器類(12)（ＳＩ06）



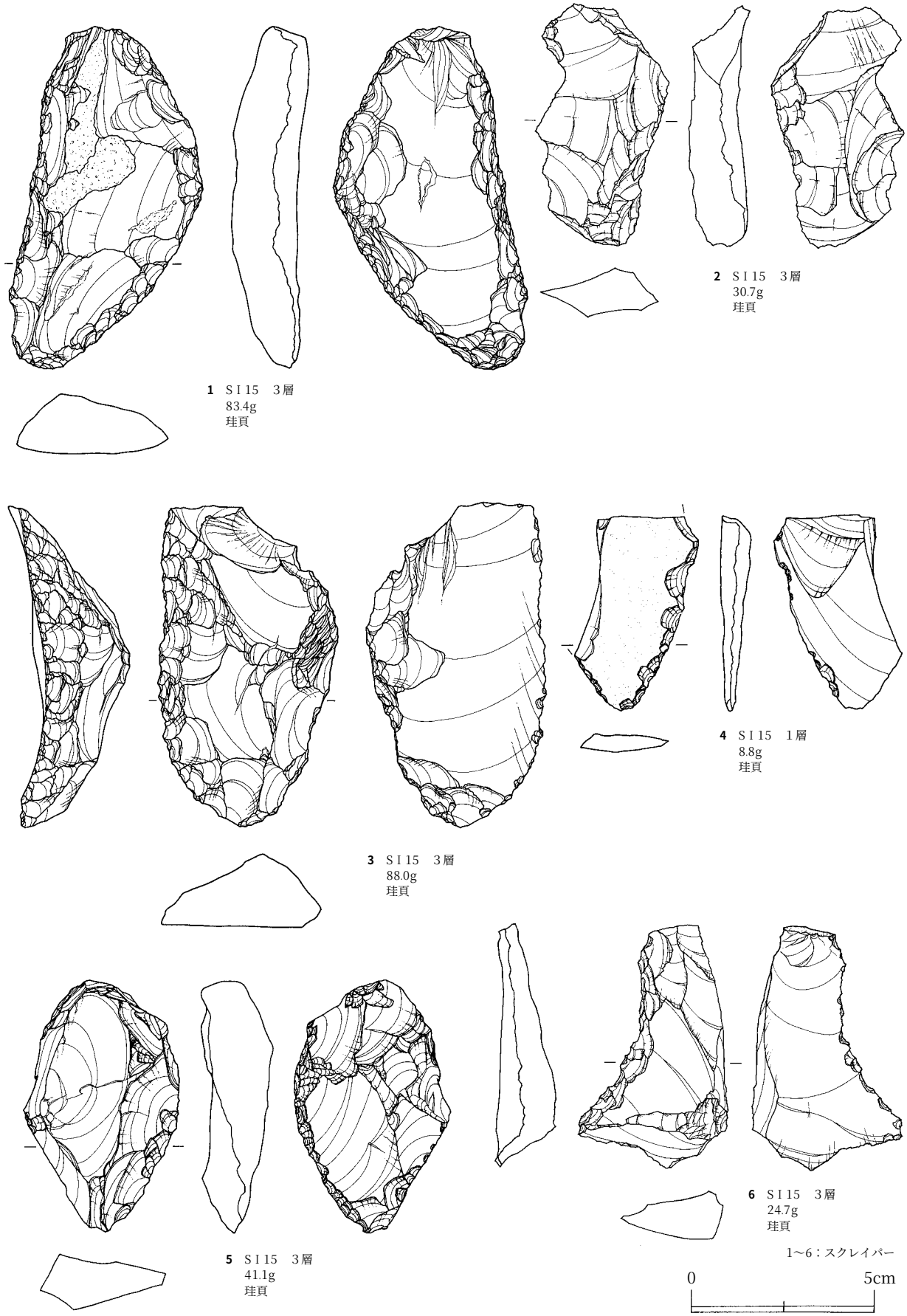
第71図　遺構内出土石器類(13)（ＳＩ06）



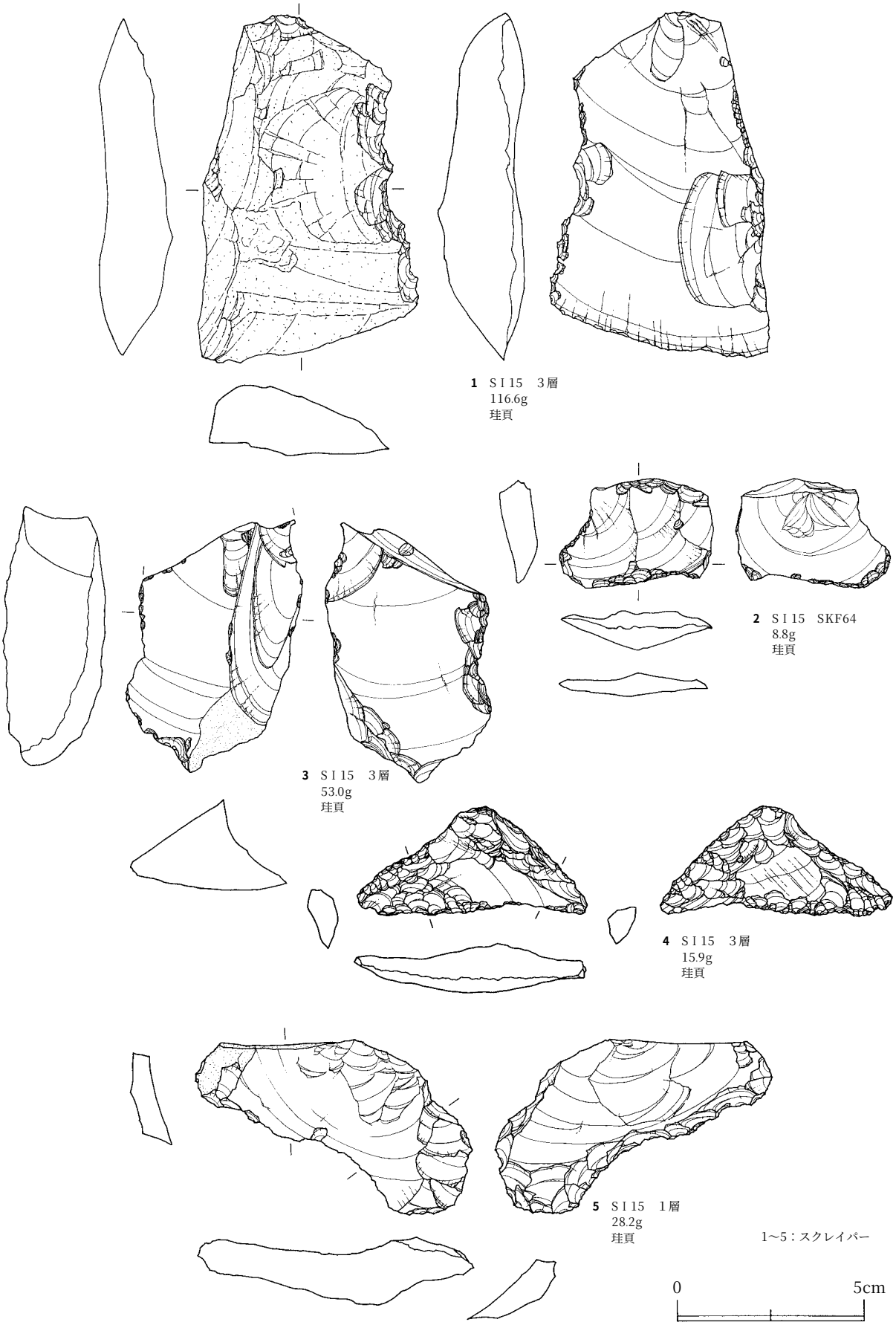
第72図　遺構内出土石器類(14)（ＳＩ15）



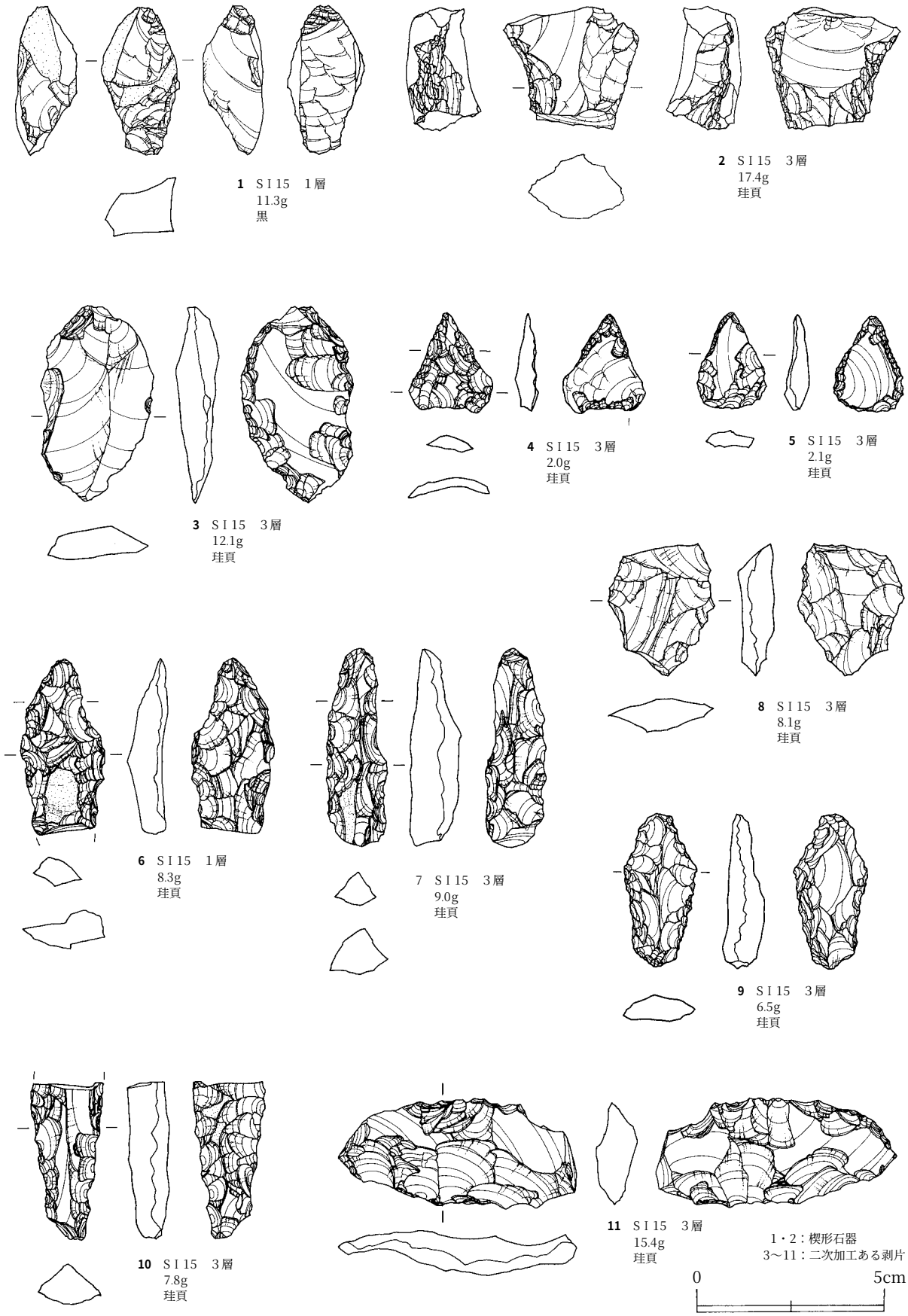
第73図　遺構内出土石器類(15)（ＳＩ15）



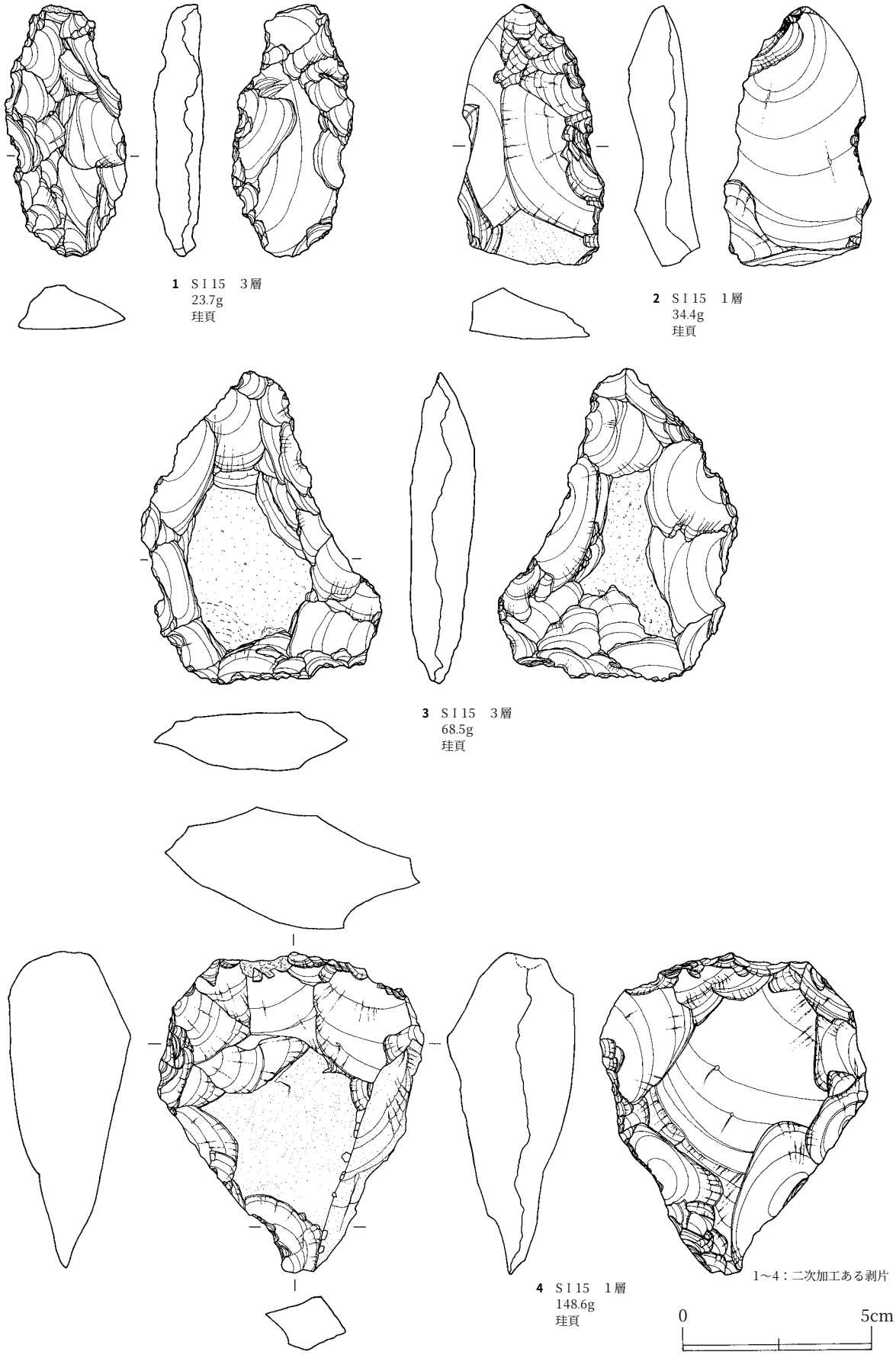
第74図　遺構内出土石器類(16)（ＳＩ15）



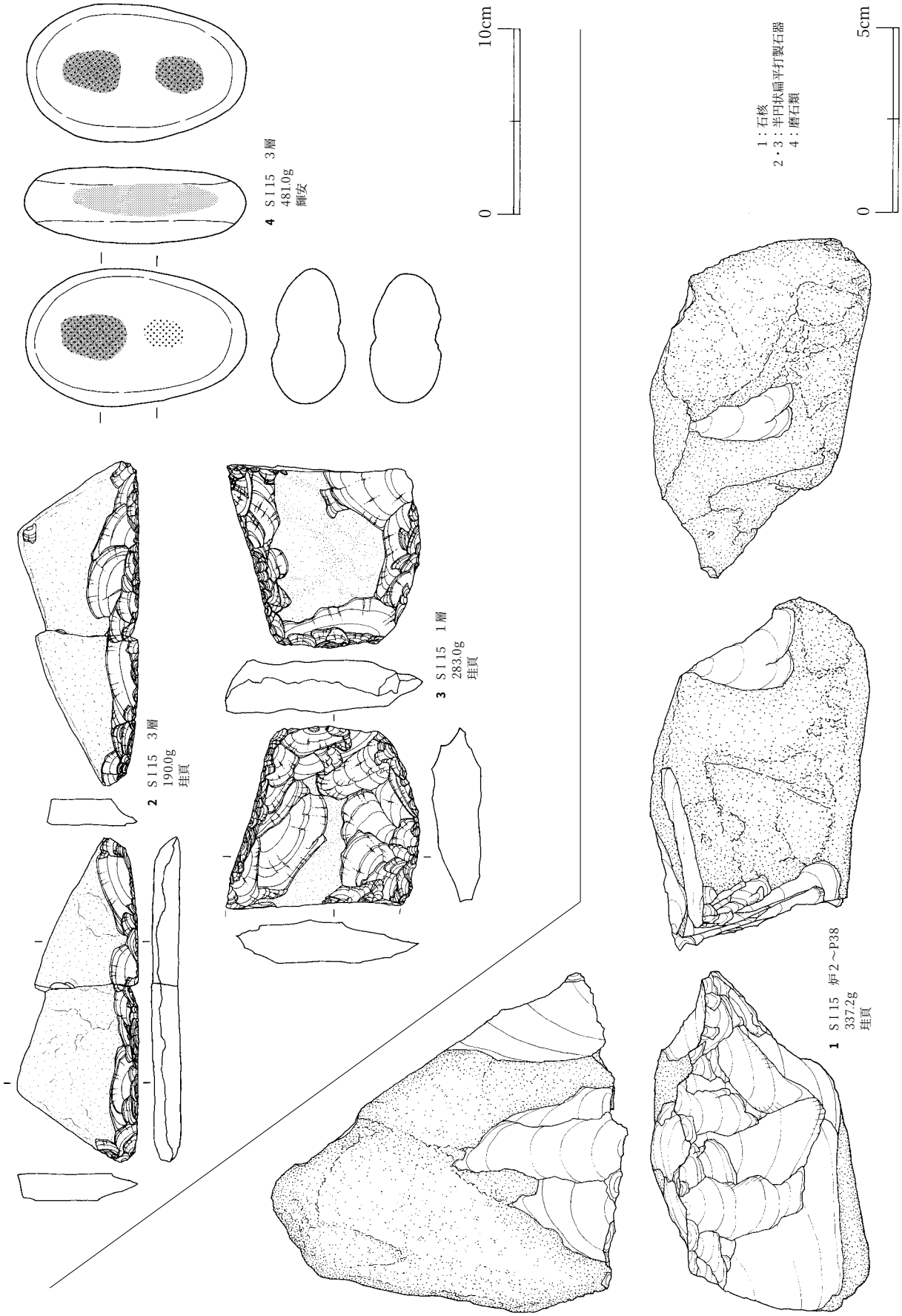
第75図　遺構内出土石器類(17)（ＳＩ15）



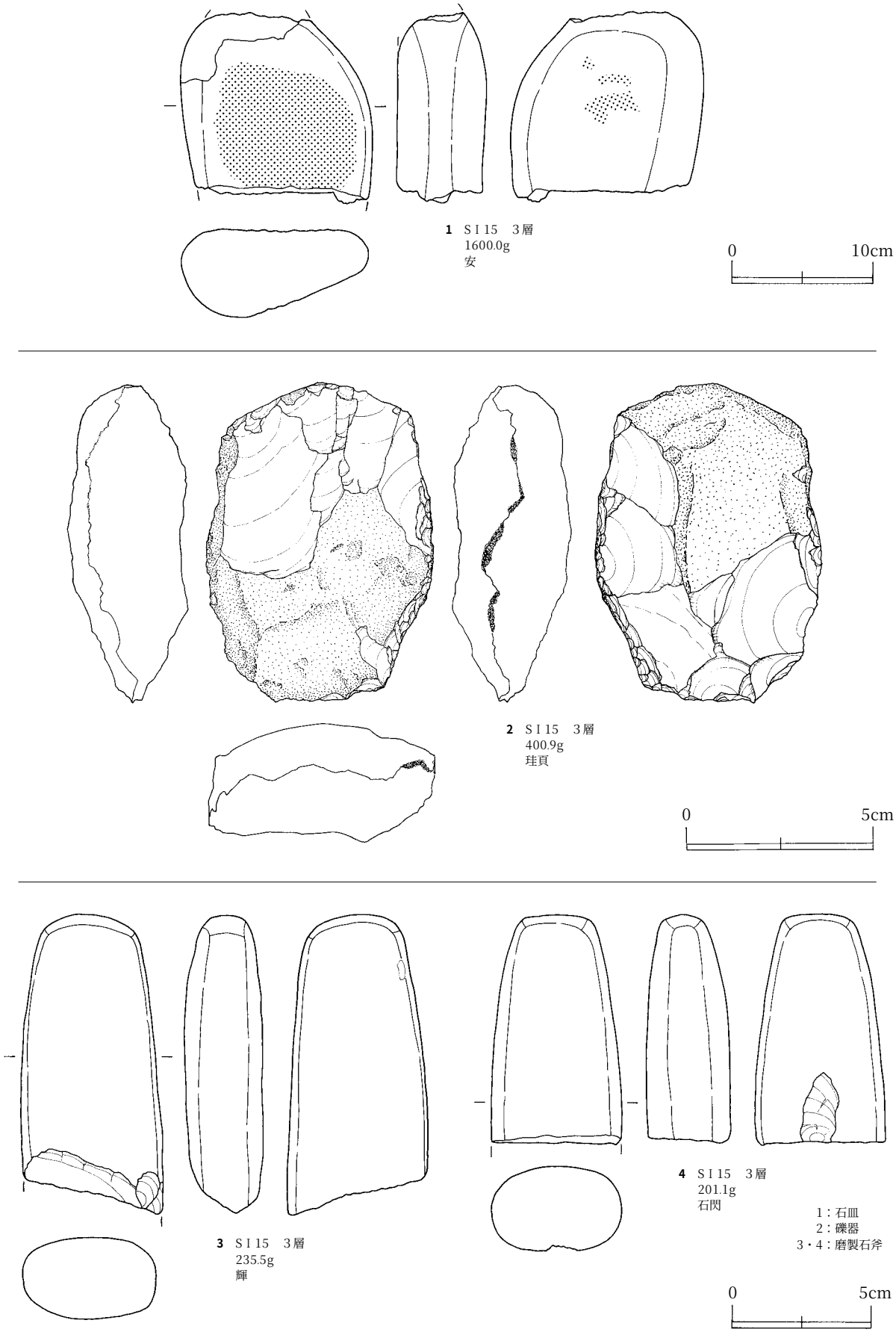
第76図　遺構内出土石器類(18)（ＳＩ15）



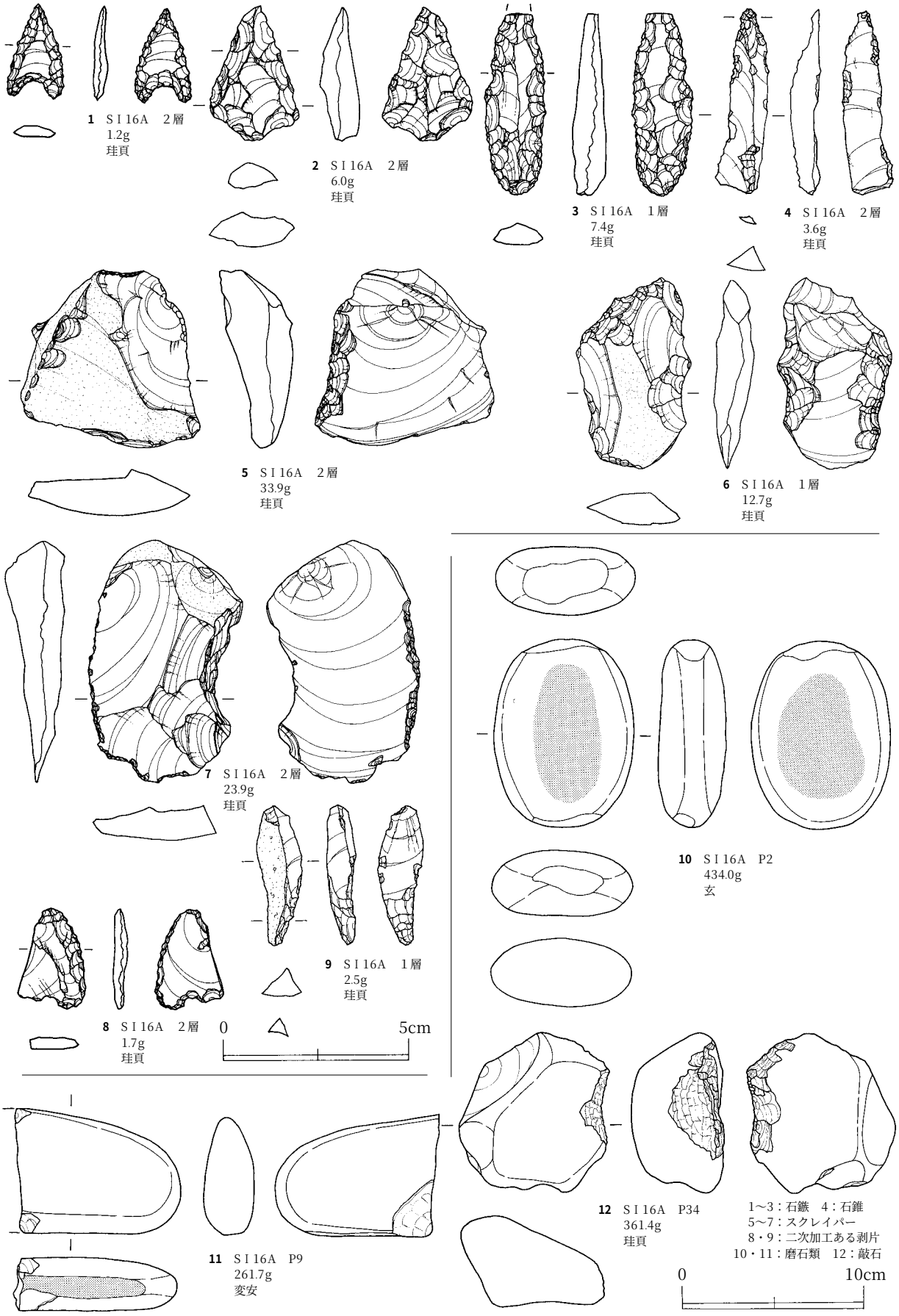
第77図　遺構内出土石器類(19)（ＳＩ15）



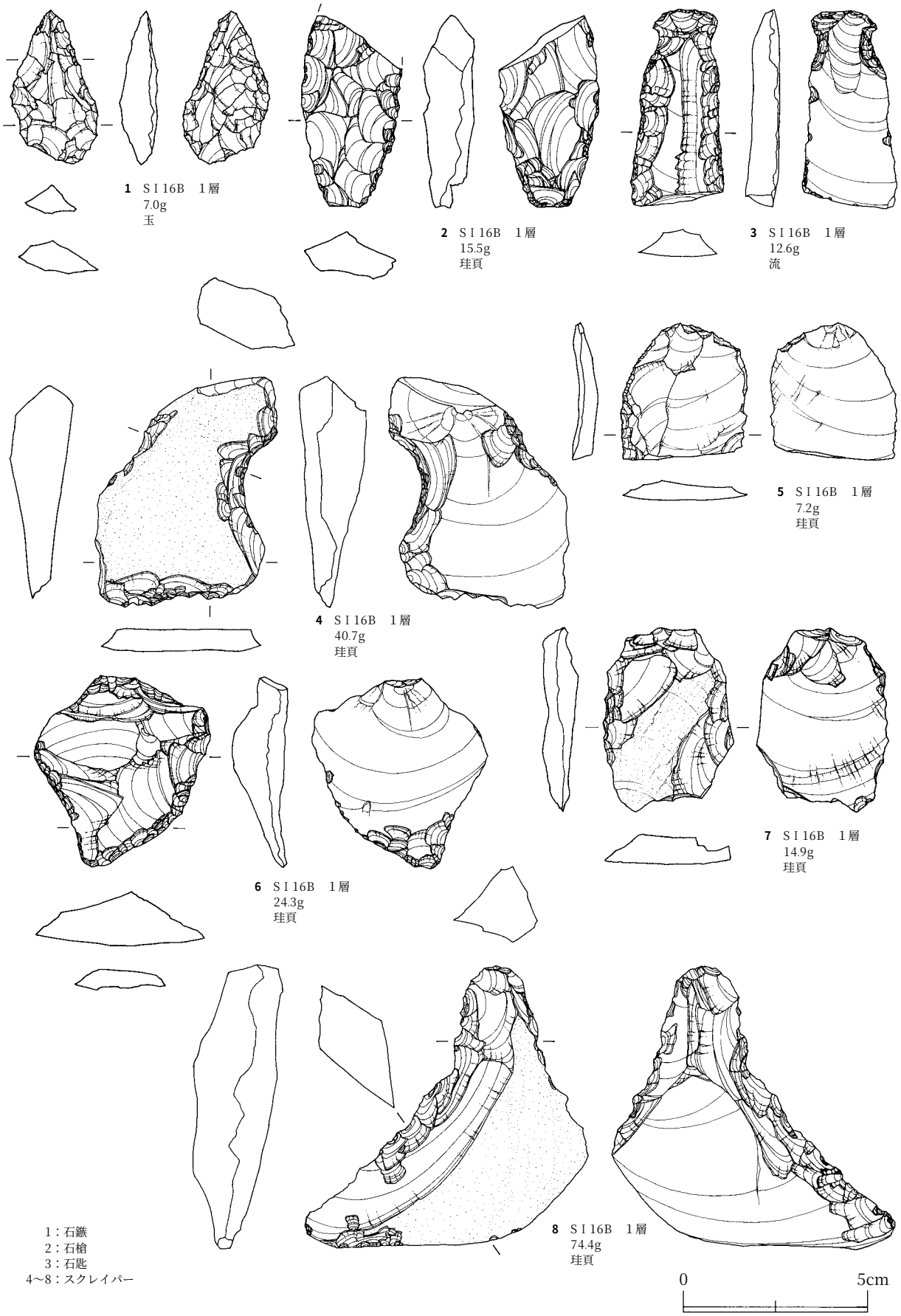
第78図　遺構内出土石器類(20)（S I 15）



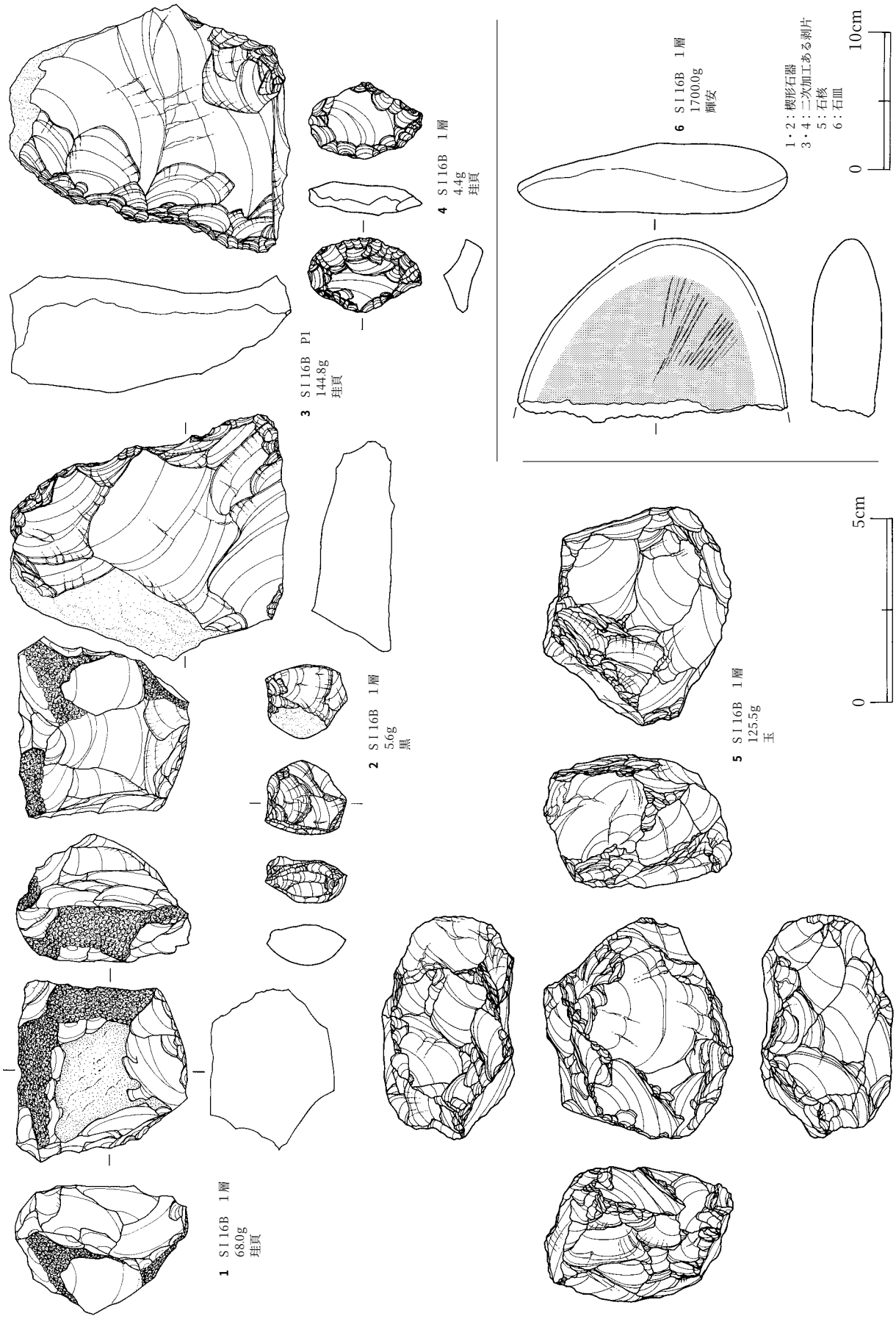
第79図　遺構内出土石器類(21)（ＳＩ15）



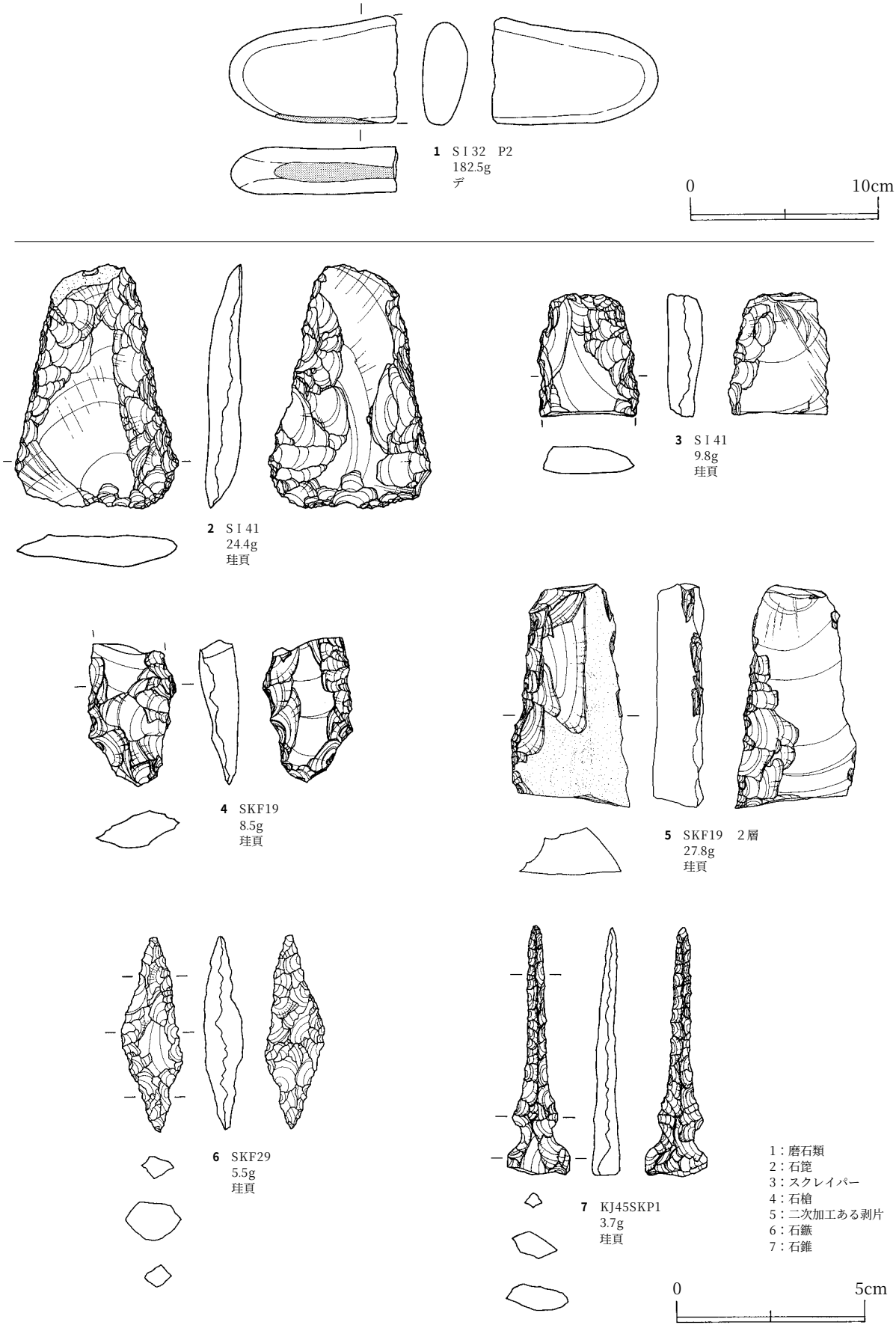
第80図　遺構内出土石器類(22)（ＳＩ16A）



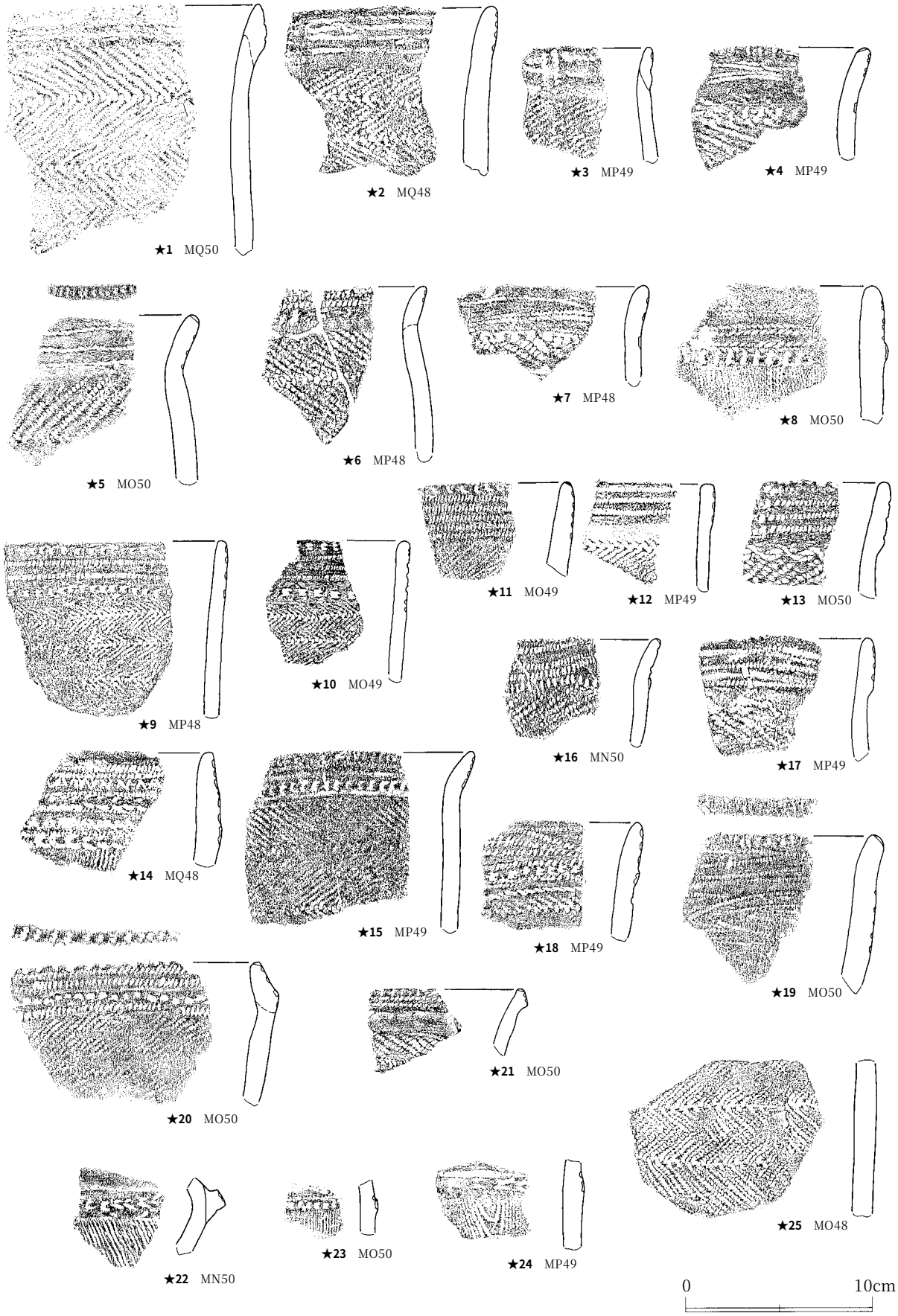
第81図　遺構内出土石器類(23)（ＳＩ16B）



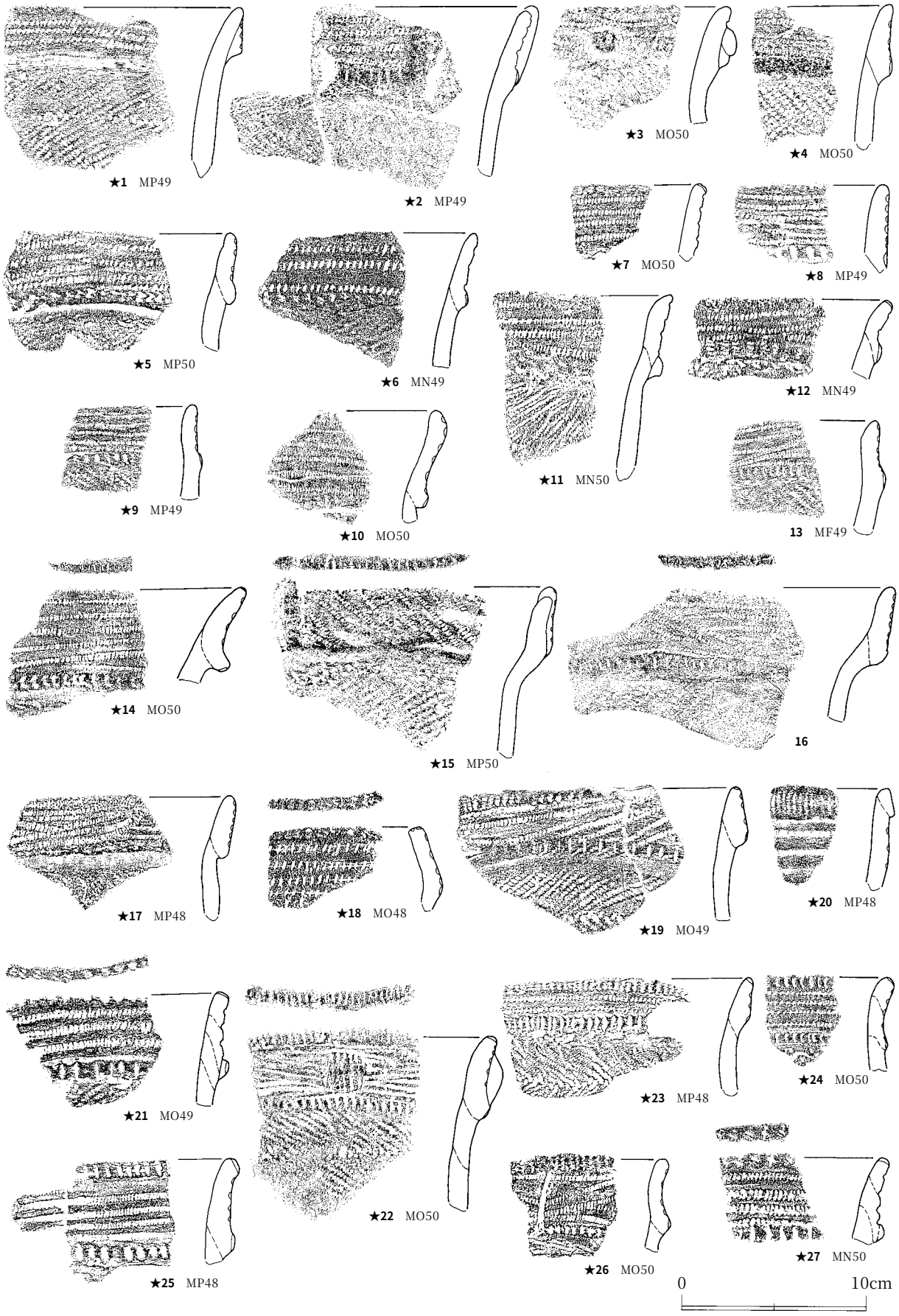
第82図　遺構内出土石器類(24)（ＳＩ16Ｂ）



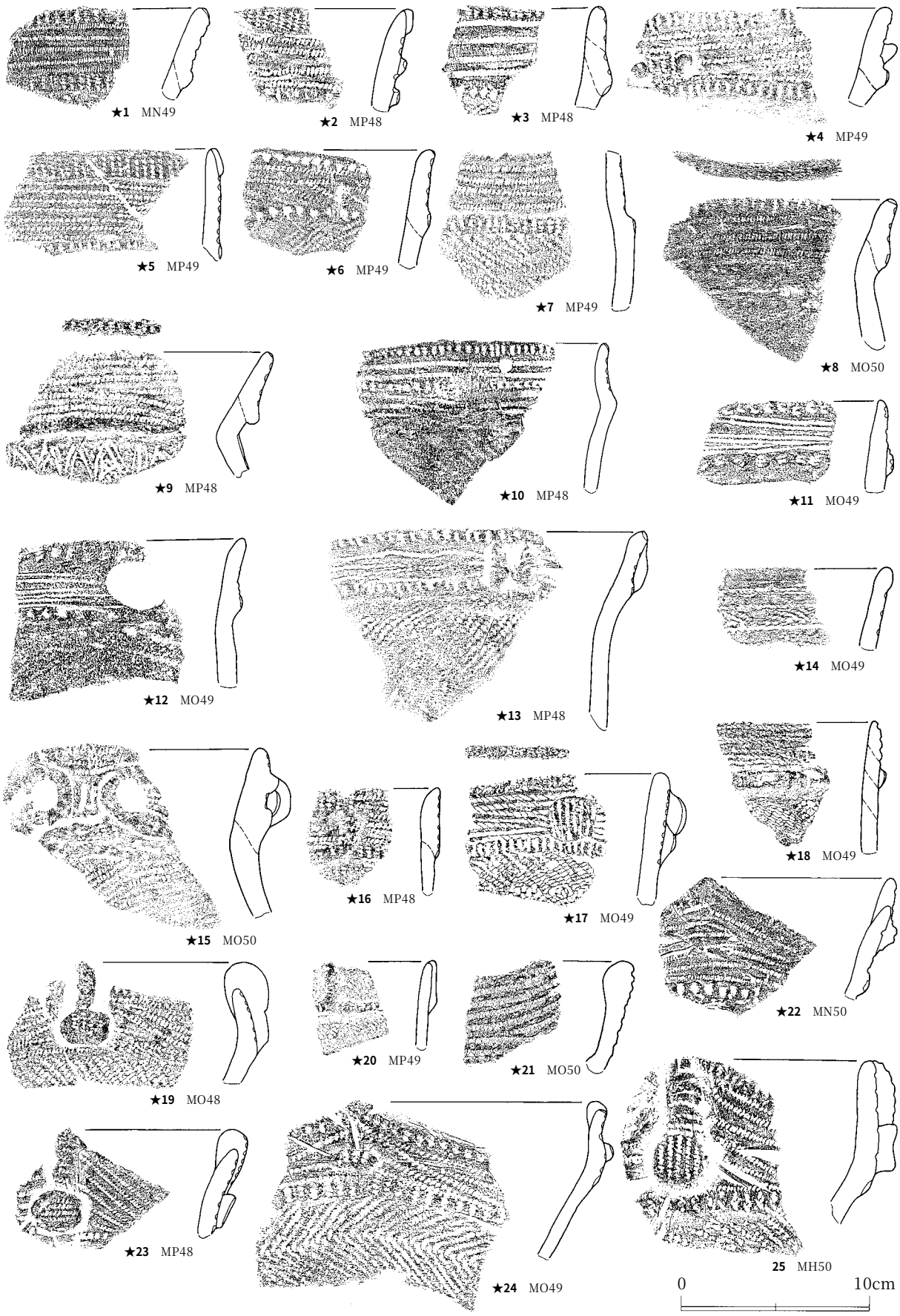
第83図　遺構内出土石器類(25)（ＳＩ32･41、ＳＫＦ19･29、ＳＫＰ）



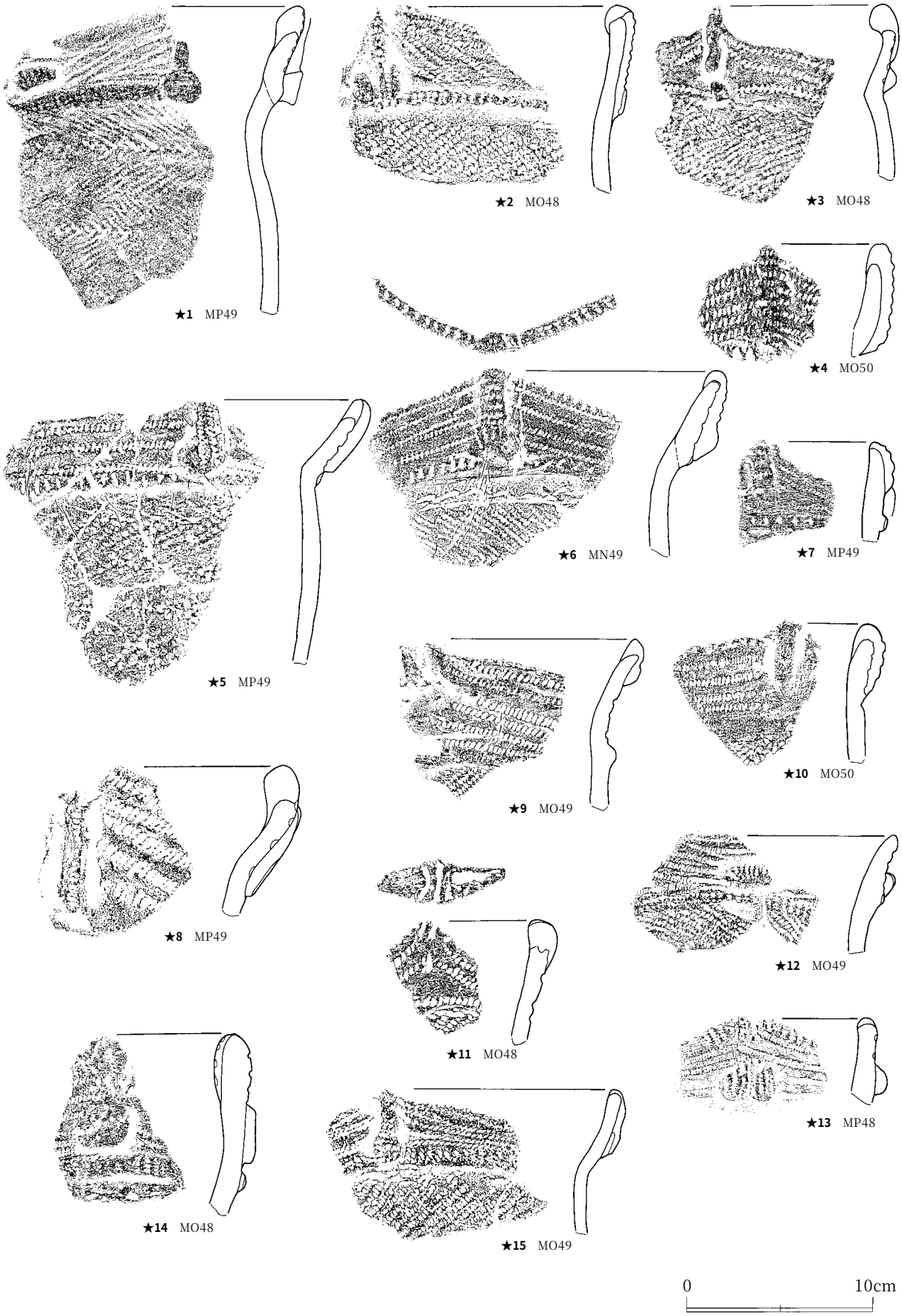
第84図　遺構外出土土器類（１）



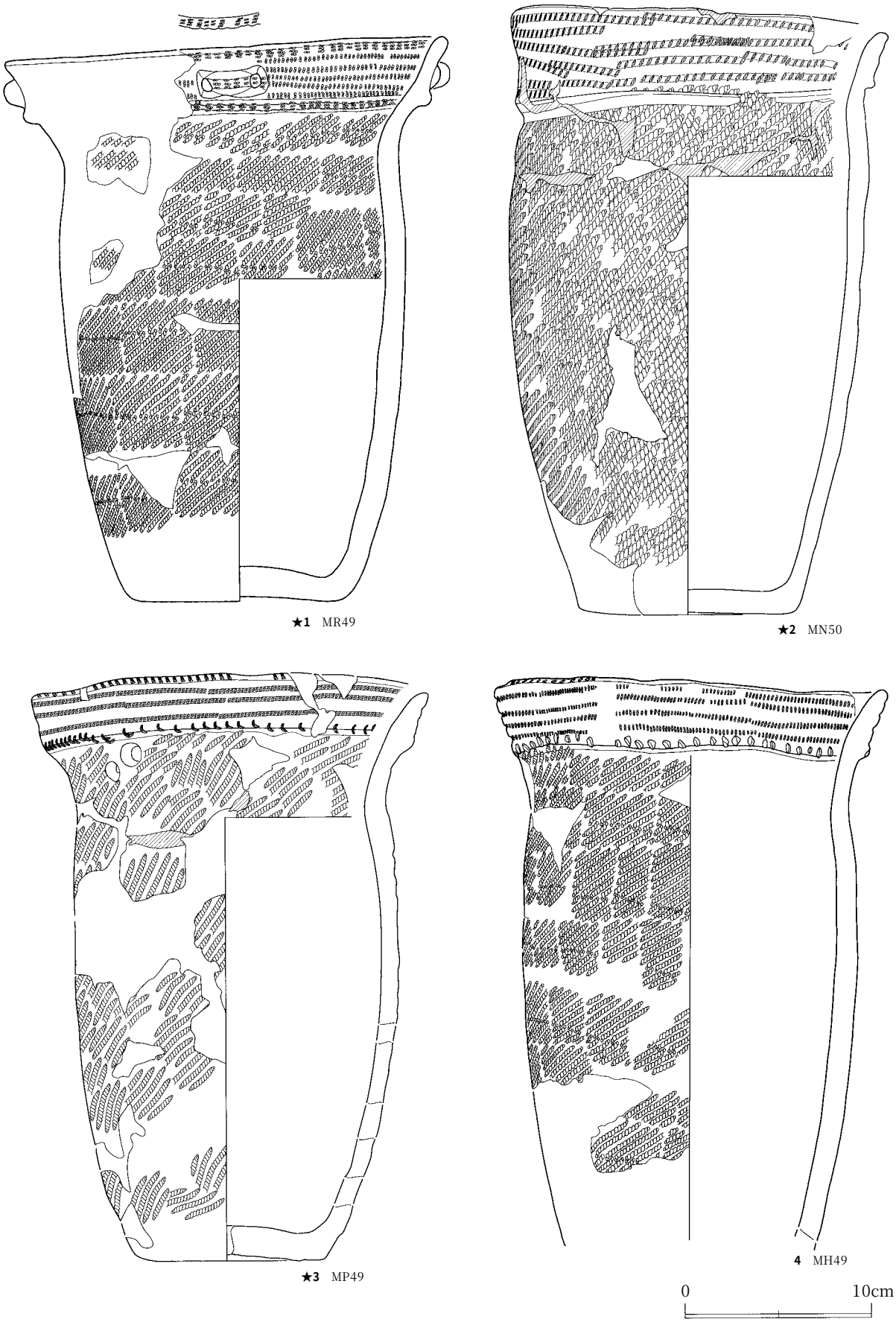
第85図　遺構外出土土器類（２）



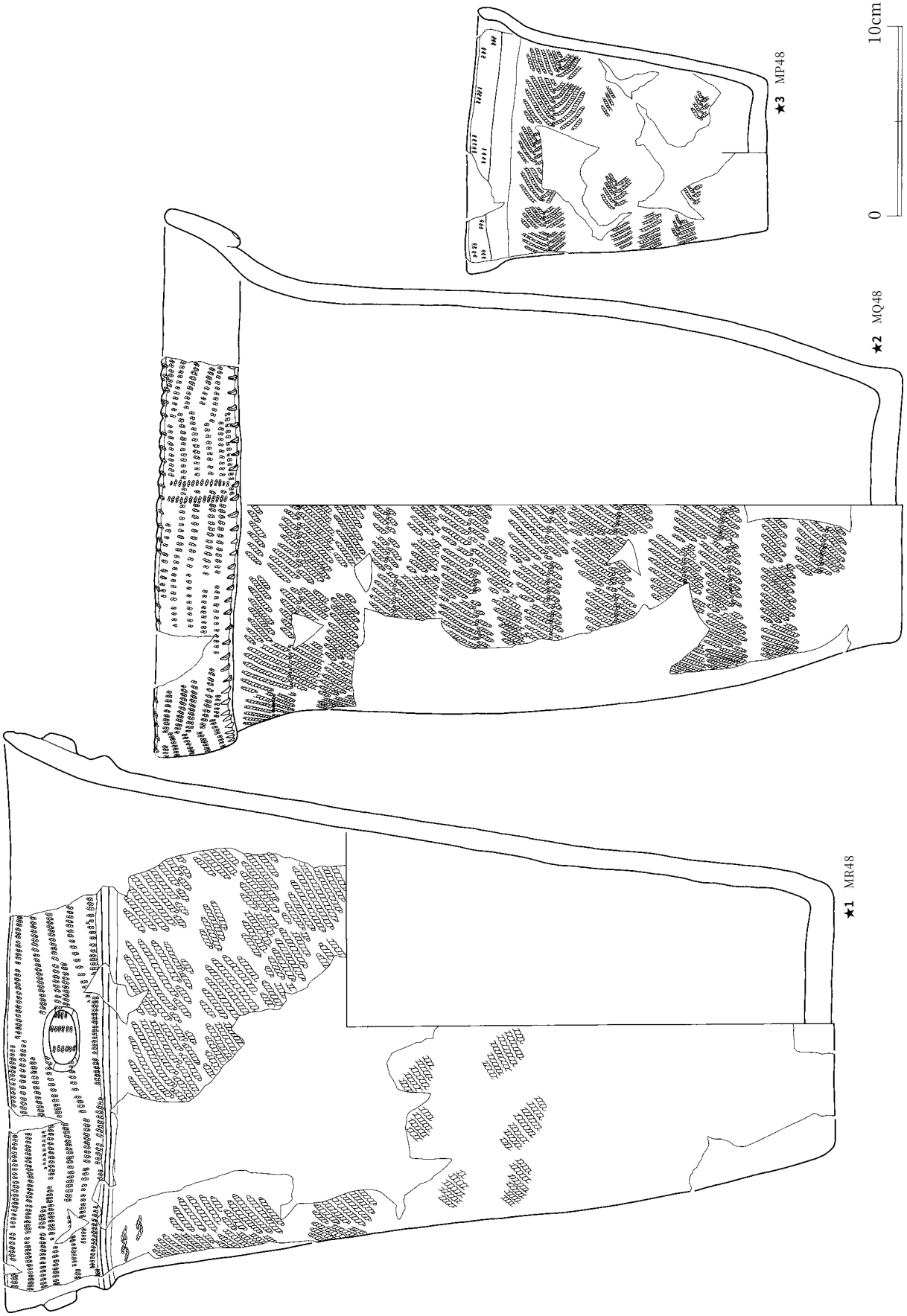
第86図　遺構外出土土器類（３）



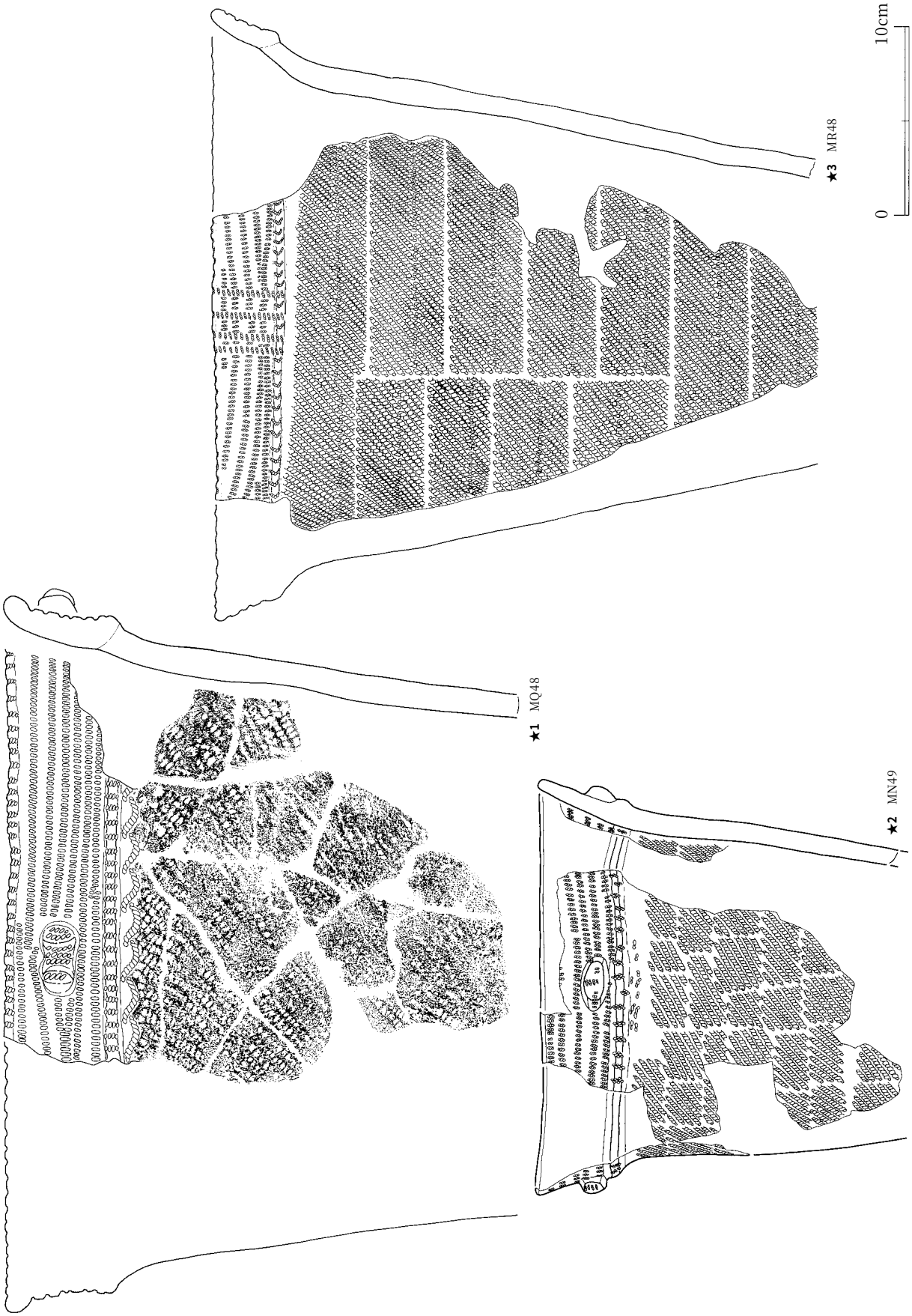
第87図　遺構外出土土器類（４）



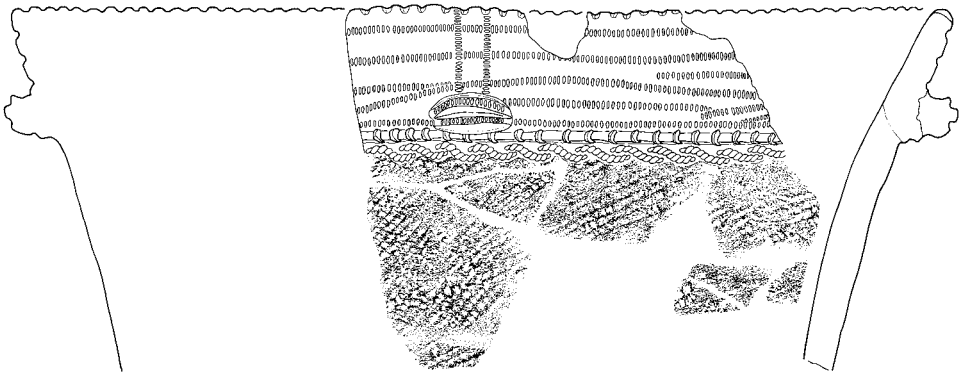
第88図　遺構外出土土器類（５）



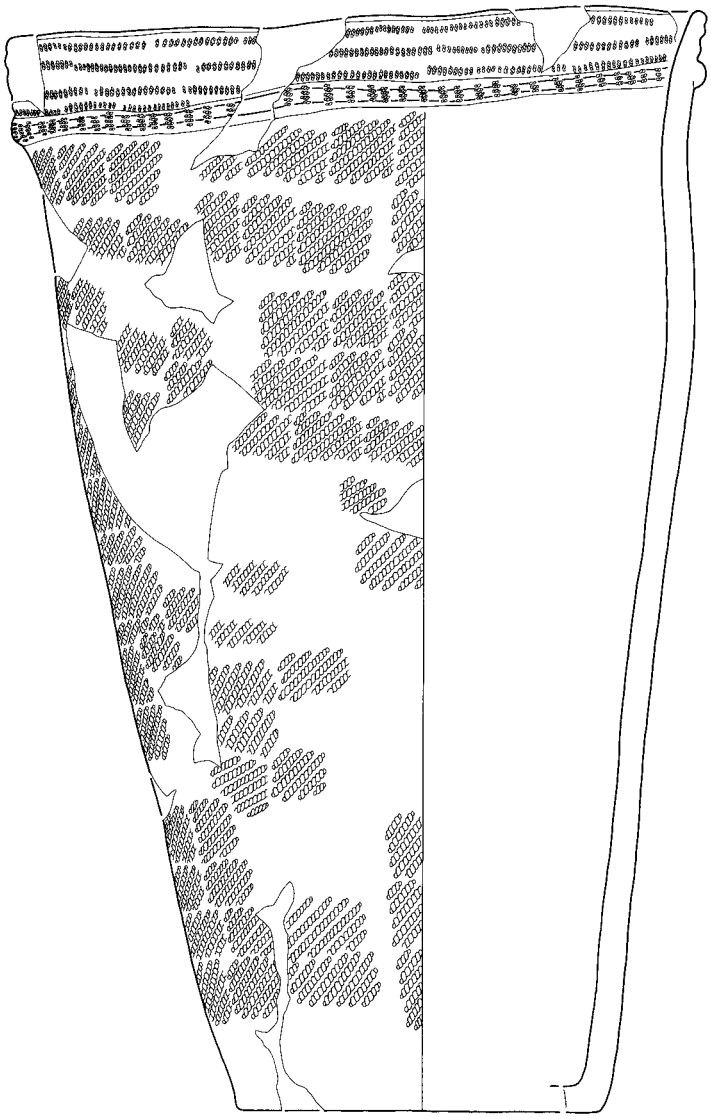
第89図　遺構外出土土器類（６）



第90図　遺構外出土土器類（７）



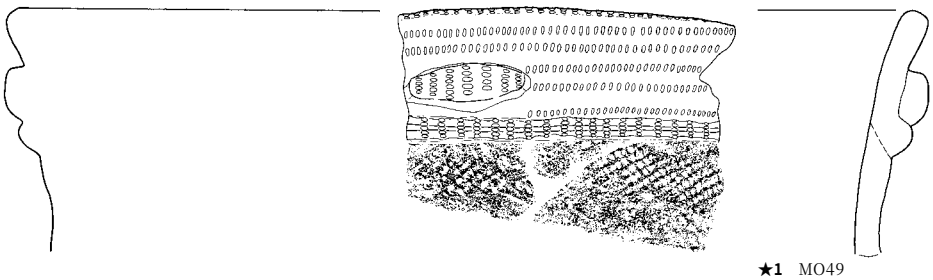
★1　MN50



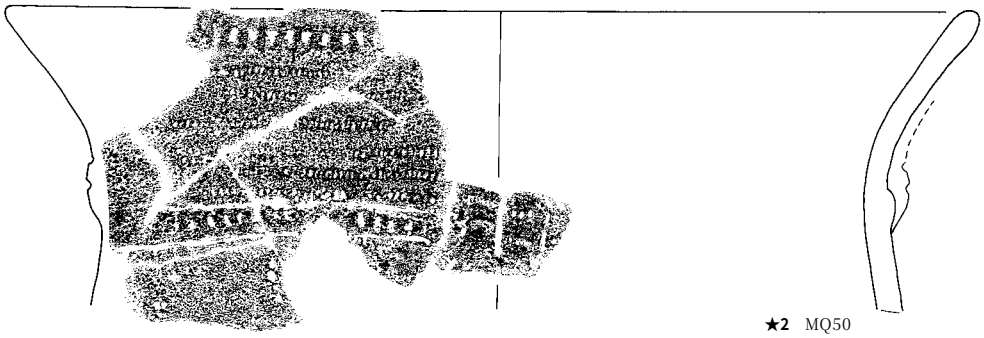
★2　MN50

0　10cm

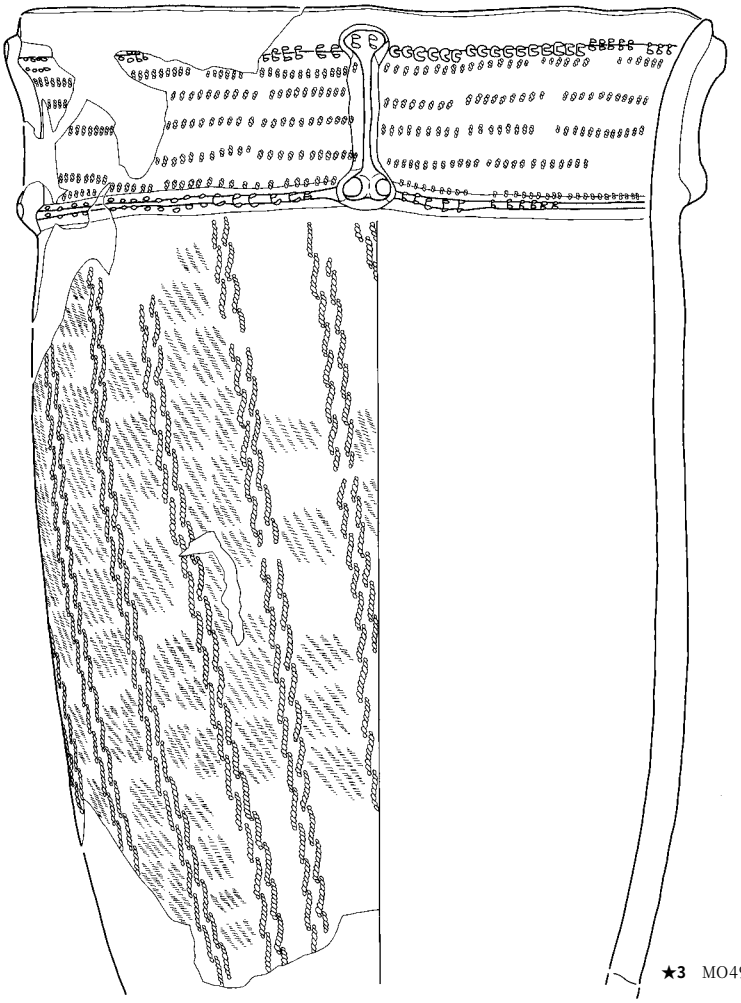
第91図　遺構外出土土器類（８）



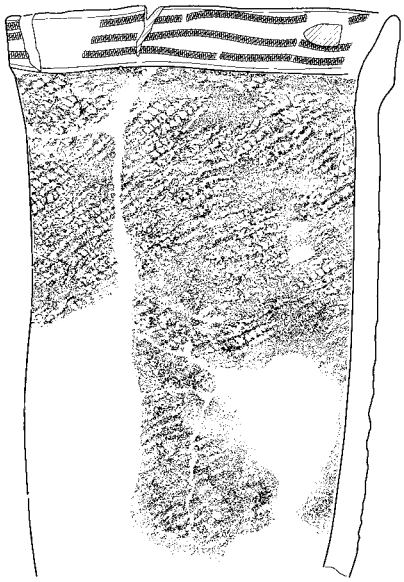
★1　MO49



★2　MQ50



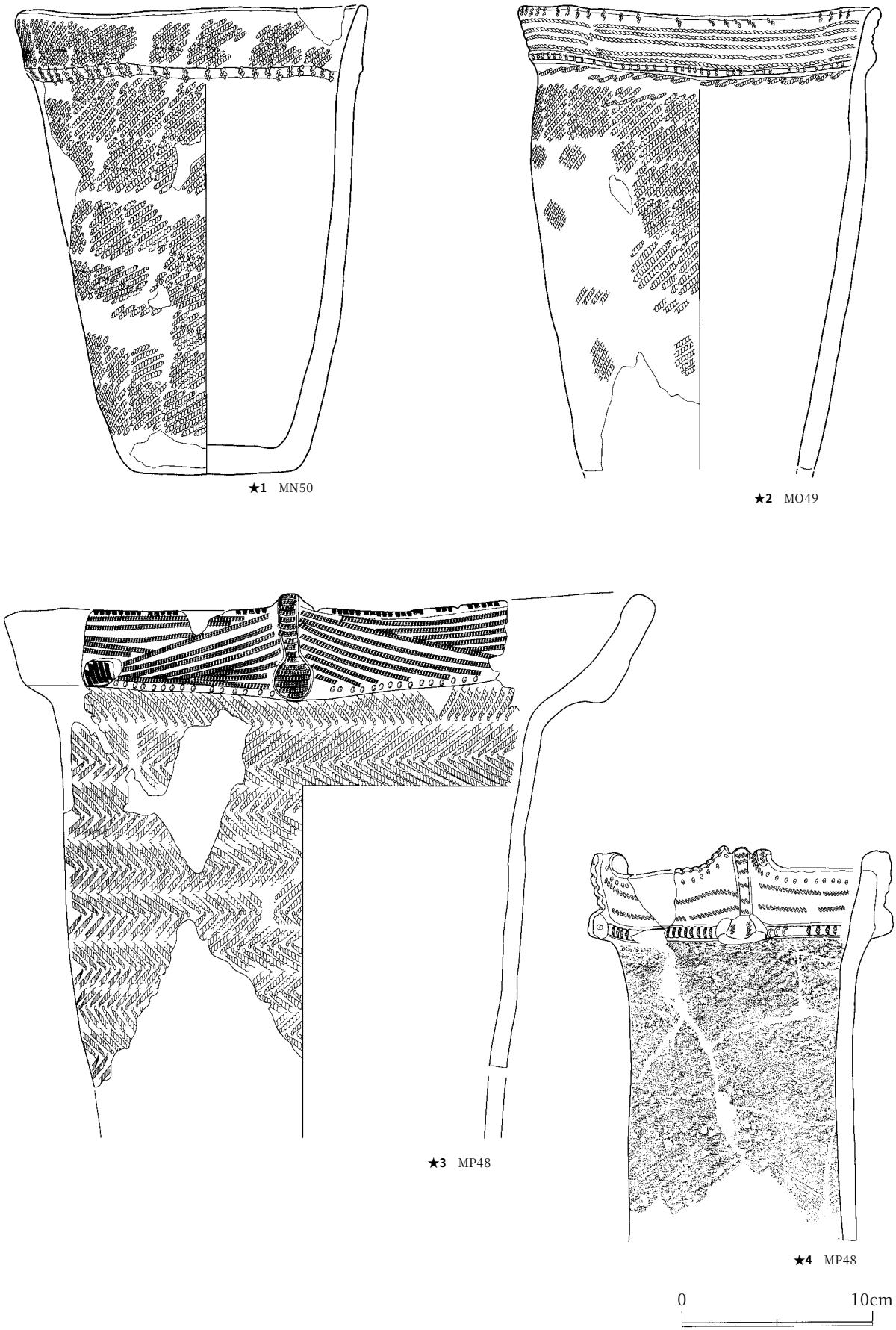
★3　MO49・50



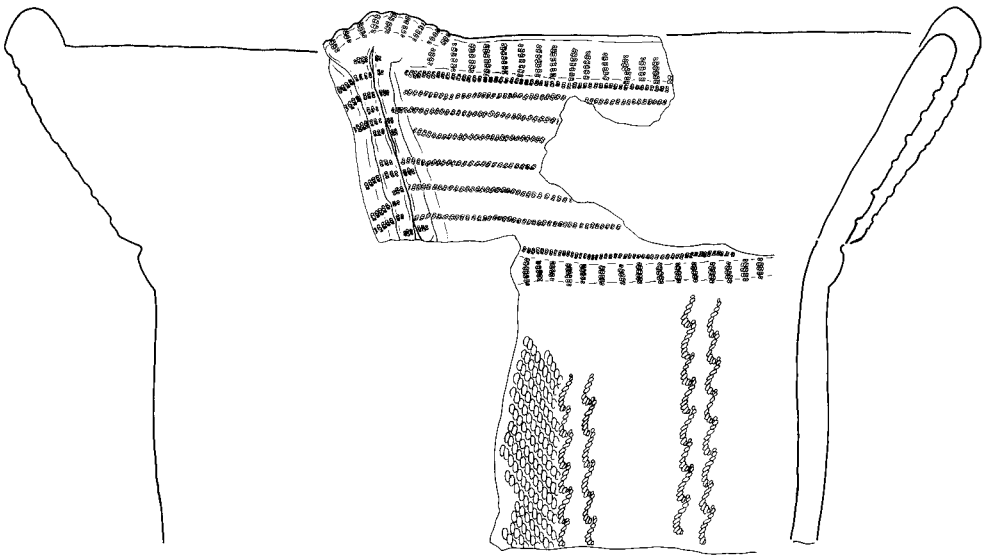
★4　MP49

0　10cm

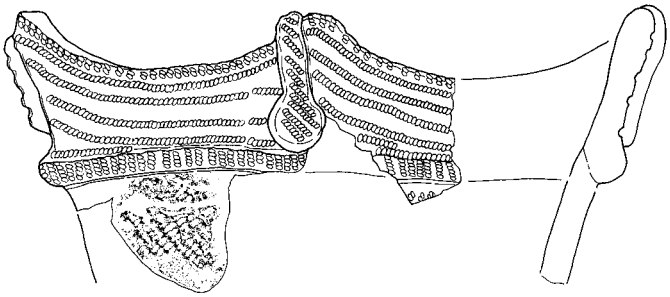
第92図　遺構外出土土器類（９）



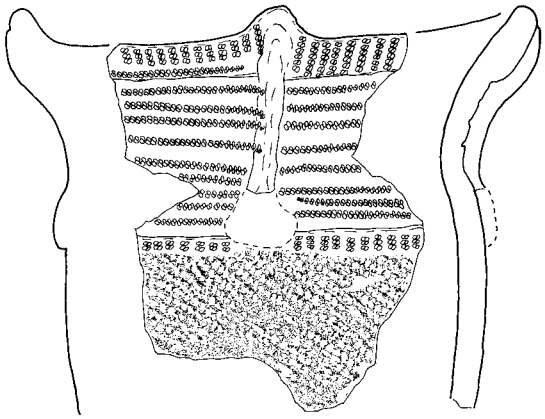
第93図　遺構外出土土器類(10)



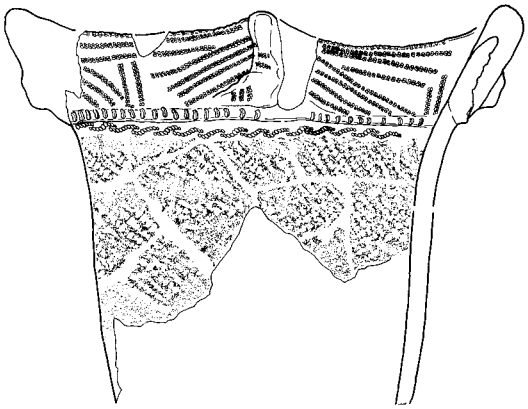
★1　MQ50



★2　MR49



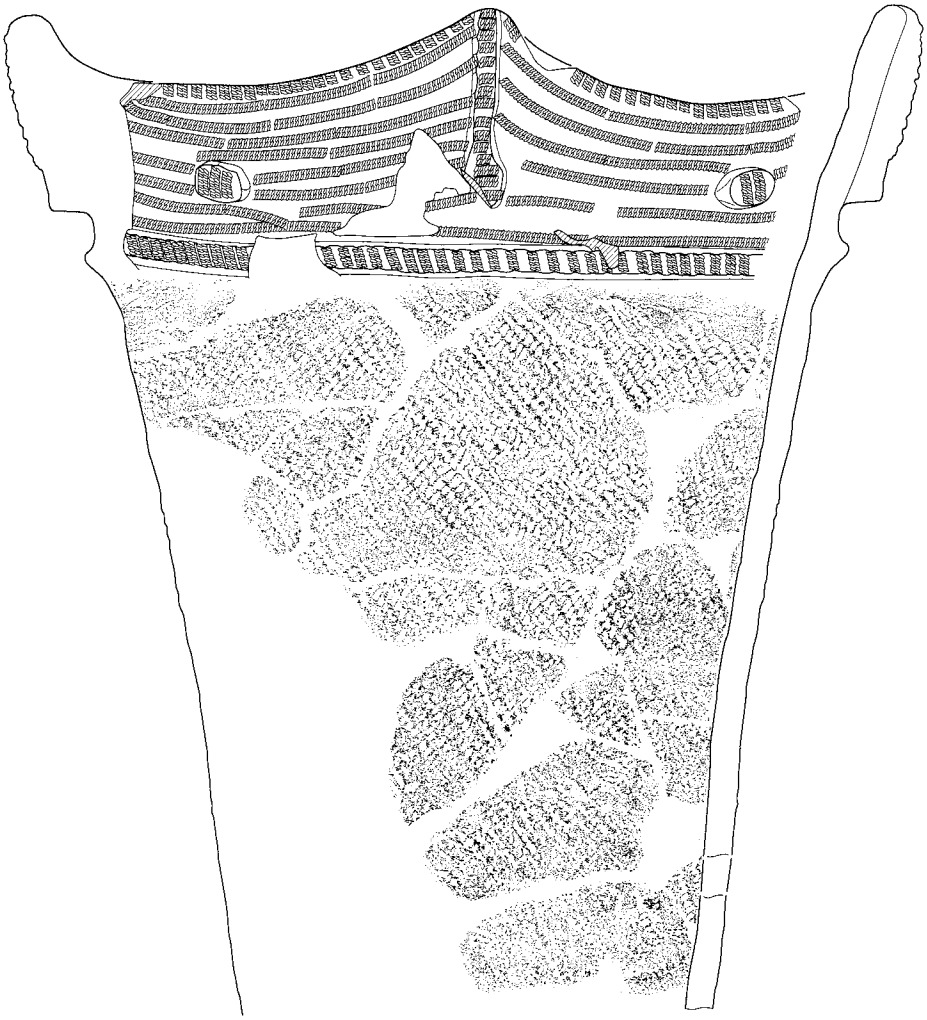
★3　MP49



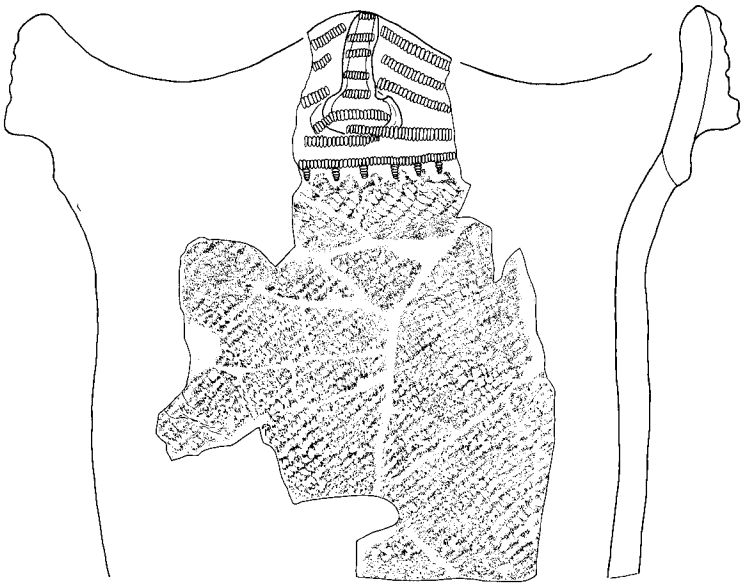
★4　MN50

0　10cm

第94図　遺構外出土土器類(11)



★1　MP50

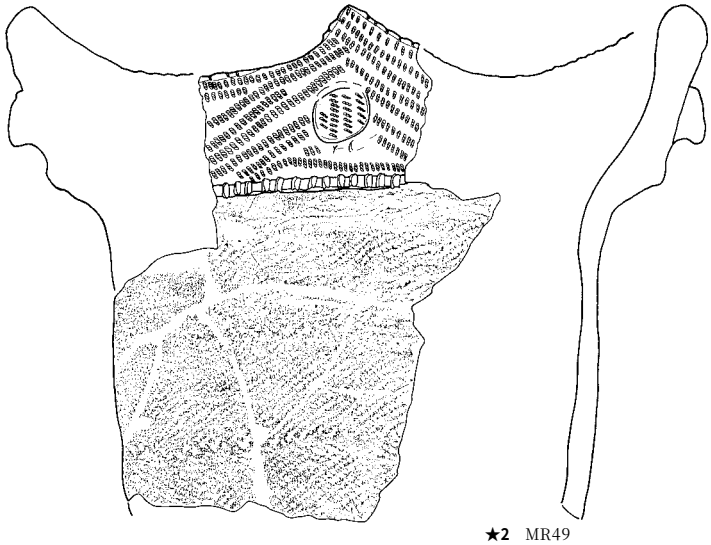


2　MD52

0　10cm

第95図　遺構外出土土器類(12)

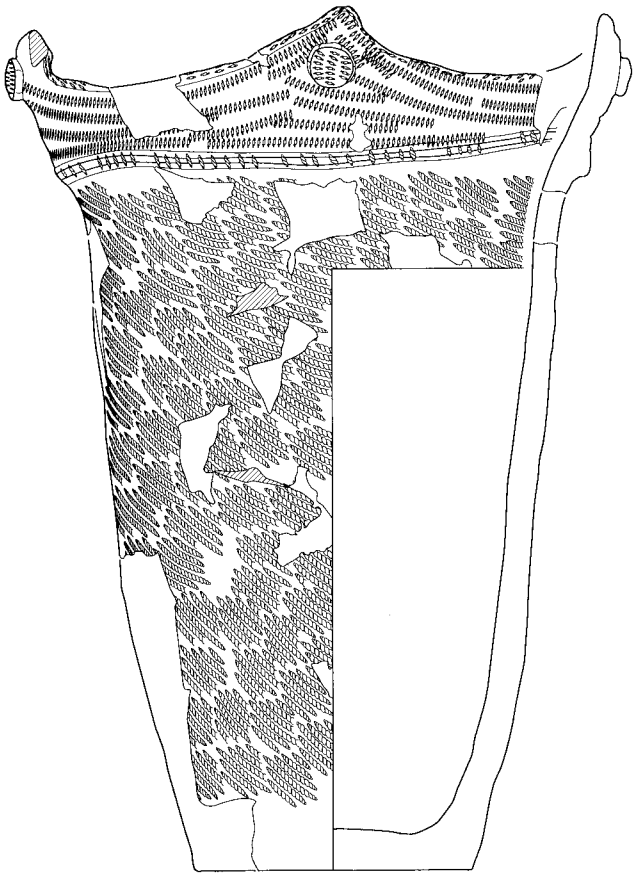
1 MJ51



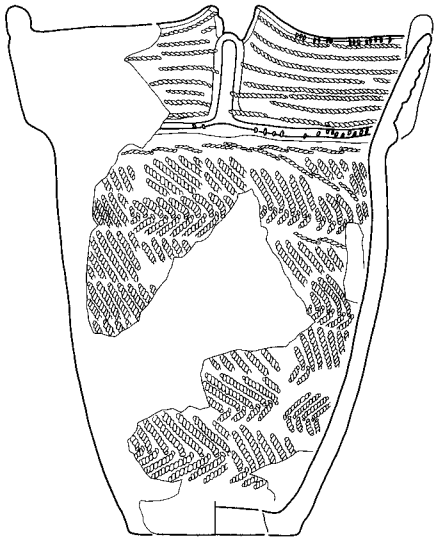
★2 MR49

0 10cm

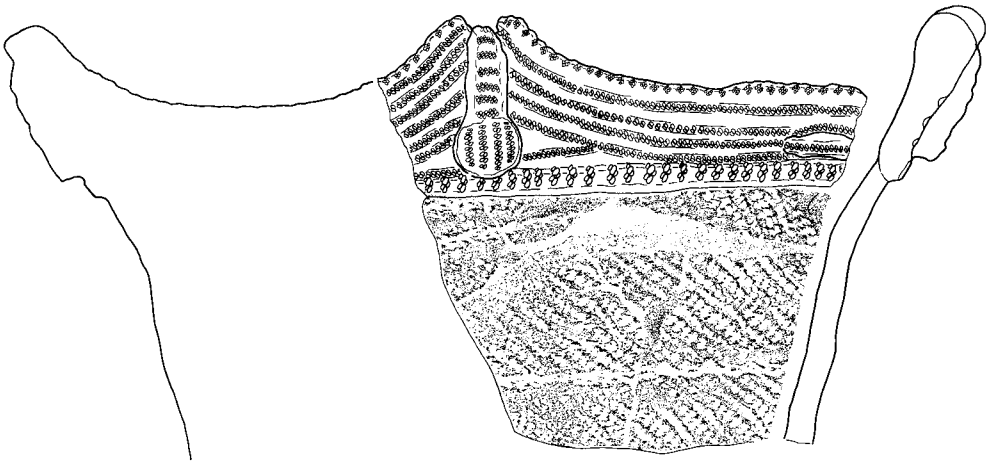
第96図　遺構外出土土器類(13)



★1　MN49・50



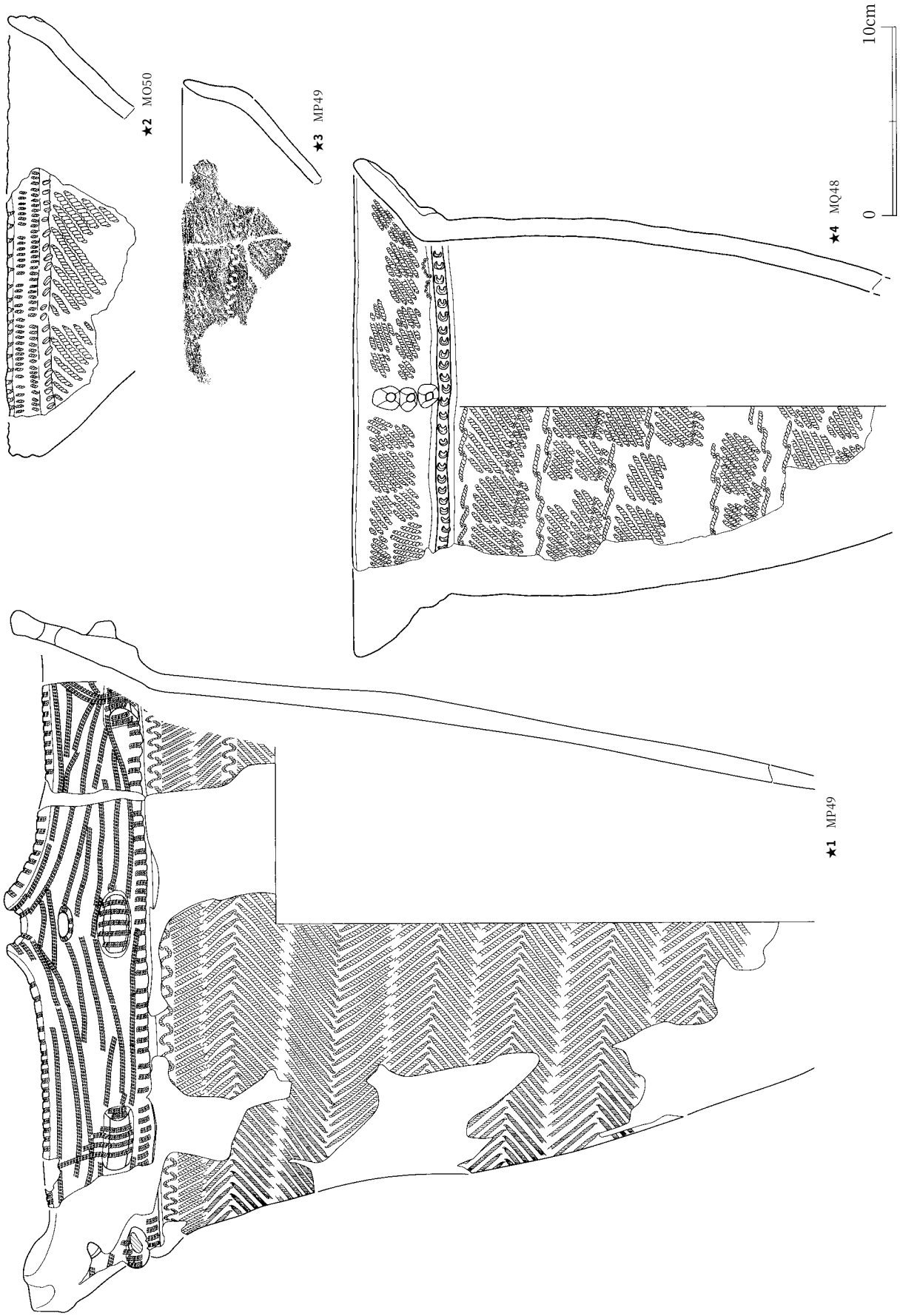
2　MM49



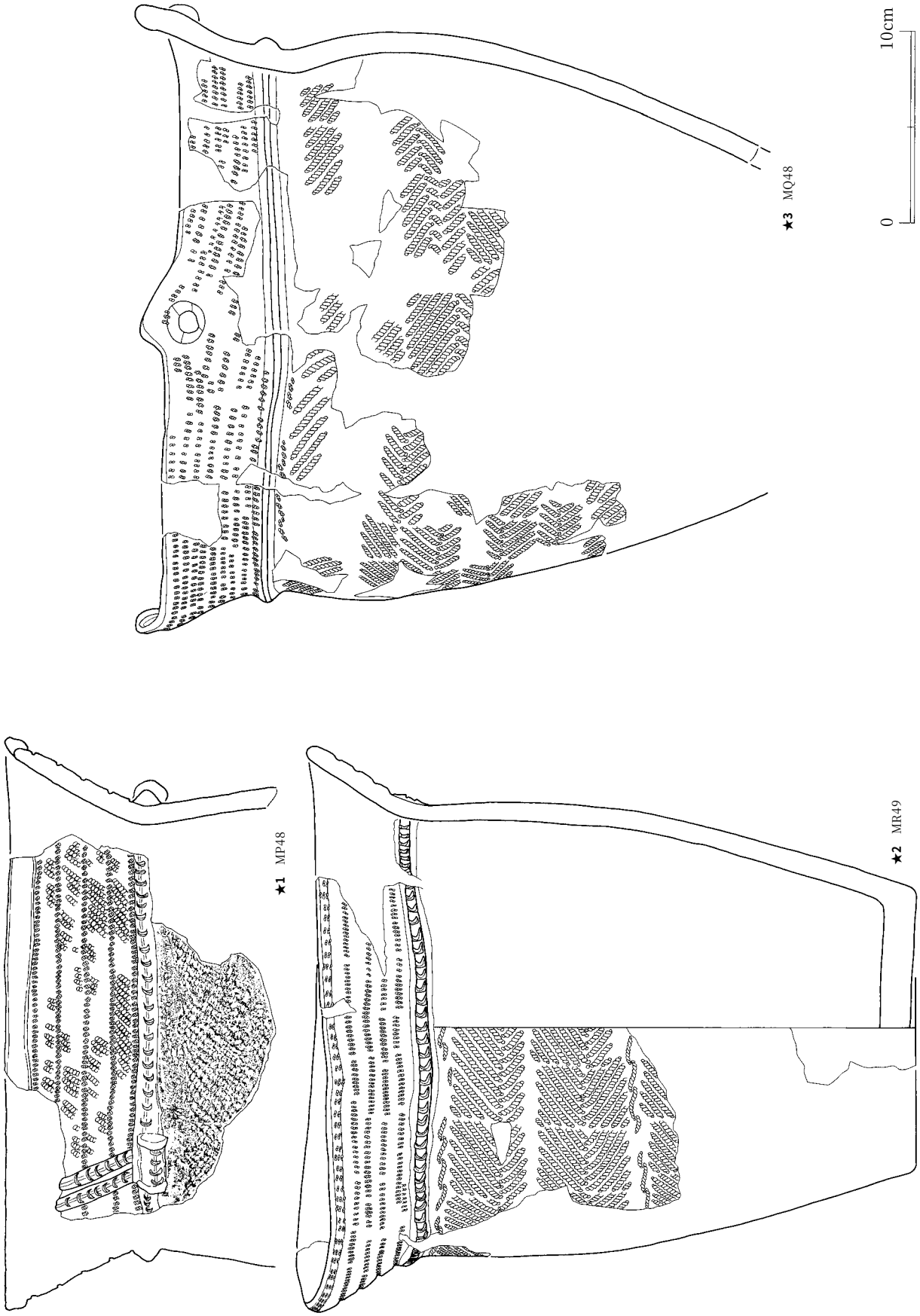
3　ML50

0　10cm

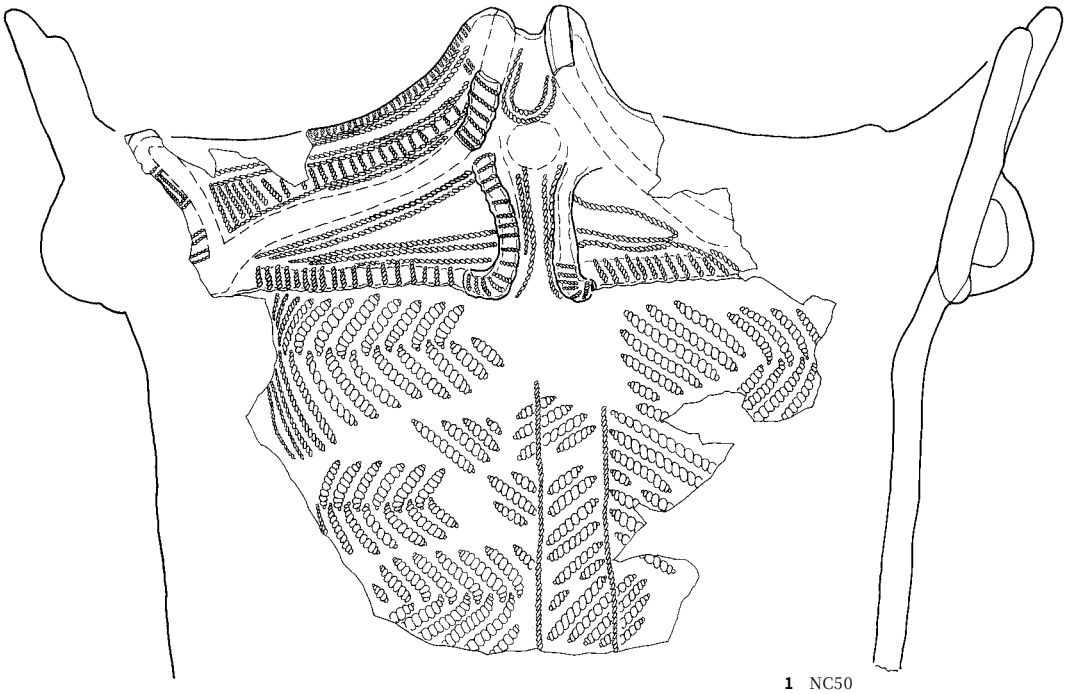
第97図　遺構外出土土器類(14)



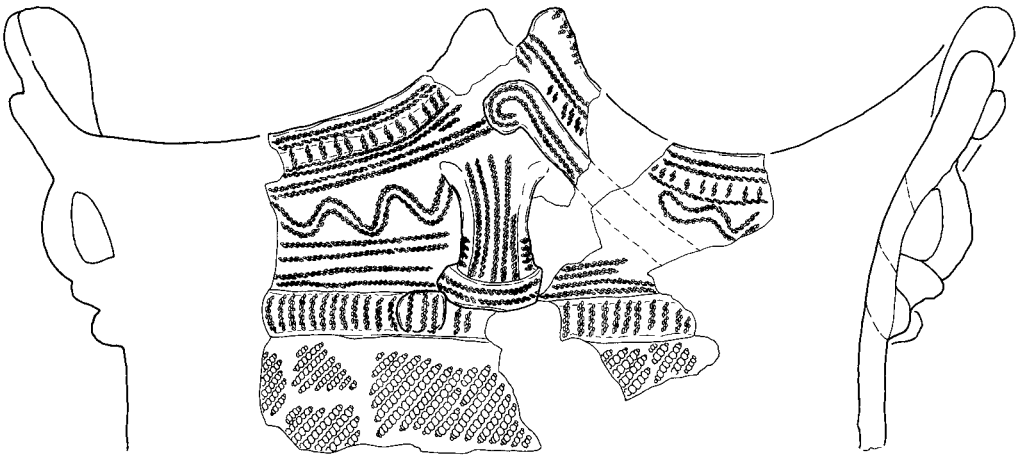
第98図　遺構外出土土器類(15)



第99図　遺構外出土土器類(16)



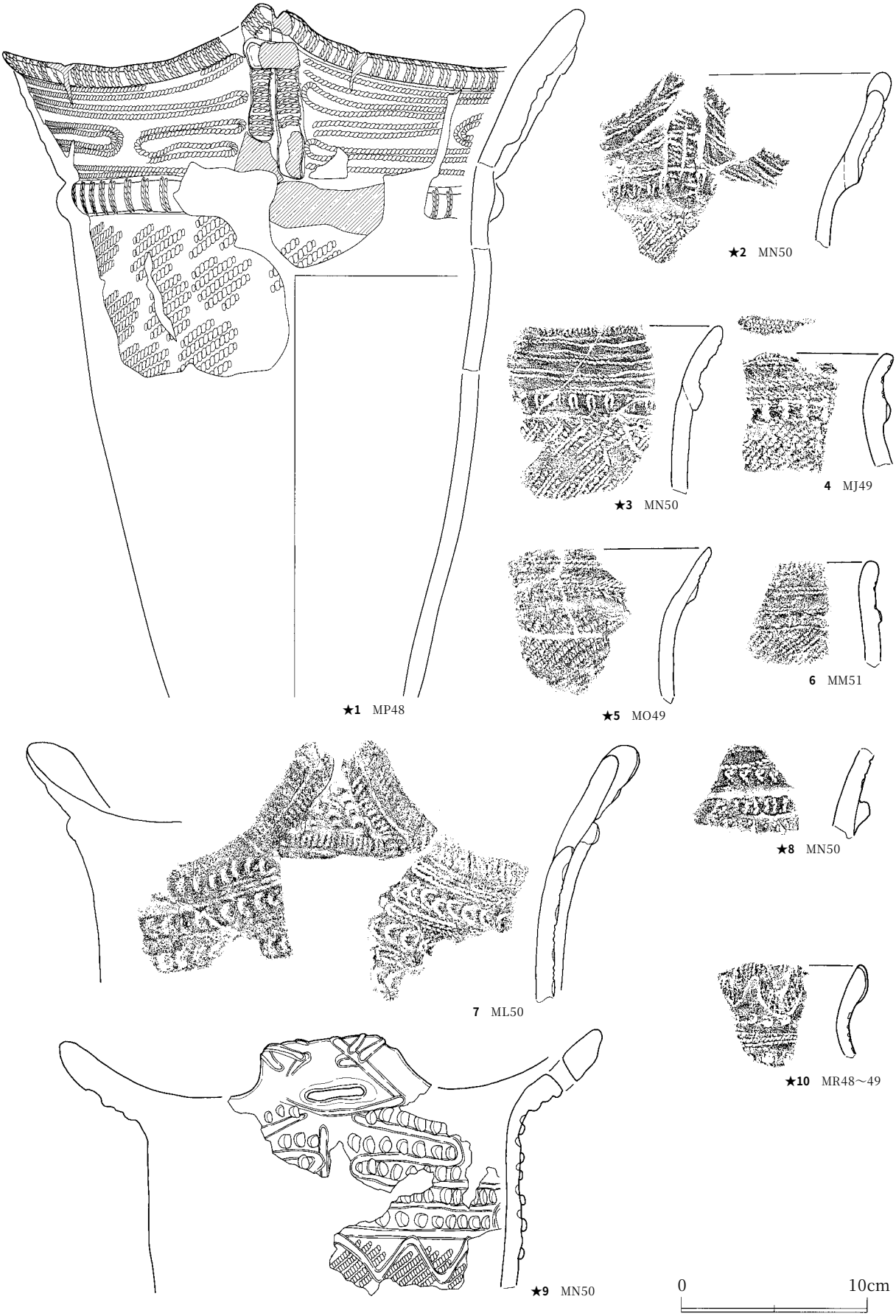
1 NC50



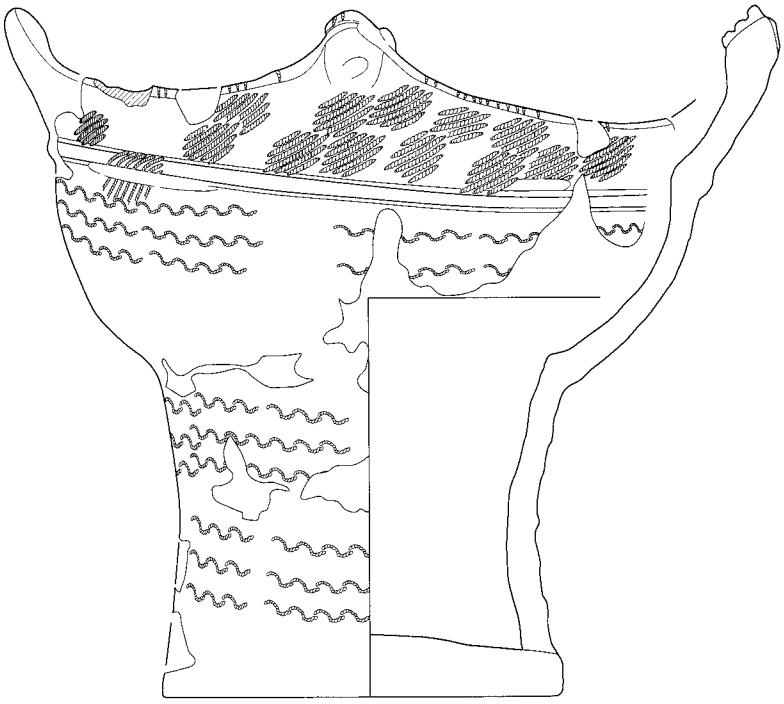
2 ML49

0 10cm

第100図　遺構外出土土器類(17)

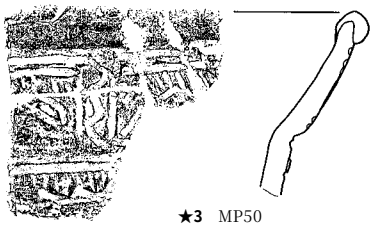


第101図　遺構外出土土器類(18)

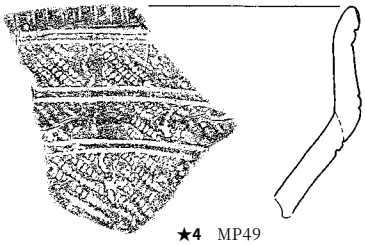


★1 MP50

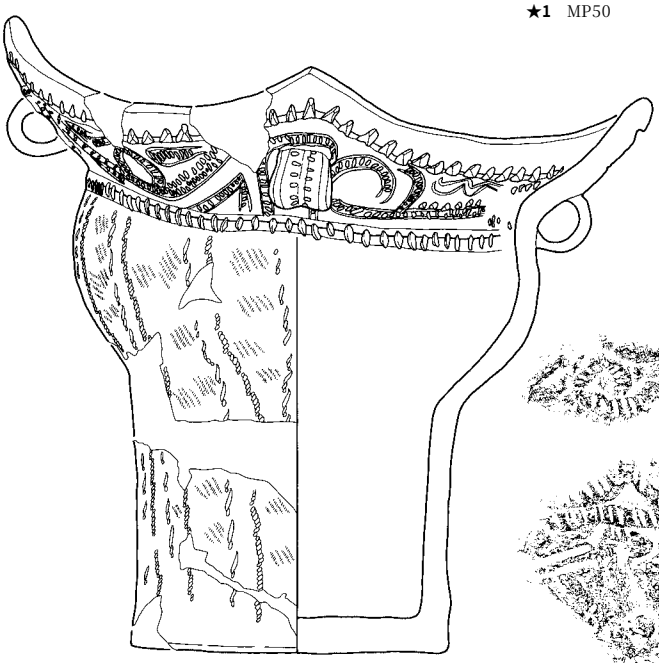
★2 MS49



★3 MP50

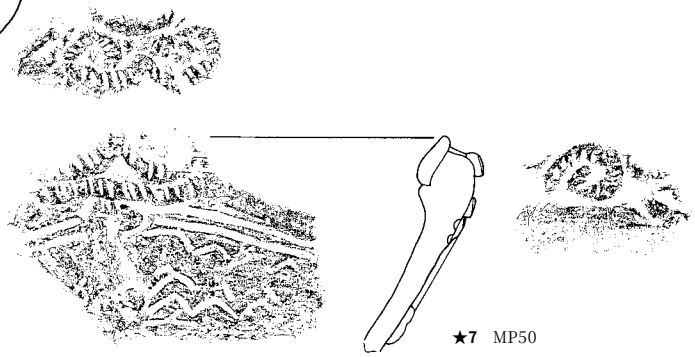


★4 MP49

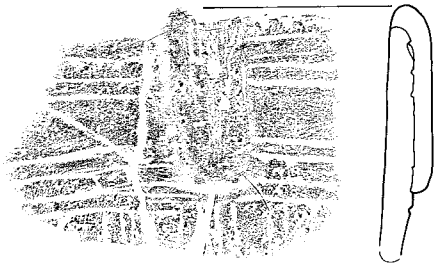


★5 MQ49

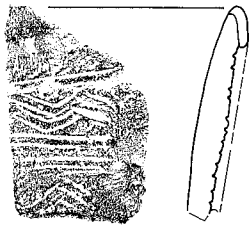
★6 MO50



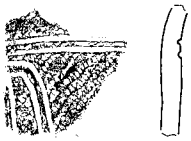
★7 MP50



★8 MN50



★9 MQ48

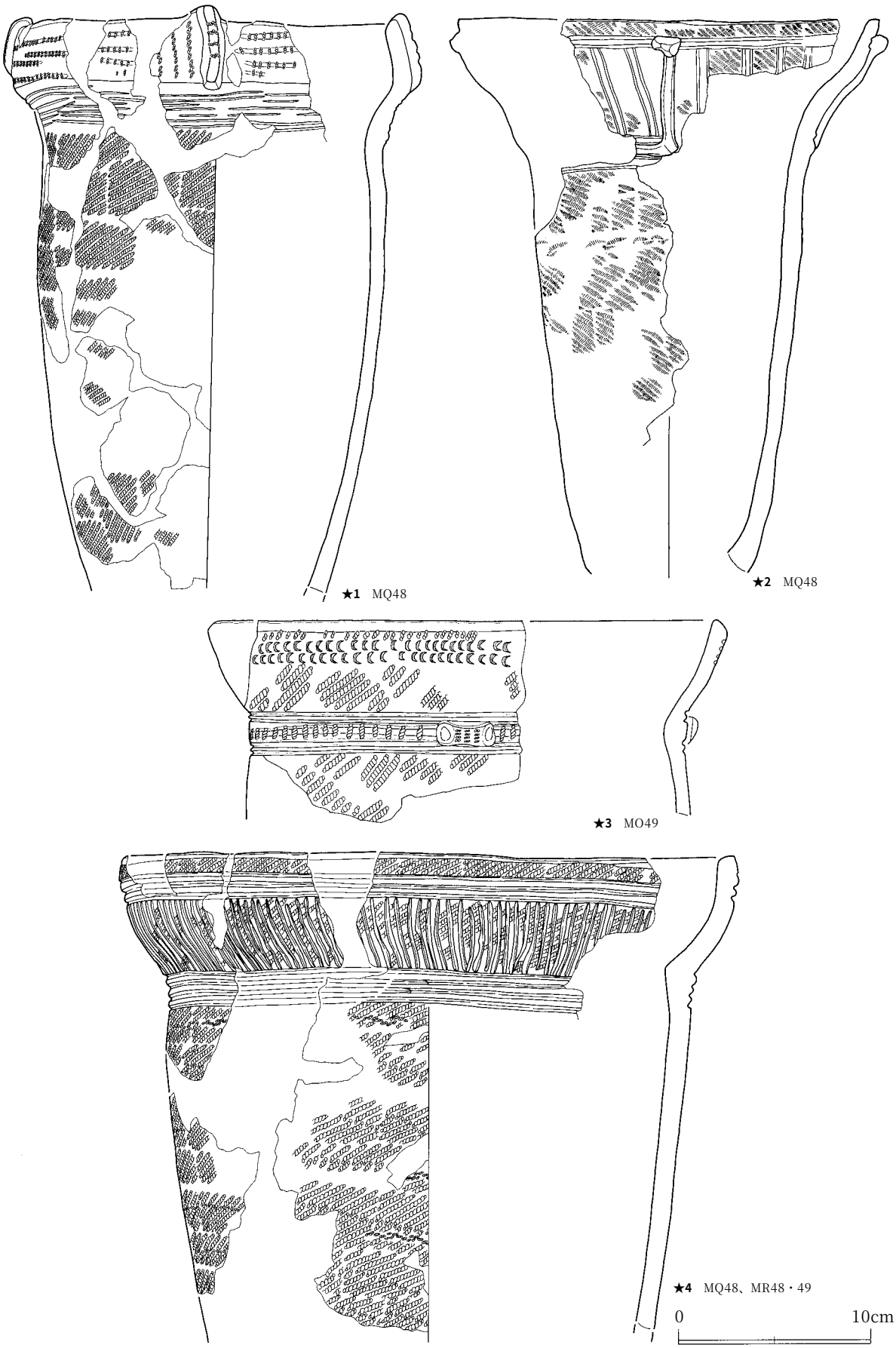


★10 MO48

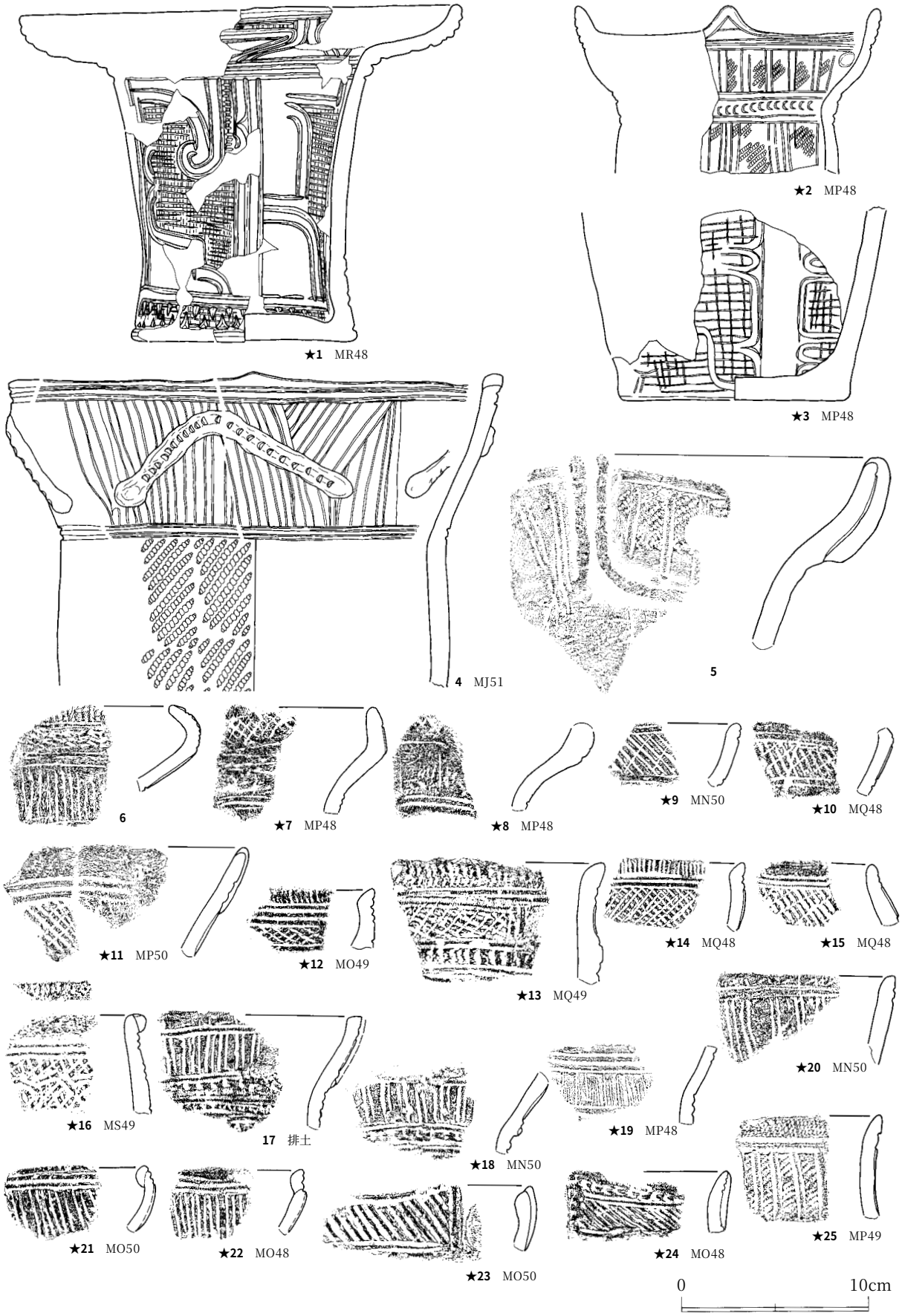
11 MJ50

0 10cm

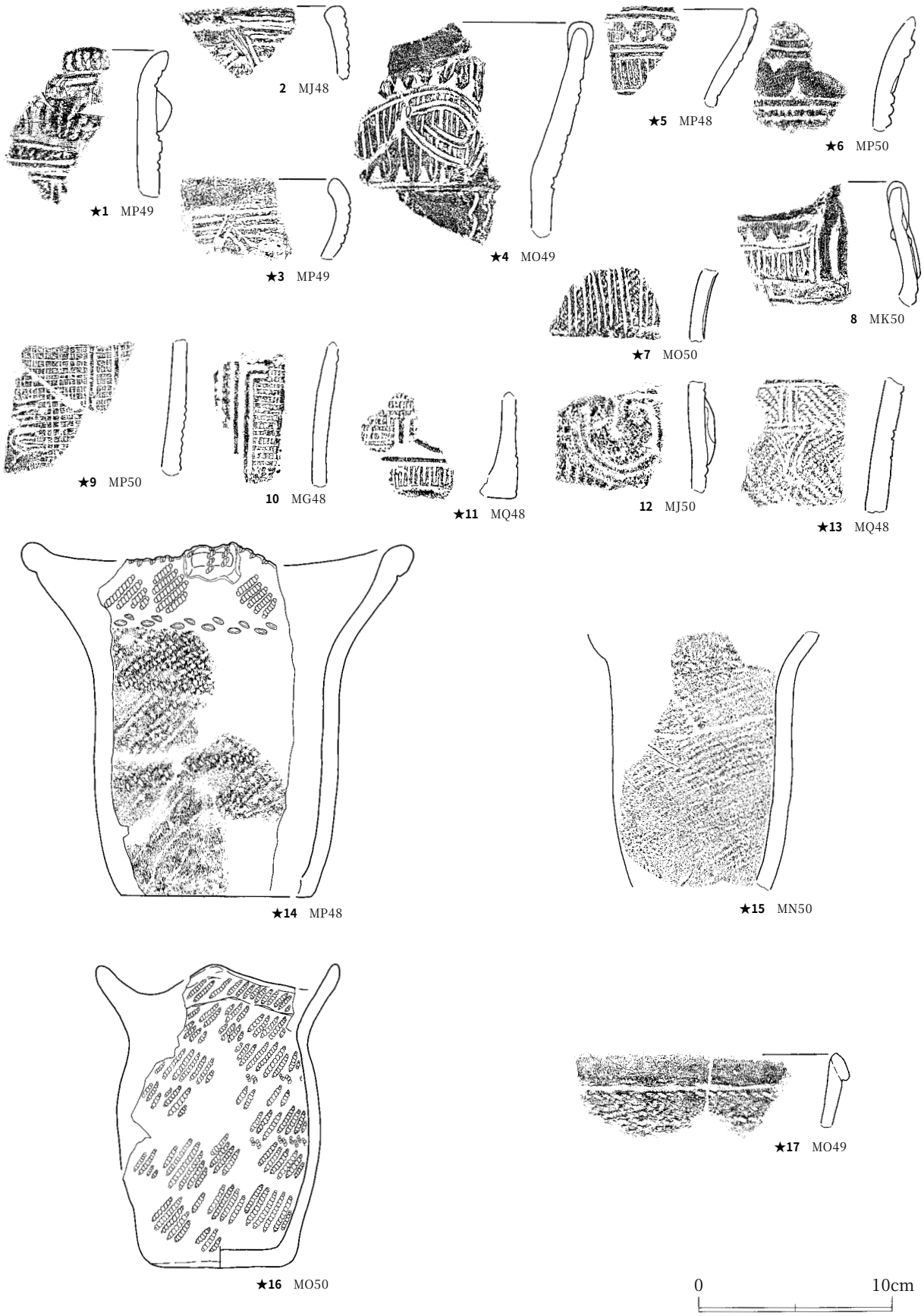
第102図　遺構外出土土器類(19)



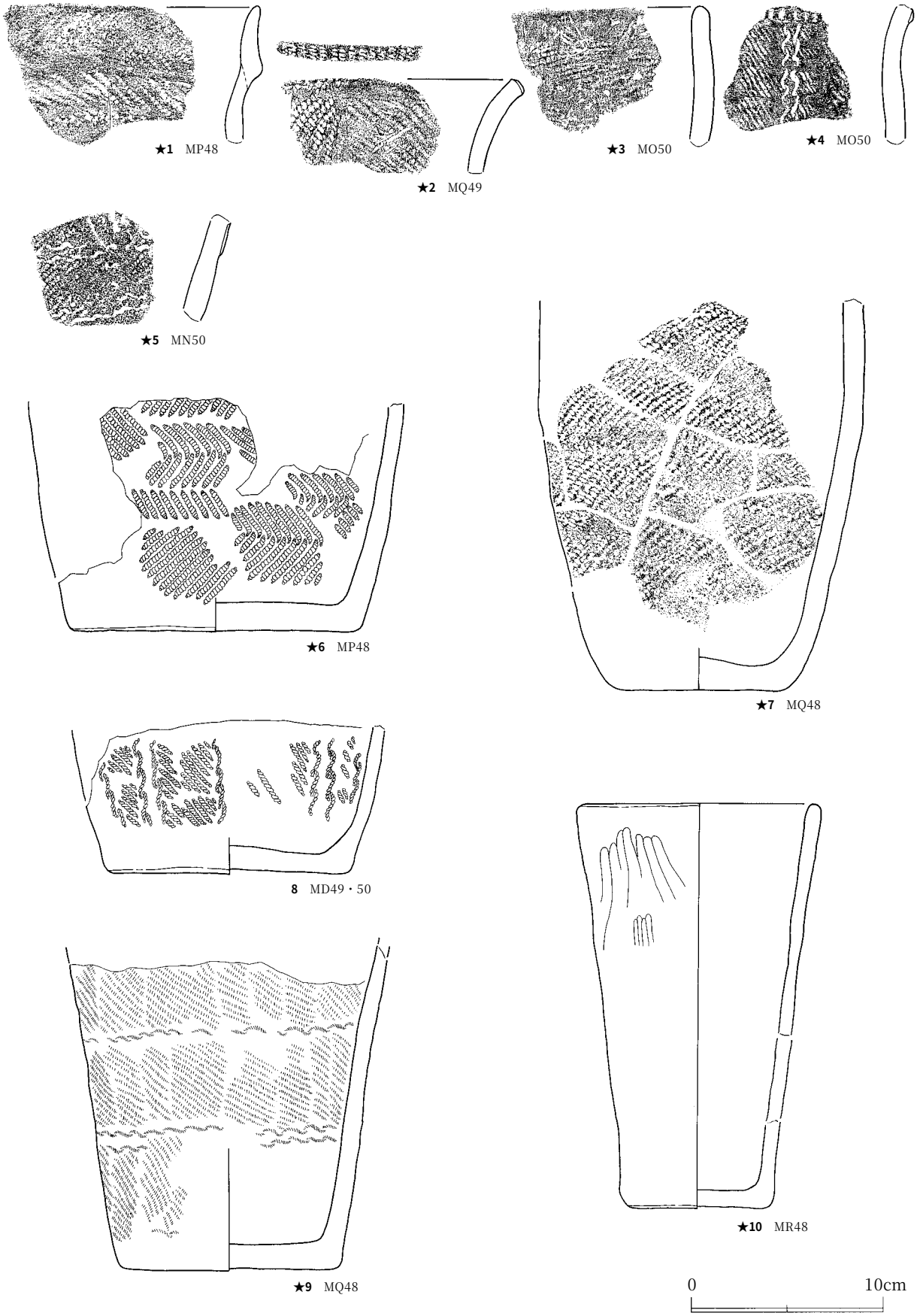
第103図　遺構外出土土器類(20)



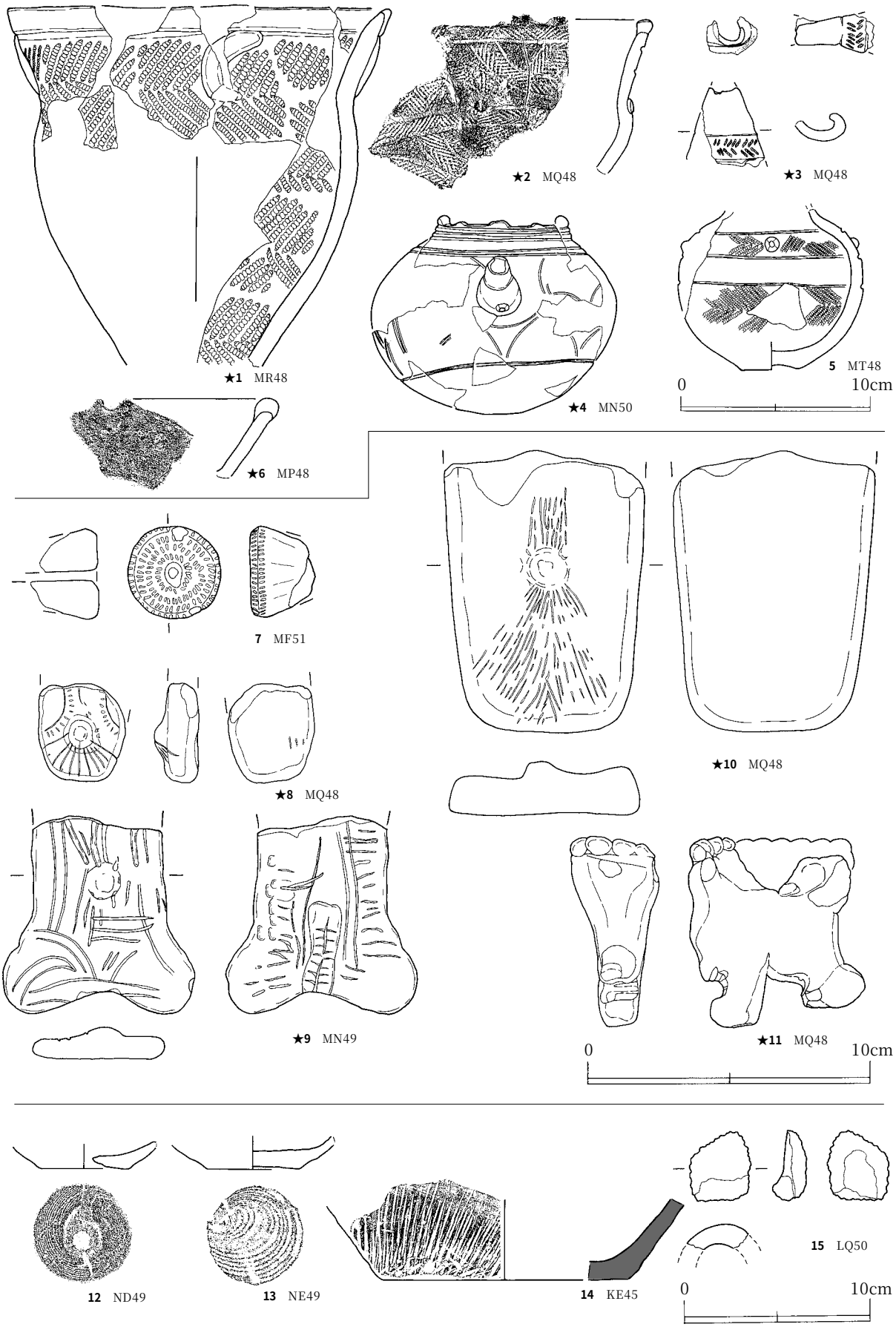
第104図　遺構外出土土器類(21)



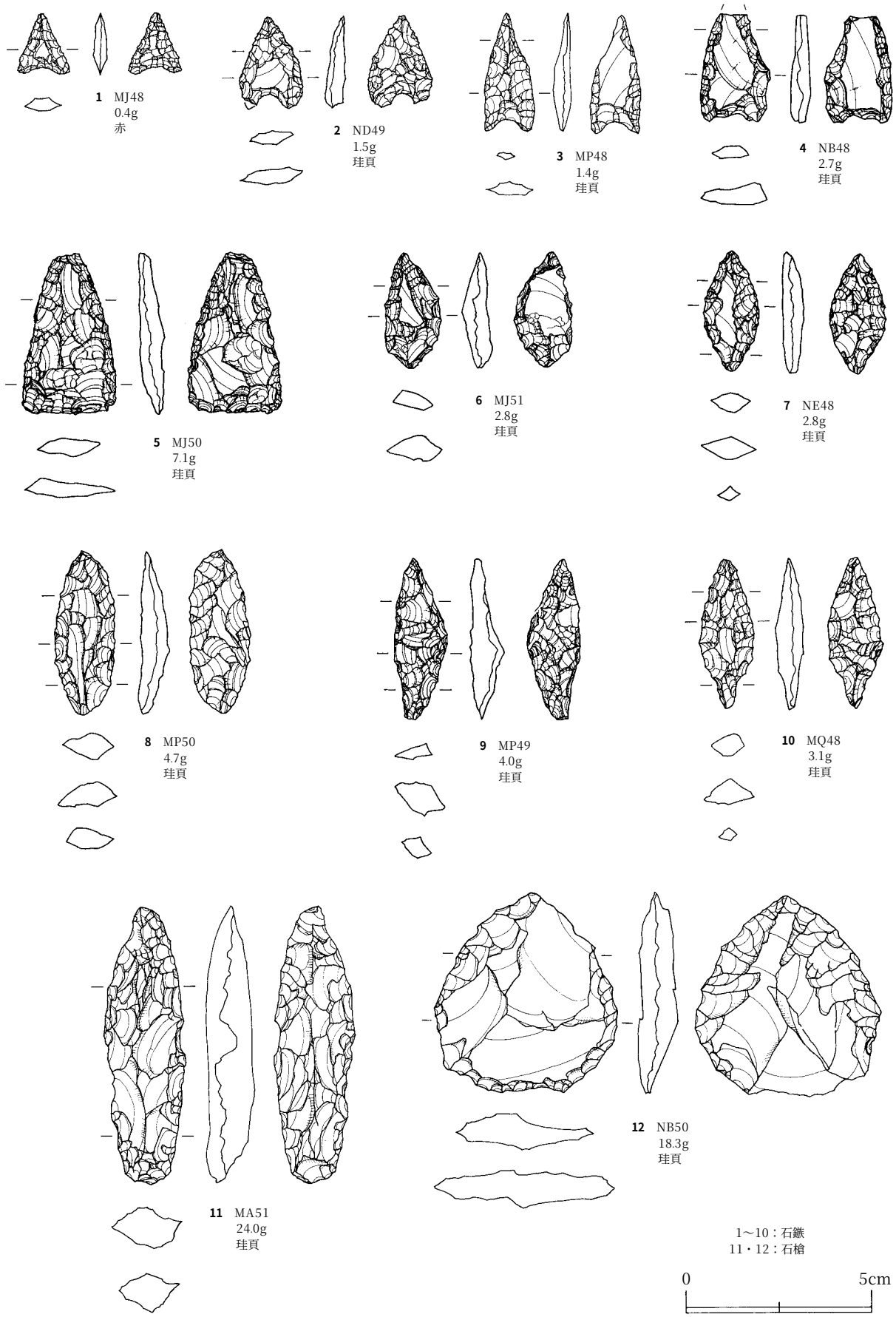
第105図　遺構外出土土器類(22)



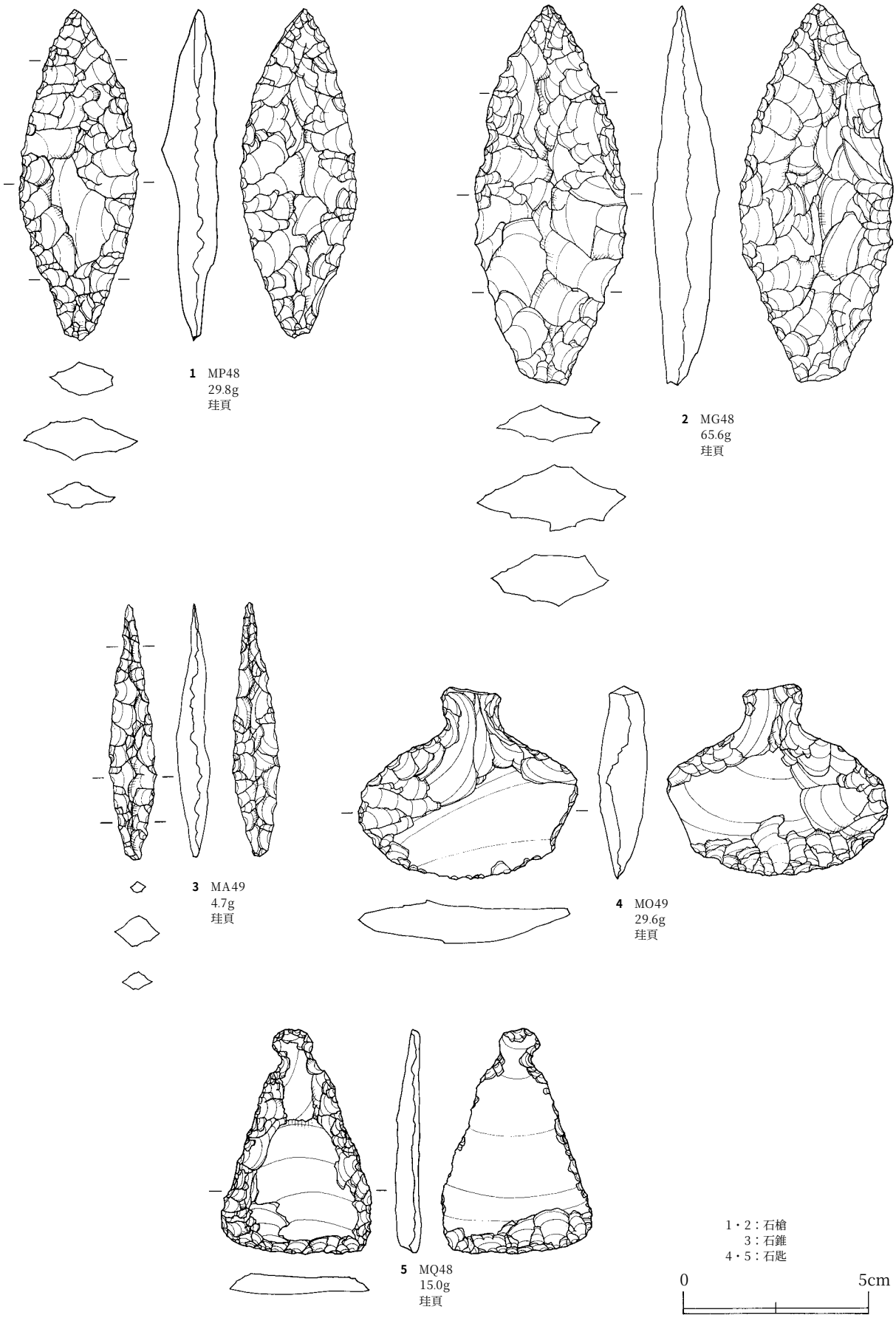
第106図　遺構外出土土器類(23)



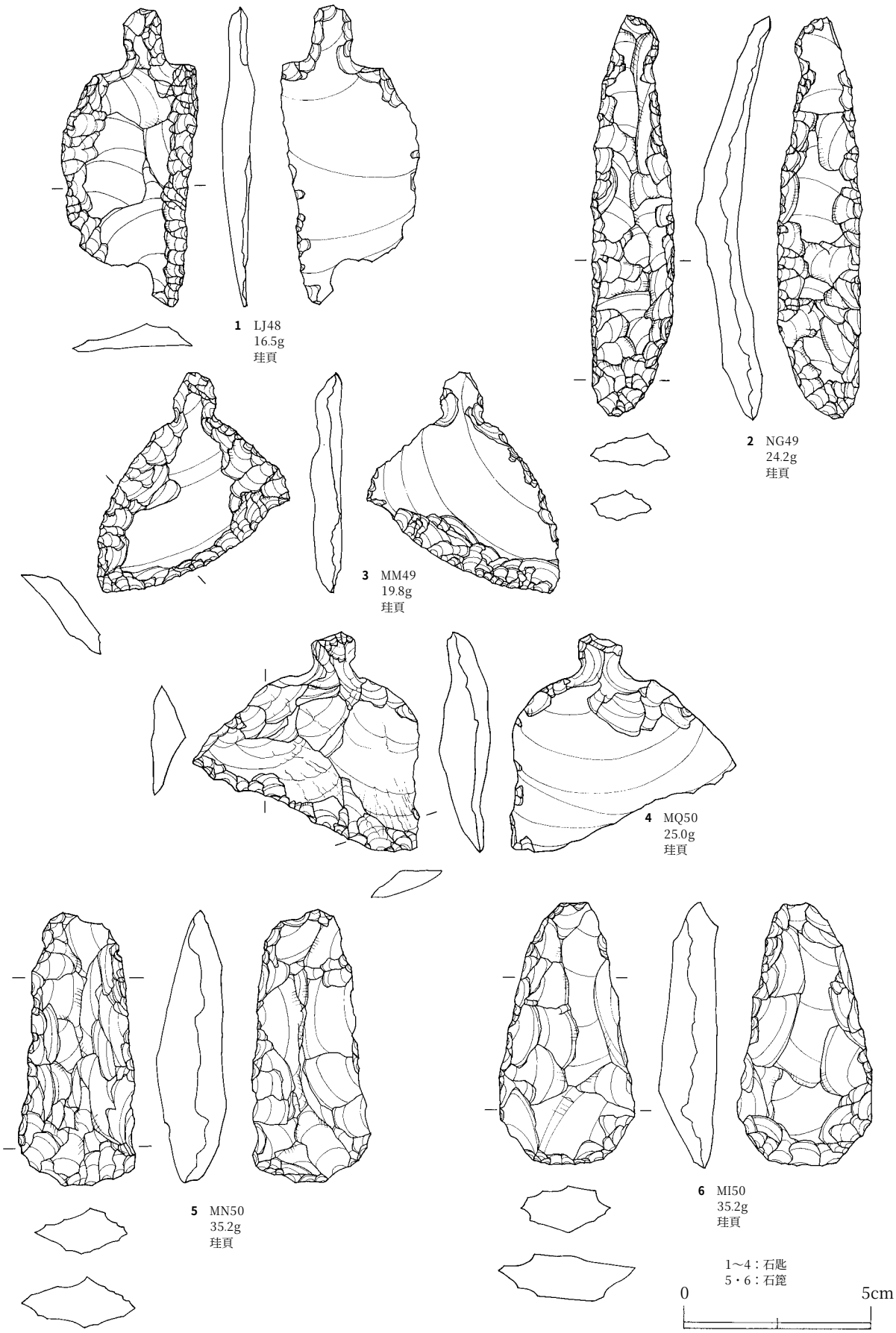
第107図　遺構外出土土器類(24)



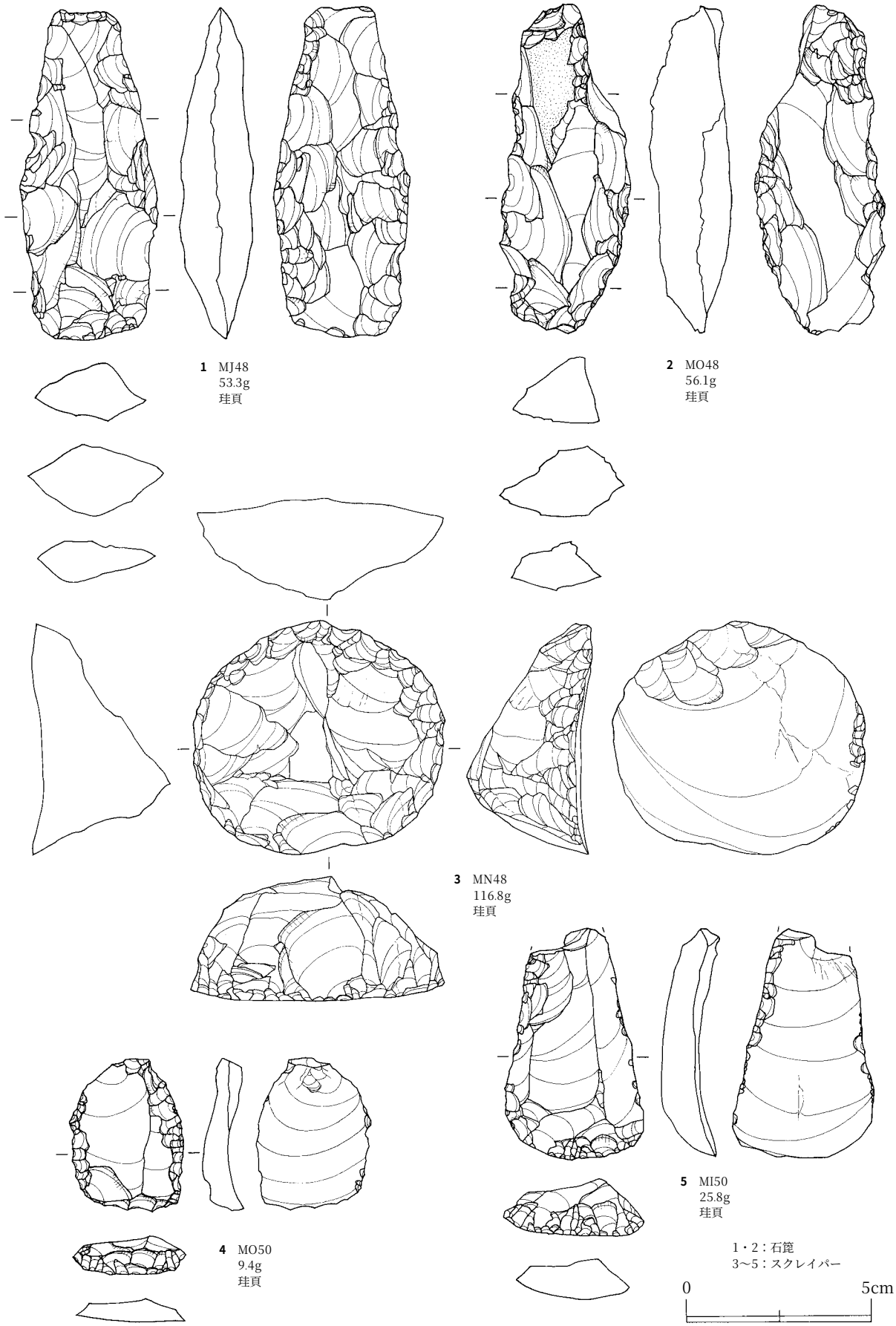
第108図　遺構外出土石器類（１）



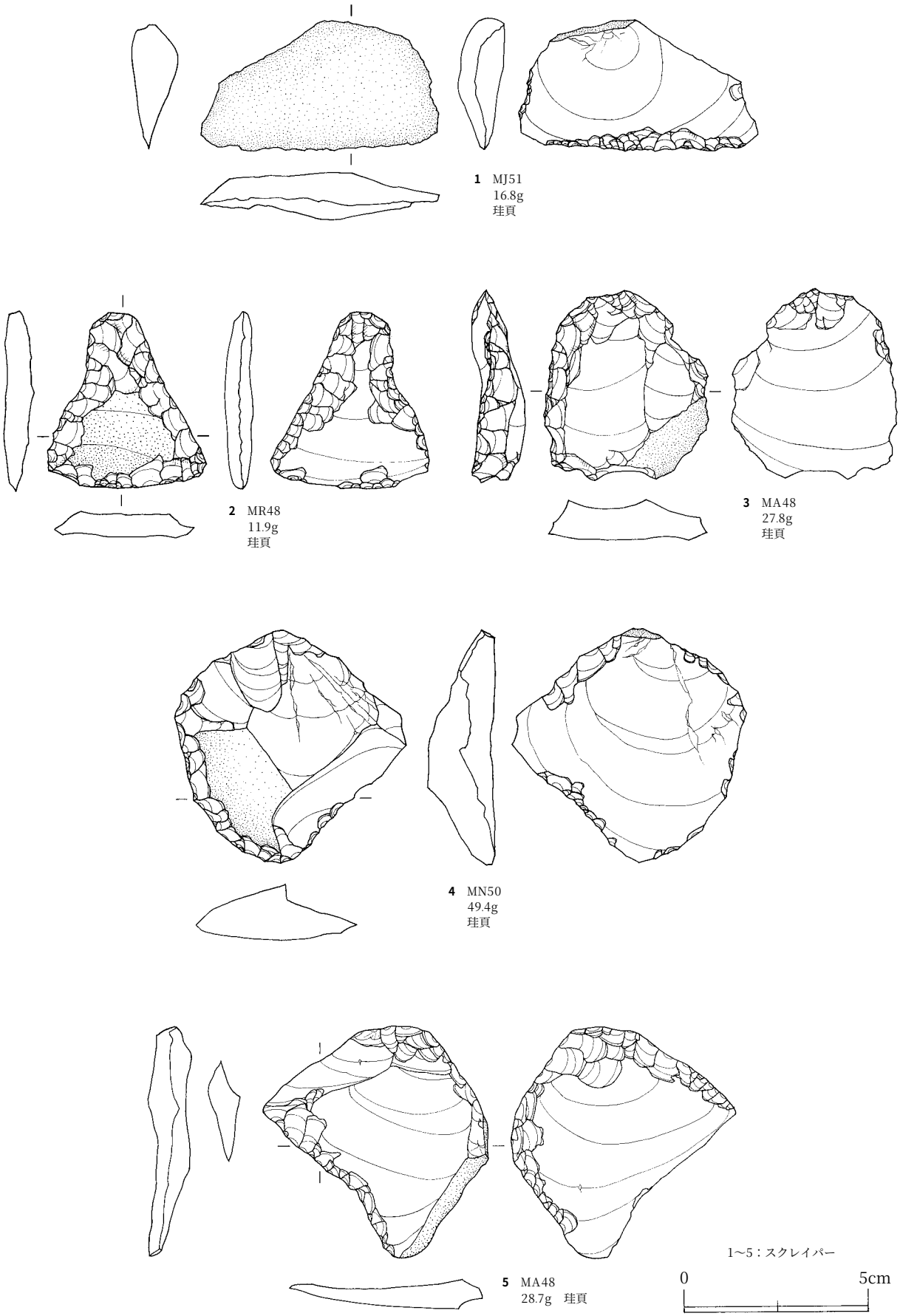
第109図　遺構外出土石器類（２）



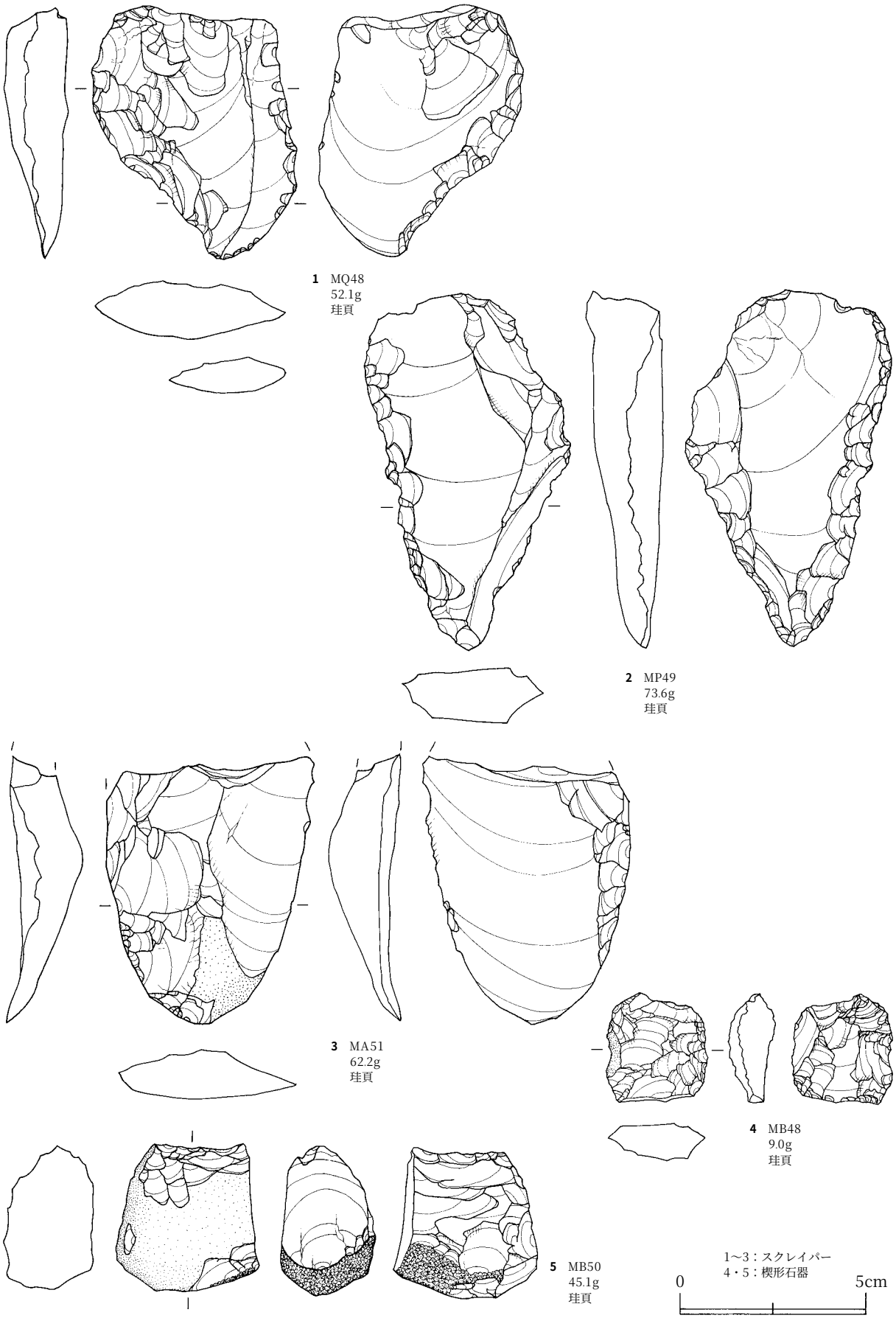
第110図　遺構外出土石器類（３）



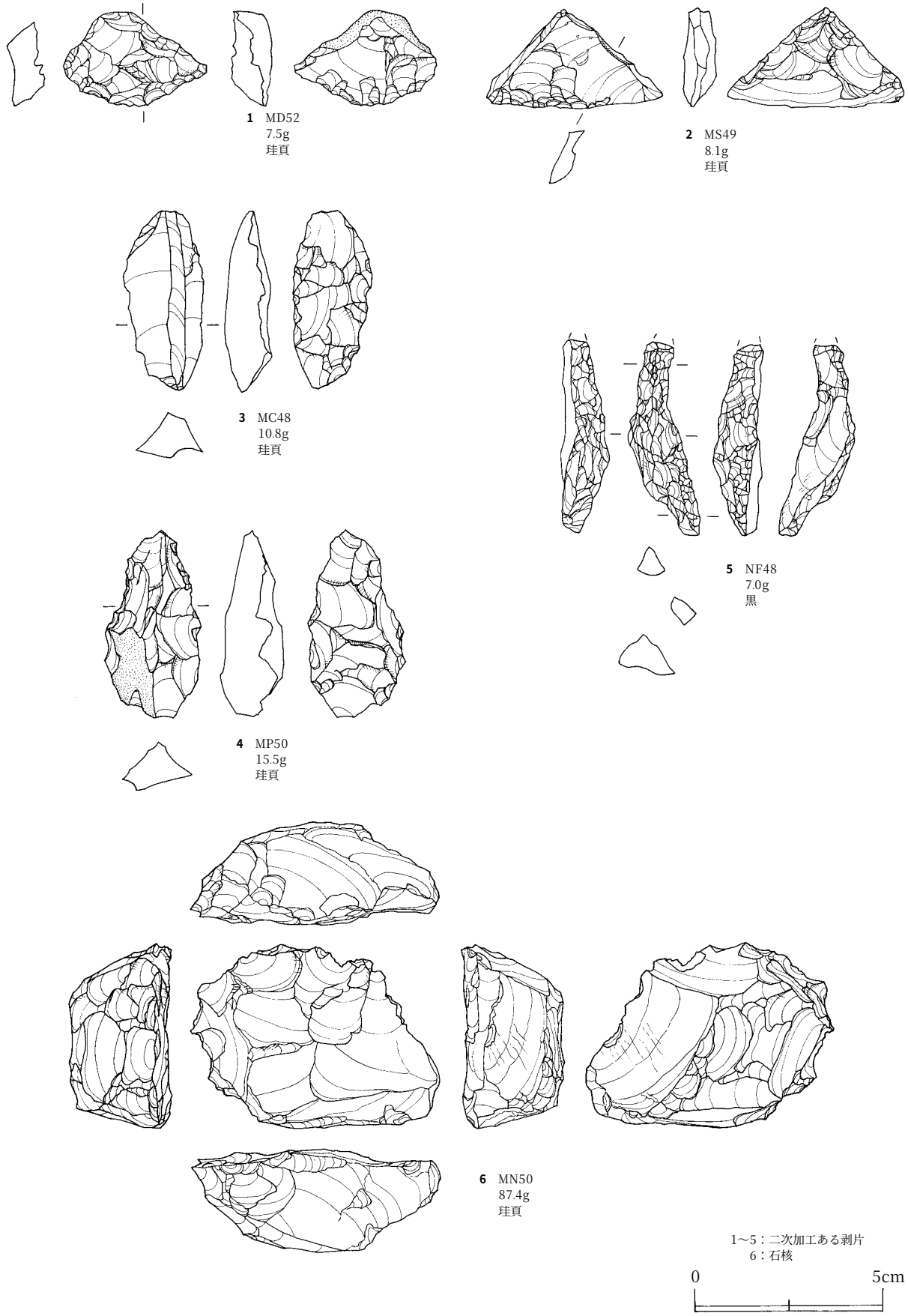
第111図　遺構外出土石器類（４）



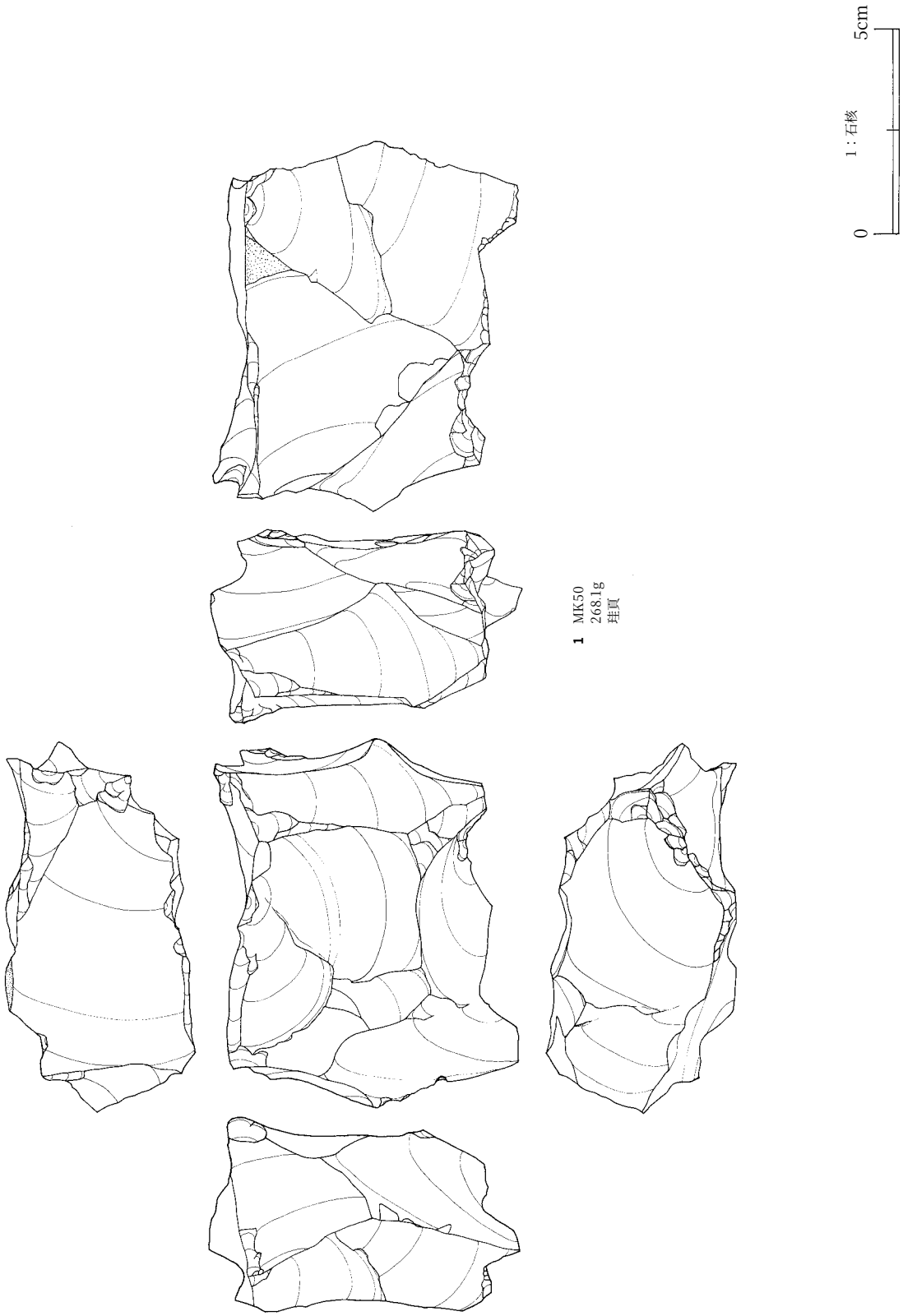
第112図　遺構外出土石器類（５）



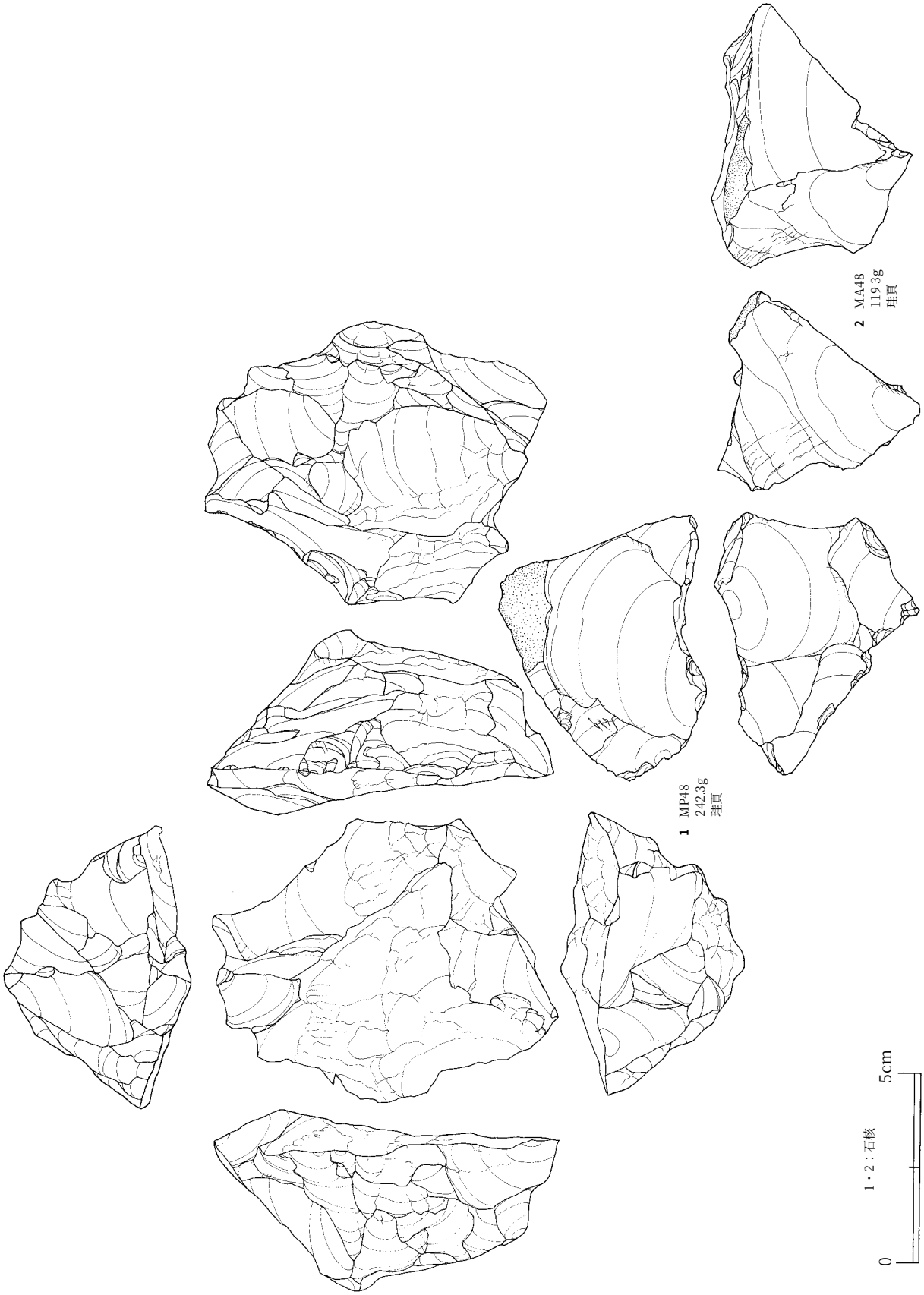
第113図　遺構外出土石器類（６）



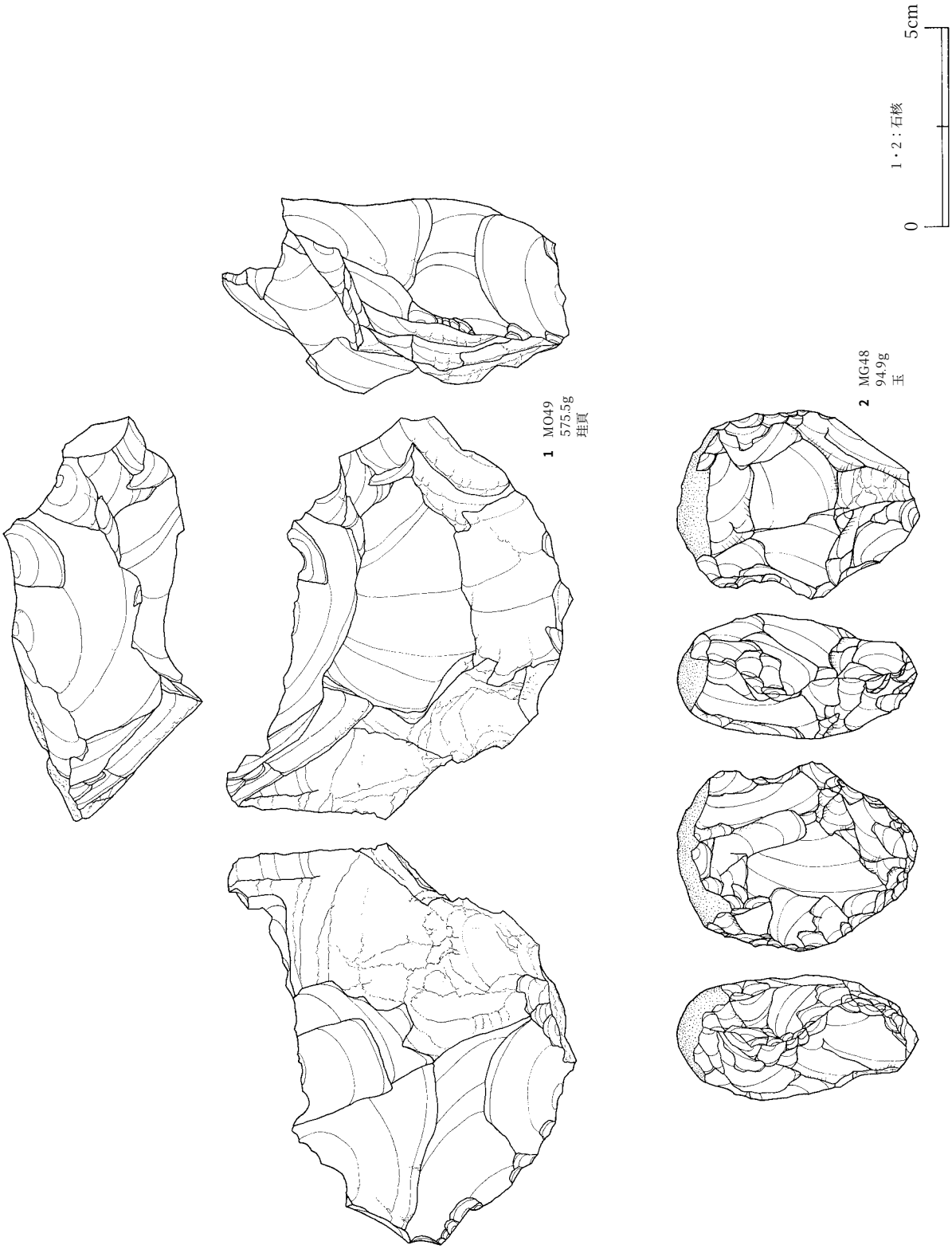
第114図　遺構外出土石器類（７）



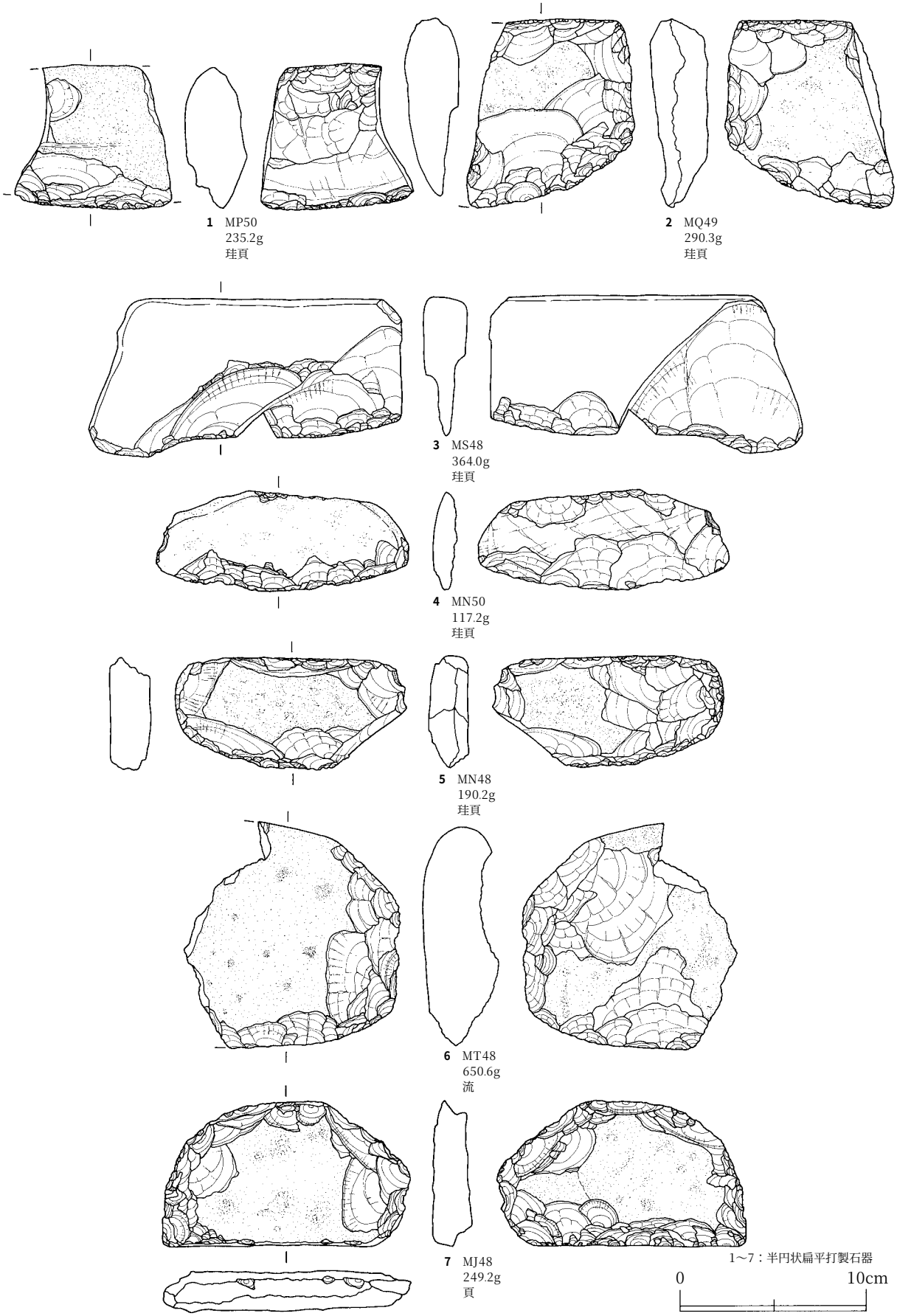
第115図　遺構外出土石器類（８）



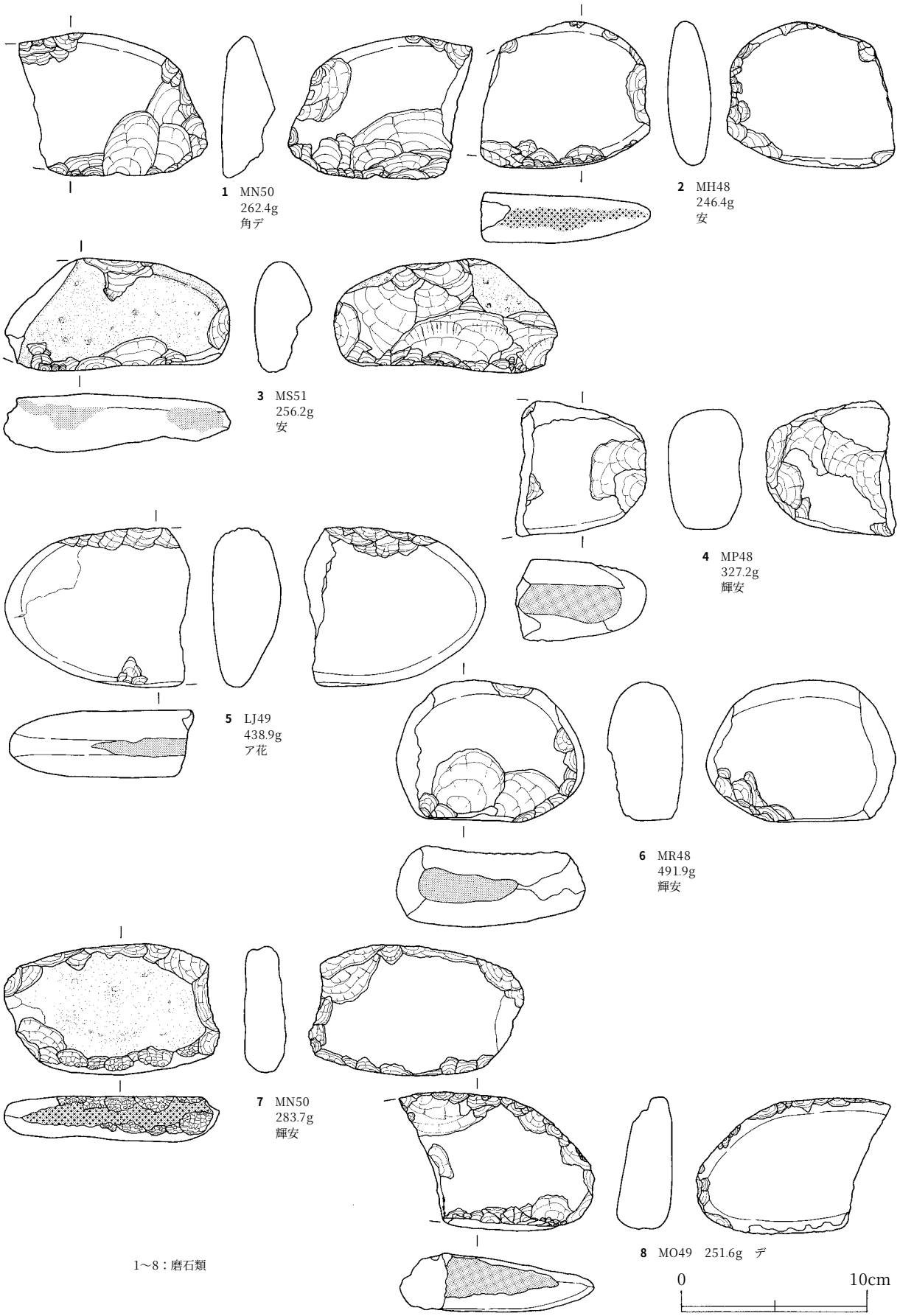
第116図　遺構外出土石器類（９）



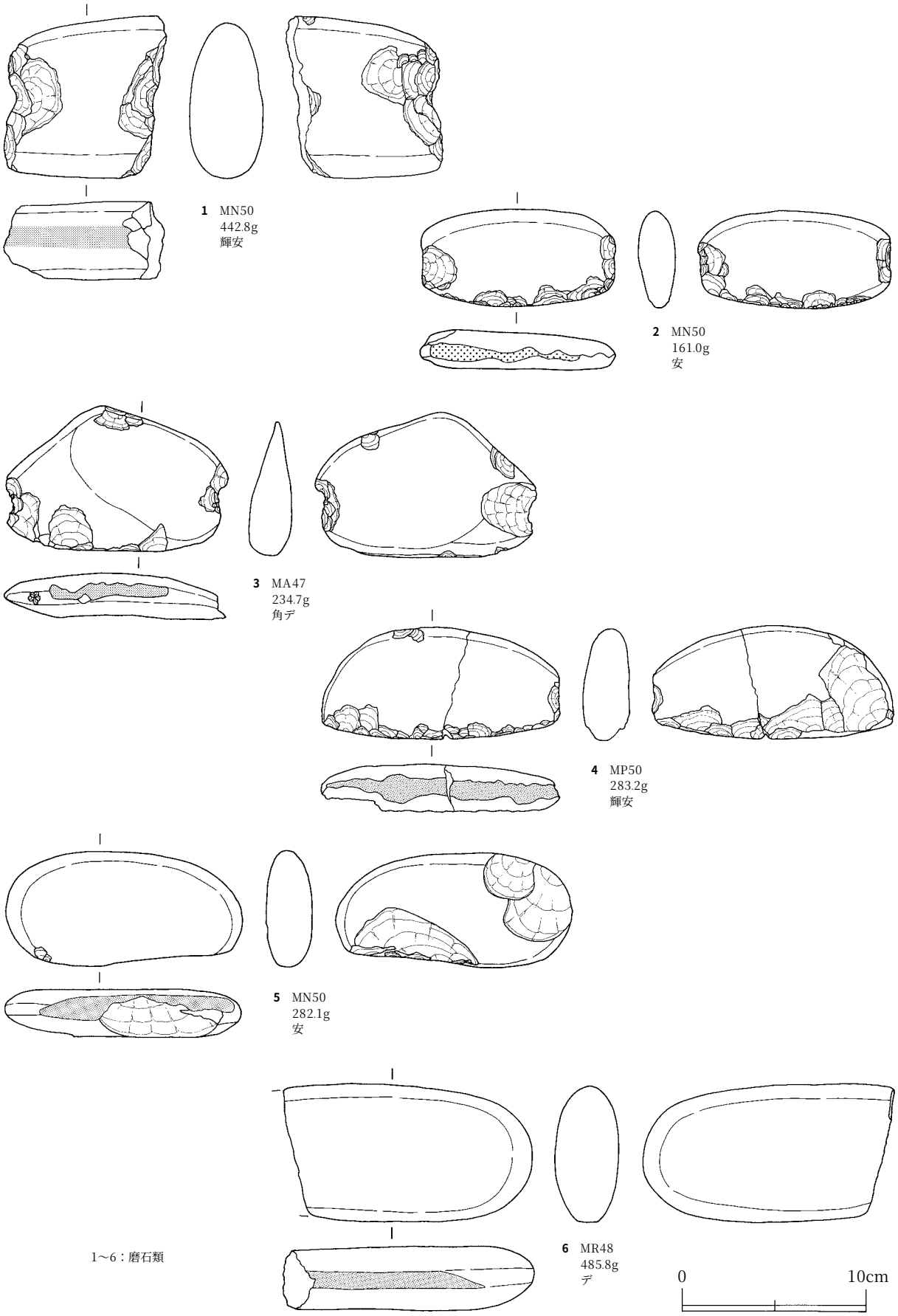
第117図　遺構外出土石器類(10)



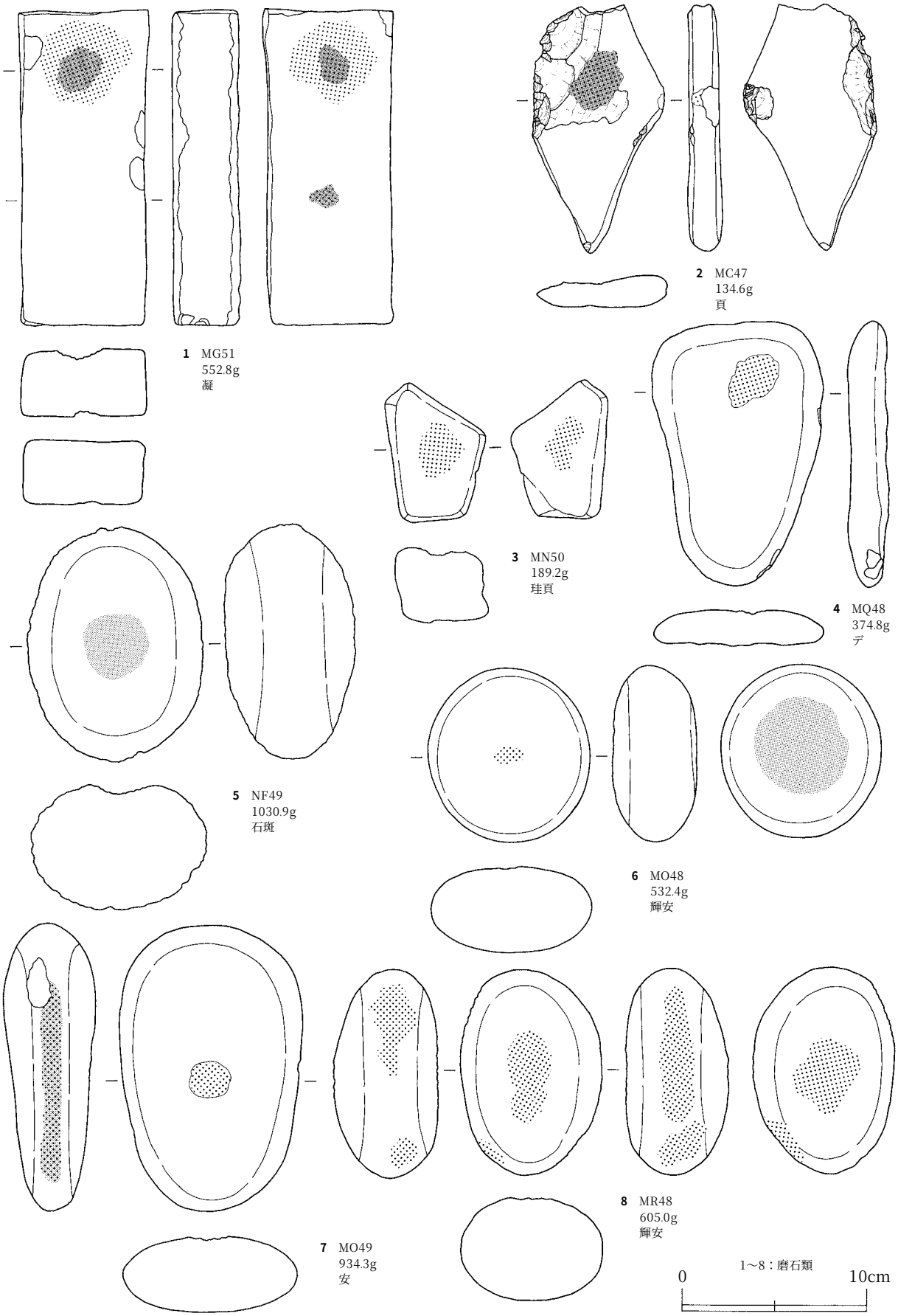
第118図　遺構外出土石器類(11)



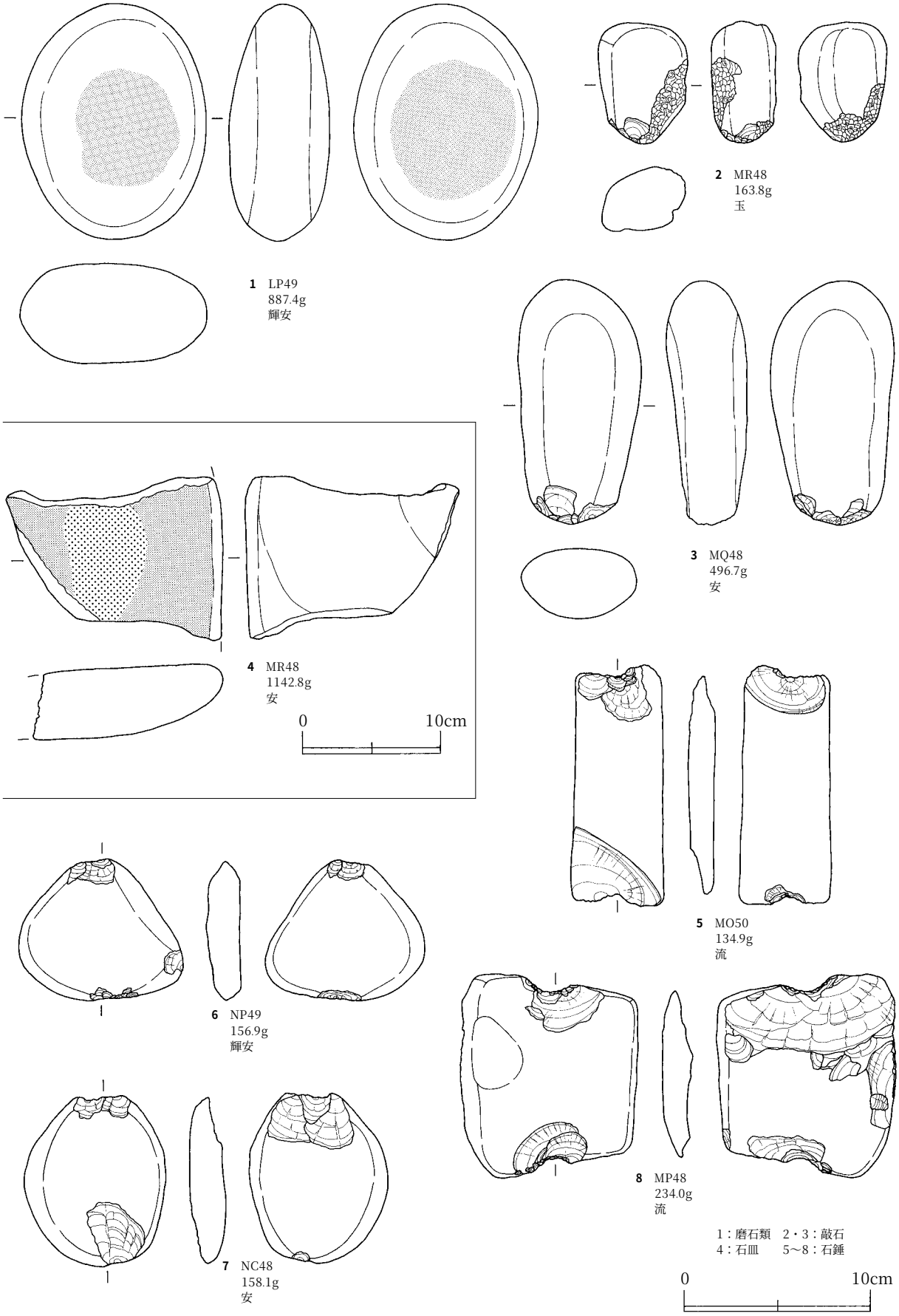
第119図　遺構外出土石器類(12)



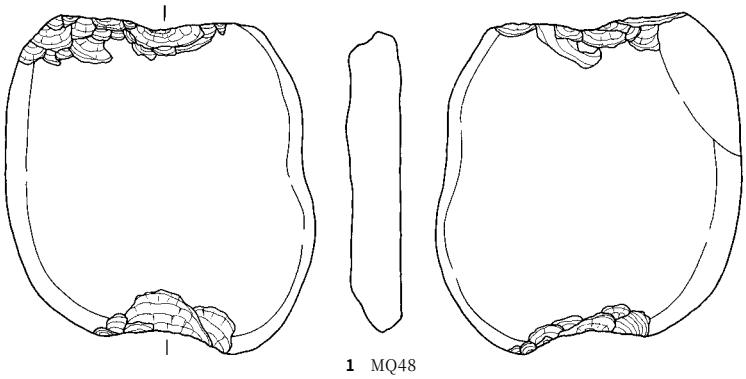
第120図　遺構外出土石器類(13)



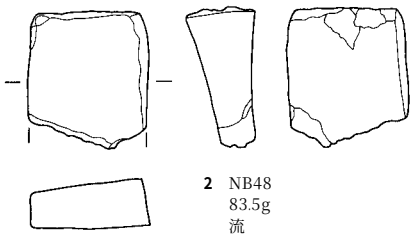
第121図　遺構外出土石器類(14)



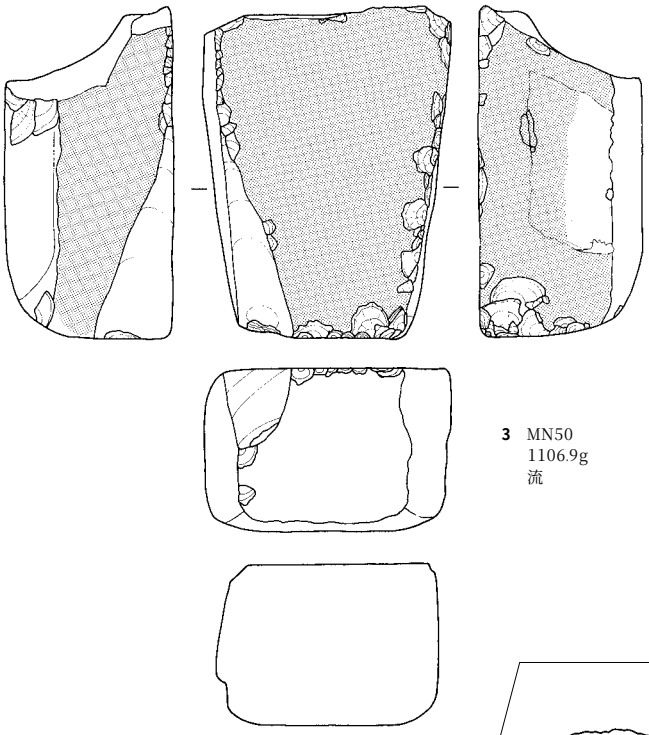
第122図　遺構外出土石器類(15)



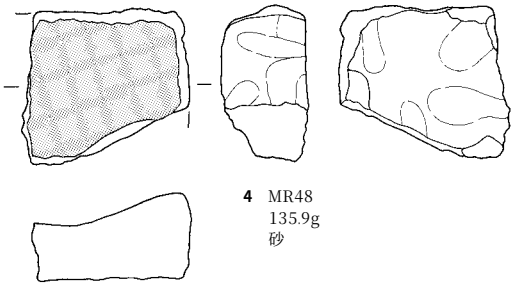
1 MQ48
671.8g
輝安



2 NB48
83.5g
流

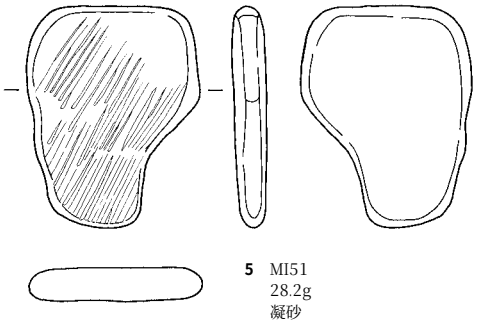


3 MN50
1106.9g
流

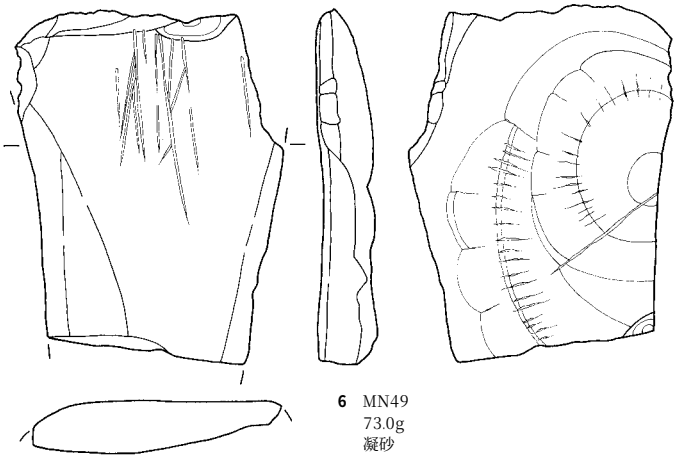


4 MR48
135.9g
砂

0　10cm



5 MI51
28.2g
凝砂



6 MN49
73.0g
凝砂

1：石錘
2～4：砥石
5・6：線刻礫

0　10cm

第123図　遺構外出土石器類(16)

第５章　自然科学的分析

第１節　和田Ⅲ遺跡出土鉄滓の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館　赤沼英男

１　はじめに

秋田県山本郡山本町に所在する和田Ⅲ遺跡は、農免農道整備事業に伴い、平成12年に発掘調査された遺跡である。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡、フラスコ状土坑、土器埋設遺構などとともに、調査区中央において９～10世紀代に比定される竪穴住居跡１軒が検出され、その周辺表土から椀形滓が出土した。また、調査区西端でも椀形滓が見出されている。住居跡内またはその周辺で鉄に関する生産活動が行われていたことは確実である。しかし、鉄関連炉跡は未検出なため、出土した鉄滓がどのような生産活動に伴って排出されたのか、その成因を言及することは困難とされた。(註1)

鉄滓の成因を推定する方法の一つに、出土遺物の金属考古学的調査がある。出土した椀形滓の金属考古学的調査の結果、椀形をした容器の中に溶銑を準備し、それを脱炭して鋼を製造する操作が行われていた可能性が高く、容器として土器の使用が想定された。以下に金属考古学的調査結果を報告する。

２　調査資料

金属考古学的調査を行った資料は椀形滓２点である。No.2は上面（平坦面）の直径が13.6㎝、資料厚1.6㎝の椀形滓のほぼ中心部分に、直径9.1㎝、資料厚2.8㎝の椀形滓が固着した資料で、２つの椀形滓の間には部分溶融した土器が噛み込まれている。第19表に調査資料番号、検出遺構、形状、および外観上の特徴を示す。なお、No.2の周辺からは内径が約２㎝の羽口が見出されている。(註2)

第19表　調査資料　注）資料番号、検出地点は秋田県埋蔵文化財センター　榮　一郎氏による。

No.	資料番号	検出地点	形状	外観上の特徴
1	1	ＮＦ49表土	椀形滓の一部	凸部は青灰色を呈し、溶融または部分溶融した粘土状物質で覆われている。凹部にはところどころに赤錆が残存している。
2	2	ＬＲ51表土	大小２つの椀形滓が固着	固着する大小２つの椀形滓の間には、土器が残存している。下部大形の椀形滓凸部は青灰色を呈し、溶融または部分溶融した粘土状物質で覆われている。上部小形椀形滓凹部は黒褐色を呈し、ところどころに赤錆がみられる。

３　調査試料片の摘出

椀形滓からの調査用試料片摘出は、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル（以下、ハンドドリルという）で行った。No.1については第124図a_1の矢印で示した位置から、No.2については第125図$a_{1\text{-}4}$の４箇所（Sa_1～Sa_4）に深さ１～３㎝の切り込みを入れ、それぞれの切り込み面から0.5～１ｇの試料片２個を摘出した。摘出した試料片のうち大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。

４　調査方法

組織観察用試料片はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された鉄滓中の鉱物相を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（ＥＰＭＡ）で分析した。化学分析用試料片は外表面に付着する土砂を除去するため、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料片を130℃で２時間以上乾燥し、テフロン分解容器に直接秤量した。テフロン分解容器に塩酸、硝酸、フッ化水素酸、および蒸留水を加え密栓した後、マイクロウエーブ分解装置を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe（全鉄）、Cu（銅）、マンガン（Mn）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、リン（P）、チタン（Ti）、ケイ素（Si）、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）、バナジウム（V）の12元素を誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-OES法）で分析した。

５　調査結果

５－１　椀形滓の化学組成（第20表）

No.1およびNo.2Sa_4のT.Feはそれぞれ64.06%、53.57%で、6.30%、11.3%のSi、1.37%、2.14%のAlが検出されている。酸化鉄と粘土状物質とが反応して生成した鉄滓と推定される。No.2Sa_1～Sa_3のT.Feは14.36～20.56%で、Si、Alはそれぞれ15.8～28.2%、6.11～6.69%含有されている。主として溶融または部分溶融した粘土状物質からなる試料と考えられる。

第20表　椀形滓の分析結果

No	化学組成(mass%)												鉱物組成
	T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	
1	64.06	<0.001	<0.001	0.003	0.079	0.05	1.08	6.30	0.408	1.37	0.371	0.057	Wü、XT、S
2Sa_1	15.48	0.005	0.003	0.004	0.067	0.16	0.564	28.2	1.24	6.69	0.714	<0.001	(Q、S)、(Ha、Fa、S)、(Fa、M)
2Sa_2	14.36	0.003	0.003	0.006	0.099	0.19	0.532	27.7	1.671	6.27	0.912	<0.001	M
2Sa_3	20.56	0.003	0.003	0.005	0.073	0.21	0.453	15.8	1.811	6.11	0.641	<0.001	Me、S
2Sa_4	53.57	0.004	0.002	0.007	0.044	0.10	0.182	11.3	1.09	2.14	0.400	<0.001	Wü、Fa、M

注１）No.は表１に対応。化学成分分析はICP-OES法による。
注２）Wü:ウスタイト（化学理論組成FeO）、XT:主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物、Q:酸化ケイ素、Ha:主としてFeO、Al2O3からなる化合物、Fa:FeO-SiO2系化合物、S:ガラス質ケイ酸塩、M:マトリックス。

５－２　鉄滓から摘出した試料片の組織観察結果

No.1から摘出した試料片のマクロ組織にはいたるところに空隙が残存している（第124図a_1・b_1）。枠で囲んだ内部のEPMAによる組成像（COMP）は、灰色の領域［Wü：ウスタイト（化学理論組成FeO）からなると推定される］と暗灰色の領域が混在した粒状物質の回りにFe-Ti-Al-O系化合物（XT）が残存し、その回りをK_2O-Al_2O_3-SiO_2系のガラス質ケイ酸塩（S）が取り囲んだ組織によって構成される（第124図$c_{1\text{-}4}$）。

No.2鉄滓の凸部外表面には灰色を呈し、溶融または部分溶融した粘土状物質が固着している。凸部$Sa_{2\text{-}3}$から摘出した試料片は主としてガラス化した領域からなり、Sa_3には直径１～３μmの鉄粒が残存している（第125図$b_{1\text{-}2}$・第127図）。Sa_1は大小２つの椀形滓が固着した部分の縦断面試料で、中央部分には溶融または部分溶融した土器片がみられる（第126図a_1）。領域R_1内部は主として酸化鉄と酸化アルミニウムからなり微量の酸化チタンを含む化合物（Ha）、FeO-SiO_2系化合物（Fa）、およびFeO-CaO-K_2O-

Al_2O_3-SiO_2系ガラス質ケイ酸塩によって、領域R_3内部はFeO-SiO_2系化合物およびガラス質ケイ酸塩中に微細な結晶が残存したマトリックス（M）からなる。領域R_2はガラス化した領域のところどころに、酸化ケイ素（Q）が残存した組織によって構成される（第126図$b_{2\text{-}5}$）。

Sa_1の下方部から摘出した試料片（Sa_1下部）にはガラス化した領域の内部にNo.1の枠で囲んだ部分とほぼ同様の組織が、Sa_4から摘出した試料片には錆とウスタイト、FeO-SiO_2系化合物、および微細な結晶を内包するマトリックスによって構成される鉄滓が混在した組織が確認された（第127図）。

６　考察

６－１　推定される古代の鋼製造法

古代の鋼製造法については幾つかの方法が提案されており、見解の一致をみるにいたってはいない。その主因は、原料鉱石〔砂鉄もしくは鉄鉱石(註3)〕を製錬して得られる主生成物の組成についての見解の相違にあると考えられる。

製錬産物である鉄は炭素量に応じ、鋼と銑鉄の２つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を摘出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある(註5)。製錬炉で直接に鋼がつくり出されるという意味で、この方法は近世たたら吹製鉄における鍛押法(註6)によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄〔炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄（主に鋼からなるが銑鉄も混在すると考えられている）〕を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶(註5)と呼ばれている。古代に鋼を溶融する技術は未確立であったと考えられるので（溶融温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1～0.2％の鋼を溶融するためには炉内温度を1550℃以上に保つ必要がある(註7)）、主として鋼から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述によるものと推察される。

一方、おびただしい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする鋳造鉄器の普及が示すように(註8)(註9)、遅くとも９世紀には銑鉄を生産する技術、すなわち銑鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が出されている(註10)。得られた銑鉄を溶解し鋳型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器が製作される。また、生産された銑鉄を脱炭することにより鋼の製造も可能となる。この方法による鋼製造は、銑鉄を経由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼（鉄）法(註11)に位置づけられる。

銑鉄を脱炭する方法の一つとして、近世たたら吹製鉄における大鍛冶(註6)がよく知られている。たたら吹製鉄には銑押法と鍛押法の２つの方法がある。後者における生産の主目的物は鍛鉄（主として鋼からなる鉄塊）、前者は炉外に流し出される銑鉄で、副生成物として炉内に鍛鉄もできる。銑押法において鍛鉄は操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。このようにして生産された銑鉄は鍛冶場に運ばれる。そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その上に銑鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに小炭で覆った後底部に点火する。積み重ねられた銑鉄は内部にあるものから溶融し、滴下する。この時、羽口付近の酸化性火焔にふれ酸化され、鋼（左下鉄）となる。ここまでの操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は製錬時の副生成物である鍛とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にしてさらに脱炭が図られる。脱炭が十分に進んだところで

金敷の上にのせ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。上記の「左下」と「本場」、２つの操作を経て包丁鉄を造る方法が大鍛冶と呼ばれている。(註12) 上述から明らかなように、大鍛冶における「本場」の操作内容は出発物質こそ異なるものの、基本的に先に述べた精錬鍛冶とほぼ同じとみることができる。

大鍛冶では空気酸化により局所的に銑鉄の脱炭が図られるが、溶銑（溶融した銑鉄）を準備し、大鍛冶と同じ原理によって脱炭する方法が古代に行われていたとする見方が出されている。(註13)－(註15) この方法の場合、溶銑の確保とそれを脱炭するための設備・道具が不可欠であり、現在その点についての検討が進められている。

古代においては複数の鋼製造が用いられていた可能性がある。以下では、この点に留意し、考古学の発掘調査結果と出土鉄滓の金属考古学的解析結果を基に、鉄滓の成因について検討することとする。

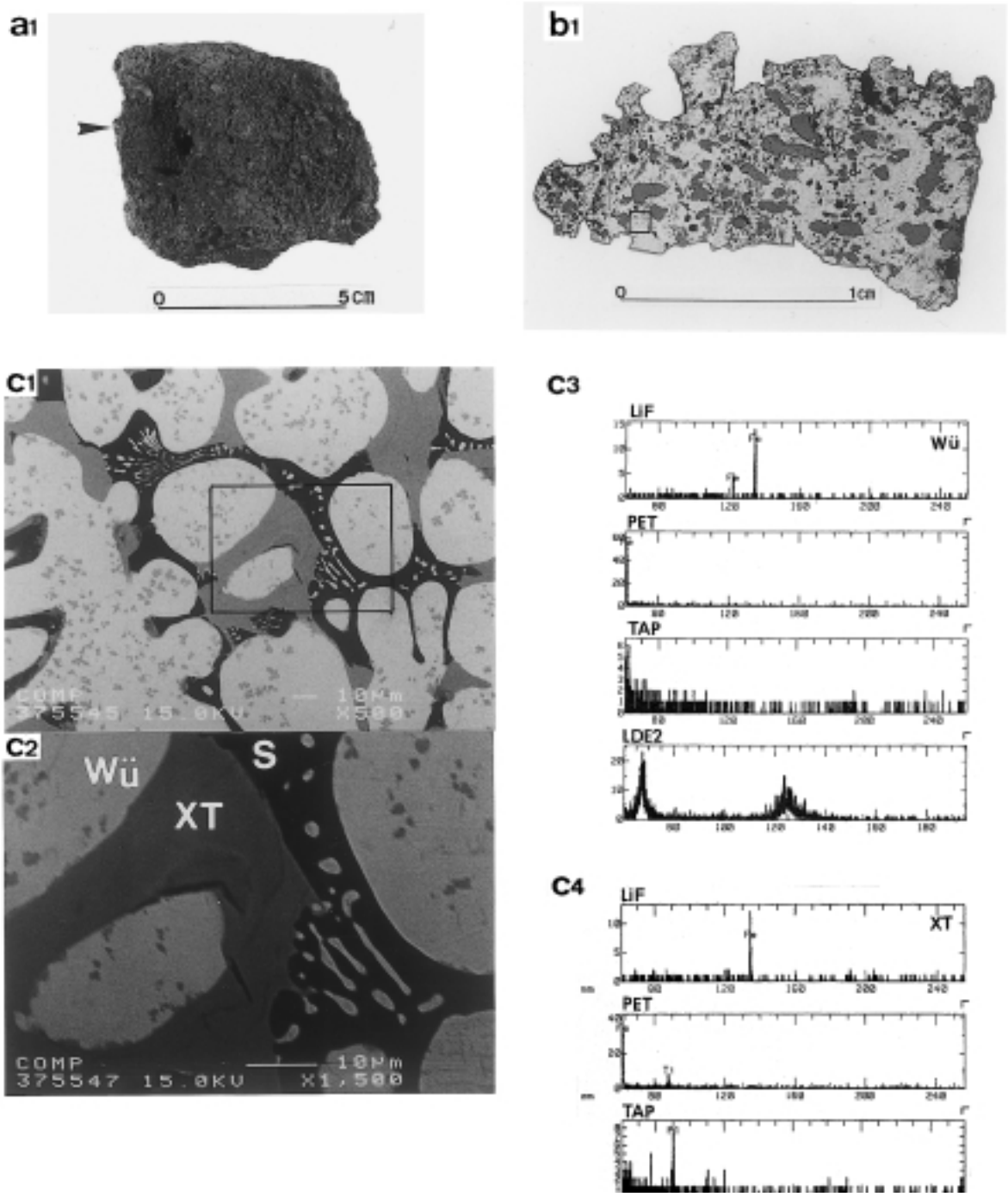
６－２　鉄滓の成因と検出遺構における生産活動

金属考古学的調査を行った２点の鉄滓はいずれも椀形を呈する。特に、No.2鉄滓は平坦面の直径が13.6㎝、資料厚が1.6㎝の椀形滓の上に、平坦面の直径が9.1㎝、資料厚が2.8㎝で、前者よりも小型の椀形滓が溶着した資料である。それぞれの鉄滓の間には、溶融または部分溶融した土器片が残存している。下方にある鉄滓の凸部表面はほぼその全域が青灰色をした粘土状物質で覆われている。木炭の噛み込みや固着はみられない。上部小型鉄滓上面にはいたるところに空隙があり、黒褐色をした鉄滓と赤錆とが混在している。No.1鉄滓もNo.2鉄滓同様、凸部表面は青灰色または黒褐色をした粘土状物質、上面平面部はやや窪み黒褐色を呈した鉄滓と赤錆で覆われている。

大小２点の鉄滓が融着しその間に土器が残存した資料が、木炭が共存する炉内において生成した可能性は乏しい。上記２点の椀形滓の凸部表面に木炭の噛み込みがみられないこともそれを支持している。６－１で述べた鋼製造法の中で、これら２点の鉄滓が製錬、精錬鍛冶、および小鍛冶工程の過程で生成したとみることは難しく、銑鉄を脱炭して鋼を製造する精錬過程での生成を考える必要がある。

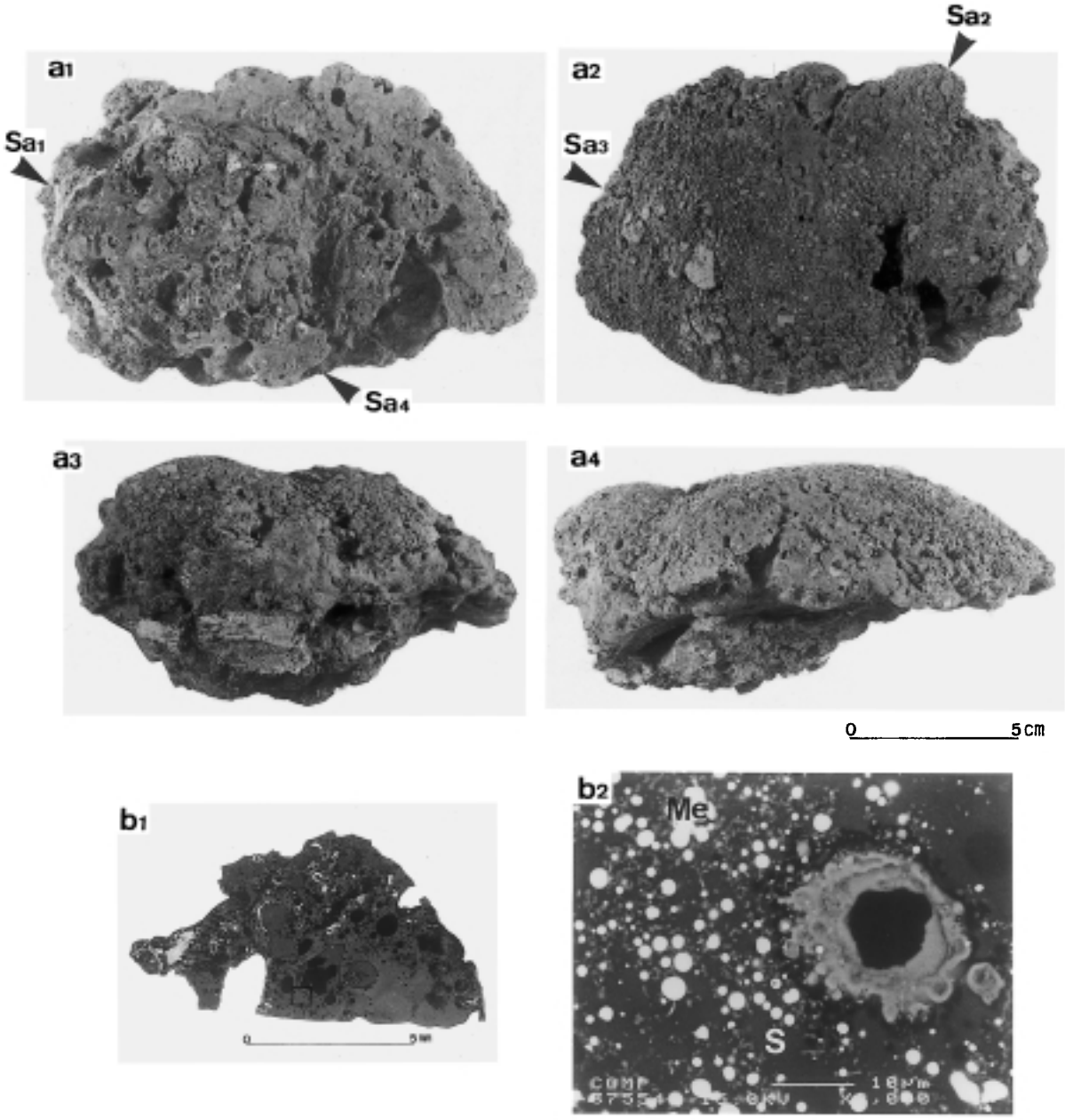
既述のとおり、精錬操作には固体の銑鉄を局所的に溶融し脱炭するという近世たたら吹製鉄における大鍛冶と、銑鉄をほぼ溶融状態とした後、脱炭する方法とが考えられる。出土した資料の外観形状を考慮すると、あらかじめ粘土状物質でつくった椀形の容器の中に、溶銑を準備し脱炭する操作が行われていたものと推定される。大小２つの椀形滓の間にある土器片は、椀形容器として使用された可能性が高いことを示している。

調査した鉄滓には局所的にFe-Ti-Al-O系化合物および$FeO\text{-}SiO_2$系化合物がガラス質ケイ酸塩中に残存した組織、または主として酸化鉄と酸化アルミニウムからなる化合物、および$FeO\text{-}SiO_2$系化合物がガラス質ケイ酸塩中に残存した組織が見いだされている。これらの組織の成因については、ア、溶銑を脱炭する過程で生成した酸化鉄が土器または土器表面に塗布された物質と反応して生成した、イ、溶銑を脱炭する過程で酸化ケイ素、酸化アルミニウムを主成分とし少量の酸化鉄を含む造滓材が使用された、ウ、アおよびイの両方によって生成した、という３つを考えることができる。アの場合、溶銑を脱炭する際に溶銑に送り込まれた空気中の酸素と溶銑中の炭素が反応し脱炭が進行するのと並行して、溶銑中の鉄と酸素が反応し酸化鉄となる。このようにして生成した酸化鉄が土器または土器表面に塗布された物質と反応し、観察された組成の鉄滓が生成したと解釈することができる。イの場合



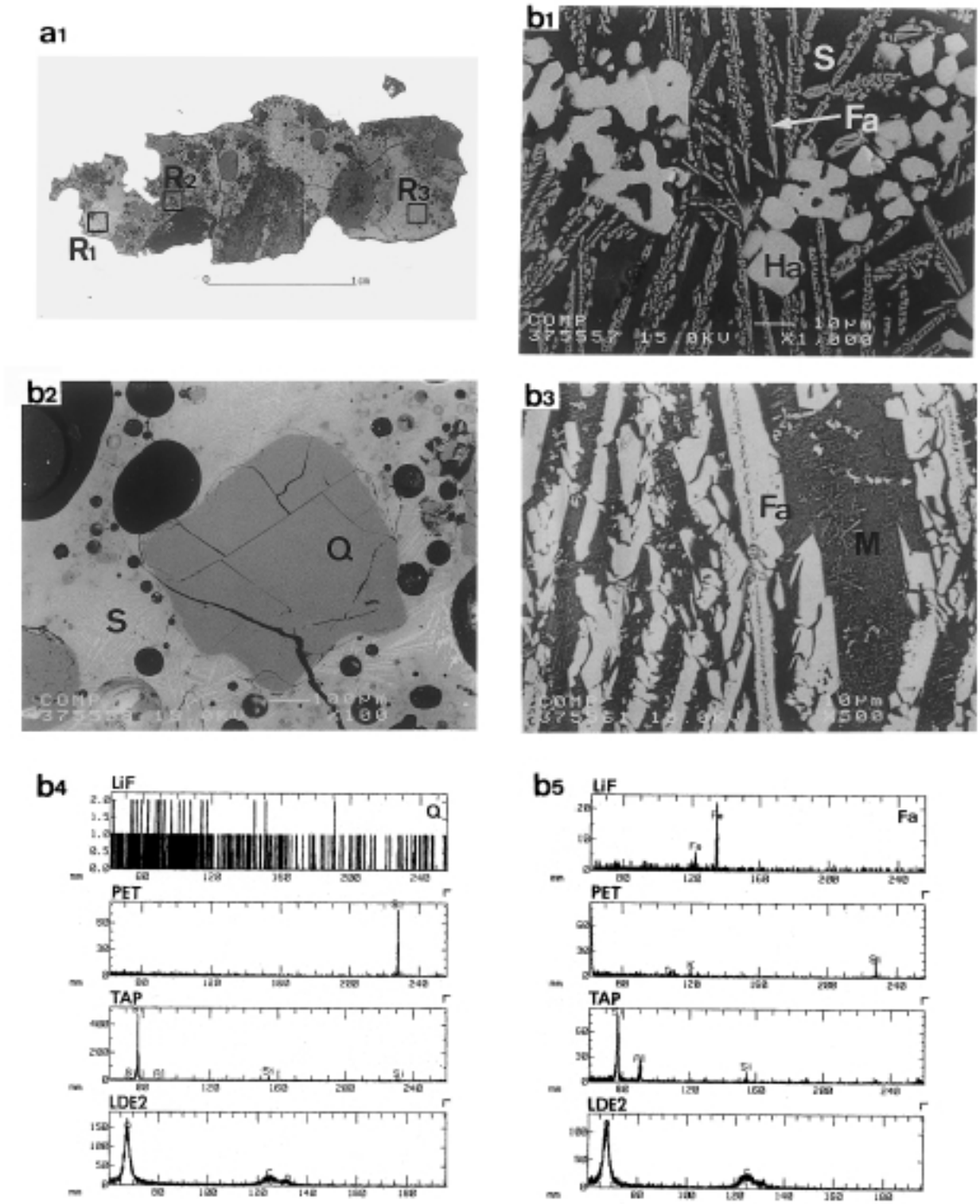
第124図　No.1の外観と摘出した試料片の組織観察結果

a_1：外観、矢印は試料片摘出位置。b_1：摘出した試料片のマクロ組織。$c_{1\text{-}4}$：b_1の枠で囲んだ内部のEPMAによる組成像（COMP）と定性分析結果。Wü：ウスタイト、XT：Fe-Ti-Al-O系化合物、S：ガラス質ケイ酸塩。



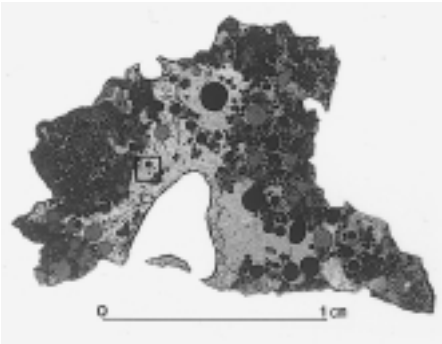
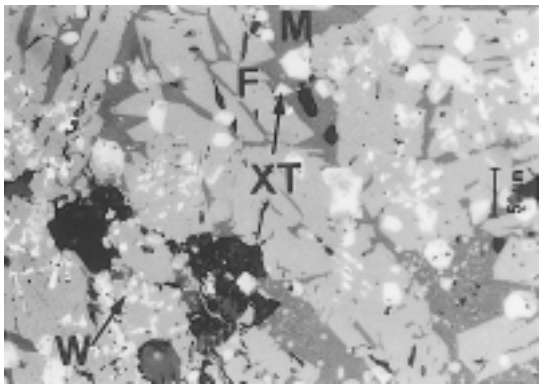
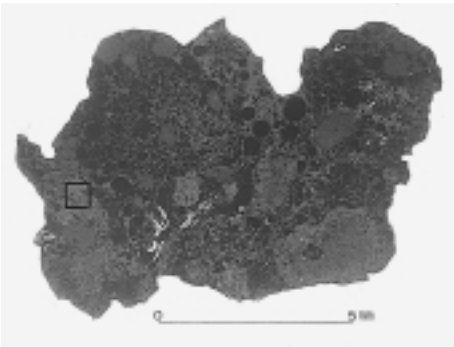
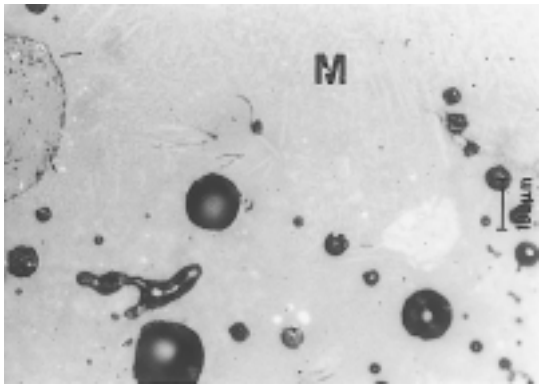
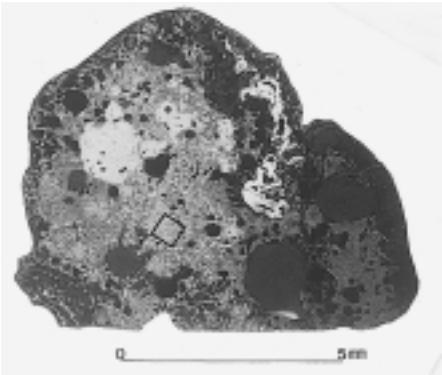
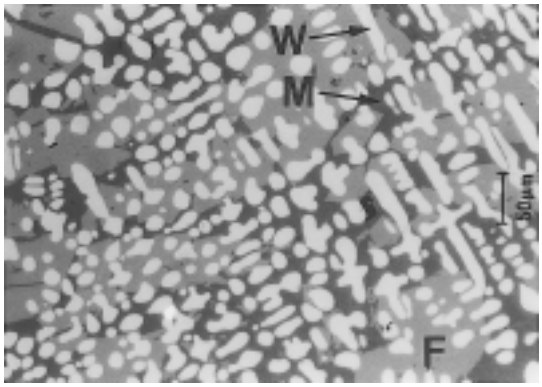
第125図　No.2の外観と摘出した試料片の組織観察結果

$a_{1\text{-}4}$：外観、矢印は試料片摘出位置。b_1：摘出した試料片のマクロ組織。b_1：a_2のSa_3から摘出した試料片のマクロ組織。b_2：b_1の枠で囲んだ内部のEPMAによる組成像（COMP）と定性分析結果。Me：鉄粒、S：ガラス質ケイ酸塩。



第126図　No.2 Sa₁から摘出した試料片の組織観察結果

a_1：摘出した試料片のマクロ組織。$b_{1\text{-}5}$：a_1の領域$R_{1\text{-}3}$内部のEPMAによる組成像（COMP）と定性分析結果。Ha：主として酸化鉄と酸化アルミニウムからなる化合物（Fe-Al-O系化合物）、Fa：FeO-SiO_2系化合物、Q：酸化ケイ素、S：ガラス質ケイ酸塩、M：マトリックス。

	マクロ組織	ミクロ組織
Sa_1 下部		
Sa_2		
Sa_4		

第127図　No.2 Sa_1下部・Sa_2・Sa_4から摘出した試料片の組織観察結果

には造滓材をほぼ溶融状態にするための設備を必要とする。No.2鉄滓の周辺から気道の細い羽口が検出されていることを加味すると、筆者はアの可能性が高いと考えるが、この点についてはほぼ同様の資料を伴う鉄関連炉跡の検出を待って明らかにしたい。

出土椀形滓の金属考古学的調査の結果、和田Ⅲ遺跡では９～10世紀に比定される竪穴住居跡内およびその周辺で、空気酸化により溶銑を脱炭して鋼を製造する操作が行われていたと推定された。溶銑を入れる容器として土器が、空気送風には羽口が使用された可能性が高い。No.1鉄滓の成因もNo.2鉄滓と同じであったと推定される。ただし、発見された地点が異なること、および破片の状態で見出されていることから、溶銑を脱炭して得られた鋼を加熱・鍛打して鋼に固着する鉄滓を除去する操作、すなわち鍛冶過程での排出を考える必要がある。精錬による鋼製造に加え、製造された鋼を加熱・鍛打して整形し、生活に必要な鋼製鉄器を作り出す操作が別な場所で実施されていた可能性がある。火窪炉、さらには鍛冶に不可欠な台石、金挟などの道具、および鍛造剥片の検出されれば上記一連の生産活動の実施をより明確にすることができるにちがいない。

註１　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』　19　2001(平成13)年　p.36

註２　遺跡を発掘調査された秋田県埋蔵文化財センター、榮　一郎氏からのご教授による。

註３　各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの淘汰集積作用などで濃縮したものが砂鉄鉱床である(註4)。従って、砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別して使用することには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。

註４　日本鉄鋼協会編　『鉄鋼便覧』　1981(昭和56)年

註５　大澤正己　「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」　『季刊考古学』　8　1984(昭和59)年　pp.36－40

註６　河瀬正利　「中国地方におけるたたら製鉄の展開」　『たたらから近代製鉄へ』　1990(平成２)年　平凡社　p.11

註７　『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』　1968(昭和43)年　丸善株式会社

註８　五十川伸矢　「古代・中世の鋳鉄鋳物」　『国立歴史民俗博物館研究報告』　第46集　1992(平成４)年　pp.1－79

註９　五十川伸矢　「古代から中世前半における鋳鉄鋳物生産」　『季刊考古学』　57　1996(平成８)年　pp.57－60

註10　関清　「古代末の北陸－富山湾岸部の遺跡群－」　『季刊考古学』　57　1996(平成８)年　pp.30－32

註11　空気酸化により銑鉄中の炭素を脱炭した場合、操作方法によってはただちにαFeに近い組成の鉄が得られた可能性もある。古代の鋼製鉄器によく使用される亜共析鋼が銑鉄を精錬してただちに得られたかどうか不明なため、本論では間接製鋼(鉄)法という表現をとった。

註12　村上英之助　「村上・中澤の往復書簡」　『たたら研究』　36・37　1996(平成８)年　p.78－88

註13　福田豊彦　「近世における『和鉄』とその技術－中世の『和鉄』解明のために－」　『製鉄史論文集たたら研究会創立四十周年記念』　たたら研究会　2000(平成12)年　pp.195－228

註14　福田豊彦　「近世前期，和鉄の生産と流通の基本形態」　『たたら研究』　39　1999(平成11)年　pp.15－24

註15　赤沼英男　「みちのくの地から中世の鉄をみる」　『ふぇらむ』　Vol.2　No.1　1997(平成９)年　社団法人日本鉄鋼協会　pp.44－51

第６章　まとめ

今回の第２次調査は、東向きの舌状台地を東西に横断する形であった。今回の調査区における和田Ⅲ遺跡の主要な変遷は以下のように想定する。

遺跡利用は、出土土器から、縄文時代前期後葉円筒下層ｄ式期に始まると判断できる。しかし、当該期の遺構は未確認であり、遺跡の詳細な性格も判然としない。次に縄文時代中期前葉円筒上層ａ式期には、舌状台地中央部から基部側にかけての地点に集落が形成される。現時点では、集落は円筒上層ａ式期のうちに廃絶されるようである。その後においても、円筒上層ｂ式～円筒上層ｄ式前後の縄文時代中期中葉前後の土器、あるいは縄文時代後期中葉前後の土器が少量出土し、遺跡利用は断続的であれ、継続したものと判断できる。しかし、確実に当該期に属する遺構は認めることができず、当時の遺跡の詳細な状況も不明である。縄文時代晩期前後になると、台地先端部を中心に集落が形成される。今回の調査では、台地先端部側の過半は調査したものと推定できることから、当該期の集落は、少数の竪穴住居もしくは平地住居が短期間断続的に営まれた小規模なものであったであろう。その後、遺跡利用の痕跡は不明となり、古代（９世紀後半から10世紀前半前後）に至って、再び集落が形成されたと推定できる。今回の調査では台地中央部で竪穴住居跡１軒を確認したのみであったが、山本町教育委員会が台地基部よりも西側で行った第１次調査結果も勘案すると、当時の集落の中心は台地基部よりも北西側の平坦面であった可能性があろう。その後の遺跡の状況は、不明である。

以下では、縄文時代中期前葉円筒上層ａ式期の集落について、竪穴住居跡を中心にその特徴を簡単にまとめておく。

竪穴住居跡

当該期の竪穴住居跡は建て替え（拡張）例を１軒とすると、合計９軒確認した（第21表）。このうち、住居全体を調査した例は、ＳＩ06・15・16Ａ・16Ｂ・32竪穴住居跡（以下の記述では竪穴住居跡を省略し、略記号のみで表記する）の５例である。残りの４例は一部の調査にとどまり、住居構造等の詳

第21表　縄文時代中期前葉の竪穴住居跡一覧

番号	時期	竪穴規模	主軸方向	有段床	主柱穴	炉	付属施設	備考
ＳＩ03	円筒上層a_2式期	(8.0)×5.2m	Ｎ－40°－Ｗ	なし	（３）対（５）基	地床炉１	特殊ピット２	南端側未調査　建て替えか
ＳＩ04	円筒上層a_2式期	(12.5)×(6.6)m	Ｎ－89°－Ｅ	あり	（４）対（４）基	地床炉２ 土器埋設炉１	特殊ピット２ （切り合い）	南半側未調査
ＳＩ05	円筒上層a_1式期	(?)×7.0m	Ｎ－２°－Ｗ	あり	（３）対（６）基	地床炉１ 土器埋設炉２	特殊ピット３ （切り合い）	中央部のみ調査　建て替え
ＳＩ06	円筒上層a_1式期	4.7×3.8m	Ｎ－25°－Ｗ	なし	４基	土器埋設炉１	埋設土器１ 特殊ピット１ フラスコ状土坑１	
ＳＩ08	円筒上層a_1式期	(?)×(6.0)m	Ｎ－９°－Ｅ	あり	（２）対（４）基	地床炉１	特殊ピット１	
ＳＩ15	円筒上層a_1式期	10.1×7.1m	Ｎ－20°－Ｗ	あり	新期：４対８基 古期：４対８基	新期：土器埋設炉１ 古期：石組炉？１	特殊ピット各期１ フラスコ状土坑１	１回以上建て替え
ＳＩ16Ａ	円筒上層a_2式期	6.9×5.1m	Ｎ－32°－Ｗ	なし	８基？	土器埋設炉１ （炉体土器２個）	埋設土器１ 特殊ピット１	建て替えか　埋設土器は古期の土器埋設炉か
ＳＩ16Ｂ	円筒上層a_1式期	4.5×4.2m	Ｎ－20°－Ｗ	なし	５基	土器埋設炉？１	特殊ピット１	
ＳＩ32	円筒上層a式期	9.6×5.7m	Ｎ－87°－Ｗ	なし	３対６基＋棟持柱？２基	地床炉１ 土器埋設炉１		棟持柱？柱穴１基は特殊ピット類似のロート状

細は不明な部分が大きい。ここでは上記５例を中心にその特徴を概観する。

当該期の竪穴住居跡は、竪穴長軸10m前後の相対的に大形例（ＳＩ04・15・32など）と長軸５～７m前後の相対的に小形例（ＳＩ06・16Ａ・16Ｂなど）とに分かれる。両者ともに円筒上層 a_1 式期と円筒上層 a_2 式期にそれぞれ属すると判断できる例があり、基本的に併存していたものと想定できる。また、大形例は主柱穴が２列平行に並ぶのに対し、小形例では主柱穴の配置はやや不規則である。両者では上部構造が異なっていた可能性を想定することができる。(註1) 大形例には、ＳＩ04・15のように床面中央が一段深くなる構造のものがあるが、小形例には存在しない。床面に段がある例では主柱穴は段部分の長辺側に沿って並ぶ。

竪穴住居跡の内部施設を見ると、炉は基本的に土器埋設炉もしくは地床炉である。竪穴全体を調査した例では、土器埋設炉が単独で存在する（ＳＩ06・15新期・16Ａ・16Ｂ）、もしくは土器埋設炉と地床炉とが併存する（ＳＩ32）。後者の複数の炉が併存する例では、炉は竪穴中軸線上に並ぶ。現状からは、大形例･小形例ともに土器埋設炉が主体をなし、一部の大形例には地床炉が併存すると想定できる。(註2)

また、大形例と小形例の両者ともに、竪穴の一端側に特殊ピットを伴う例が一般的である。ただし、ここで特殊ピットとしたものは、地山を掘り残すことにより掘り込み周囲に土手を巡らす例が目立つものの、その形態および覆土の特徴には変異がある。形態には大きくは浅い鍋状ものと深いロート状のものとがあり、覆土には、暗褐色土単一層、あるいは、暗褐色土と地山土粒混在土とが互層状に堆積する例などがある。また、ＳＩ04では、柱穴等には作り替えの痕跡がないのに対し、特殊ピットは僅かに位置をずらして作り替えている。形態は相対的に浅い鍋状から、深いロート状に変化したと推定でき、覆土の層相も異なっている。このように、ここで特殊ピットとしたものは変異が大きく、特定の機能を想定することは現状では困難である。ただし、覆土平断面には柱痕跡あるいは柱の抜き取り痕を認めることができず、柱穴であったとは想定し難い。(註3)

このほか、小形例のＳＩ06と大形例のＳＩ15にはフラスコ状土坑各１基を伴う。ともに円筒上層 a_1 式に属する。時期的な特徴であるかは、現時点では資料不足であり、断定できない。(註4)

このように、大形例と小形例とでは、規模と上屋構造等に相違があると判断できるが、その他の内部施設には顕著な違いを認めることができない。さらに、大形例のＳＩ15では炉は土器埋設炉１基を伴うのみであること、上記のように、フラスコ状土坑を伴う例では、大形例・小形例とも１基のみであることなど、内部施設の数量の面でも両者の間には必ずしも大きな格差を認め難い。このような状況からは、大形例と小形例それぞれの居住集団間には、優劣等の質的な相違は想定し難い。相対的な規模の差を認定し得るにとどまると言えよう。

遺構分布

縄文時代中期前葉円筒上層ａ式期の集落は、東向きの舌状台地中央部から基部側にかけて立地する。主として台地斜面寄りに分布する大小の竪穴住居跡９軒、台地中央北斜面側に位置するフラスコ状土坑５基、その西隣の浅い開析谷に形成された遺物包含層（捨て場）などからなる。

竪穴住居跡は円筒上層 a_1 式期から円筒上層 a_2 式期にかけて営まれたと想定できるが、フラスコ状土坑および遺物包含層は主として円筒上層 a_1 式期に属する。今回の調査区においては、集落の中心時期は円筒上層 a_1 式期であったと言えよう。ただし、円筒上層 a_1 式期に同時に存在した可能性ある竪

穴住居は最大で６軒に過ぎない。現状での竪穴住居跡分布密度からは、未調査地点の存在を考慮しても、当該期の集落は比較的小規模であったと想定できよう。また、円筒上層 a_2 式期の集落の中心は、今回の調査区の南隣りの段丘面上にあると予想できるかもしれない。

集落全体の遺構分布を見ると、フラスコ状土坑が台地中央北斜面側に集中的に布する傾向を認めることができるものの、現状では遺構群の有意な分布状況は判然としない。特定の広場状空閑地を伴うなどの規格性は明瞭ではなく、遺構は台地の縁辺寄りに不規則に分布するようである。竪穴住居跡の分布が複数の集中地点に分かれるかも不明瞭である。

さらに、竪穴住居跡主軸方位も一定ではなく、地形との関係では、台地斜面の傾斜方向に対して平行する例（ＳＩ06・15・16Ａ・16Ｂなど）と直交する例（ＳＩ04・32など）とが混在する。前者例のうち、ＳＩ06・15・16Ｂはいずれも円筒上層 a_1 式期に属し、一方、後者例のうち、ＳＩ04は円筒上層 a_2 式に属する。総体として、前者から後者への変化を想定できる可能性があるものの、断定できない。

今回の調査結果から、縄文時代中期前葉の集落は、円筒上層ａ式期に営まれた比較的小規模なものであったと判断できる。竪穴住居は一時期に10数軒を越えるほど多数存在したとは想定し難いであろう。また、遺物包含層（捨て場）が形成されているものの、集落に伴うフラスコ状土坑は僅かである。このほか、フラスコ状土坑が土坑墓に転用された可能性も考慮すべきであるが、調査では埋葬施設の痕跡は確認できなかった。

今回は調査範囲が狭小であったこともあり、縄文時代中期前葉の集落の実態については不明な部分が少なくない。現時点では、当該期の和田Ⅲ遺跡についての定まった評価は明確にし難い。今後、周辺地域における同時代集落跡の立地と構造を比較検討することを通じて、和田Ⅲ遺跡の評価を行っていく必要があろう。

註１　大形例では、後述する特殊ピット側では主柱穴が相対的に小形である場合が多く、住居の特殊ピット側とその反対側とでは上屋構造が異なっていた可能性が強い。

註２　ＳＩ15古期は石組炉であった可能性がある。当該住居跡は本遺跡内では最古段階に属する可能性があることから、時期差による変異であった可能性もあろう。

註３　棟持柱柱穴と推定するＳＩ32Ｐ５は、上位がすり鉢状に開いたロート状を呈し、特殊ピットの一部のものと形態が類似する。

註４　今回、竪穴住居外で確認したフラスコ状土坑５基もいずれも円筒上層 a_1 式期に属する可能性が強い。現状では、円筒上層 a_2 式期に帰属すると判断できるフラスコ状土坑は未確認である。未調査地域が存在することを考えると、現時点では、円筒上層 a_1 式期と円筒上層 a_2 式期とではフラスコ状土坑の分布が変化したことを想定すべきであろう。

報告書抄録

ふりがな	わだ３いせき
書名	和田Ⅲ遺跡
副書名	農免農道整備事業金岡西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第350集
編著者名	榮　一郎　　赤沼英男
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　　TEL0187-69-3331
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒010－8580　秋田県秋田市山王３丁目１番１号　　TEL018-860-5193
発行年月日	西暦2003年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
和田Ⅲ遺跡（わだ３いせき）	秋田県（あきたけん） 山本郡山本町（やまもとぐんやまもとまち） 豊岡金田（とよおかかねだ） 字和田255外（あざわだ）	05344	21-26	40度 ６分 33秒	140度 ３分 ６秒	20000703 ～ 20001004	4,200㎡	農免農道整備事業金岡西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和田Ⅲ遺跡（わだ３いせき）	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　12軒 フラスコ状土坑　７基 土坑　13基 柱穴　70基 遺物包含層 （捨て場）　１箇所	縄文土器 石器	大小の竪穴住居、フラスコ状土坑、遺物包含層（捨て場）などから構成される縄文時代中期前葉の集落跡、小形の竪穴住居跡等から構成される縄文時代晩期前後の小規模集落跡を検出した。
	集落跡	古代	竪穴住居跡　１軒	土師器 須恵器	古代の竪穴住居跡１軒も検出した。
		時期不明	溝跡　３条 柱穴列　１列		

秋田県文化財調査報告書第350集

和　田　III　遺　跡

―農免農道整備事業金岡西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

印刷・発行　平成15年３月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地

電話 0187(69)3331　FAX(0187)69-3330

発　　行　秋田県教育委員会

〒010-8580　秋田市山王３丁目１番１号

電話 018(860)5193

印　　刷　株式会社 江川印刷所